松山市文化財調査報告書　108

来住・久米地区の遺跡Ⅵ

久米才歩行遺跡

― 3次・4次・5次調査地 ―

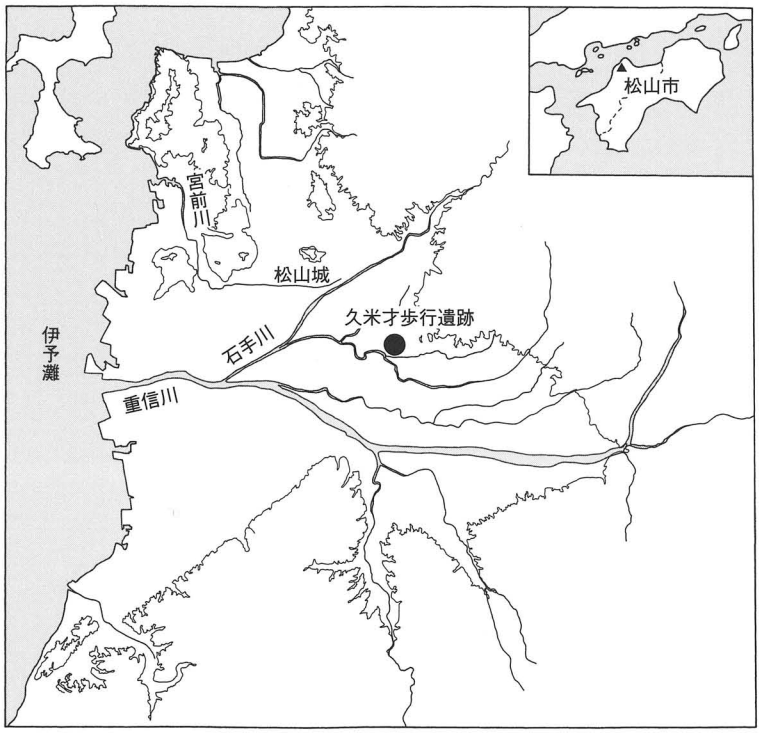
2005

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

来住（きし）・久米（くめ）地区の遺跡Ⅵ

久米才歩行（くめさいかち）遺跡

― 3次・4次・5次調査地 ―



2005

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

本書は、平成９年度～平成11年度に松山市東部の来住・久米地区で実施した宅地造成に伴う緊急発掘調査の報告書です。

来住・久米地区には、国指定史跡「来住廃寺跡」、平成15年度に追加指定された「久米高畑官衙遺跡群」があり、全国的にも重要な古代遺跡が展開する地域として知られています。

今回報告します久米才歩行遺跡３・４・５次調査地では古墳時代後期～古代の建物址が検出され、久米高畑官衙遺跡群の北方地域の集落構造を解明する貴重な資料を得ることができ、また、４次調査地では弥生時代の石鎌の定着時期が推定されるなど、重要な成果が得られました。

このような成果をあげることができましたのは、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を賜った関係者のお陰であり、感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご援助を賜りますよう、お願い致します。

本書が文化財保護、生涯教育、埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面にご活用いただければ幸いに存じます。

平成17年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、財団法人松山市埋蔵文化財センターが平成９年度～平成11年度に、松山市南久米町３ヶ所で宅地開発に伴う事前の緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴住居址：ＳＢ、掘立柱建物址：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰとし、遺跡ごとに通し番号を付記した。

3．遺構の測量は、担当調査員指示のもと補助員・作業員が実施した。

4．遺物の実測及び掲載図の製作は、調査担当者指示のもと整理作業員が行った。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西が行った。

7．本書に使用した方位は、磁北と真北である。

8．本書に掲載した遺物及び写真・図版等の記録類は、すべて松山市立埋蔵文化財センターにて収蔵保管している。

9．本書の執筆は梅木謙一・宮内慎一・加島次郎・小笠原善治が行い、編集は梅木が担当し、水口あをいが補助をした。

10．**製版**　白黒図版－175線
　　印刷　オフセット印刷
　　用紙　白黒図版－ニューＶマット菊版 93.5kg使用

本　文　目　次

第１章　はじめに……〔梅　木〕……1

第２章　久米才歩行遺跡３次調査地……〔宮　内〕……7
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第３章　久米才歩行遺跡４次調査地……〔加　島〕……35
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第４章　久米才歩行遺跡５次調査地……〔小笠原〕……93
　１．調査の経緯　２．層　位　３．遺構と遺物　４．小　結

第５章　おわりに……〔梅　木〕……125

挿　図　目　次

第１章　はじめに
第１図　久米才歩行遺跡調査地位置図（縮尺１：2,500）……1
第２図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺１：25,000）……3

第２章　久米才歩行遺跡３次調査地
第３図　調査地位置図(1)（縮尺１：25,000）……7
第４図　調査地位置図(2)（縮尺１：3,000）……8
第５図　調査地測量図（縮尺１：500）……9
第６図　調査地区割図（縮尺１：200）……10
第７図　東壁土層図（縮尺１：30）……11
第８図　西壁土層図（縮尺１：30）……13
第９図　北壁土層図（縮尺１：30）……15
第10図　南壁土層図（縮尺１：30）
第11図　遺構配置図（縮尺１：100）……17
第12図　掘立１測量図（縮尺１：80）……18
第13図　掘立１出土遺物実測図（縮尺１：３）……19
第14図　掘立２測量図（縮尺１：80）……20
第15図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３）
第16図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺１：80・１：３）……22
第17図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１：80・１：３）……23
第18図　ＳＤ１断面図・出土遺物実測図（縮尺１：10・１：３）……24
第19図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３）……25
第20図　ピット出土遺物実測図(1)（縮尺１：３）……26
第21図　ピット出土遺物実測図(2)（縮尺１：３）……27
第22図　第Ⅲ層・地点不明出土遺物実測図（縮尺１：３）……28

第３章　久米才歩行遺跡４次調査地
第23図　調査地位置図（縮尺１：2,000）……35
第24図　調査地区割図（縮尺１：300）……36
第25図　調査区北壁・東壁土層図（縮尺１：20・１：50）……37
第26図　遺構配置図（縮尺１：200）……40
第27図　ＳＲ201測量図・ＳＲ201埋土④出土遺物実測図(1)（縮尺1：100・1：４・1：２）……41
第28図　ＳＲ201埋土④出土遺物実測図(2)（縮尺２：３）……42
第29図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(1)（縮尺１：４）……43

第30図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(2)（縮尺１：４）……44
第31図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(3)（縮尺１：３）……45
第32図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(4)（縮尺２：３・１：２）……46
第33図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(1)（縮尺１：４）……47
第34図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(2)（縮尺１：４）……48
第35図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(3)（縮尺１：４）……49
第36図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(4)（縮尺１：２）……50
第37図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(5)（縮尺２：３）……51
第38図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(1)（縮尺１：４）……53
第39図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(2)（縮尺１：４）……54
第40図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(3)（縮尺１：４・２：３）……55
第41図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(4)（縮尺２：３）……56
第42図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(5)（縮尺２：３）……57
第43図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(6)（縮尺１：３）……58
第44図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(7)（縮尺１：３）……60
第45図　ＳＸ101～104測量図（縮尺１：80・１：60）……61
第46図　ＳＸ101・104出土遺物実測図（縮尺１：４・１：３）……63
第47図　ＳＲ101測量図（縮尺１：80・１：60）……64
第48図　ＳＲ101出土遺物実測図（縮尺１：３）……65
第49図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：80・１：３）……66
第50図　ＳＥ101測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……67
第51図　ＳＫ102測量図（縮尺１：40）
第52図　ＳＫ103・ＳＤ102・103測量図（縮尺１：80）……68
第53図　ＳＡ101測量図（縮尺１：80）……69
第54図　Ｉ区包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１：３）……70
第55図　Ｉ区包含層出土遺物実測図(2)（縮尺１：３）……71

第４章　久米才歩行遺跡５次調査地

第56図　調査地及び周辺遺跡（縮尺１：1,000）……94
第57図　調査地位置図（縮尺１：1,000）……95
第58図　調査地区割図（縮尺１：300）……96
第59図　遺構配置図（縮尺１：200）……97
第60図　南壁・西壁土層図（縮尺１：30）……99
第61図　北壁・東壁土層図（縮尺１：30）……101
第62図　ＳＫ４測量図（縮尺１：40）……103
第63図　ＳＤ６（北側）・ＳＤ７測量図（縮尺１：40）……104
第64図　ＳＸ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：50・１：３）……105
第65図　ＳＢ１・ＳＢ２測量図・ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１：50・１：３）……107

第66図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：50・１：３）……108
第67図　掘立２・ＳＡ１測量図・ＳＡ１出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……110
第68図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺１：60・１：３）……111
第69図　掘立４測量図（縮尺１：40）……112
第70図　ＳＤ１・ＳＤ２測量図（縮尺１：100・１：40）……113
第71図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１：３）……114
第72図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺１：３）
第73図　ＳＤ３測量図（縮尺１：40）……115
第74図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺１：３）……116
第75図　ＳＤ４測量図（縮尺１：60・１：40）……117
第76図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……118
第77図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……120
第78図　ＳＫ２・ＳＫ３測量図（縮尺１：40）
第79図　柱穴及び出土地点不明遺物実測図（縮尺１：３）……121

表　目　次

第１章　はじめに
表１　調査地一覧 …… 1

第２章　久米才歩行遺跡３次調査地
表２　掘立柱建物址一覧 ……30
表３　溝一覧
表４　土坑一覧
表５　掘立１出土遺物観察表　土製品
表６　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表７　掘立４出土遺物観察表　土製品 ……31
表８　掘立３出土遺物観察表　土製品
表９　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表10　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品
表11　ピット出土遺物観察表　土製品
表12　包含層・地点不明出土遺物観察表　土製品 ……32

第３章　久米才歩行遺跡４次調査地
表13　愛媛県松山市石鎌出土遺跡一覧 ……74

表14　自然流路一覧 ……75
表15　性格不明遺構一覧
表16　掘立柱建物址一覧
表17　井戸一覧
表18　土坑一覧
表19　溝一覧
表20　柵列一覧
表21　ＳＲ201埋土④出土遺物観察表　土製品 ……76
表22　ＳＲ201埋土④出土遺物観察表　石製品
表23　ＳＲ201埋土③出土遺物観察表　土製品
表24　ＳＲ201埋土③出土遺物観察表　石製品 ……78
表25　ＳＲ201埋土②出土遺物観察表　土製品 ……79
表26　ＳＲ201埋土②出土遺物観察表　石製品 ……81
表27　ＳＲ201埋土①出土遺物観察表　土製品
表28　ＳＲ201埋土①出土遺物観察表　石製品 ……85
表29　ＳＲ201埋土①出土遺物観察表　土製品
表30　ＳＸ101出土遺物観察表　土製品 ……87
表31　ＳＸ104出土遺物観察表　土製品 ……88
表32　ＳＲ101出土遺物観察表　土製品
表33　掘立１出土遺物観察表　土製品
表34　ＳＥ101出土遺物観察表　土製品
表35　Ｉ区包含層出土遺物観察表　土製品 ……89

第４章　久米才歩行遺跡５次調査地

表36　竪穴式住居址一覧 ……122
表37　掘立柱建物址一覧
表38　溝一覧
表39　土坑一覧
表40　性格不明遺構一覧
表41　ＳＸ１出土遺物観察表　石製品 ……123
表42　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品
表43　掘立１出土遺物観察表　土製品
表44　ＳＡ１出土遺物観察表　土製品
表45　掘立３出土遺物観察表　土製品
表46　ＳＤ出土遺物観察表　土製品
表47　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品 ……124
表48　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品
表49　柱穴及び出土地点不明遺物観察表　土製品

写　真　目　次

第２章　久米才歩行遺跡３次調査地

図版１　１　調査前の全景（北より）　２　西壁土層（北東より）
図版２　１　調査地全景（南より）
図版３　１　掘立１検出状況（北より）　２　掘立２検出状況（西より）
図版４　１　ＳＫ１完掘状況（北より）　２　掘立４完掘状況（北より）
図版５　１　掘立３完掘状況（北より）　２　ＳＰ94遺物出土状況（北より）
図版６　１　ＳＤ１検出状況（南より）　２　ＳＤ１遺物出土状況（北西より）
図版７　１　出土遺物（ＳＤ１・ＳＰ94・ＳＰ４・ＳＰ345・ＳＰ256・第Ⅲ層）

第３章　久米才歩行遺跡４次調査地

図版８　１　調査前の全景（南西より）　２　南壁土層（北より）
図版９　１　Ⅰ区遺構検出状況（西より）　２　Ⅰ区遺構完掘状況(1)（西より）
図版10　１　Ⅰ区遺構完掘状況(2)（北西より）　２　Ⅱ区ＳＲ201完掘状況（北東より）
図版11　１　ＳＲ201埋土④石鎌出土状況（東より）
　　２　ＳＲ201埋土③両刃石斧出土状況（北より）
　　３　遺構完掘状況（北西より）
図版12　１　ＳＲ201出土遺物（埋土④・埋土③(1)）
図版13　１　ＳＲ201埋土③出土遺物(2)
図版14　１　ＳＲ201埋土②出土遺物(1)
図版15　１　ＳＲ201埋土②出土遺物(2)
図版16　１　ＳＲ201埋土①出土遺物(1)
図版17　１　ＳＲ201埋土①出土遺物(2)
図版18　１　ＳＲ201埋土①出土遺物(3)・ＳＸ101出土遺物・包含層出土遺物

第４章　久米才歩行遺跡５次調査地

図版19　１　調査区西部遺構検出状況（東より）　２　ＳＢ１・２検出状況（北西より）
図版20　１　ＳＤ１・２完掘状況（西より）　２　調査区西部完掘状況（東より）
図版21　１　調査区東部遺構検出状況(1)（東より）　２　調査区東部遺構検出状況(2)（東より）
図版22　１　調査区東部遺構完掘状況（東より）　２　ＳＢ１出土遺物

第1章　はじめに

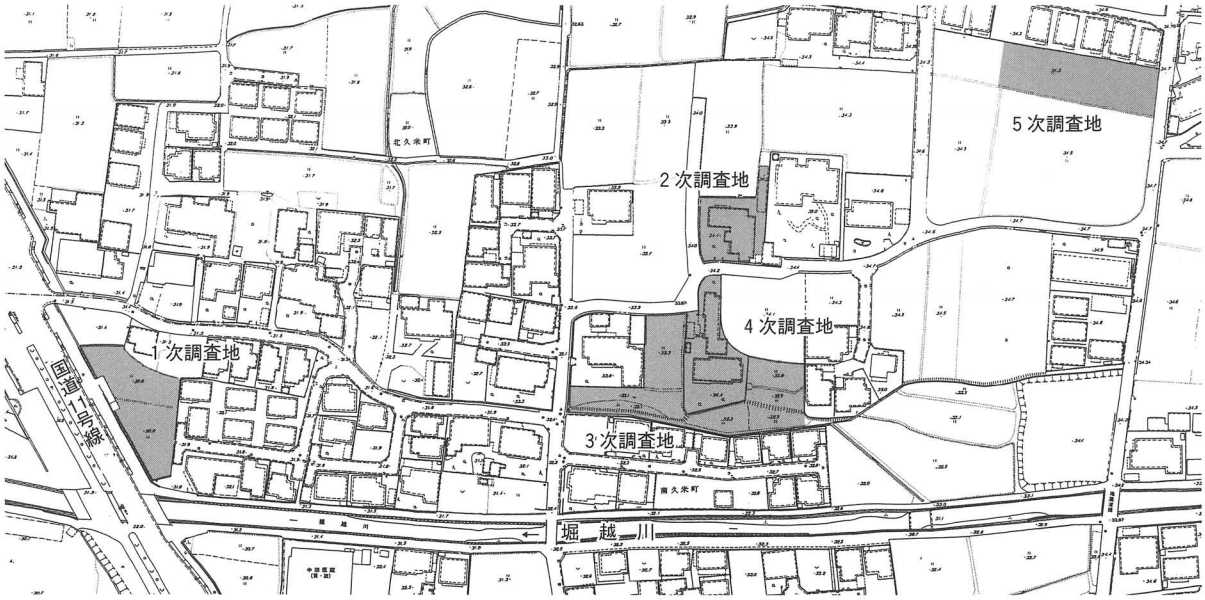
1．調査・刊行に至る経緯

財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは、平成９年９月に市内南久米町484－１、平成10年10月に南久米町485－１外、平成11年４月に南久米町468－１で宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施した。調査した３ヶ所は松山市が指定した埋蔵文化財包蔵地「126　高畑遺物包含地」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から、遺跡名を久米才歩行遺跡とした。発掘調査に至るまでの詳細は、第２章以降の各調査報告で行うものとする。

発掘作業以降は、各調査担当者が整理作業を行い、平成16年度には本格的な報告書作成作業を実施した。

表１　調査地一覧

遺　跡　名	現　住　所	面積（㎡）	調　査　期　間
久米才歩行３次	南久米町484－1	496.32	1997年９月１日～1997年10月31日
久米才歩行４次	南久米町485－１外	1,095.00	1998年10月１日～1998年12月31日
久米才歩行５次	南久米町468－1	790.31	1999年４月８日～1999年６月30日



第１図　久米才歩行遺跡調査地位置図（Ｓ＝１：2,500）

2．刊行組織（平成17年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	久保　浩三
	企画官	石丸　修
	企画官	丹生谷博一
	企画官	仙波　和典
文化財課	課長	篠原　忠人
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	石丸　允良
	事務局次長	池田　政勝
埋蔵文化財センター	所長	杉田　久憲
	専門監兼学芸係長	早瀬　忠幸
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	管理係長	岸本　照修
	調査員	梅木　謙一
	調査員	宮内　慎一
	調査員	相原　秀仁
	調査員	加島　次郎
	調査員	高尾　和長
	調査員	小笠原善治
	調査員	河野　史知
	調査員	大西　朋子（写真担当）

3．環　境（第2図）

本書で報告する遺跡は、松山平野を代表する古代遺跡の来住廃寺や久米高畑官衙遺跡群が含まれる「来住・久米地区」に属している。この地区には多くの遺跡があり、報告書も刊行したものが幾つかある。したがって、各遺跡の歴史的・自然地理的環境や久米高畑遺跡の内容は、以下の報告書を参照していただきたい。

【報告書一覧】

『来住廃寺』松山市文化財調査報告書　第12集、1979年。
『来住廃寺－平成2年度調査概報－』松山市文化財調査報告書　第23集、1991年。
『来住・久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書　第27集、1992年。
『来住廃寺遺跡－第15次調査－』松山市文化財調査報告書　第34集、1993年。
『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書　第44集、1994年。
『来住廃寺－第19次調査－』松山市文化財調査報告書　第56集、1996年。
『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書　第57集、1996年。

Ⓐ久米才歩行遺跡３次　Ⓑ久米才歩行遺跡４次　Ⓒ久米才歩行遺跡５次
❶来住廃寺　❷久米高畑遺跡群　❸福音小学校構内遺跡　❹天山神社遺跡　❺東山古墳群

第２図　調査地周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

『小野川流域の遺跡 Ⅱ』松山市文化財調査報告書　第66集、1998年。
『来住・久米地区の遺跡 Ⅲ』松山市文化財調査報告書　第76集、2000年。
『小野地区の遺跡』松山市文化財調査報告書　第81集、2001年。
『久米高畑遺跡－25次調査－』松山市文化財調査報告書　第93集、2003年。
『来住・久米地区の遺跡 Ⅳ』松山市文化財調査報告書　第100集、2004年。
『来住・久米地区の遺跡 Ⅴ』松山市文化財調査報告書　第101集、2004年。

【概要報告一覧】

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』1987年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』1989年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』1991年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』1992年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』1993年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』1994年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』1995年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』1996年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』1997年。
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』1998年。
『松山市埋蔵文化財調査年報11』1999年。
『松山市埋蔵文化財調査年報12』2000年。
『松山市埋蔵文化財調査年報13』2001年。
『松山市埋蔵文化財調査年報14』2003年。
『松山市埋蔵文化財調査年報15』2004年。
『松山市埋蔵文化財調査年報16』2004年。

第2章

久米才歩行遺跡

3次調査地

第２章　久米才歩行遺跡３次調査地

１．調査の経緯

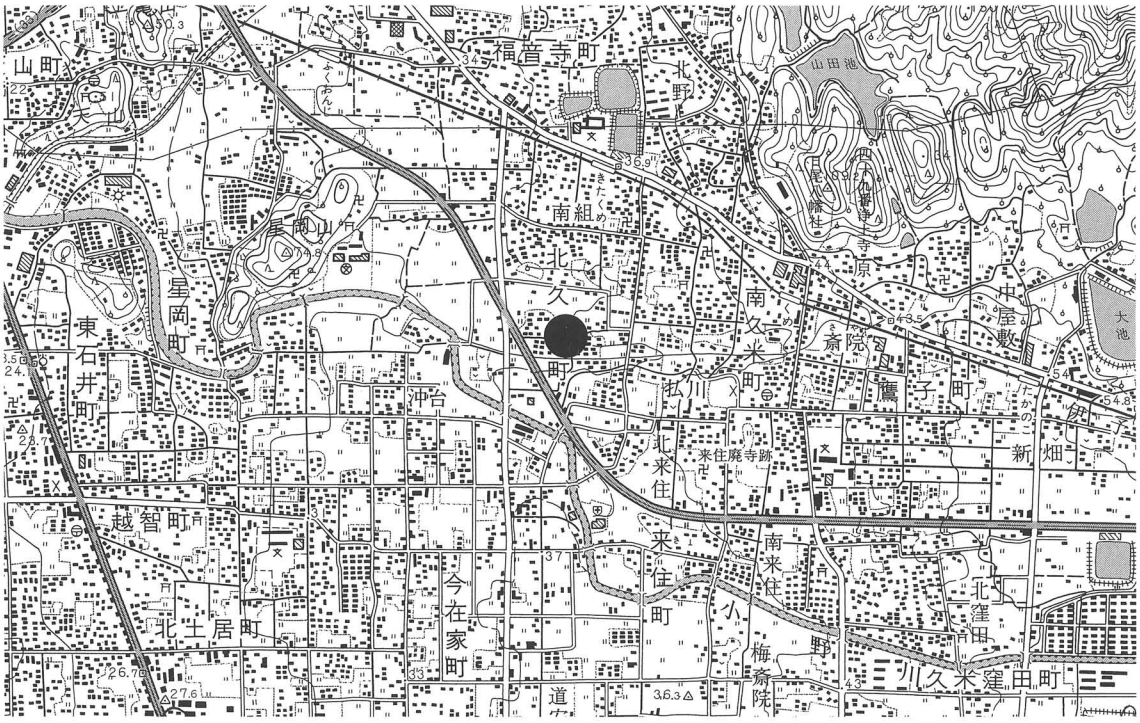
(1)　調査に至る経緯（第３図）

1997（平成９）年３月４日、田中和彦氏より松山市南久米町484番地１内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『№126　高畑遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡地帯として知られている。同包含地内では、当地の西方140ｍの地点に久米才歩行遺跡１次調査地があり、弥生時代中期から中世までの遺構や遺物が確認されている。また、当地に隣接して久米才歩行遺跡２次調査地があり、弥生時代前期の土坑や古墳時代の竪穴式住居址などが検出されている。周辺地域では南久米片廻り遺跡（１・２次調査地）や北久米町屋敷遺跡（１・２次調査地）、南久米町遺跡（１・２・３次調査地）などがあり、縄文時代から中近世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。また、当地の南西100ｍの地点に『久米評』線刻の須恵器が出土した久米高畑遺跡７次調査地が存在する。

これらのことから、当該地の埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1997（平成９）年３月14日、文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は試掘調査を実施した。その結果、地表下20㎝の地点にピット数基と土師器、須恵器を検出し、当地に集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、申請者と文化教育課・埋文センターの両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物に対して、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。



第３図　調査地位置図(1)（Ｓ＝１：25,000）

調査は、古墳時代から中世における当地や周辺地域の集落の広がりや構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、申請者の協力のもと、1997（平成９）年９月１日に開始した。

(2) 調査の経緯（第４図）

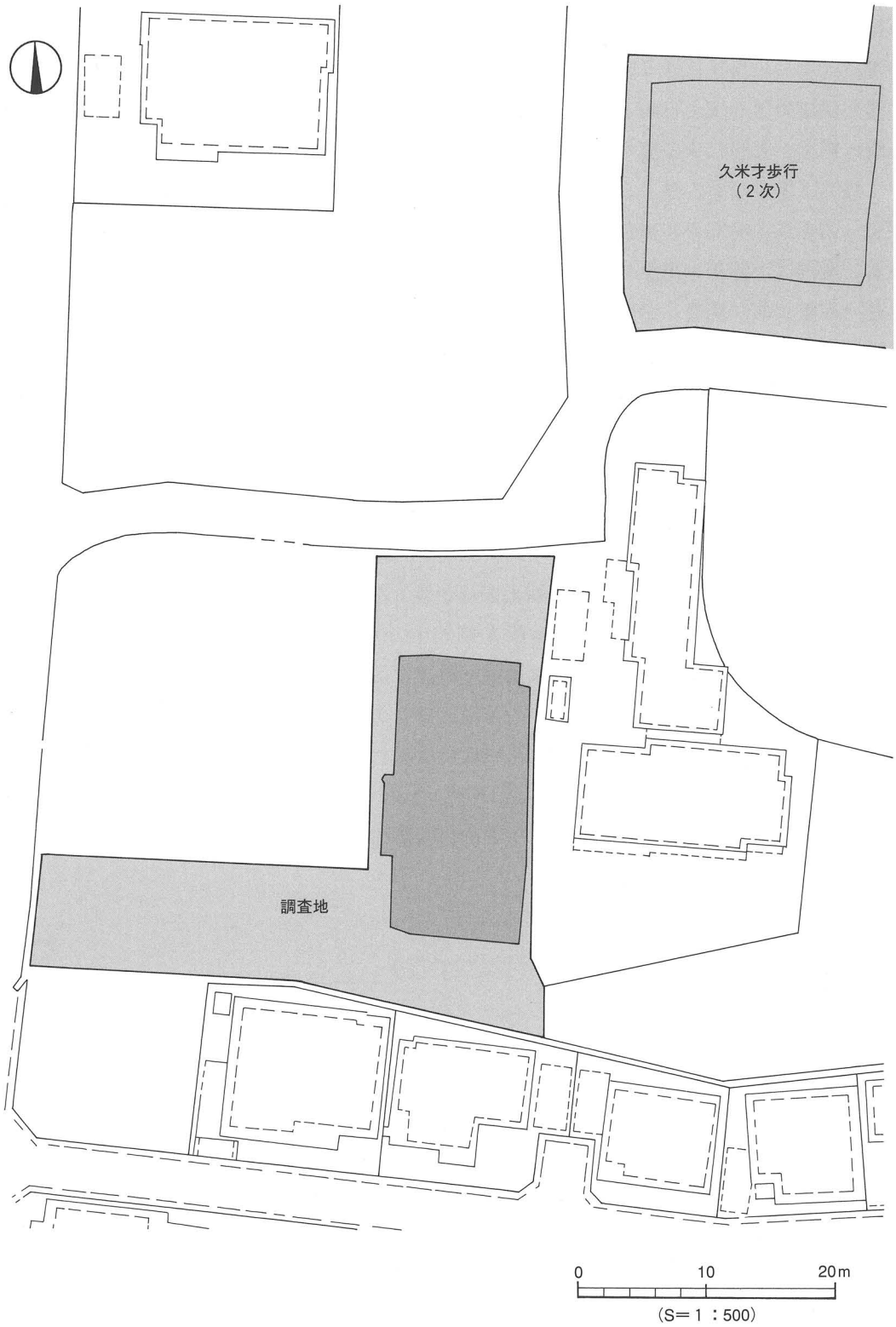
調査地は、松山平野北東部、平井谷地域を水源とする堀越川の北岸に立地する。調査以前は耕作地であった。調査対象面積は496.32㎡であるが、調査事務所や排土置き場の都合上、最終の発掘面積は230㎡余りである。1997（平成９）年９月１日、調査事務所を設置し、調査用具の搬入をする。９月４日、重機により表土の剝ぎ取り作業を行い、９月８日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始する。遺構は掘立柱建物址や溝、土坑のほか多数のピットがあり、遺構内や包含層中からは主に古代から中世までの遺物が出土した。10月28日、遺構の掘り下げをすべて終了し、完掘状況写真を撮影する。31日遺構図の測量を完了し、発掘調査を終了する。出土遺物や記録類、調査用具を撤去し、松山市立埋蔵文化財センターに保管する。

(3) 調査組織

調 査 地　松山市南久米町484番地１
遺 跡 名　久米才歩行遺跡３次調査地
調査期間　1997（平成９）年９月１日～同年10月31日
調査面積　496.32㎡
調査委託　田中和彦
調査協力　株式会社　中岡組
調査担当　宮内慎一・相原秀仁

❶久米才歩行（３次）　❷久米才歩行（１次）　❸久米才歩行（２次）
❹南久米片廻り（１次）　❺南久米片廻り（２次）　❻久米高畑（７次）

第４図　調査地位置図(2)（Ｓ＝１：3,000）



第5図　調査地測量図

２．層　位（第７～10図、図版１）

調査地は、重信川中流右岸の小野川扇状地と石手川扇状地との間に形成された洪積台地上、標高33.2m前後に立地する。調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層淡茶褐色土、第Ⅳ層暗灰褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。

第Ⅰ層－近現代の農耕に伴う客土である。地表下20～30cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層－農耕に伴う床土である。厚さ５～10cmである。

第Ⅲ層－第Ⅰ・Ⅱ層による削平により部分的な検出である。調査地西半部に多くみられ、北から南に向けて傾斜堆積をなす。厚さ５～15cmを測り、中世の土師器・陶磁器を包含する。

第Ⅳ層－調査地中央部から南側にて検出された。第Ⅲ層と同様に部分的な検出であり、厚さ５～10cmである。遺物は土師器・須恵器が出土している。

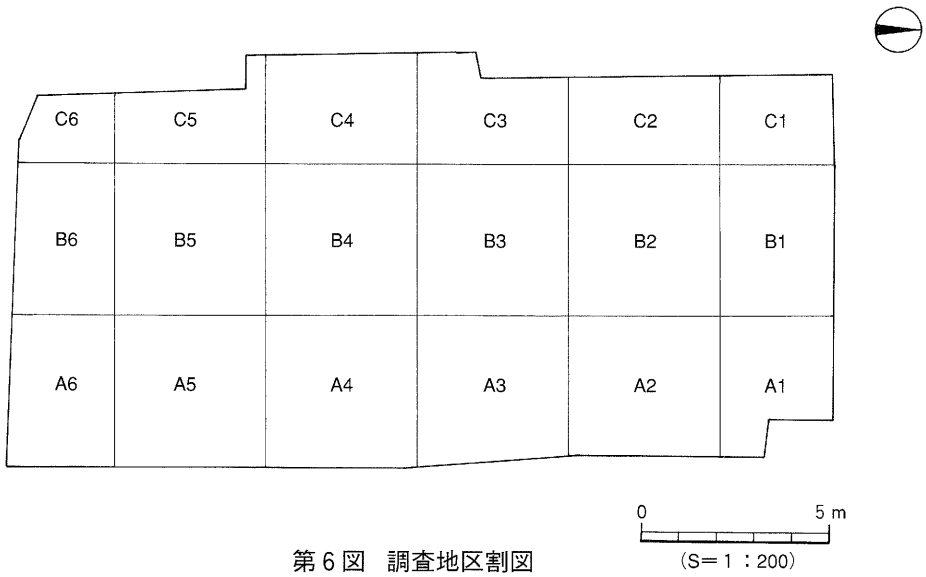
第Ⅴ層－本層上面が調査における最終の遺構検出面である。調査地北半部は粘性の強い土壌であるが、南半分では本層中に拳大の礫が混入する状況である。

遺構はすべて第Ⅴ層上面での検出である。掘立柱建物址４棟（掘立１・２：古代、掘立３・４：中世）、溝３条（ＳＤ１：中世、ＳＤ２・３：不明）、土坑（ＳＫ１：古代、ＳＫ２：中世）、ピット411基である。ただし、遺構の遺存状況から判断すると、本来は第Ⅳ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものが多い。検出遺構や出土遺物から判断すると、第Ⅲ層は古代、第Ⅳ層は中世までに堆積したものと推測される。

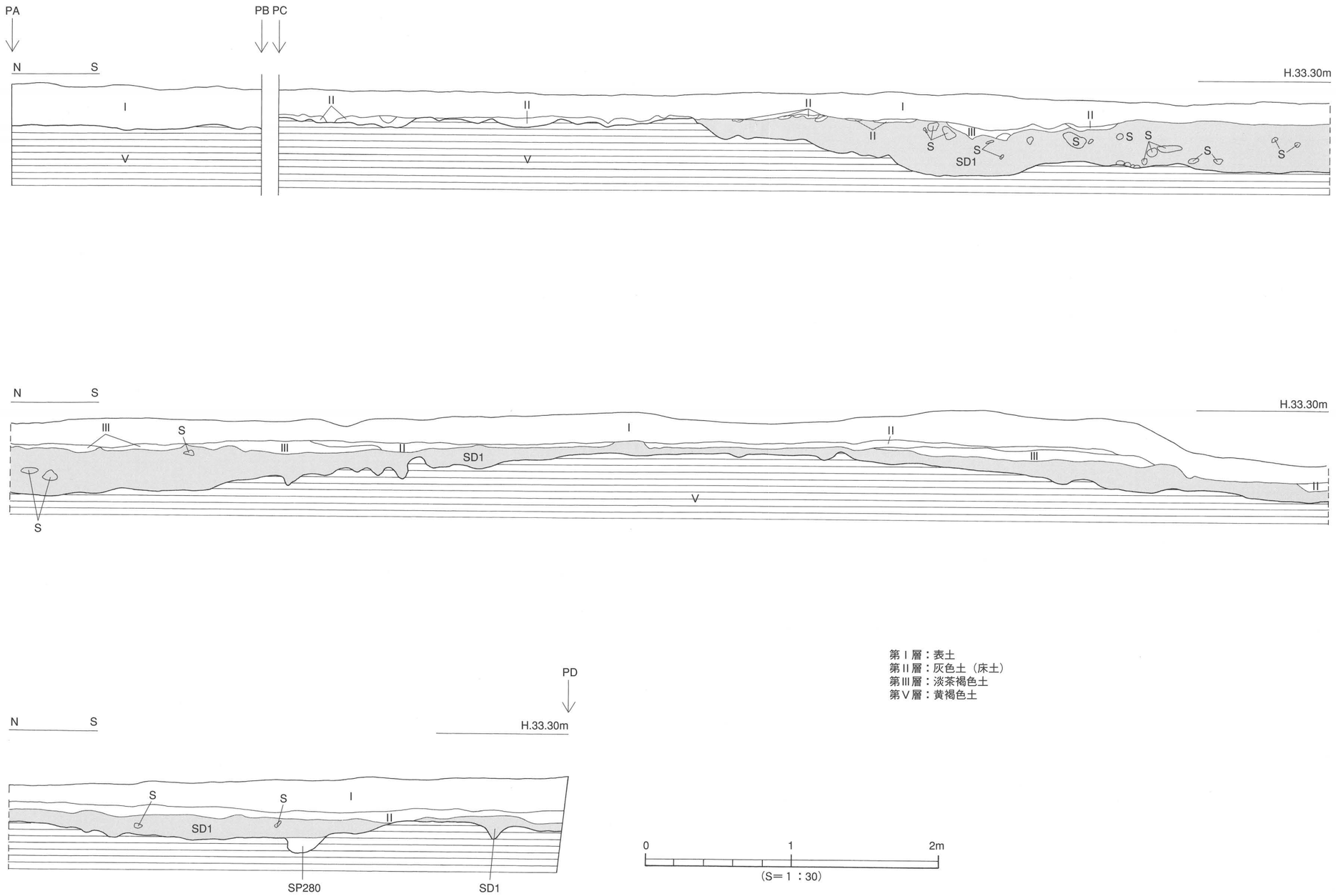
第Ⅴ層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて傾斜をなす（比高差40cm）。なお、調査にあたり調査区内を４m四方のグリットに分けた。各グリットの呼称名は第６図、土層図のポイント位置ＰＡ・ＰＢ…ＰＪは遺構配置図（第11図）に記載している。

本調査において、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。弥生時代・古墳時代の遺構は未検出であるが、古代は掘立柱建物址や土坑、中世では掘立柱建物址や溝、土坑をそれぞれ検出した。

本稿では、３．遺構と遺物〔1〕古代、〔2〕中世、〔3〕時期不明として、時代別にこれらの遺構・遺物の説明を行うことにする。ただし、ピットや包含層出土遺物などは、〔4〕その他として掲載している。



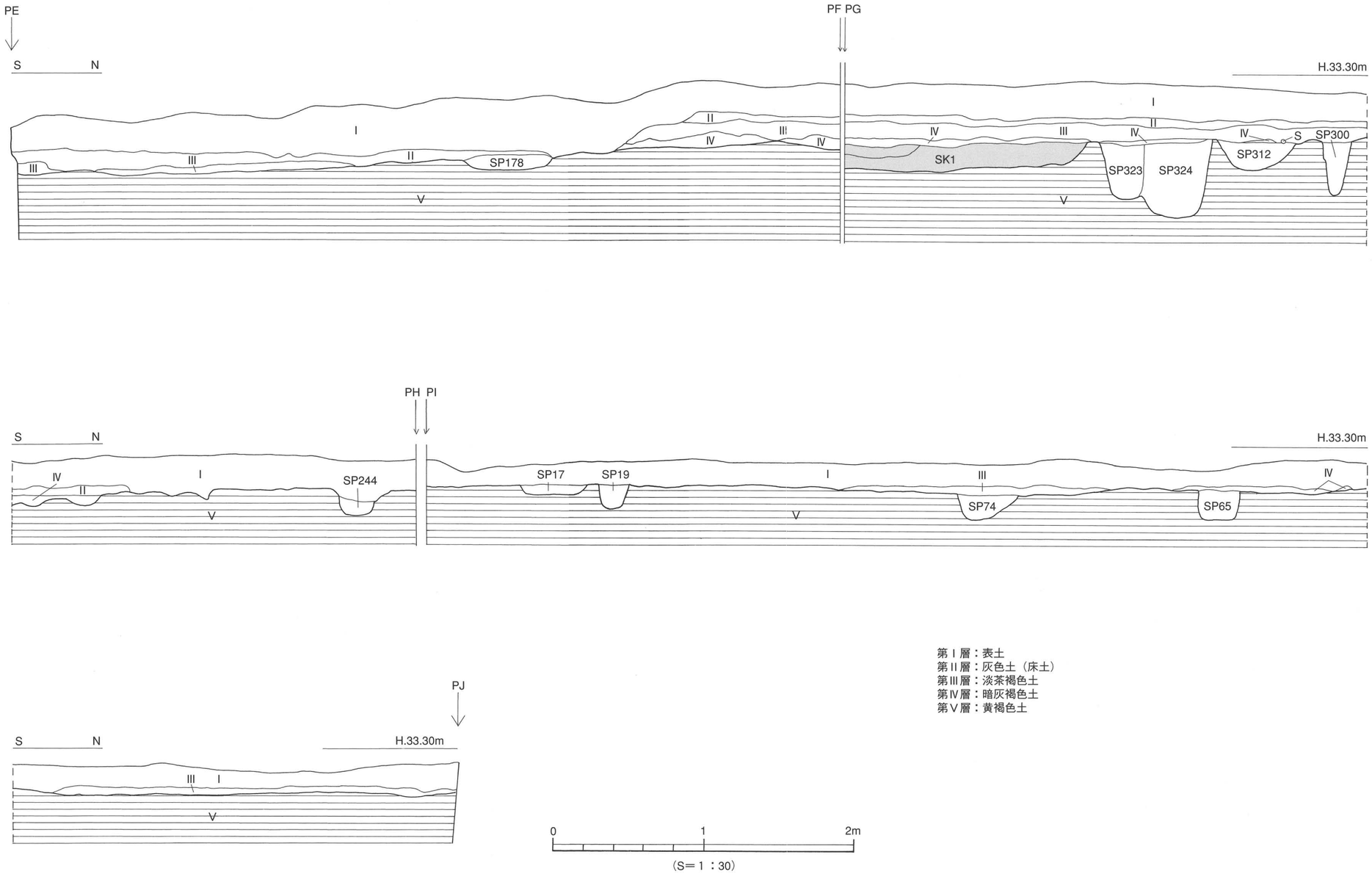
第６図　調査地区割図



第Ⅰ層：表土
第Ⅱ層：灰色土（床土）
第Ⅲ層：淡茶褐色土
第Ⅴ層：黄褐色土

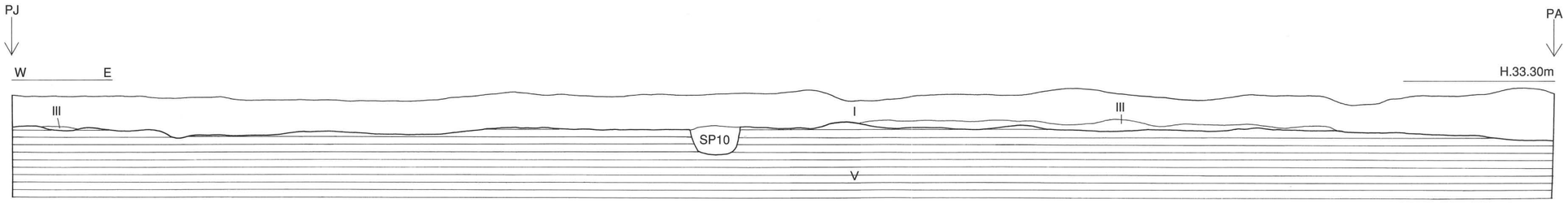
0 1 2m
(S＝1：30)

第７図　東壁土層図

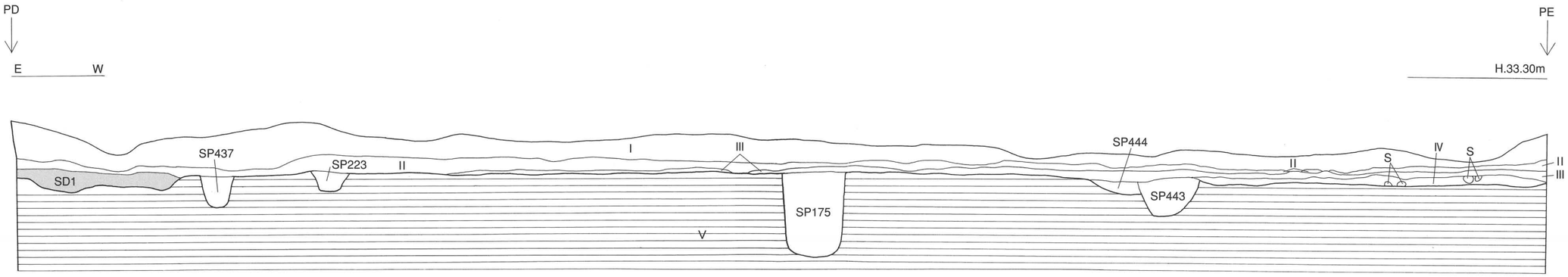


第Ⅰ層：表土
第Ⅱ層：灰色土（床土）
第Ⅲ層：淡茶褐色土
第Ⅳ層：暗灰褐色土
第Ⅴ層：黄褐色土

第８図　西壁土層図



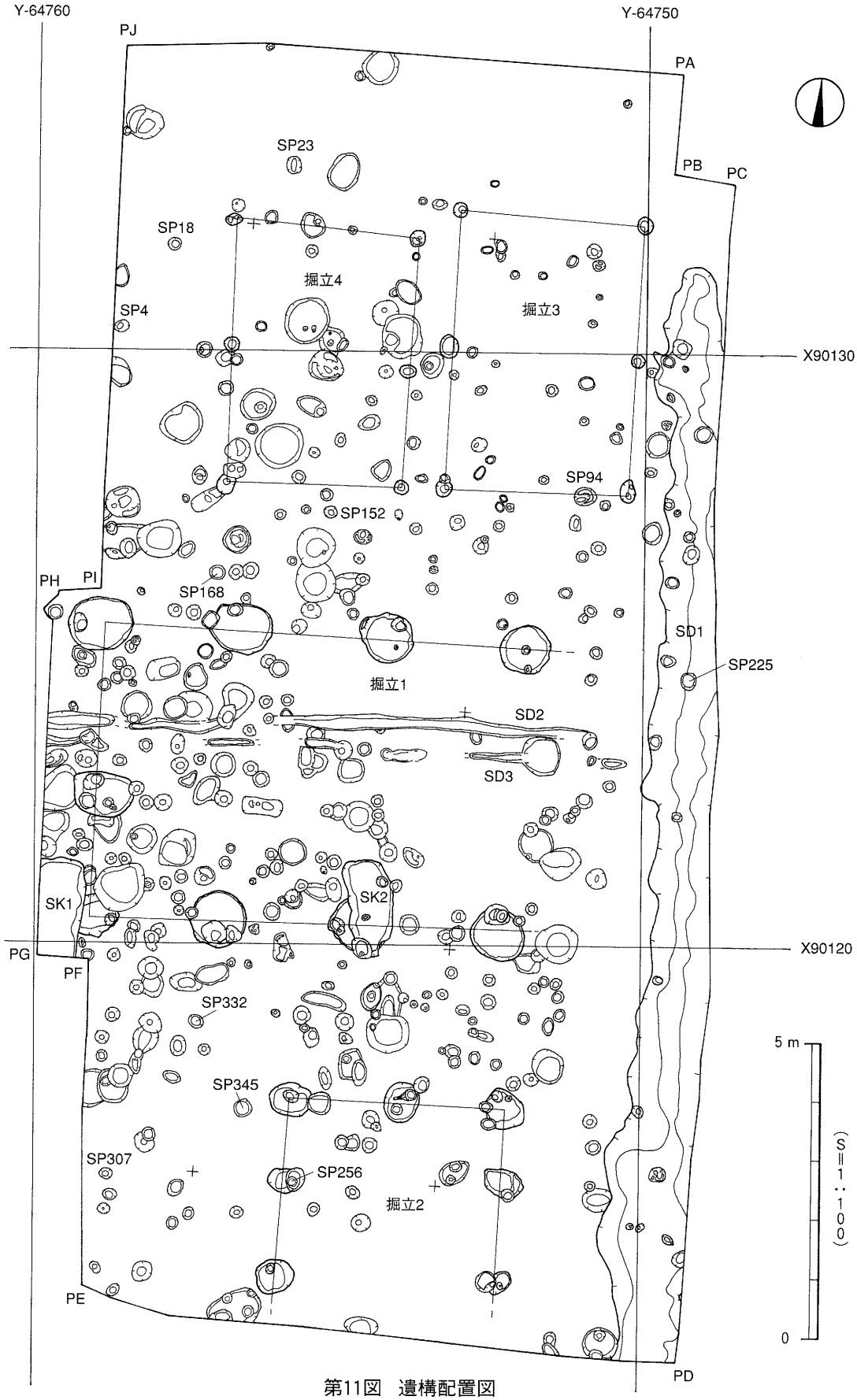
第９図　北壁土層図



第Ⅰ層：表土
第Ⅱ層：灰色土（床土）
第Ⅲ層：淡茶褐色土
第Ⅳ層：暗灰褐色土
第Ⅴ層：黄褐色土

（S＝１：30）

第10図　南壁土層図


Y-64760
Y-64750
PJ
PA
PB
PC
SP23
SP18
SP4
掘立4
掘立3
X90130
SP94
SP152
PH
PI
SP168
SD1
SP225
掘立1
SD2
SD3
SK1
SK2
PG
PF
X90120
SP332
SP345
SP307
SP256
掘立2
PE
PD
5 m
0
(S=1:100)

第11図　遺構配置図

３．遺構と遺物

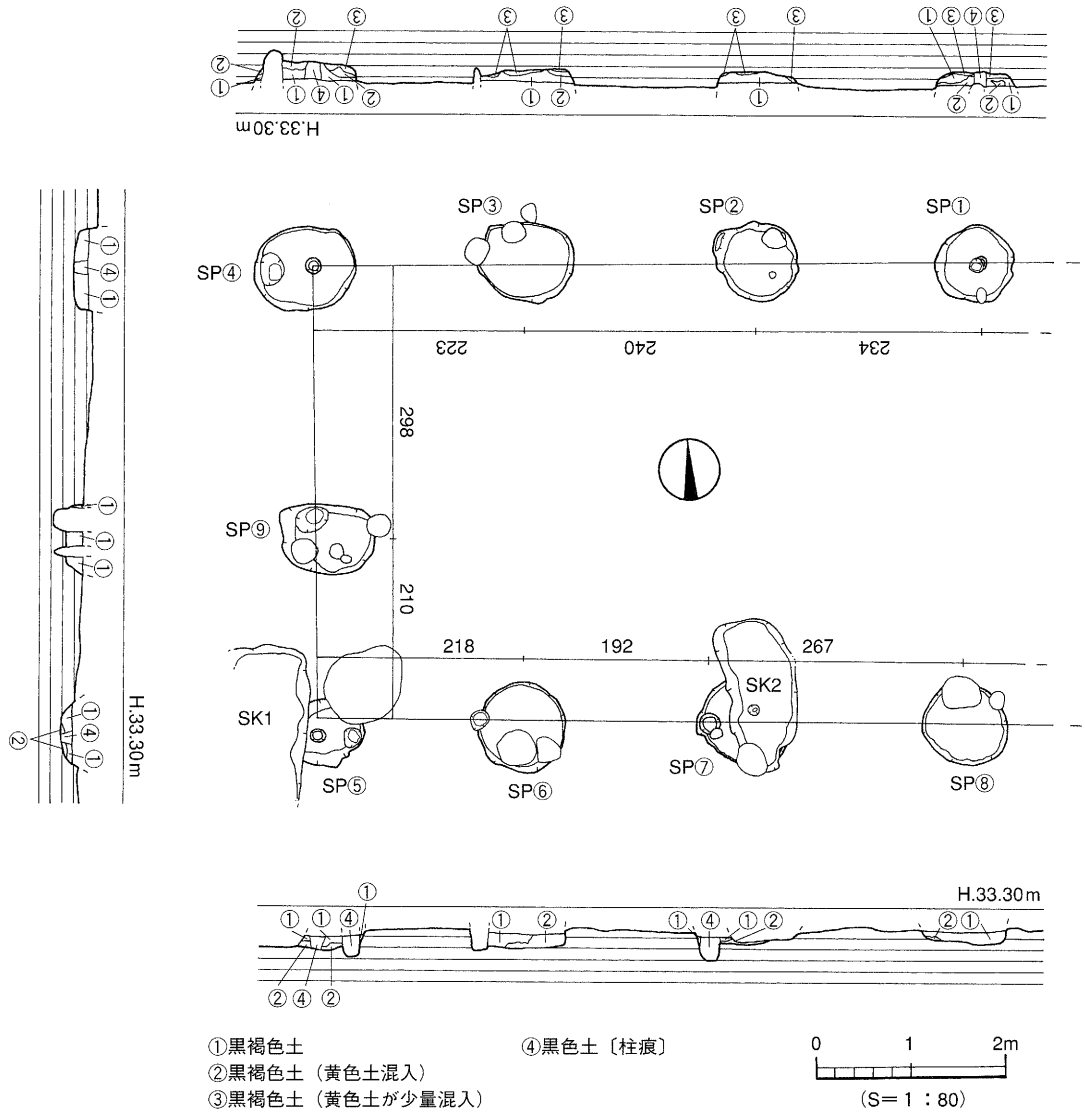
〔1〕古　代

古代の遺構は掘立柱建物址２棟、土坑１基である。すべて第Ⅴ層上面での検出である。

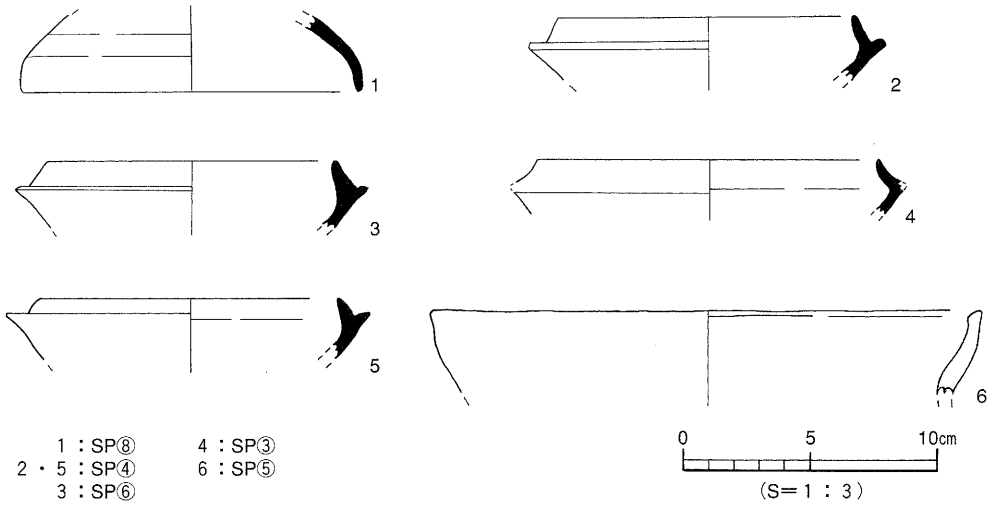
(1)　掘立柱建物址（掘立）

掘立１（第11・12図、図版３）

調査区中央部、Ａ３～Ｃ４区に位置する。９基の柱穴を検出した。建物東側は、建物柱穴の配置から溝ＳＤ１（中世）に削平されたものと考えられ、南西隅柱穴（ＳＰ⑤）及び中央部柱穴（ＳＰ⑦）は土坑ＳＫ１、ＳＫ２にそれぞれ部分的に削平されている。梁行２間、桁行３間以上の東西棟で、真北よりわずかに東側に建物方位を振っており、主軸方位はＮ－2°－Ｅである。規模は梁行長5.08m、桁行長6.77mである。柱穴間隔は梁間2.1～2.9m、桁間1.9～2.7mである。柱穴掘り方は円～楕円形を



第12図　掘立１測量図



第13図　掘立１出土遺物実測図

呈し、径80～104cm、深さ16～24cmを測る。掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土が部分的に混入するものである。柱痕はＳＰ①・④・⑤・⑦の４基の柱穴で検出され、径16～20cm、深さ16～22cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒色土である。

遺物は埋土中より、土師器・須恵器小片が少量出土した。そのうち図化しうるものを６点掲載した。

出土遺物（第13図）

１はＳＰ⑧、２・５はＳＰ④、３はＳＰ⑥、４はＳＰ③、６はＳＰ⑤出土品である。１は須恵器坏蓋、２～５は坏身である。坏身は、たちあがりは低く内傾する形態をなす。６は土師器の甕の口縁部である。口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。

時期：出土した遺物は７世紀前半頃の特徴を示している。よって、掘立１の造営時期は古代、７世紀前半頃とする。

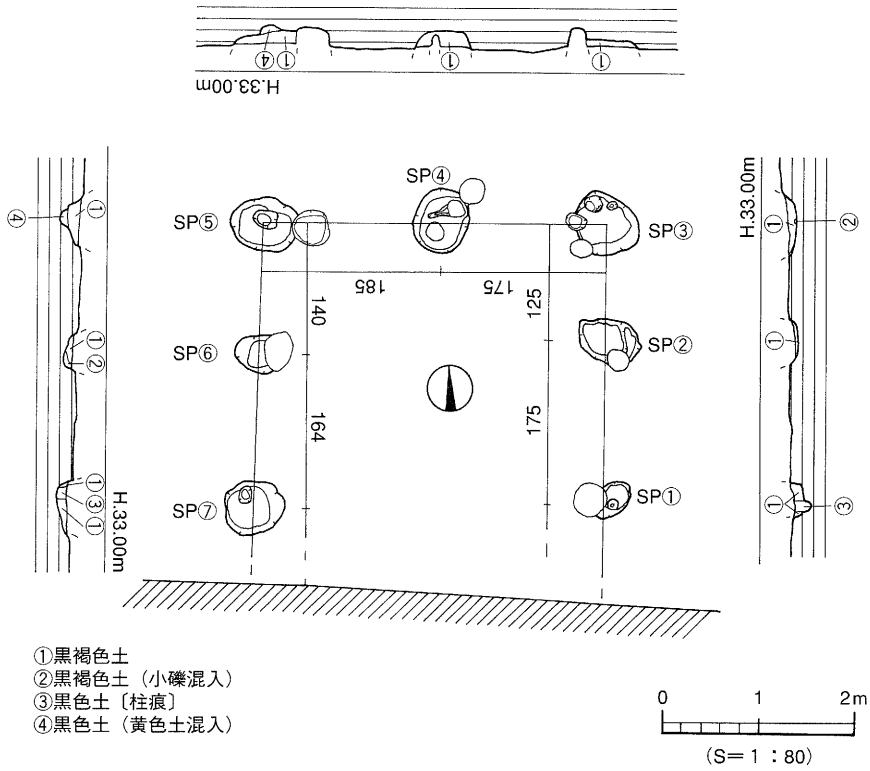
掘立２（第11・14図、図版３）

調査区南側、Ａ５～Ｂ６区に位置する。７基の柱穴を検出した。建物南側は、調査区外に続くものと考えられる。梁行２間、桁行２間以上の建物址で、主軸方位はＮ－2°－Ｅである。規模は梁行長3.04m、桁行長3.59m、柱穴間隔は梁間1.4～1.6m、桁間1.7～1.8mである。

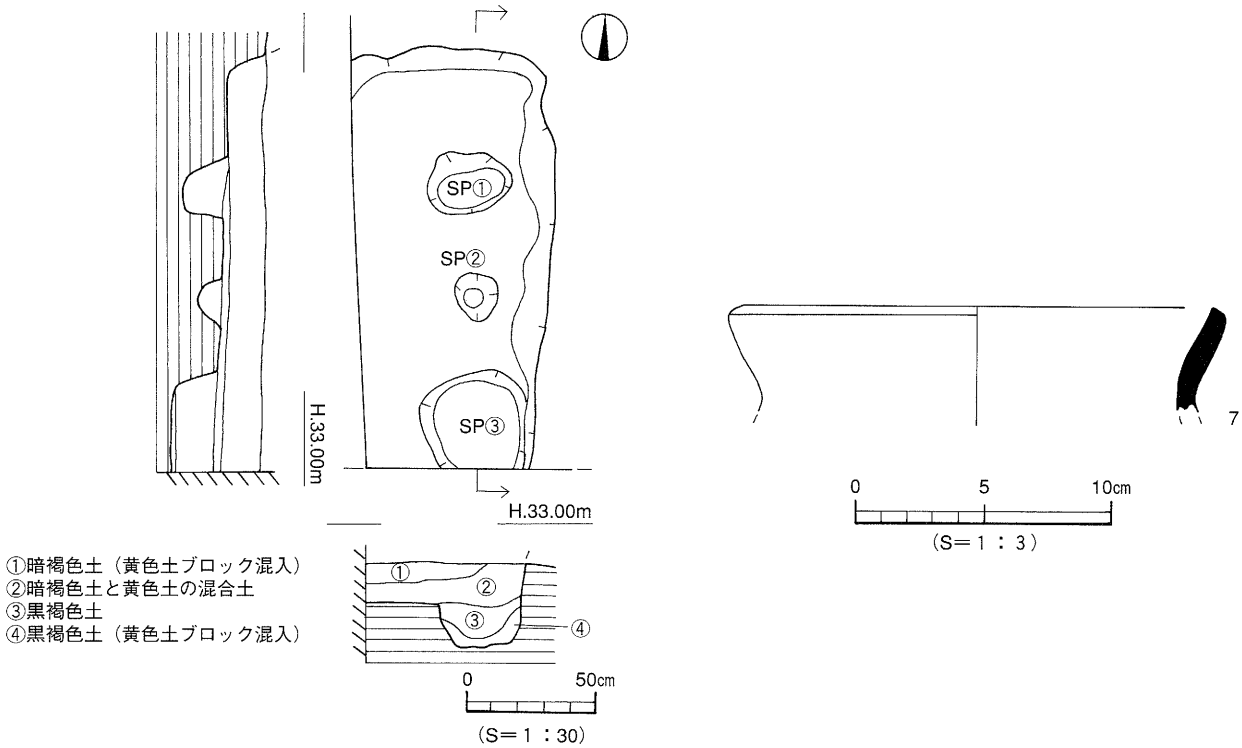
柱穴掘り方は円～楕円形を呈し、径30～60cm、深さ15～20cmを測る。掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土が部分的に混入するものである。柱痕はＳＰ①・⑦の２基の柱穴で検出され、径16～20cm、深さ16～24cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒色土である。

遺物はＳＰ⑤より須恵器坏身片が出土したが、小片のため図化できず未掲載である。

時期：出土遺物がわずかであり明確な時期判断はしかねる。柱穴の掘り方埋土や建物方位が掘立１に酷似することや、出土遺物の特徴から、掘立１と同時期の建物址と考えられる。よって、掘立２も古代、７世紀前半頃の建物址と考えておく。



第14図　掘立２測量図



第15図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

(2) 土　坑

ＳＫ１（第11・15図、図版４）

調査区西壁中央部、Ｃ４・５区に位置する。掘立１柱穴を切り、遺構西側及び南側は調査区外に続く。

平面形態は方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.77ｍ、南北検出長1.66ｍ、深さは検出面下15cmを測る。断面形態は逆台形状をなす。基底面は平坦であり、壁体は垂直に近く立ち上がる。

埋土は暗褐色土を基調とし、黄色土の混入度合いで２層（①・②層）に分層される。①層に比べて②層が黄色土の混入量が多い。

基底面にて大小３基（ＳＰ①～③）のピットを検出した。このうち、ＳＰ①・②の埋土は土坑埋土と同じであることから、ＳＫ１に伴う可能性がある。ＳＰ③は埋土が黒褐色土であり、土坑埋土が異なることや土層断面観察からＳＫ１構築以前の遺構と考えられる。

遺物は、埋土中より土師器・須恵器片が数点出土した。そのうち図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第15図）

７は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は面取りされ、口唇部はやや内側につまみ出されている。推定口径18.0cm、色調は内外面共に灰色を呈する。

時期：出土遺物は僅少で明確な時期判断は困難である。掘立１に後出することや、遺物の特徴からＳＫ１は７世紀後半の遺構とする。

〔2〕中　世

中世の遺構は掘立柱建物址２棟、溝１条、土坑１基がある。すべて第Ⅴ層上面での検出である。

(1) 掘立柱建物址

掘立４（第11・16図、図版４）

調査区北西部、Ｂ１～Ｃ３区に位置する。建物は６基の柱穴から構成される。梁行１間、桁行２間の南北棟で、建物方位をＮ－2°－Ｅにとる。規模は梁行長3.04ｍ、桁行長4.48ｍ、柱穴間隔は桁間2.1～2.3ｍを測る。柱穴掘り方は円～楕円形を呈し、径24～30cm、深さ20～44cmを測る。掘り方埋土は褐色土単層である。柱痕はＳＰ③・④の２基の柱穴で検出され、径15～20cm、深さ26～30cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い褐色土である。

遺物はＳＰ⑥から土師器土釜の口縁部片が出土したほか、ＳＰ⑤の基底面にて径20cm、厚さ５cmの扁平な石を１個検出した。

出土遺物（第16図）

８は土師器土釜の口縁部片である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は面をもつ。口唇部よりやや下がった位置に断面三角形状の凸帯が付く。

時期：柱穴内から出土した遺物が僅少で、明確な時期決定はしかねる。出土した土釜の特徴から、掘立４は15～16世紀の建物址とする。

掘立３（第11・17図、図版５）

調査区北東部、Ａ１～Ｂ３区に位置する。建物は６基の柱穴から構成される。梁行１間、桁行２間

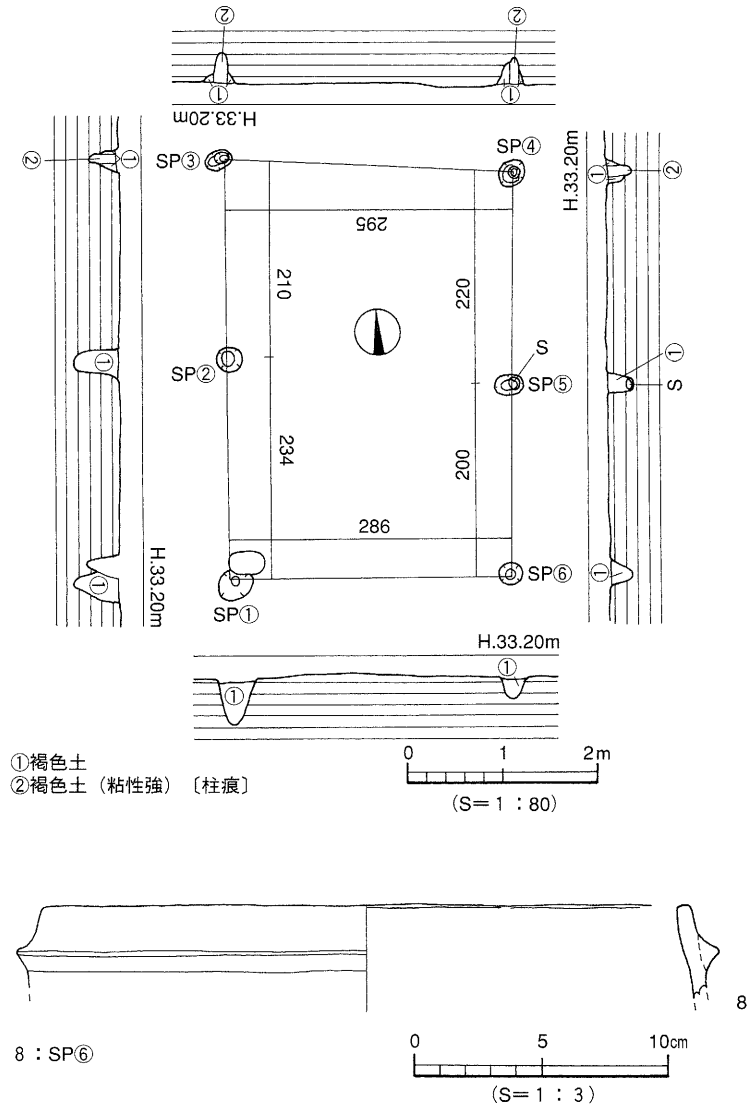
の南北棟で、建物方位をＮ－2°－Ｅにとり、ほぼ、掘立４と同じ建物方位をなす。規模は梁行長3.04ｍ、桁行長4.77ｍ、柱穴間隔は桁間2.3～2.5ｍである。柱穴掘り方は円～楕円形を呈し、径20～40㎝、深さ30～45㎝を測る。掘り方埋土は暗灰褐色土単層である。柱痕は未検出である。

遺物はＳＰ③より土釜、または土鍋の脚部片が出土したほか、ＳＰ②の基底面にて径20㎝、厚さ５㎝の扁平な石が１個出土した。

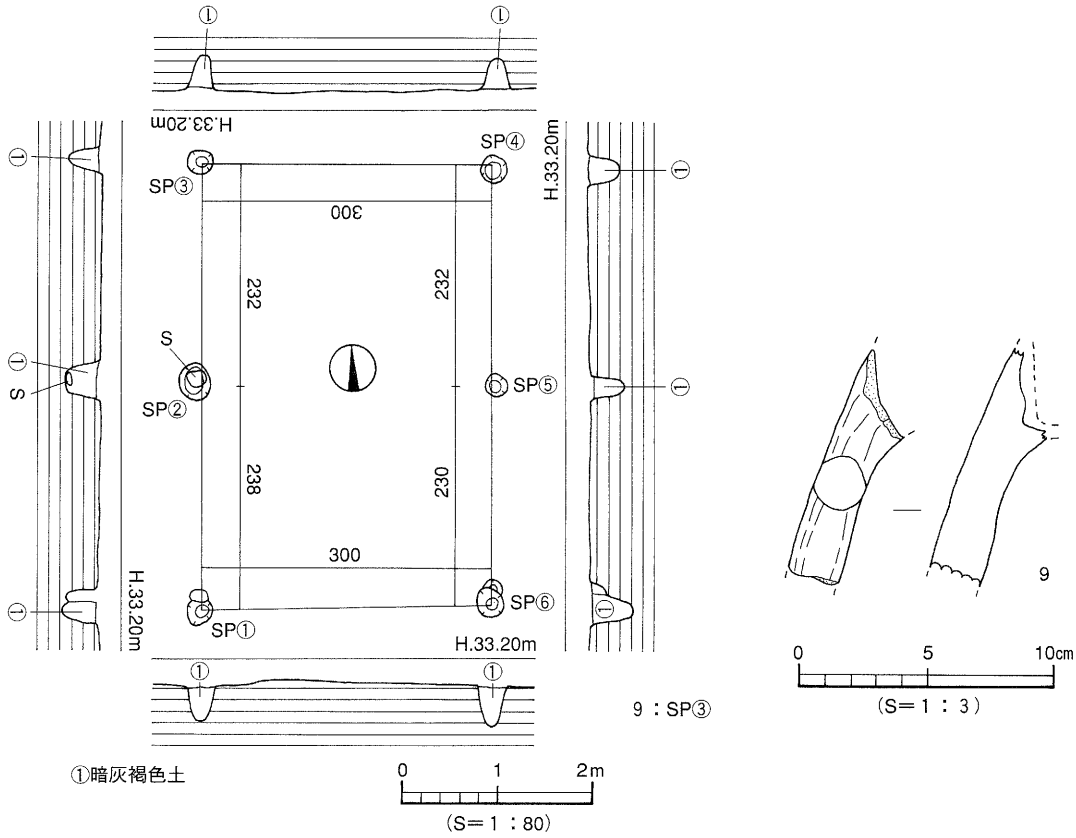
出土遺物（第17図）

９は土釜、または土鍋の脚部片である。最大厚は２㎝を測る。脚部の接合方法が看取されるもので、胴部に粘土板を捻るように貼り付け、脚柱部分を絞って成形し、指頭で細かな整形を施している。

時期：柱穴内から出土した遺物が僅少で、明確な時期決定は困難である。あえて時期を求めるならば、掘立３は15～16世紀代の建物址と考えられよう。



第16図　掘立４測量図・出土遺物実測図



第17図　掘立３測量図・出土遺物実測図

(2)　溝

ＳＤ1（第11・18図、図版６）

調査区東側、Ａ２～６区に位置する。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅱ・Ⅲ層が覆う。溝北端は消滅し、南端及び東側は調査区外に続く。溝中央部は掘立１柱穴を削平したものと推測される。南北方向に延びる溝で、ほぼ真北に等しい方位をとる。規模は検出長18.4m、最大幅1.4m、深さは最大で30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色土単層である。

溝基底面は北側から南側に向けて傾斜をなす（比高差30cm）。調査区中央部やや南寄りの地点では、溝基底面に10cm大の礫が露出する状況であった。このほか、溝を完掘後、基底面にて大小20基のピットを検出した。いずれのピットも、埋土が褐色土もしくは暗灰褐色土であるため、溝に先行する時期の遺構と推測される。溝内には水の流れた様子はなく、溝の性格は土地割りのためのものではないかと考えられる。

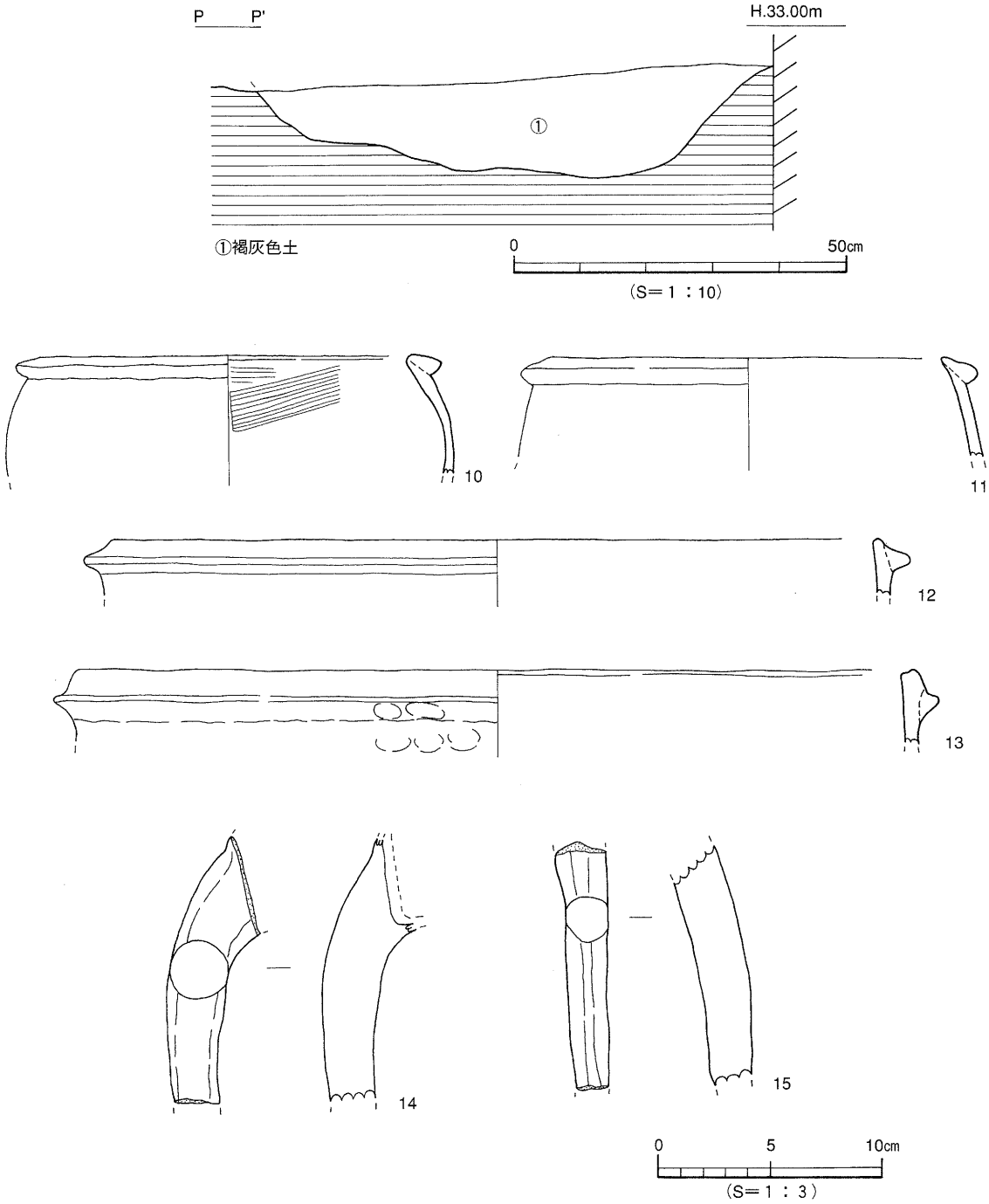
遺物は、埋土中にて土師器片が散在して出土した。

出土遺物（第18図、図版７）

10～13は土師器土釜である。10・11は口縁部は内湾し、口縁端部に下膨れの断面三角形状の凸帯が付く。10は凸帯下の胴部外面に煤が付着する。内外面共に口縁部はヨコナデ調整、胴部は、10は刷毛目調整、11はナデ調整を施す。12・13は口縁部は直立し、口縁端部より下がった位置に断面三角形状

の凸帯が付く。13の口縁端部はやや凹む。13の外面には指頭痕を残す。内外面共に口縁部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施す。14・15は土釜または土鍋の脚部である。最大厚は14が2.6cm、15は1.9cmを測る。

時期：出土した遺物が15～16世紀の特徴を示している。掘立１に後出することや、出土遺物の特徴から、ＳＤ１は15～16世紀代の遺構とする。



第18図　ＳＤ１断面図・出土遺物実測図

(3) 土　坑

ＳＫ２（第11・19図）

調査区中央部南寄り、Ｂ４・５区に位置する。遺構北東部及び南側は、それぞれ灰色土を埋土にもつＳＰ253、ＳＰ214に切られ、掘立１柱穴（ＳＰ⑦）を切っている。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.63m、短径0.80m、深さ約７cmを測る。基底面はわずかに北から南に向けて傾斜をなす（比高差４cm）。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は暗灰色土単層である。

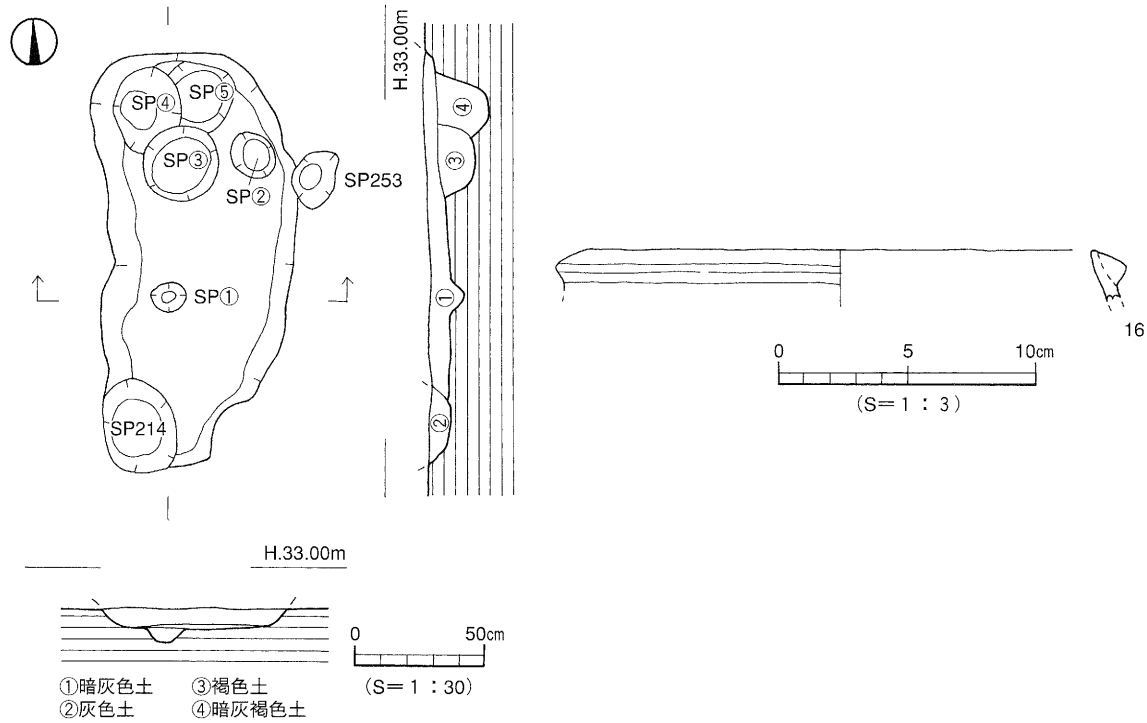
基底面にて大小５基のピットを検出した。ＳＰ①は径10～15cm、深さ５cm程度のもので、埋土はＳＫ２と同様の暗灰色土であることから、本土坑に伴うものと考えられる。そのほか、ＳＰ②・⑤は暗灰褐色土、ＳＰ③は褐色土、ＳＰ④は黒褐色土を埋土にもつことから、これら４基のピットは本土坑構築以前の遺構の可能性が高い。

遺物は埋土中にて土師器小片が数点出土したほか、基底面付近からは鉄片（魂）が数点出土している。出土遺物のうち、図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第19図）

16は土師器土釜の口縁部である。口縁端部に接して、丸味のある断面三角形状の凸帯が付く。推定口径19.4cm、色調は茶褐色を呈する。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。あえて時期を求めるならば、出土した土釜の特徴から、ＳＫ２は15～16世紀の遺構とする。また、鉄片が出土したことから、ＳＫ２は工房的な性格をもつ遺構の可能性もある。



第19図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

〔3〕時期不明

本調査では、時期特定の困難な遺構として溝２条があげられる。

ＳＤ２（第11図）

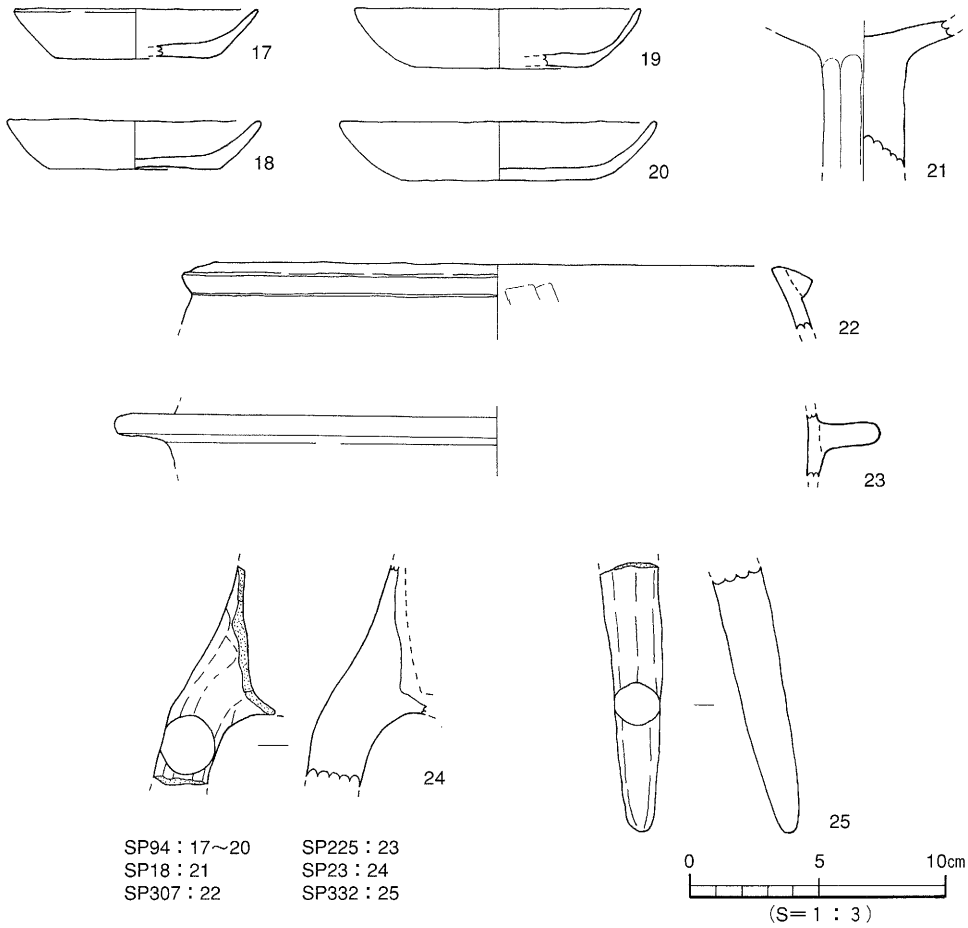
調査区中央部やや南寄り、Ａ４～Ｃ４区に位置する。東西方向の溝で、規模は検出長8.92ｍ、幅14㎝、深さ６㎝を測る。断面形態は浅い「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物はなく、他の遺構との切り合いもないことから時期は不明である。

ＳＤ３（第11図）

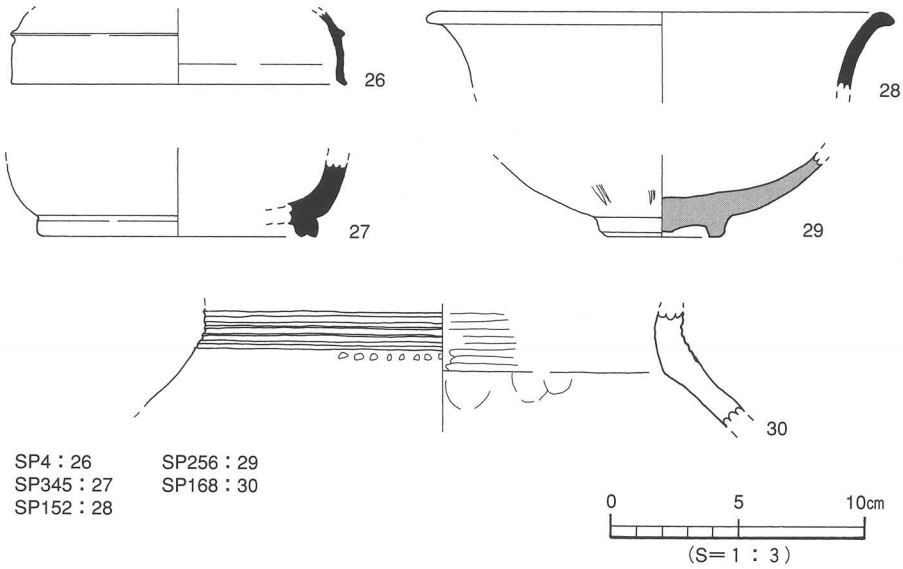
調査区中央部やや南寄り、Ａ４～Ｃ４区に位置する。ＳＤ２とほぼ平行に走る溝であるが、部分的に削平されている。規模は検出長9.56ｍ、幅12㎝、深さ５㎝を測る。断面形態は浅い「Ｕ」字状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

〔4〕その他

本調査では、掘立柱建物址や溝、土坑のほかにピット411基を検出している。また、包含層である第Ⅲ層中からは、少量ではあるが遺物が出土している。



第20図　ピット出土遺物実測図(1)



第21図　ピット出土遺物実測図(2)

(1)　ピット

本調査では411基のピットを検出した。埋土の違いにより以下の５種類に分類される（埋土①－灰色土、埋土②－暗灰色土、埋土③－褐色土、埋土④－暗灰褐色土、埋土⑤－黒褐色土）。

埋土①のピットは91基あり、調査区ほぼ全域に点在する。埋土②のピットは、掘立３を含め89基ある。調査区中央部西寄り付近に集中して分布する。ピット内からは、中世段階の土師器片が出土している。埋土③のピットは掘立４を含め48基あり、調査区北東部に多く分布する。埋土④のピットは117基あり、調査区ほぼ全域に散在する。埋土⑤のピットは掘立１・２を含め66基あり、調査区全域に点在する。ピット内からは弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

これらピットのうち、埋土②のＳＰ94からは、４枚の割れた土師器皿や坏が、ピット中心部付近に斜め方向に埋められていた。そのほか、ピット内から出土した遺物のうち図化しうるものを第20・21図に掲載した。

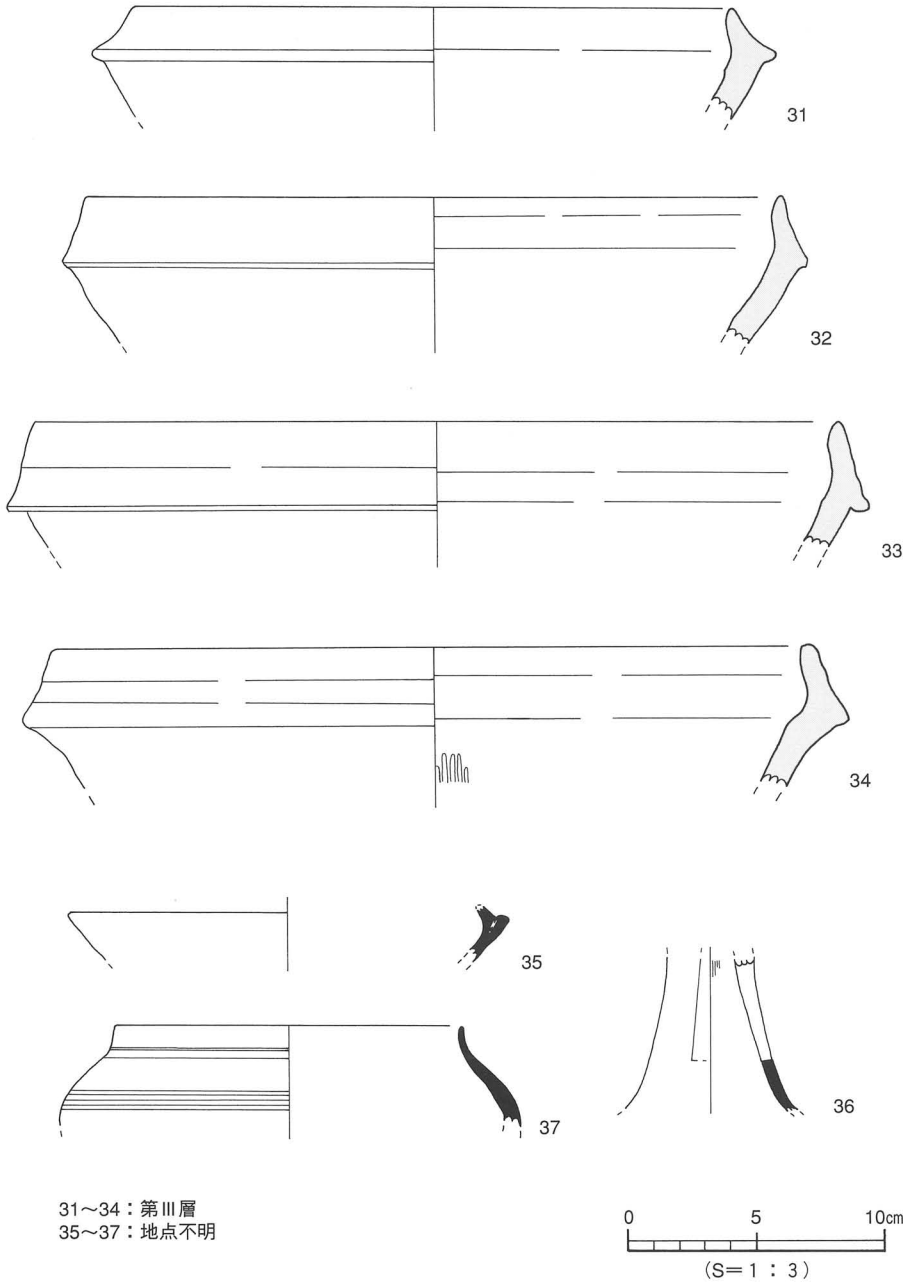
出土遺物（第20・21図、図版７）

17～20はＳＰ94出土品。21・27・28は埋土③、26・30は埋土⑤、その他は埋土②のピット出土品である。17～20は土師器皿である。体部はやや内湾し、口縁端部は丸く仕上げられている。すべて底部の切り離しは回転糸切り技法による。17・18は口径9.2cm、9.9cm、器高は1.9cmである。19・20はやや大型で、口径11.0cmと12.0cm、器高は両者共に2.3cmである。内外面共にヨコナデ調整を施す。21はＳＰ18出土の土師器の高坏である。外面に面取り痕を僅かに残す。22はＳＰ307、23はＳＰ225、24はＳＰ23、25はＳＰ332出土品。22は土師器土釜の口縁部である。口縁端部に接して断面三角形状の凸帯が付く。23は瓦質土器の羽釜である。やや上向きの比較的長い鍔が付く。24・25は土釜または土鍋の脚部である。24は外面にわずかに煤が付着する。26はＳＰ４、27はＳＰ345、28はＳＰ152、29はＳＰ256、30はＳＰ168出土品。26は須恵器坏蓋で、断面三角形の鋭い稜をもつ。27は須恵器坏で、幅広の短い高台をもち、高台接地面はやや凹む。28は須恵器壺である。29は龍泉窯系青磁碗で、体部外面

に細身の蓮弁文を施す。釉は薄緑色で、高台畳付部分は露呈のままである。30は弥生土器の壺である。頸部にヘラ描き沈線文５条と刺突文を施す。

(2) 包含層・地点不明出土遺物（第22図、図版７）

本調査では、第Ⅲ層中から遺物が出土した。また、出土地点の不明な遺物が数点ある。31～34は第Ⅲ層、35～37は地点不明出土遺物である。31～34は備前焼の擂鉢である。口縁部は上下方に拡張し、端面は31・32は凹み、33・34は凹線が巡る。34の内面には平行条線を５条以上施している。15～16世紀。35は須恵器の坏身、36は高坏、37は短頸壺である。６～７世紀。



第22図　第Ⅲ層・地点不明出土遺物実測図

4．小　結

本調査において、弥生時代から中世までの遺構・遺物を確認することができた。

弥生時代と古墳時代は、確実に時期比定される遺構は未検出であるが、ピットや表採資料に弥生時代前期や古墳時代後期の土器片が出土している。これは久米才歩行遺跡２次調査において、同時期の遺構や遺物が検出されていることから、近隣に存在する弥生時代や古墳時代集落に関連して、これらの遺物が存在するものと考えられる。

ついで、７・８世紀の古代の遺構・遺物が認められる。７世紀前半頃、掘立柱建物が当地に出現する。掘立１は７ｍを超える比較的大型の建物址で、建物方位をほぼ真北に等しくとる。柱穴掘り方は円～楕円形を呈している。来住台地上で検出される掘立柱建物址の場合、方向性や柱穴掘り方プランなどで概ね時期判断が可能である。真北方向をとる建物址は古代のもので、掘り方プランにより、円形プランでは７世紀代、方形プランになると８世紀代と考えられている。この観点からも、本調査検出の建物址は７世紀代の建物址であるといえよう。しかも、古代７世紀における集落が、確実に当地や近隣地域に存在することを示す貴重な資料である。

引き続き、９～13世紀の遺構・遺物を有しないまま、久米才歩行遺跡３次調査地は15・16世紀の遺構や包含層を有している。掘立３・４は１×２間の規模の建物址で、真北方向に建物方位をとる。また、南北に延びる溝ＳＤ１は検出状況から、土地を区画するための溝ではないかと推測される。このほか、土坑ＳＫ２からは基底面付近にて鉄片が数点出土し、工房的な性格の遺構の可能性がある。

このように、掘立柱建物址や地境を示すと考えられる溝、鍛冶工房的性格の土坑などの存在は、当地や周辺地域に中世集落が存在するものとみて間違いないであろう。さらに破片ながら輸入陶磁器の出土は、集落の中心となる大型建物が営まれた屋敷址が、周辺に存在している可能性も高い。

今後は、調査地や周辺地域の遺跡を検討し、各時代における集落の広がりや構造を、来住台地に展開する遺跡との関係をも考慮して考えていかなければならないであろう。

遺構・遺物観察表　ー凡例ー

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構一覧表の出土遺物欄は遺物を略記した。

例）土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の記載について

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土製品の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部。

胎　土　欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～３）→「１～３㎜大の石英・長石を含む」

焼　成　欄　焼成欄は焼成具合を略記した。

例）◎→良好、○→良、△→不良。

表２　掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規模（間）	桁　行		梁　行		床面積（㎡）	備　考	時　期
			実長(m)	柱間寸法（m）	実長(m)	柱間寸法（m）			
1	東西	3＋α×2	6.77	2.18・1.92・2.67	5.08	2.98・2.10	34.39＋α	SK1・SK2に切られる。	7世紀前半
2	南北	2＋α×2	3.04	1.40・1.64	3.59	1.84・1.75	10.91＋α		7世紀前半
3	南北	2×1	4.77	2.32・2.45	3.04	3.04	14.50		15～16世紀
4	南北	2×1	4.48	2.13・2.35	3.04	3.04	13.62		15～16世紀

表３　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A2～A6	レンズ状	18.40×1.40＋α×0.30	褐灰色土	土師	15～16世紀	
2	A4～C4	U字状	8.92×0.14×0.06	灰色土		不明	
3	A4～C4	U字状	9.56×0.12×0.05	灰色土		不明	

表４　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	C4・5	方形	逆台形状	1.66＋α×0.77＋α×0.15	暗褐色土 ＋黄色土	須恵	7世紀後半	掘立1を切る
2	B4・5	不整楕円形	皿状	1.63×0.80×0.07	暗灰色土	土師・鉄	15～16世紀	掘立1を切る

表５　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	坏蓋	口径（13.1） 残高　3.0	天井部からなだらかなカーブを描き口縁部に至る。口縁端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP⑧	
2	坏身	口径（11.6） 残高　2.5	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は比較的太く丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP④	
3	坏身	口径（13.2） 残高　2.1	たちあがりは内傾し、端部は尖る。受部は欠損。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP⑥	
4	坏身	口径（11.1） 残高　2.6	たちあがりは低く内傾し、端部は尖る。受部は水平に短くのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP③	
5	坏身	口径（11.5） 残高　2.4	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。受部は上外方に短くのび、受部端に沈線状の凹みあり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP④	
6	甕	口径（21.2） 残高　3.0	内湾する口縁部。口縁端部は内傾する。小片。	マメツ	マメツ	橙褐色 橙褐色	密 ◎	SP⑤	

表６　SK1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面） （内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外　面	内　面				
7	甕	口径（18.0） 残高　4.1	須恵器甕の口縁部。わずかに内湾し、口縁端部は上方にややつまみ上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表7　掘立４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
8	土釜	口径（24.8） 残高　3.7	口縁端部よりやや下がった部分に断面三角形の凸帯が付く。口唇部は内傾する。小片。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎	SP⑥	

表8　掘立３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
9	土釜	残高　9.3	土釜の脚部。接合痕あり。	ナデ		褐色	石・長（1～3） ◎	SP③	

表9　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
10	土釜	口径（16.6） 残高　5.6	内湾する口縁部。口縁端部に下垂する断面三角形の凸帯が巡る。胴部外面に煤付着。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	㊐ヨコナデ ㊟ハケ（10本／cm）	茶褐色 茶褐色	石・長（1～3） ◎	煤	7
11	土釜	口径（17.2） 残高　4.0	土釜の口縁部。口縁端部に下膨れの断面三角形状の凸帯が付く。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		7
12	土釜	口径（34.0） 残高　2.6	土釜の口縁部。口縁端部にほぼ接して、断面三角形状の凸帯が巡る。小片。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長（1～3） ◎		7
13	土釜	口径（36.0） 残高　3.3	直立する口縁部。口縁端部より下がった位置に断面三角形状の凸帯が付く。口唇部はやや凹む。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ（指頭痕）	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長（1～3） ◎		7
14	土釜	残高　11.5	三足付き土釜の脚部。粘土接合痕あり。	ナデ		褐色	石・長（1～3） 金　◎		7
15	土釜	残高　10.8	三足付き土釜の脚部。細身。	ナデ（指頭痕）		茶褐色	石・長（1～3） ◎		

表10　SK2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
16	土釜	口径（19.4） 残高　1.9	土釜の口縁部。口縁端部に接して断面三角形の凸帯が付く。小片。	㊐ヨコナデ ㊟ナデ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長（1） ◎		

表11　ピット出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
17	皿	口径　9.2 底径　6.0 器高　1.9	やや内湾する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。底部外面に回転糸切り痕あり。3/4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	SP94	
18	皿	口径　9.9 底径　6.6 器高　1.9	内湾する口縁部。底部に凹凸あり。底部は回転糸切り離し技法。4/5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長（1～3） ◎	SP94	7
19	皿	口径（11.0） 底径（6.6） 器高　2.3	大型の皿。口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。底部外面に回転糸切り痕あり。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	SP94	7
20	皿	口径　12.0 底径　7.2 器高　2.3	ほぼ完形品。大型で口縁部は内湾する。底部は平底で回転糸切離技法を施す。	マメツ	マメツ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	SP94	

ピット出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
21	高坏	残高　5.8	外面に面取りの痕跡を看取。中実。	マメツ		赤橙褐色	密 ◎	SP18	
22	土釜	口径（21.6） 残高　2.5	内湾する口縁部。口縁端部に接して断面三角形の凸帯が付く。	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎	SP307	
23	羽釜	鍔径（30.5） 残高　2.5	瓦質土器。やや上向きの比較的長い鍔。小片。	ナデ	ナデ	灰褐色 乳黄褐色	密 ◎	SP225	
24	土釜	残高　8.7	土釜の脚部。わずかに煤付着。接合痕が残る。	ナデ（指頭痕）		褐色	密 ◎	SP23 煤	
25	土釜	残高　10.6	土釜の脚部。細身。脚端部は丸い。	ナデ		褐色	石・長（1～3） ◎	SP332	
26	坏蓋	口径（13.1） 残高　2.8	断面三角形の鋭い稜をもつ。口縁部はやや内湾し、端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP4	7
27	坏	底径（11.8） 残高　3.0	高台付坏。高台は太く底体部境付近に付く。高台接地面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP345	7
28	壺	口径（17.0） 残高　3.1	外反する口縁部。口縁端部はやや下方に垂下する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP152	
29	碗	高台径（4.3） 残高　3.3	龍泉窯系青磁碗。細身の蓮弁文あり。薄緑の釉を施し、高台畳付部分は露呈のまま。	㊥回転ナデ ㊞回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP256	7
30	壺	残高　4.5	壺の頸胴部片。頸部にヘラ描き沈線文を5条と刺突文を施す。弥生前期。	ナデ	㊦ミガキ ㊥ナデ	赤橙褐色 赤橙褐色	密 ◎	SP168	

表12　包含層・地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
31	擂鉢	口径（23.0） 残高　4.4	備前焼。口縁部は上下方に拡張し、端面はやや凹む。口唇部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰橙色	密 ◎	Ⅲ層	
32	擂鉢	口径（27.0） 残高　5.2	備前焼。口縁部は上下方に拡張。口縁端部はわずかに内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 赤褐色	密 ◎	Ⅲ層	7
33	擂鉢	口径（31.4） 残高　4.9	備前焼。口縁部は上下方に拡張。端面に凹凸あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 赤橙色	密 ◎	Ⅲ層	
34	擂鉢	口径（28.5） 残高　5.2	備前焼。口縁部は上下方に拡張。櫛描きの平行条線5本あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎	Ⅲ層	7
35	坏身	残高　2.1	たちあがりは欠損。受部は短く水平に付く。小片。	マメツ	回転ナデ	乳白色 乳黄白色	密 ○	地点不明	
36	高坏	残高　6.1	外反する脚部。3方向の透かしあり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	地点不明	
37	壺	口径（13.3） 残高　4.3	短頸壺。口縁部は直立し、端部は尖り気味に丸い。胴部に回転カキメ調整を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	地点不明	

第3章

久米才歩行遺跡

4次調査地

第３章　　久米才歩行遺跡４次調査地

１．調査の経緯

(1)　調査に至る経緯（第23図）

平成10年４月27日、川田和代氏より、松山市南久米町485－１・３・４の住宅建設にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

当該地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『126　久米高畑遺物包含地』内にある。さらに、久米才歩行遺跡として過去に３次の本格調査が実施されている地域内にあたる。このうち、平成８年度に実施された久米才歩行遺跡３次調査地は本調査地の西20mの地点になる。

よって、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するために平成10年５月に試掘調査を実施した。調査の結果、当該地に遺跡が存在していることが明らかとなった。この結果を受け、申請者、文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと呼称する）の三者は、確認された遺跡の取り扱いについて協議を行った。住宅建設に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のための本格調査を実施することとなった。埋文センターは申請者の協力のもと、平成10年10月～11月の間に発掘調査を実施した。調査は、申請地を含めた周辺地域における集落構造の解明を主目的としたものである。

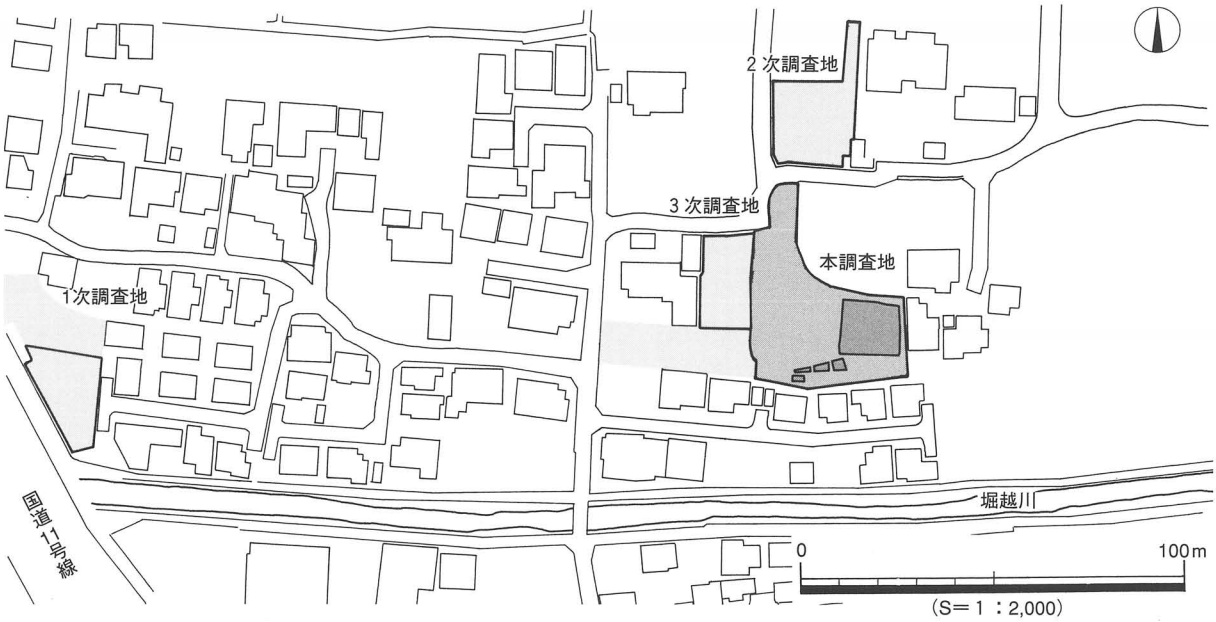
(2)　調査組織

調 査 地　松山市南久米町485－1・3・4　　調査面積　1,095m²

遺 跡 名　久米才歩行遺跡４次調査地　　調査委託　川田和代

調査期間　屋外調査　平成10年10月１日～同年11月30日　　調査担当　高尾和長、加島次郎

屋内調査　平成10年12月１日～同年12月31日



第23図　調査地位置図

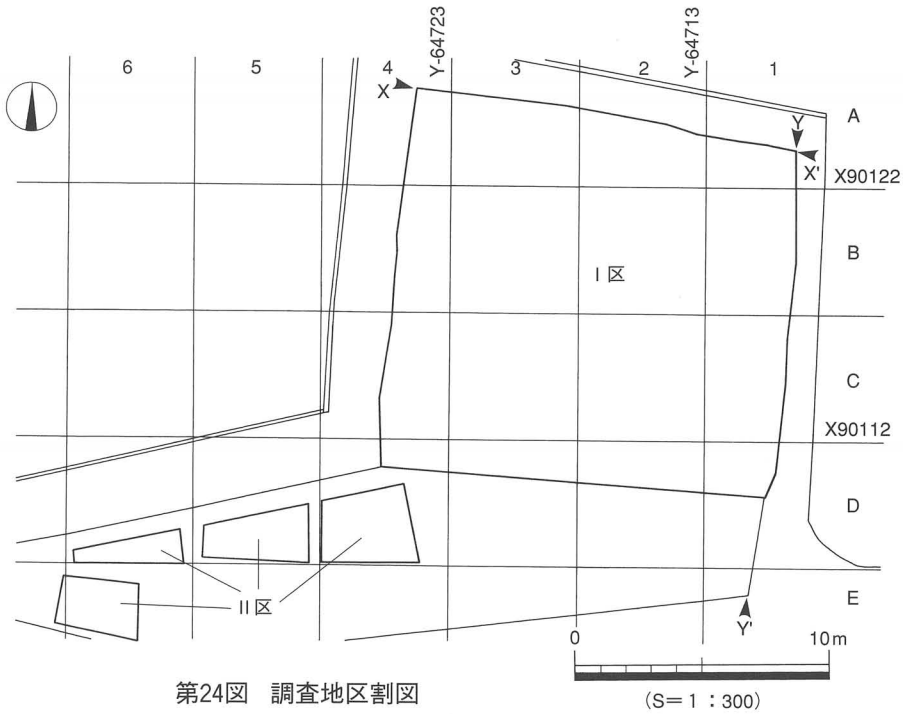
２．層　位（第25図、図版８）

久米才歩行遺跡４次調査地は、現在の堀越川下流域の右岸に位置し、標高32～33ｍを測る。調査前は畑であった。

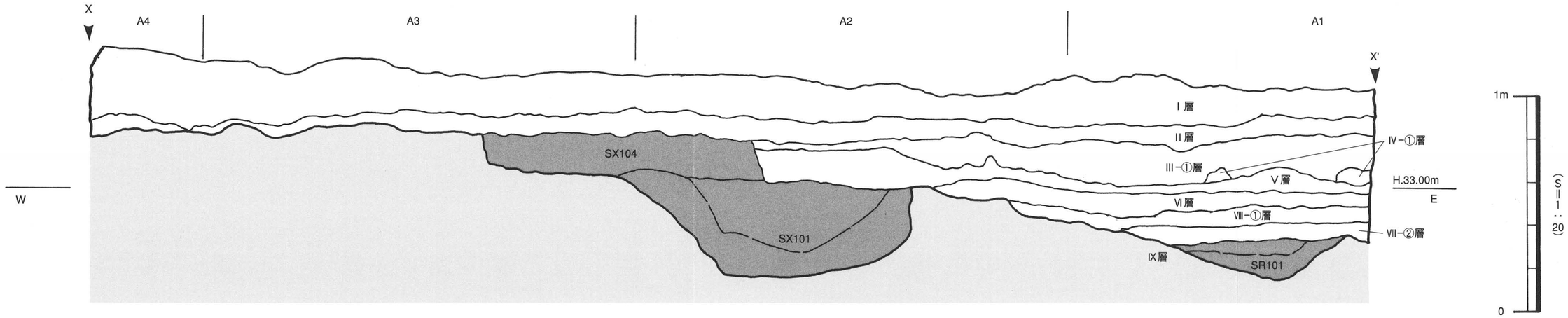
層位は、第Ⅰ層が灰白色土（N7/0）で、現代の耕作土である。調査区の全域に分布し、南東部では厚く堆積し、層厚70cmを測る。第Ⅱ層がにぶい橙色土（５ＹＲ7/4）で、床土である。調査区の全域に分布する。層厚５～10cmを測る。第Ⅲ層は二層に分けられる。①層が灰白色土（10ＹＲ7/1）で、調査区北半部に分布し、層厚５～20cmを測る。②層がオリーブ黄色土（５Ｙ6/3）で、調査区南西半部に分布する。層厚５cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第Ⅳ層は二層に分けられる。①層が黄色粘質土（2.5Ｙ8/8）で調査区北東部に局部的に分布する。②層が灰色土（N6/0）で、調査区南西部に分布し、層厚５cmを測る。第Ⅴ層は灰白色土（N7/0）である。層厚８cmを測り、ほぼ水平に堆積する。本層以下、Ⅷ層までは調査区北半部のみ分布する。第Ⅵ層は明褐灰色土（５ＹＲ7/2）で、層厚５～10cmを測る。第Ⅶ層は灰白色土（2.5Ｙ7/1）である。層厚35～70cmを測る。黄色土（2.5ＹＲ7/2）ブロックが互層となって堆積していることから、二次堆積層と考えられる。第Ⅷ層は二層に分けられる。①層が灰白色土（2.5Ｙ7/1）、②層が灰白色土（2.5Ｙ7/1）で①層と比べて粒が細かく、硬い質感である。いずれも調査区北東部にのみ分布する。第Ⅸ層は黄色土（2.5Ｙ8/6）である。調査区の全域でみられ、３～５cm大の川原礫を多量に含み、ガチガチした質感である。本層上面が遺構検出面になる。

調査地は既に近現代の土地開発を受け（第Ⅰ～Ⅶ層）、大きく改変されている。これらの土層から出土した遺物の多くが、器面の磨滅した小破片である。第Ⅷ層は最も多くの遺物が出土した遺物包含層であり、遺物は６～８世紀代である。第Ⅸ層は20cm程深掘りを行ったが遺物は出土しなかった。

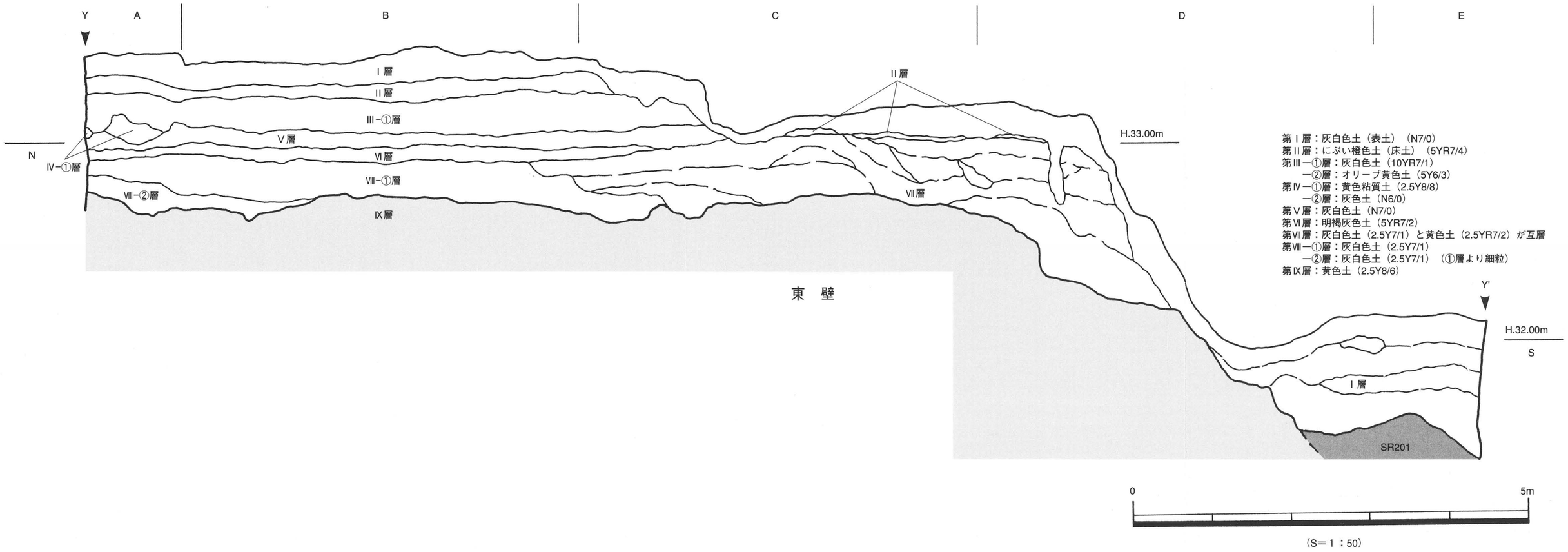
なお、土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖（1989）を準拠した。調査にあたり、真北方向を軸として調査地に５ｍ方眼区画を設定した。方眼区画は北から南へ向かってＡ・Ｂ・Ｃ…、東から西へ向かって１・２・３…とし、呼称はこれらを組み合わせることとした。調査の進行上、便宜的に調査区を２つに区分し、北半部をⅠ区、南半部をⅡ区とした（第24図）。



第24図　調査地区割図　（S＝１：300）



北　壁



東　壁

第25図　調査区北壁・東壁土層図

3．遺構と遺物

本調査では、弥生時代、古墳時代～古代、中世の遺構と遺物を確認した。時代別の遺構の種類と基数は次のとおりである（第26図）。

弥生時代	自然流路	（ＳＲ201）	1
古墳時代～古代	性格不明遺構	（ＳＸ101～104）	4
	自然流路	（ＳＲ101）	1
中世	掘立柱建物址	（掘立１）	1
	井戸	（ＳＥ101）	1
	溝	（ＳＤ101・102）	2
	柵列	（ＳＡ101）	1
	土坑	（ＳＫ102・103）	2
	柱穴	（ＳＰ１～32）	32

出土遺物は、遺構と包含層に大別できる。

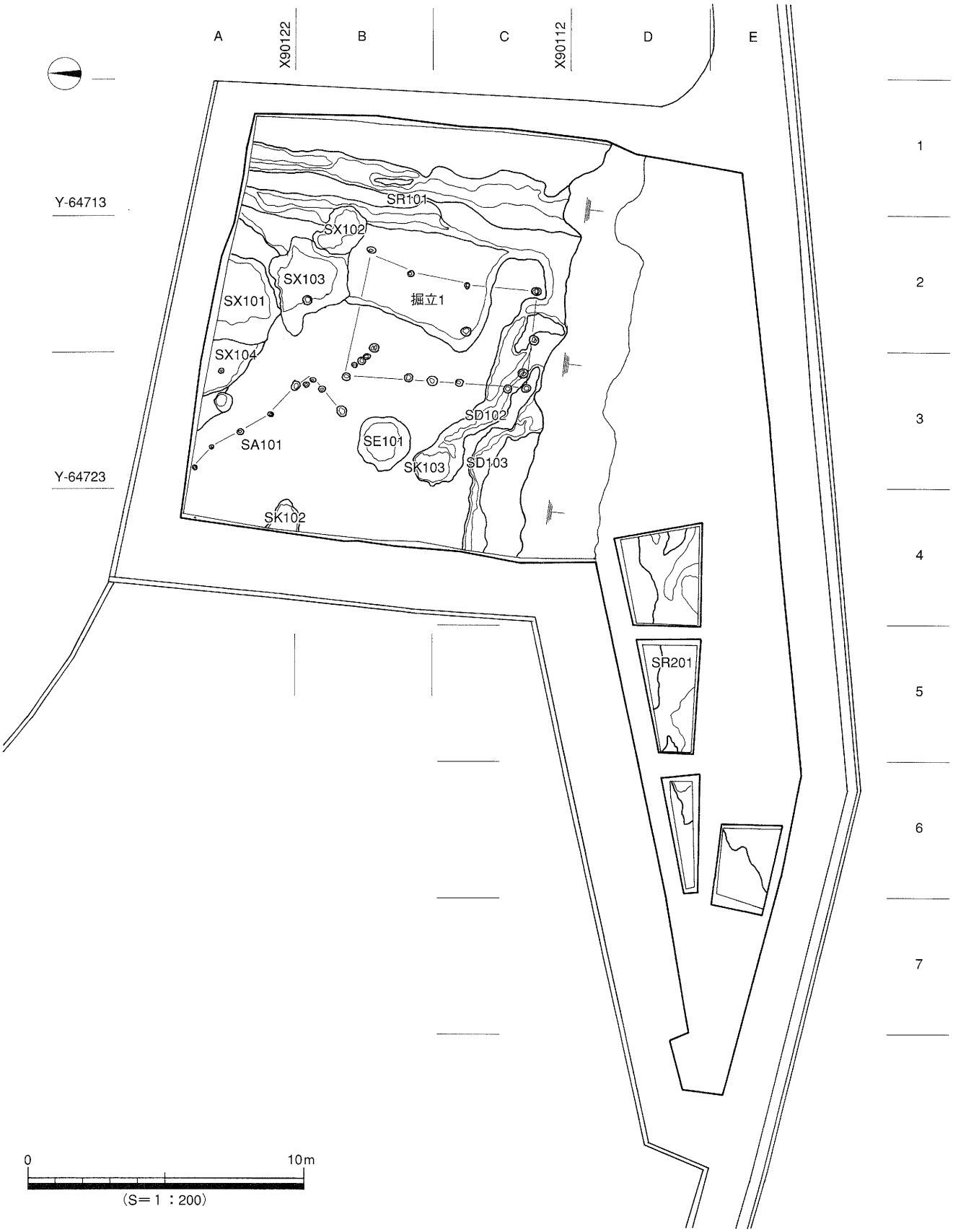
遺構出土遺物は縄文時代晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代後期、古代、中世に帰属するものがあり、弥生時代前期と古墳時代後期～古代の遺物が多い。これらの多くはＳＲ201からの出土である。他の遺構からの出土遺物は少なかったことから、遺構の帰属時期については、遺構埋土と配置から判断した。

包含層出土遺物は第Ⅷ層が多く、古墳時代後期～古代が主体を占める。

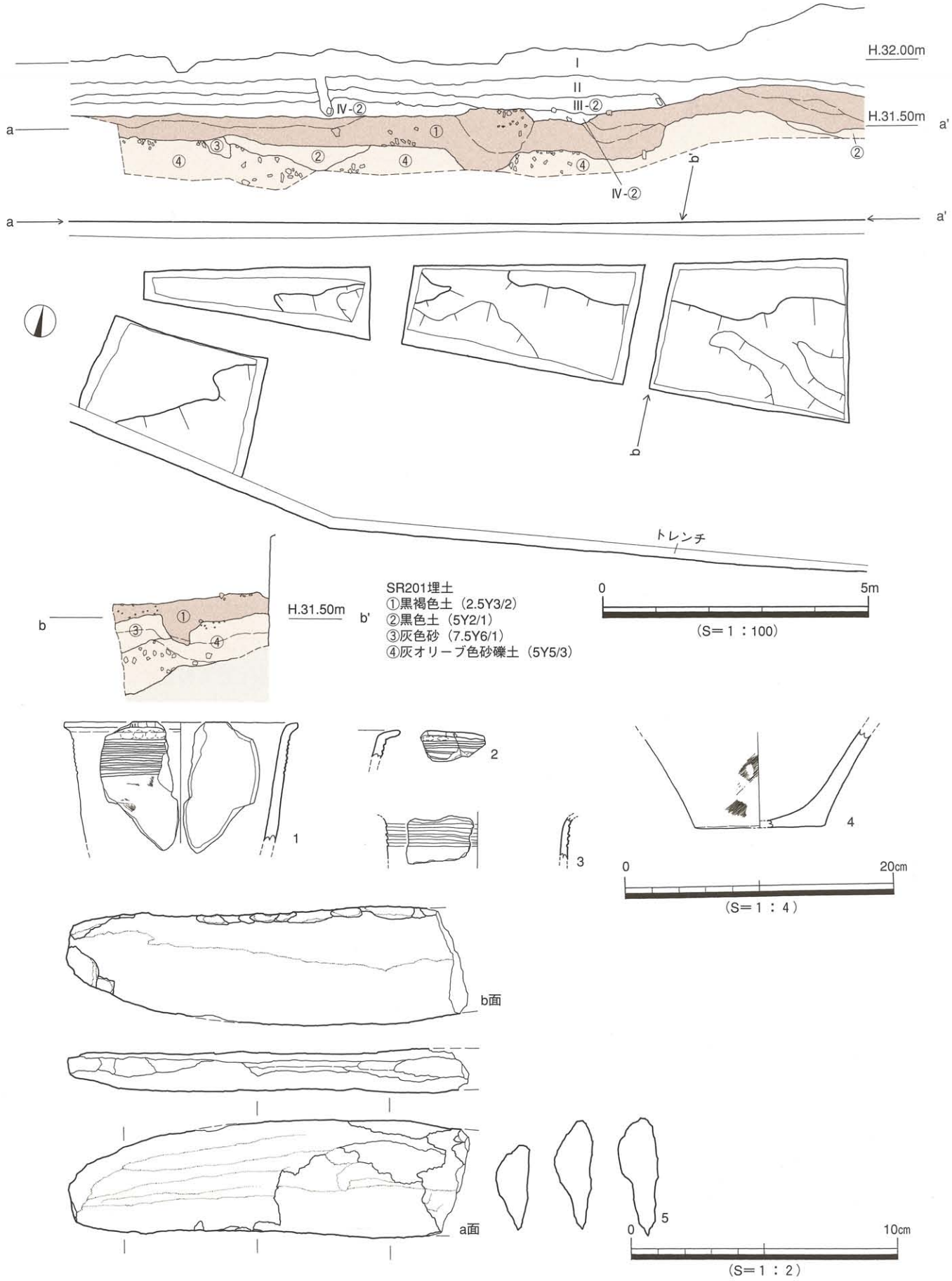
(1) 弥生時代

ＳＲ201（第26・27図、図版９）

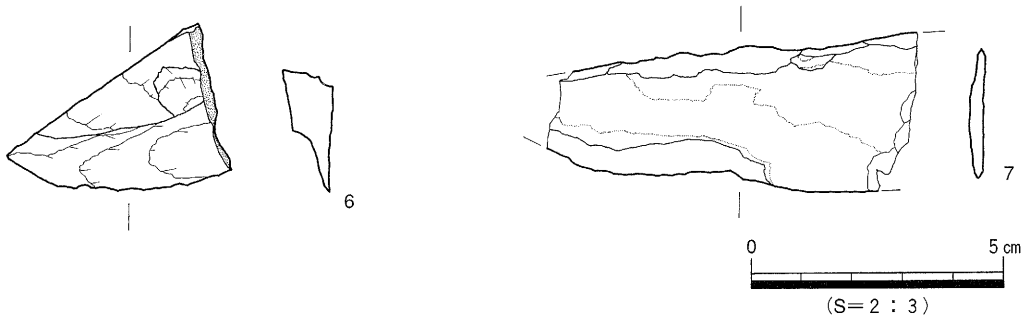
Ⅱ区に位置し、流路の東・西・南は調査区外に続く。調査の工程上、Ｄ４～６区とＥ６区を調査した。規模は、検出長14ｍ、幅５ｍ、深さ0.8～1.3ｍである。埋土は４層に分層され、上から埋土①～④とした。埋土①は黒褐色土（2.5Ｙ3/2）である。層厚30～40㎝を測る。本層は硬くしまっており、鉄分の砕ブロックを含む。上部に比して下部は黒色が強い傾向にある。遺物は弥生前期土器・中期土器、石製品、土師器、須恵器、磁器、陶器が出土した。遺物の量が最も多く、種類も豊富で多時期にわたる。埋土②は黒色土（５Ｙ2/1）である。層厚10～30㎝を測る。本層は非常に硬くしまっている。遺物は弥生前期土器と石製品が出土した。埋土③は灰色砂（7.5Ｙ6/1）である。層厚10～20㎝を測る。本層は粒の揃った砂で構成されており礫は含まない。遺物は縄文晩期土器、弥生前期土器、石製品が出土した。埋土④は灰オリーブ色砂礫土（５Ｙ5/3）である。層厚30～40㎝を測る。本層は１～３㎝大の円礫を多量に含み、ガサガサした質感をもつ。土にしまりはなく、湧水が著しく認められた。遺物は弥生前期土器と石製品がわずかに出土した。遺構の床面が相対的に南へ向かって落ち込んでいることから、流路の右岸の一部を検出したと考えられる。出土遺物は、埋土④→①の順で記述することとする。


A
X90122
B
C
X90112
D
E
1
2
3
4
5
6
7
Y-64713
Y-64723
SR101
SX102
SX103
SX101
SX104
掘立1
SD102
SA101
SE101
SK103
SD103
SK102
SR201
0
10m
(S＝1：200)

第26図　遺構配置図



第27図　ＳＲ201測量図・ＳＲ201埋土④出土遺物実測図(1)



第28図　ＳＲ201埋土④出土遺物実測図(2)

出土遺物（１～237）（第27～44図、図版12～18）

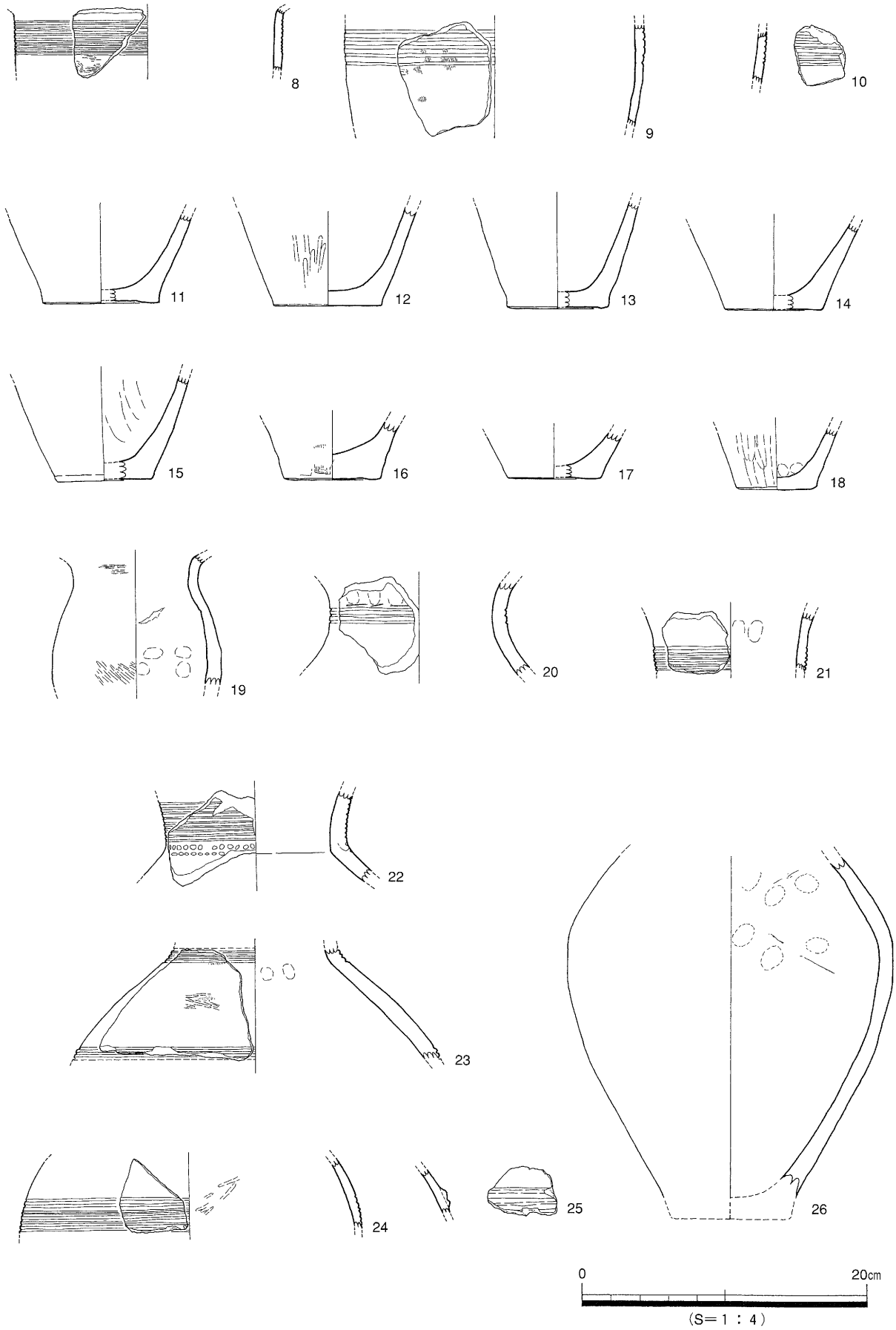
埋土④出土遺物（１～７）（第27・28図、図版12）　土器には甕と壺、石器には石鎌・スクレイパー・剥片がある。

１～３は甕である。いずれも口縁部が折り曲げられて形成される。１は復元口径17.5cmを測る中型品である。胴上半部は張りが弱く、外傾気味に立ち上がる。２は口縁部片、３は口縁～胴上半部片である。４は壺で、中型壺の底部片である。薄い平底で、復元底径9.8cmを測る。５は石鎌である。緑色片岩製。打裂を終え、研磨に移行した未成品になる。刃部はわずかに内湾し、背部は外湾する。研磨は局部的にみられ、ａ面の基部付近と背部中央部に施されるにとどまる。６はスクレイパーである。サヌカイト製。右側部は自然面（風化した礫面）で覆われる。７は剥片である。緑色片岩製。両面が粗割時の剥離面で構成される。大陸系磨製石器の製作段階（粗割段階）で生じたものと考えられる。

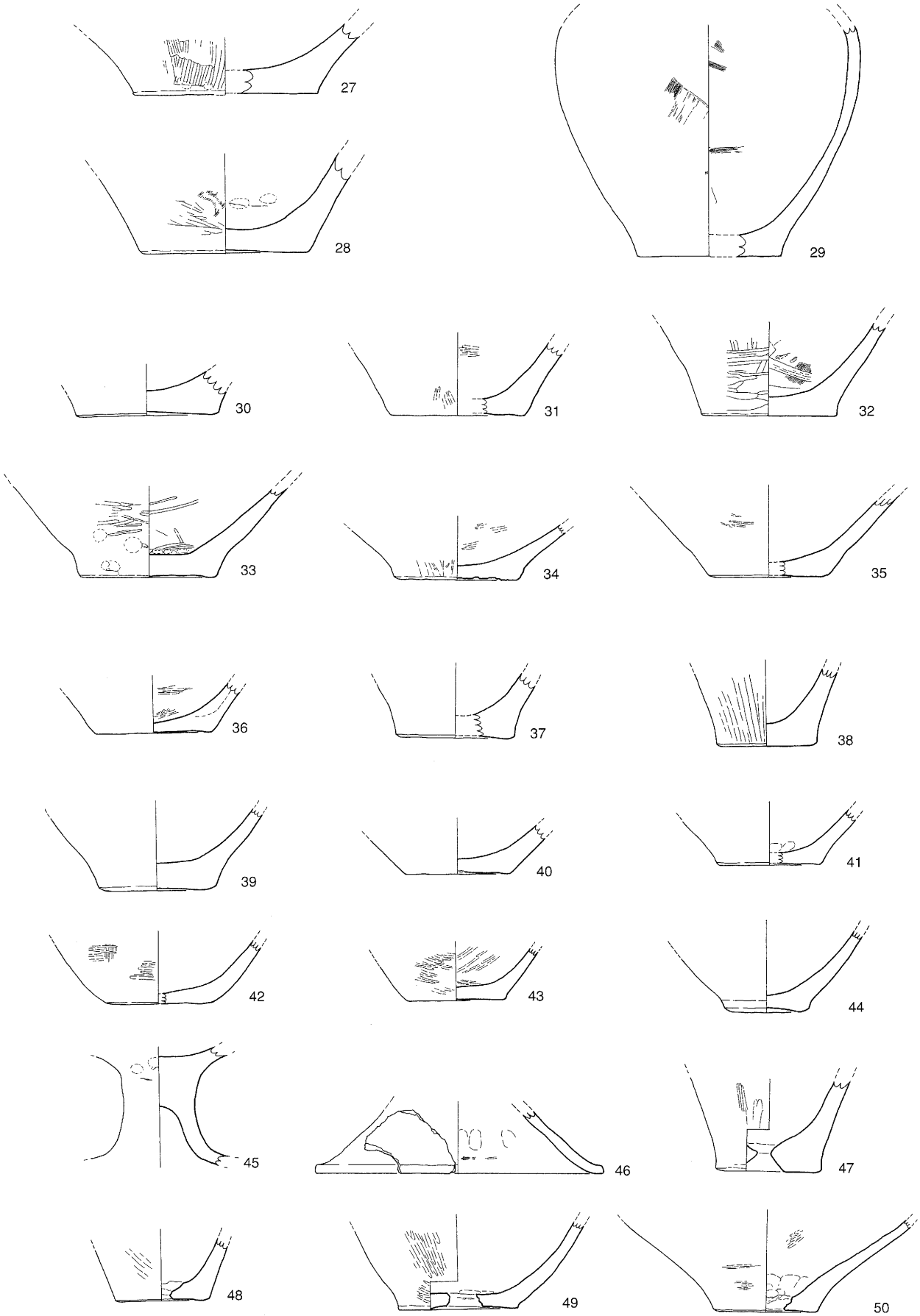
埋土③出土遺物（８～60）（第29～32図、図版12・13）　土器には甕・壺・高坏・蓋があり、わずかに縄文土器が出土している。

８～18は甕である。８と９は口径が20cm前後に復元される中型品で、施文は胴上半部に施され、多条の沈線文をもつ。11～18は底部である。平底ないしわずかに上がる底部で、底径が５～８cmのもので占められる。19～44は壺である。19と20は短い口頸部をもち、20はヘラ描き沈線文を３条施す。21と22は筒状のやや長い頸部で、いずれも多条の沈線文を施す。22は９条以上の沈線文の下位に、２段の刺突文が施される。23～25は胴中位辺りが最大径となり、かつ幅広く施文されるものである。23は大型品、25は断面「M」字状の凸帯が施される。26は中型品で、肩部が張る胴部である。27～44は底部である。27と28は大型品、29～37・39は中型品、38・40～44は小型品になる。平底とわずかな上げ底のものがあり、底部の厚さは大・中型品が厚く、小型品には薄い傾向がみられる。44にみられる顕著な上げ底は１点に限られる。45は高坏である。短い脚部をもち、裾部が広がる。46は蓋で、裾部が短く外反する。内面調整はヨコ刷毛後丁寧なナデによる。47～50は、いわゆる「コシキ」用の土器である。47と48は甕の底部を焼成後に穿孔したもので、47は両面から穿孔している。49と50は壺の底部で、焼成後に穿孔が施され、49は外面から片面穿孔する。

51～54は縄文土器である。51は深鉢で、口縁部は外へ向かって大きく外反するものと考えられる。外面にはヘラ描きによる斜格子状の沈線文が施される。52は深鉢で、口縁部は緩やかに外反し、端部は面取り後に刻みが全面に施される。調整は、外面がヨコ方向の条痕、内面が丁寧なナデになる。胎土には長石と石英の他に、金雲母が多く含まれる。53は鉢で、復元口径が10.8cmの小型品である。胴部上半で屈曲し、わずかに内傾しながら立ち上がる。口縁部は波状を呈するものと考えられる。外面

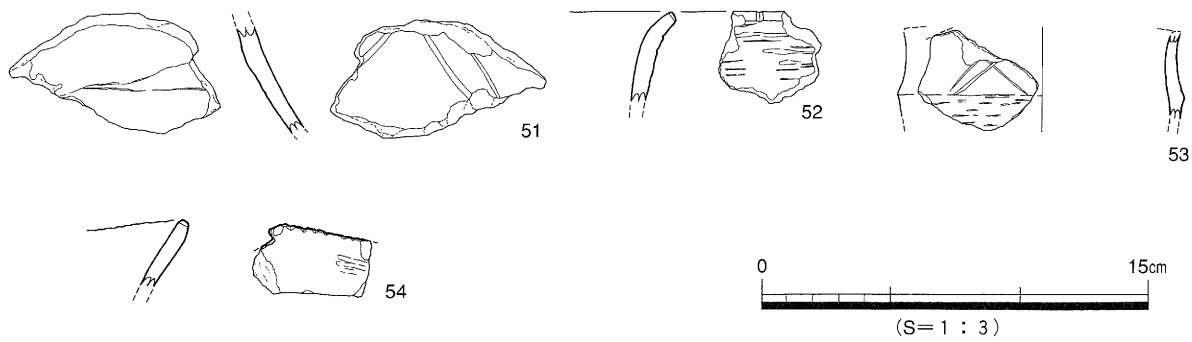


第29図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(1)



第30図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(2)

0　20cm
(S＝１：４)



第31図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(3)

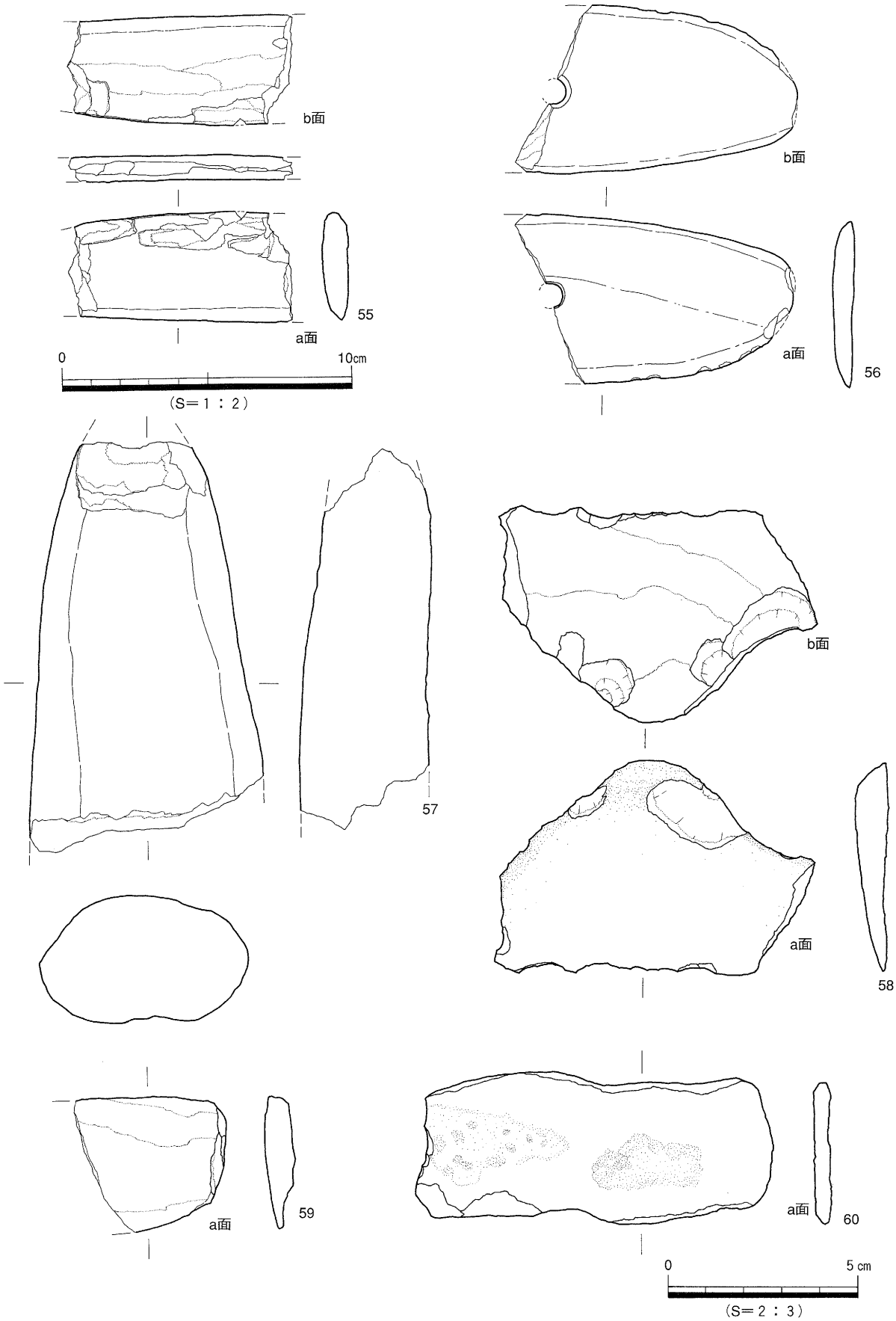
の調整は、屈曲部から上はヨコナデ、下はヨコ方向の条痕である。内面はナデ仕上げになる。外面には斜格子状の細沈線文が施される。54は浅鉢である。口縁端部にはリボン状突起が付され、さらに口縁端部には全面に刻みが施される。

55～60は石器である。石器には鎌・石庖丁・斧・刃器のほかに未成品がある。55は石鎌で、緑色片岩製。先端部と基部を欠き、全体の1/3程度の遺存である。完成品。刃部はほぼ直線状を呈する。研磨はほぼ全面に施されており、とりわけａ面では丁寧になる。そのため同面における刃部の鎬は明確である。刃部は扁両刃で、研磨は背部にまで及んでおり、面が形成されている。56は石庖丁で、緑色片岩製。左半部を欠く。平面形は弧背弧刃形（あるいは杏仁形、紡錘形）を呈する。背部弧度が刃部弧度より弱い。刃部は扁両刃である。器面はａ面の背部付近が研磨によって研ぎ落とされており、稜線をもつ。57は伐採斧。刃部と基端の一部を欠く。平面形は基部幅が狭く、刃部に向かって幅が広い長台形状を呈し、横断面は扁楕円形をなす。製作段階の打裂痕・敲打痕が粗く残り、器面の研磨が充分になされていない。58はスクレイパーの完存品。ａ面は自然面で覆われる。両側部は切断面である。刃部の作り出しは粗く、細部調整は入念ではない。59と60は石庖丁未成品で、緑色片岩製。59は左半部を大きく欠く。ａ面は粗割時の剥離面で構成され、ｂ面は自然面が広く残置する。右側部には研磨が施されることから、長方形を指向していることがうかがえる。60は完存品か。ａ面には自然面が残置し、ｂ面は粗割時の剥離面で構成される。最大厚0.48cmを測る。なお、ａ面には細かな敲打痕が認められるが、器面の凹凸を減ずるためか、穿孔に伴うものかは判然としない。

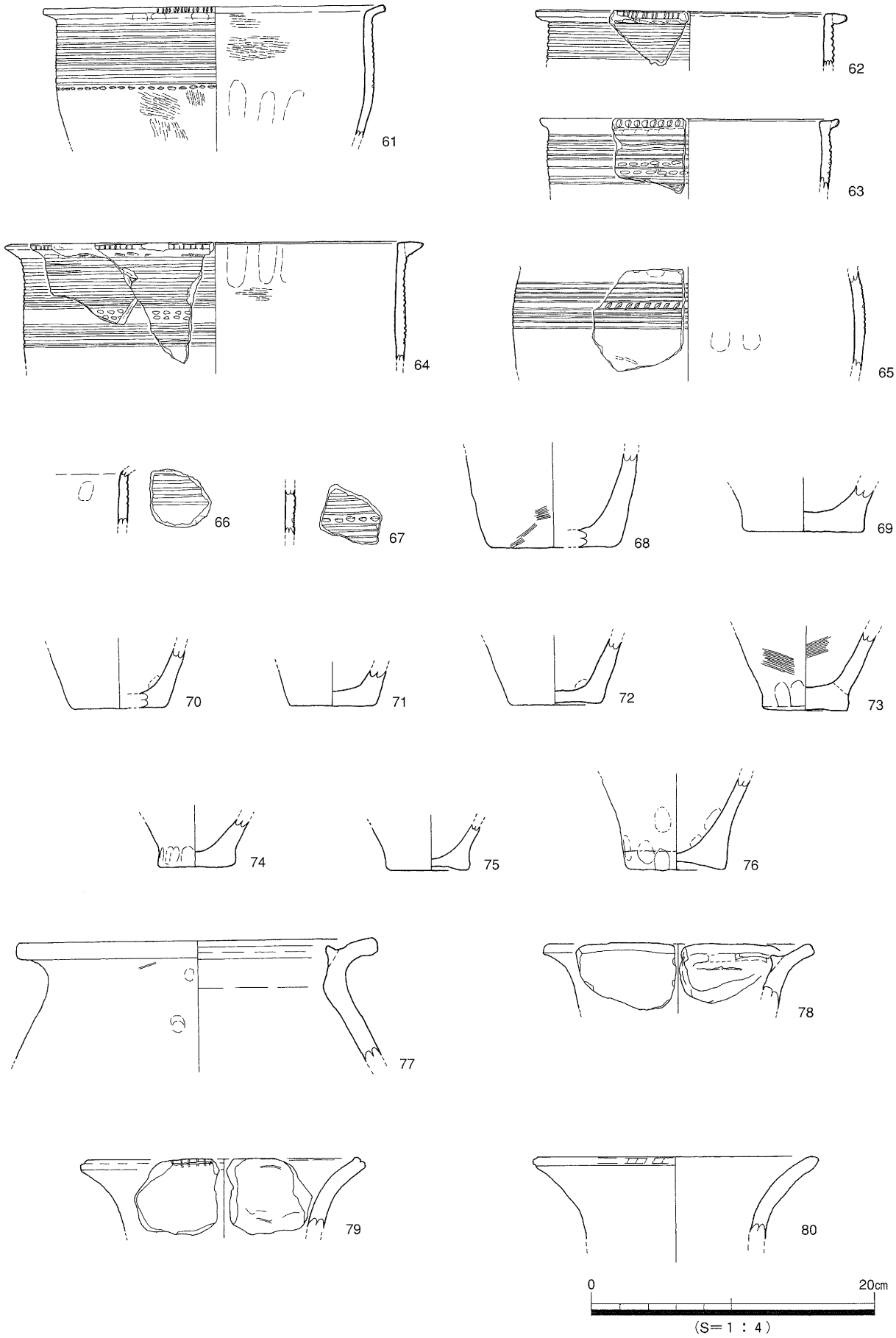
埋土②出土遺物（61～122）（第33～37図、図版14・15）　土器と石器が出土している。土器には甕・壺・鉢・高坏等がある。

61～76は甕で、口縁部の成形手法が折り曲げによるもの（61）と、粘土紐の貼り付けによるもの（62～64）とがある。いずれも口径が20～30cmにおさまる中型品になる。口縁端面には刻目を施す。胴部上半には沈線文を６～11条施し、さらに刺突文を施す。61は胴部上半にやや張りをもち、口縁部は強く折り曲げられ、逆Ｌ字状に近い形態をもつ。多条の沈線文の下位には刺突文が１段施される。62～64は胴部上半が直立し、粘土紐が口縁部に接して貼り付けられるものである。63～65は多条の沈線文帯の間に刺突文が施される。66は口縁端部を欠く。口縁部直下には沈線文４条を施す。68～76は底部である。平底とわずかに上がる底部が多い。底径が８cmを超えるものは厚い平底、底径が５～７cmのものは薄い平底もしくは上げ底になる傾向がある。76は上げ底で、やや新しい形態を呈している。

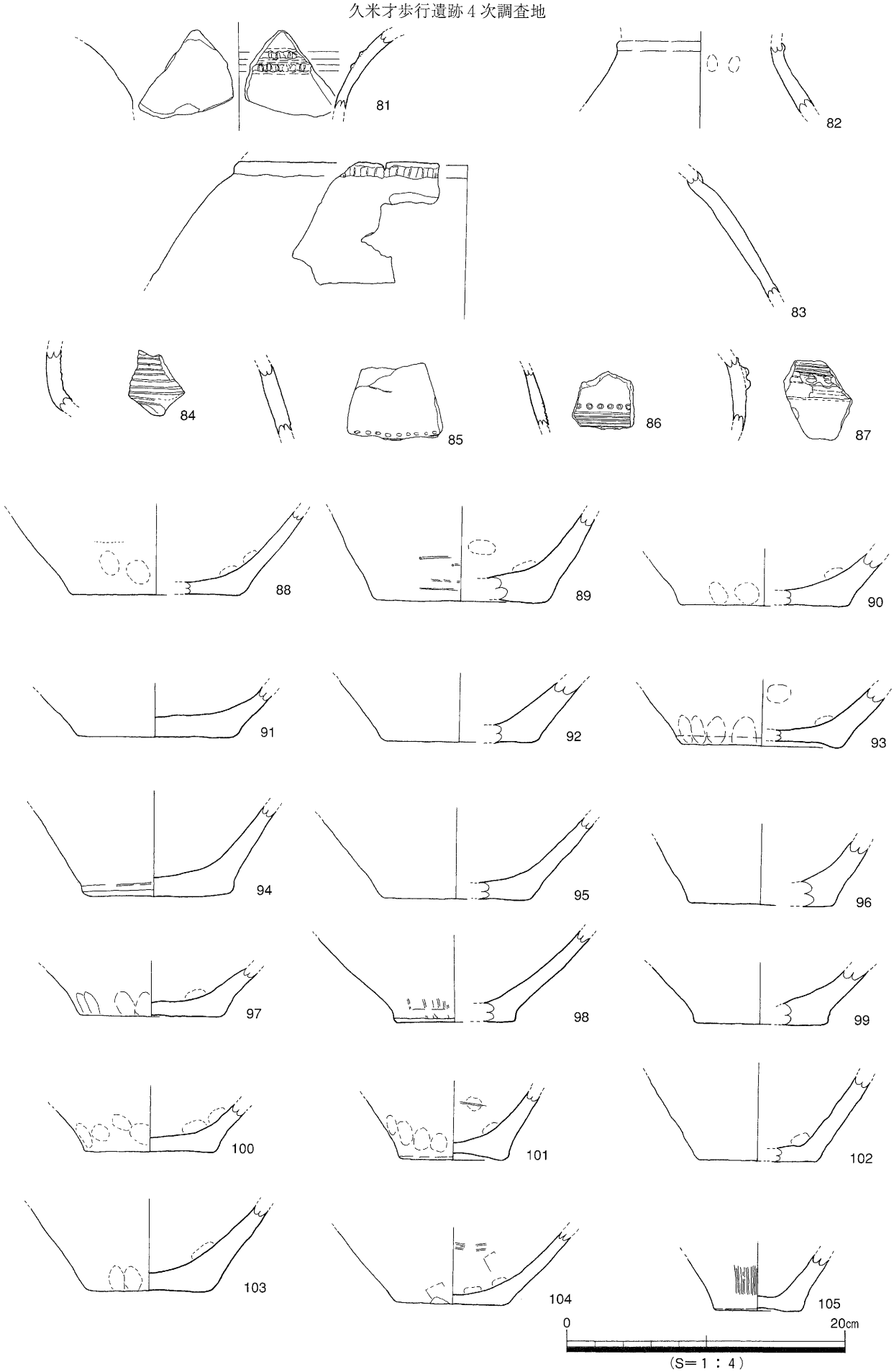
77～108は壺である。77は短く外反する口縁部をもつもので、口縁部内面には凸帯１条をもつ。復元口径値は25cmを測る。78～81は筒状の長い口頸部をもつものである。81は口頸部が長く、外傾度が



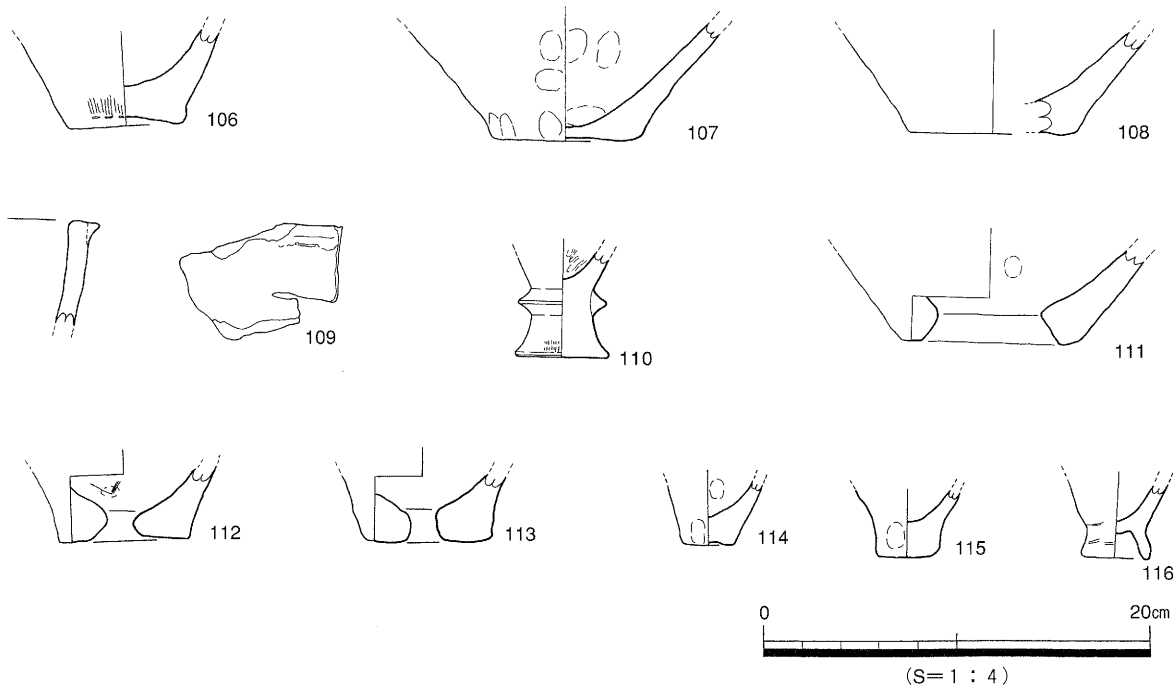
第32図　ＳＲ201埋土③出土遺物実測図(4)



第33図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(1)



第34図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(2)



第35図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(3)

強くなる。口縁部内面には凸帯を２条もち、刻目を施す。84は筒状の長い口頸部をもち、85と86は胴部上半に加飾が施される。87は胴部中位付近に最大径をもつもので、凸帯を２条もち、上位の凸帯には指頭押圧後上下２段に刺突文を施す。なお、凸帯は沈線を施した後に貼り付けている。88～108は底部で、底径が大きいものには厚い平底が多く、小さいものには平底で厚いものと薄いものとがある。

109は鉢である。口縁部に接して粘土紐が貼り付けられ、大型品になる。胎土は混和剤が少なく、精製され、淡乳褐色を呈する。

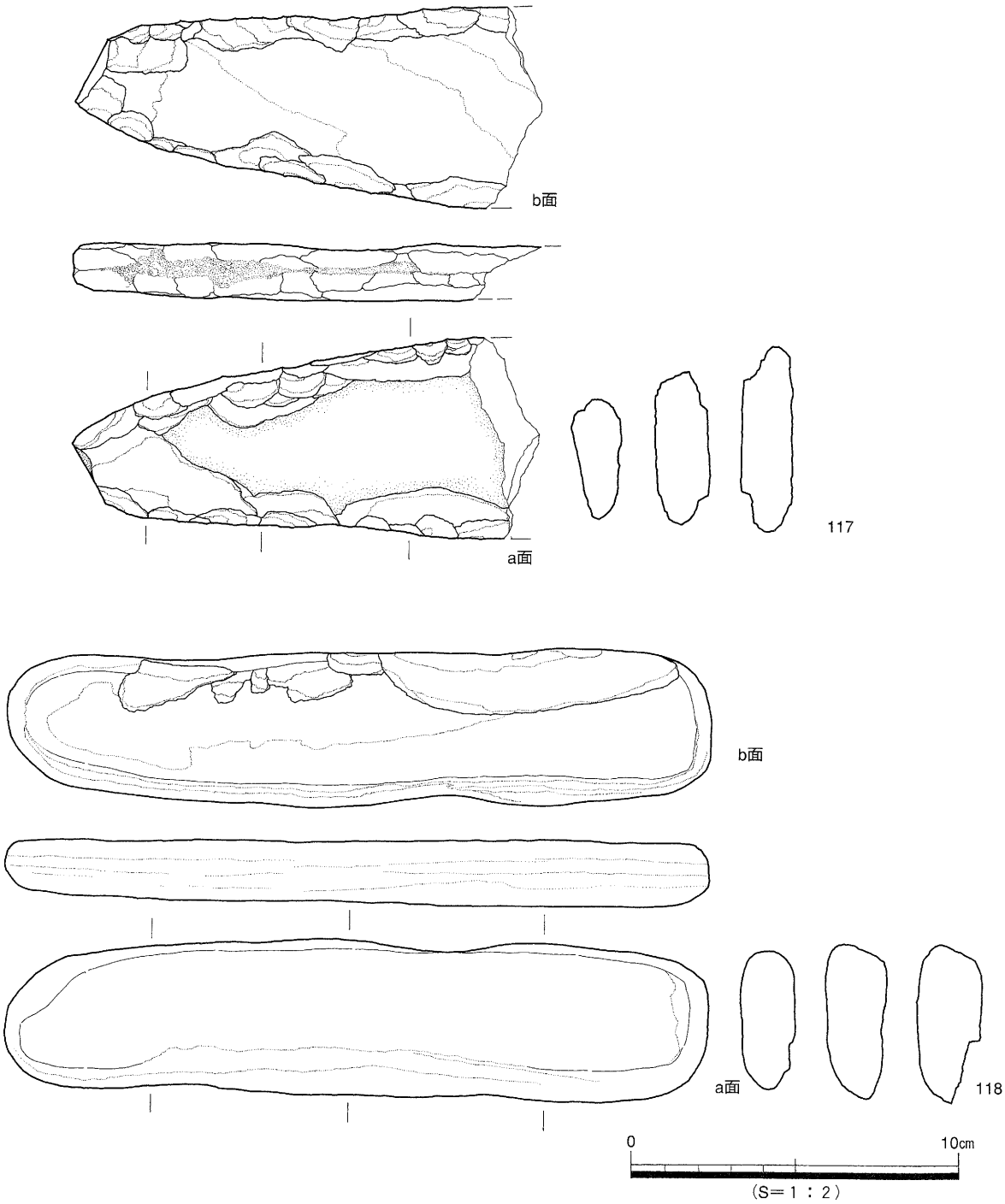
110は高坏で、脚部は低く、中実の台形状を呈す。坏部と脚部の境界には三角形凸帯を施す。

111～113は、いわゆる「コシキ」用の土器である。111は壺の底部、112と113は甕の底部を転用している。焼成後に穿孔がなされ、112と113は外側からの片面穿孔になる。

114～116はミニチュア品で、114と116は甕、115は壺のミニチュアである。114はわずかな上げ底で、115は器壁が厚く、立ち上がりをもつ。116はくびれの上げ底で、底部の内外面には煤が付着する。

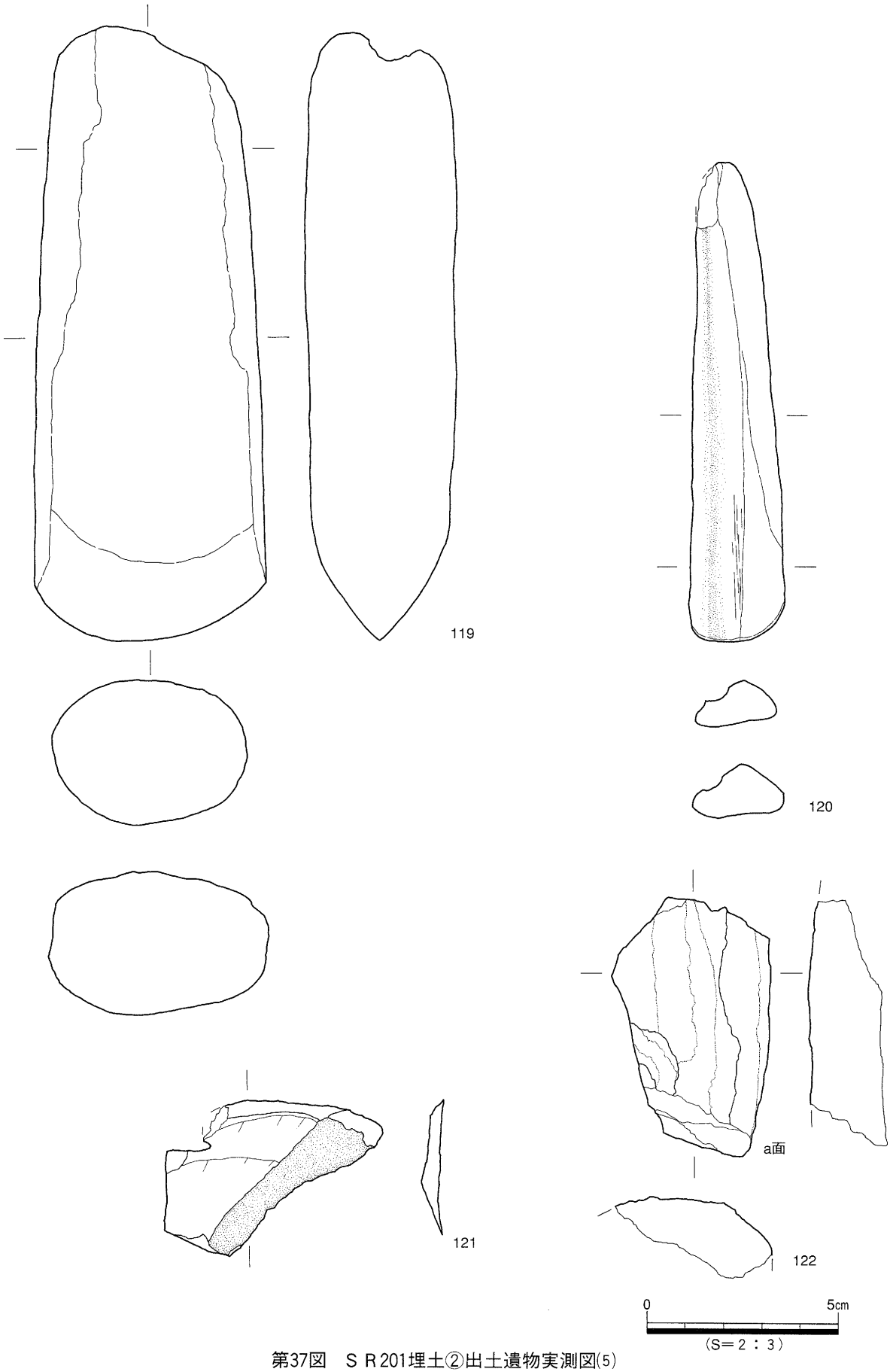
117～122は石器である。石器には鎌・斧・砥石・剥片がある。

117と118は石鎌で、緑色片岩製。いずれも未成品。117は打裂段階の資料で、ａ面には自然面、ｂ面には粗割時の剥離面が広く残置し、先端部の端面には自然面が残る。打裂時の調整剥離は背・刃部に施される。背部にはさらに敲打が局部的に施され、面取りが意識されている。刃部はやや内湾すると考えられる。118はやや長い礫を素材とした打裂段階途中の資料である。粗割段階を経ず、獲得した原材に直接打裂を行っている。ｂ面の下端に打裂時の調整剥離が施される。調整剥離は基部から先端へ向かって施される。119は伐採斧。ほぼ完存品。基部幅が刃部幅よりもやや狭い。基部は不整形で、刃部は円刃である。横断面形は、基部側では楕円形に近く、他では身膨れした長方形に近い形態となる。両側部には敲打痕が残る。器面の研磨は上半（基部側）に比べ下半（刃部側）が入念になさ



第36図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(4)

れ、特に刃部付近は丁寧である。石の節理面は側面でみられ、縦方向になる。120は砥石で、礫を素材とし、上面を機能面として使用する。使用痕は上面右半部が幅広く、左半部は幅狭い。法量と形態から手持ち砥として扱われていた可能性がある。121はサヌカイト製の剥片で、左上端部は新しい欠損である。右側部には自然面が広く残置する。最大厚0.61cmを測る。122は器種を特定出来ない石器である。緑色片岩製。ａ面が自然面で覆われる。



第37図　ＳＲ201埋土②出土遺物実測図(5)

埋土①出土遺物（123～237）（第38～44図、図版16～18）　本層からは、弥生時代前期・中期、古墳時代後期、古代、中世の各期の遺物が出土した。

123～177は弥生時代前期の遺物である。土器には甕・壺・鉢がある。

123～140は甕で、口縁部の成形手法が折り曲げによるもの（123～125）と、粘土紐の貼り付けによるもの（126～130）とがある。口径が20cm前後の中型品になる。口縁端面には刻目はみられない。胴部上半には沈線文を４～13条施し、さらに刺突文を施すものもある。123は胴部上半にやや張りをもち、口縁部は短く折り曲げる。７条の沈線文帯と６条の沈線文帯の下位には、それぞれ刺突文が１列施される。126～130は粘土紐が口縁部に接して貼り付けられるもので、胴部上半は直線的に立ち上がる。126は胴部上半に沈線文７条以上、127と128は沈線文４条を施す。129は沈線文５条の下位に刺突文を施す。130は多条の沈線文の下位に竹管文を１組施す。131～134は胴部片で、多条の沈線文と刺突文を施すものがある。135～140は底部で、平底が多い。135は底径が８cmを超え、厚い平底を呈する。138はわずかな上げ底で、立ち上がりをもつ。

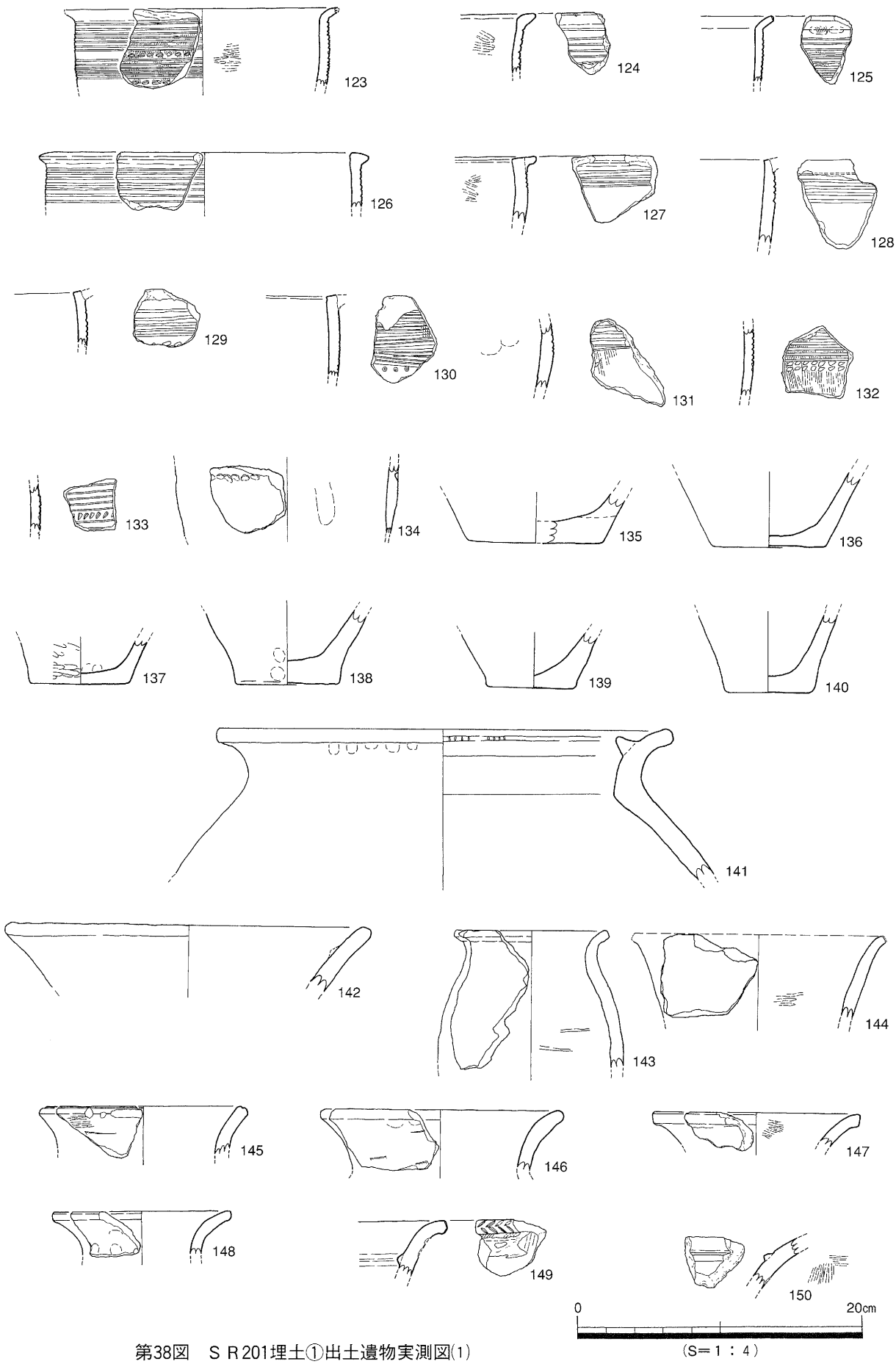
141～156は壺である。141と142は短く外反する口縁部をもつものである。141は口径が30cmを超える大型品で、口縁内面には凸帯１条をもち、凸帯上には刻み目をもつ。143は短い口頸部をもつ。144～150は口縁部片である。144は口頸部が長く直立気味に外傾し、口縁端部が短く外反する。145～148は口径が12～17cmを測る中・小型品になる。148は口頸部が太く、やや長い。149と150は口縁内面に凸帯１条をもち、149は口縁端面に羽状文を施す。151と152は筒状の長い口頸部をもつもので、頸部下半には沈線文を施す。152は沈線文の下位に凸帯があり、凸帯上には指頭押圧後に刺突文を上下２段に施す。153～156は胴部の中位が最大径となるものである。153は貝殻腹縁による施文をもつ。沈線文３条は２段に施し、沈線文帯の上位には山形文、下位には斜位の直線文と弧文が組み合う。154は頸部下半に凸帯をもち、凸帯上には刻み目をもつ。155は凸帯２条をもち、凸帯の上位には多条の沈線文が施される。凸帯の下位はヨコ方向のヘラミガキ調整になる。

157と158は鉢である。157は口縁部がゆるやかに外反し、口径は17.2cmに復元される。158は口縁部が貼り付けによる成形技法をとり、口縁部に接して断面方形の凸帯を貼り付ける。

159～177は壺の底部である。159～162は立ち上がりをもつ平底で、159は大型品、160と161は中型品、162は小型品になるであろう。163～168には立ち上がりをもつ平底と、わずかな上げ底がみられる。167は底部と胴部の境界が強くヨコナデされたため括れる。169～177には低い立ち上がりの平底、わずかな上げ底、顕著な上げ底のものがある。

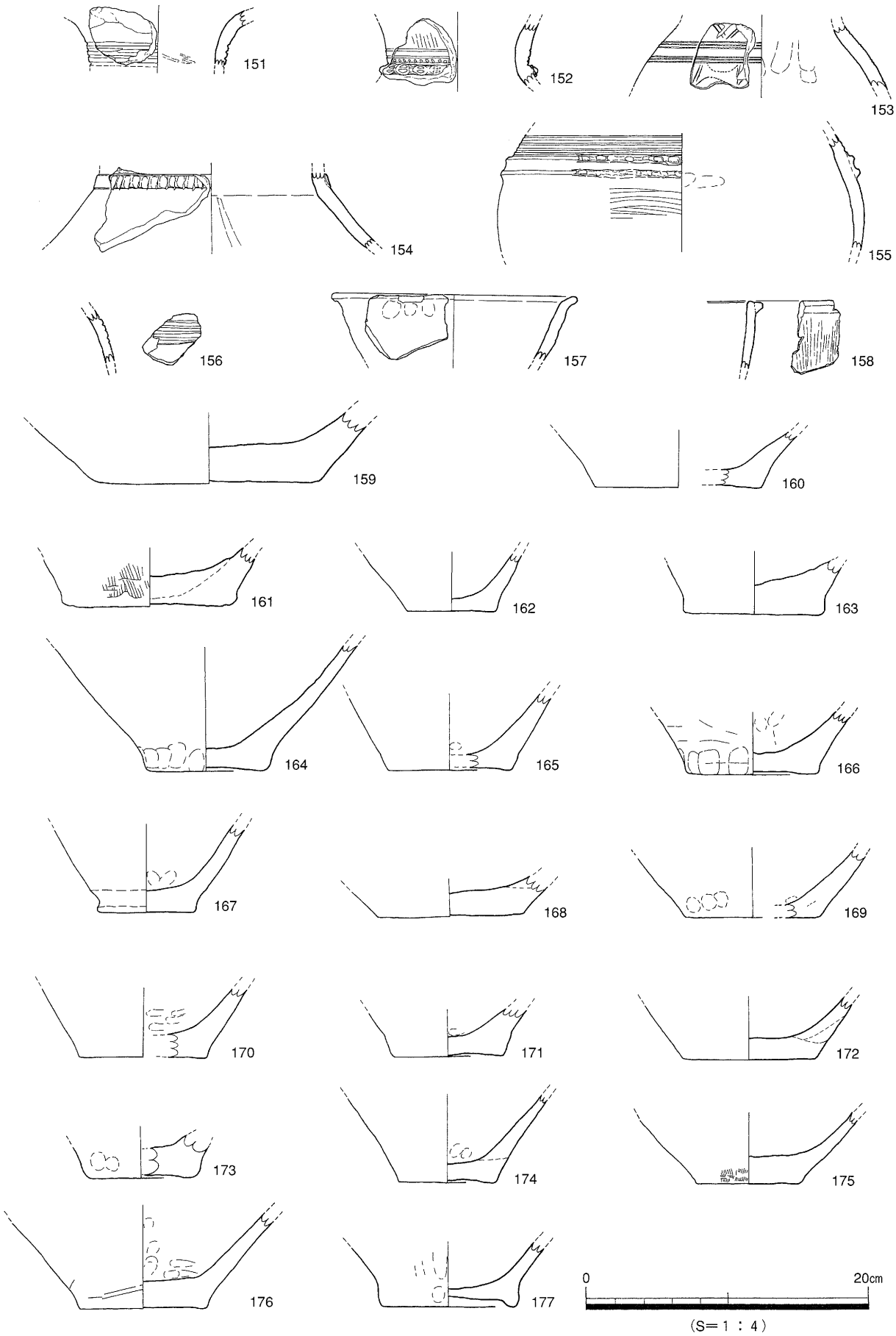
178～194は弥生時代中期の遺物で、土器には甕・壺・高坏がある。

178～185は甕である。178～181は口縁部で、折り曲げにより成形する。口縁端部には刻み目は施されない。頸部には凸帯が１条施され、押圧がみられる。182は胴部が長胴化の傾向を示し、器壁は薄く、底部は上げ底になる。183は厚手のやや上がる底部である。184と185は薄手の上げ底である。186～192は壺である。186は口縁部が短く外反し、端部はやや下方に突出する。筒状の頸部には多条の沈線文が施される。187は口頸部が長く、外傾度が強い。口径が26cmに復元される中型品である。口縁端部は凹線状の強いナデが施され、やや垂下する。口縁内面に削り出し状の凸帯を３条施す。188と189は口径が20cm前後の中型品、190は口径14.4cmの小型品である。口縁端部は上下に拡張され、３～４条の凹線文状の施文がみられる。191と192は頸部に凸帯を施すものである。

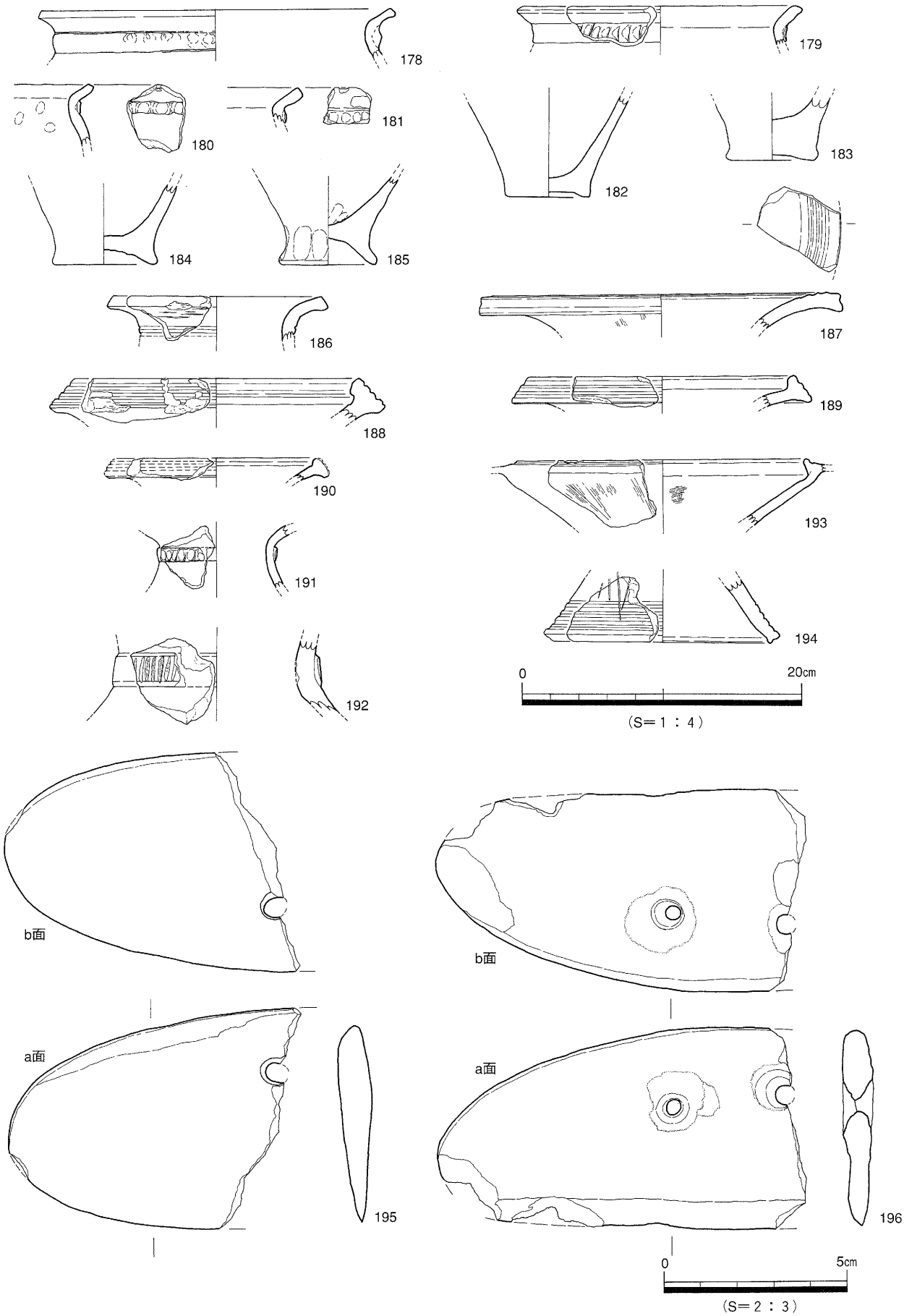


第38図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(1)

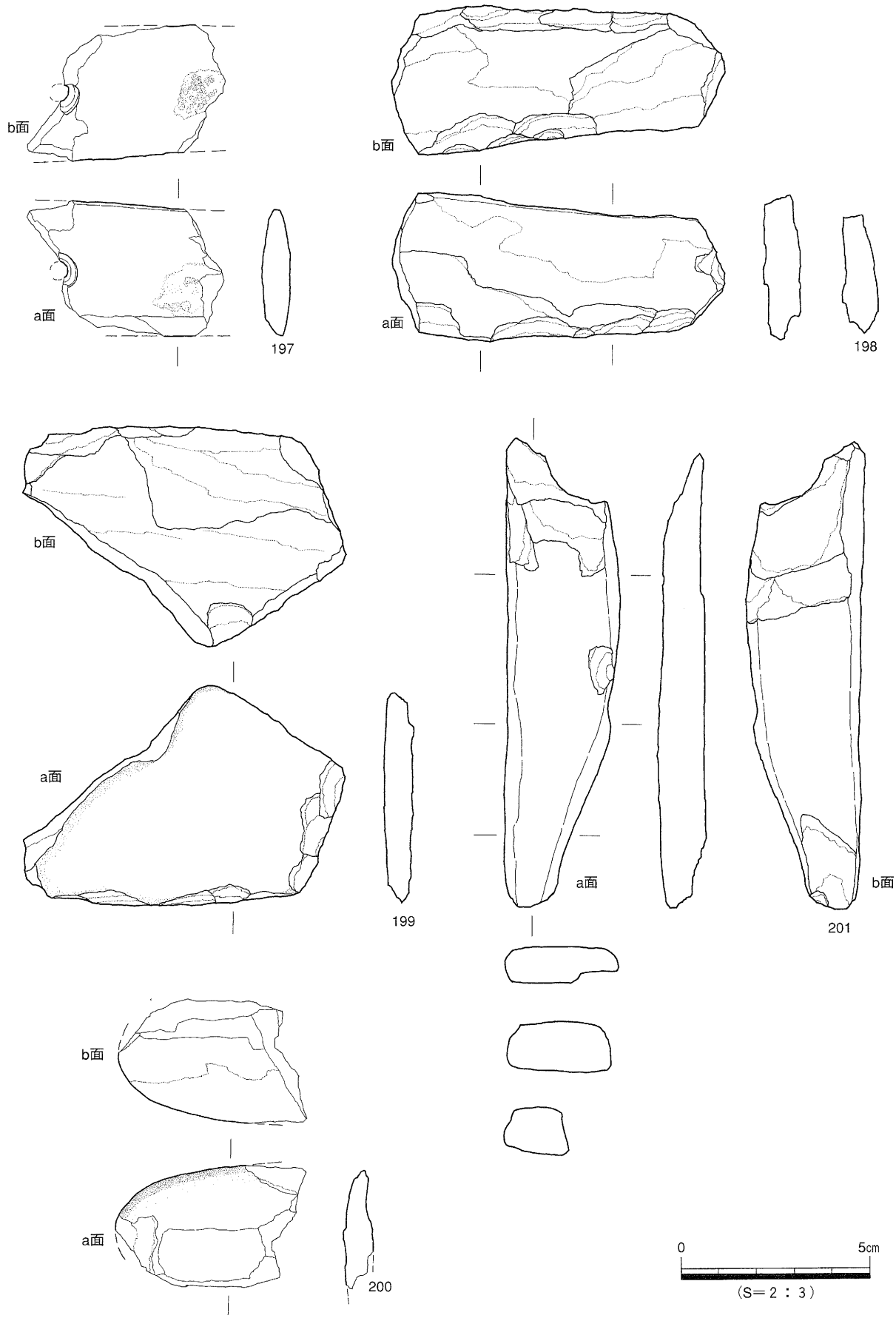
(S=1：4)



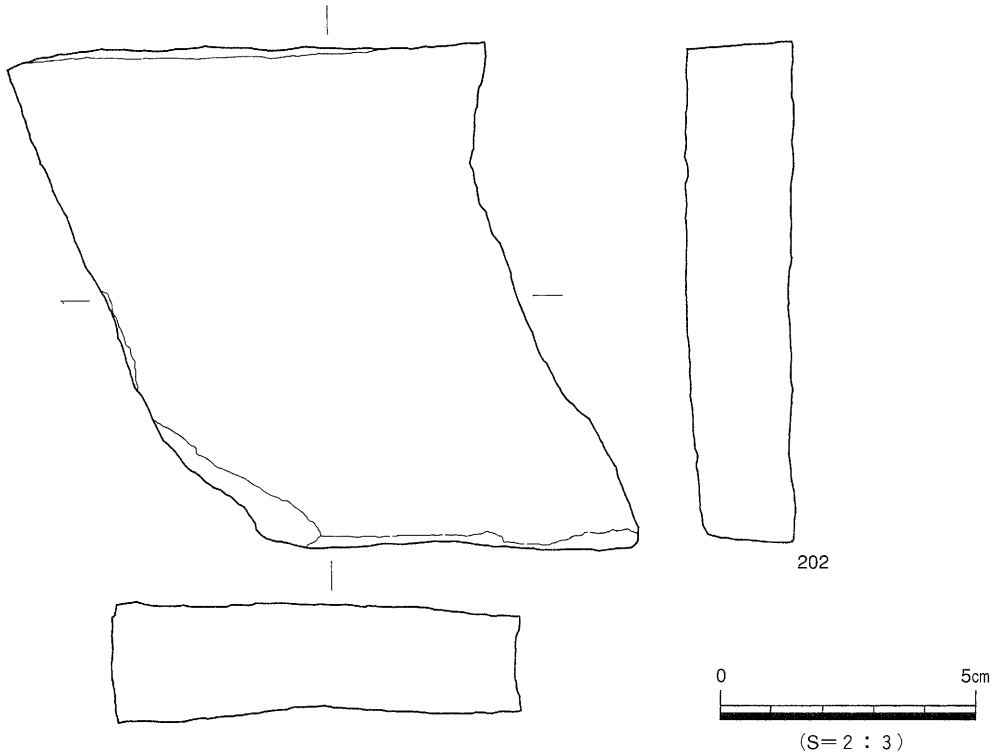
第39図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(2)



第40図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(3)



第41図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(4)



第42図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(5)

193と194は高坏である。193は坏部で、体部が直線的に外側に開いて立ち上がり、口縁部は内傾し短く立ち上がる。口縁端部からやや下がった外面には、沈線文が１条施される。内外面ともに丁寧なナデ調整による。口縁部に接して受け部が水平にのびる。194は脚部片で、裾部はあまり開かない。裾部付近には５条の凹線文が施され、その後、細沈線文が鋸歯状に巡る。裾端部は強いナデによりやや凹む。内面は磨滅が著しい。

195～202は石器である。石器には石庖丁・敲石・台石がある。

195～197は石庖丁の完成品で、多くは緑色片岩製である。195は右半部を欠き、弧背弧刃形を呈する。刃部は扁両刃である。器面はａ面の背部付近が研磨によって研ぎ落とされており、稜線をもつ。196は左端部と右半部を欠く。弧背直刃形（直線刃半月形）を呈する。刃部は扁両刃である。他の石庖丁の石材と比べ、銀色の雲母が含まれているためか、器面の遺存が不良であり、研磨痕の観察は困難である。ただし、ａ面の刃部には鎬が不明瞭ながら認められる。197は左右を大きく欠く破損品である。198～200は石庖丁の未成品で、緑色片岩製である。198と199は打裂段階の資料で、198は打裂が進行し、直線状の刃部を作り出す。打裂は比較的大きな剥離となり、両面に粗割時の剥離面が広く残置し、粗割工程によって得られた素材が板状剥片であったことがうかがえる。199は右側部と下端に打裂が施されたものである。ａ面には自然面が広く残置し、ｂ面には粗割時の剥離面が残る。200は大きく欠けた破損品である。分割された円礫を素材とする。粗割段階で破損し、廃棄されたものであろうか。201は敲石である。緑色片岩製。扁平な礫の上端と下端を機能面とする。202は台石である。完存品。厚さ２㎝を測る板石である。使用痕は肉眼観察では顕著に認められない。

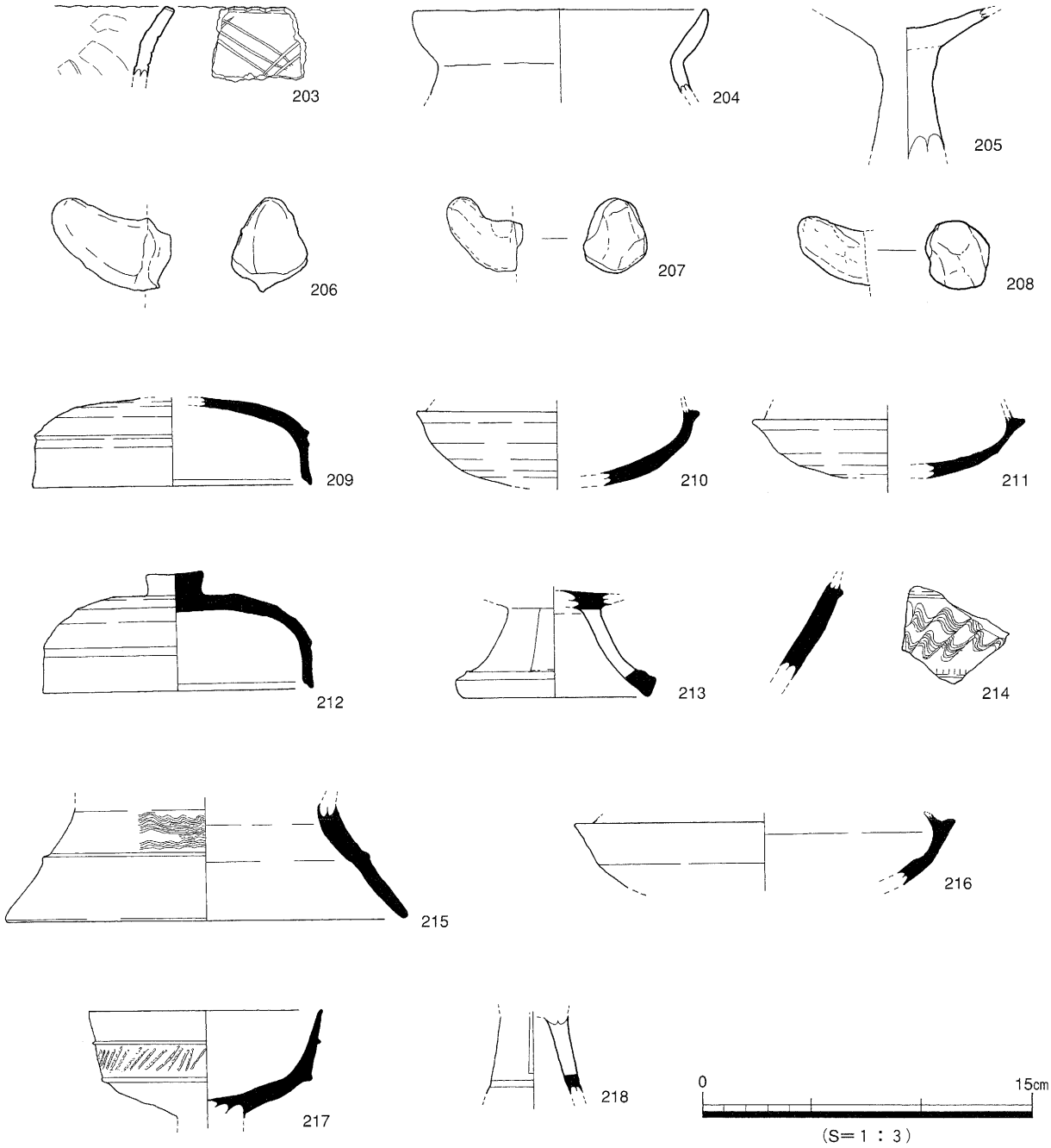
これらの石器は、土器の出土量から弥生時代前期末に帰属する可能性が高い。

弥生時代遺物以外には、縄文土器と、古墳時代～中世までの土器が少量ある。

縄文土器（203）　203は深鉢で、胴上半部に施文をもつ。

古墳時代土師器（204～208）　土師器には甕・高坏・甑の把手がある。

古墳時代後期の須恵器（209～218）　須恵器には坏蓋・坏身・高坏・器台等がある。209は坏蓋で、天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。口縁部は垂下し、端部は内傾する。口径12.4cmを測る。210と211は坏身である。いずれも底部と口縁部の立ち上がりを欠く。受け部はほぼ水平に短くのびる。212と213は有蓋高坏である。212は蓋で、つまみ部は天井がわずかに凹む。外面の稜は鈍く、口縁端部は段



第43図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(6)

をなす。天井部外面はヘラ削りが施され、その範囲は天井部の2/3をこえる。213は脚部である。透孔は長方形を呈し、3方向につく。214と215は器台である。214は坏部で、低い突帯を付し、9条1単位の櫛描波状文が2段施される。209～215は5世紀末～6世紀初頭。216は坏身で、口縁部の立ち上がりを一部欠く。受け部はやや上方に短くのびる。217は無蓋長脚高坏の坏部である。低い突帯を2条付し、突帯間には刺突列点文が施される。218は長脚高坏の脚部である。透孔は長方形で2段2方向につく。216～218は6世紀。

古代の遺物（219～235）　須恵器、陶器、磁器がある。

219は坏蓋で、天井部には宝珠様のつまみ部をもつ。220～225は坏身である。220～223は口径9～13cmを測り、立ち上がりは内傾し、端部がつまみ上げられる。224は坏部が深く、受け部はやや上方に短くのびる。225は底端部のやや内側に、高台が「ハ」の字形に付く。226は長頸壺で、頸部が上方に開く。227は瓶で、肩が張り、屈曲部から上の外面は回転ナデ、下は回転ヘラ削りになる。228は直口壺で、口縁部が短く直立し、肩は張り、把手が4方向に付く。229と230は広口壺である。229は口縁部は大きく外反し、端部は下方に拡張する。他の須恵器と色調が異なり、赤褐色を呈する。230は口径8.4cmで、小型品になる。頸部は外傾気味に立ち上がり、口縁外面がわずかに肥厚する。231は高坏で、脚裾部片である。裾部が大きく外に開き、裾端部は下方にわずかに突出する。232と233は甕である。232は口縁部は長く、やや内湾気味に直立する。太い沈線文を2条付し、沈線文間には櫛状工具による斜位の直線文が施される。233は頸～胴部片である。胴部内面は同心円文の叩きの後、軽いナデが施される。

234と235は碗である。234は緑釉陶器で、外底部に接してやや「ハ」の字形に開く高台を貼付する。235は白磁で、外底部に接して、直立する高台はケズリ出される。

中世の遺物（236・237）　いずれも備前焼きのすり鉢で、厚みのある平底をもつ。このほかに土師質の三足付羽釜の脚部片が出土している。

時期：出土遺物から、埋土④～②は弥生時代前期末に堆積した土層であり、埋土①は中世までに堆積した土層である。

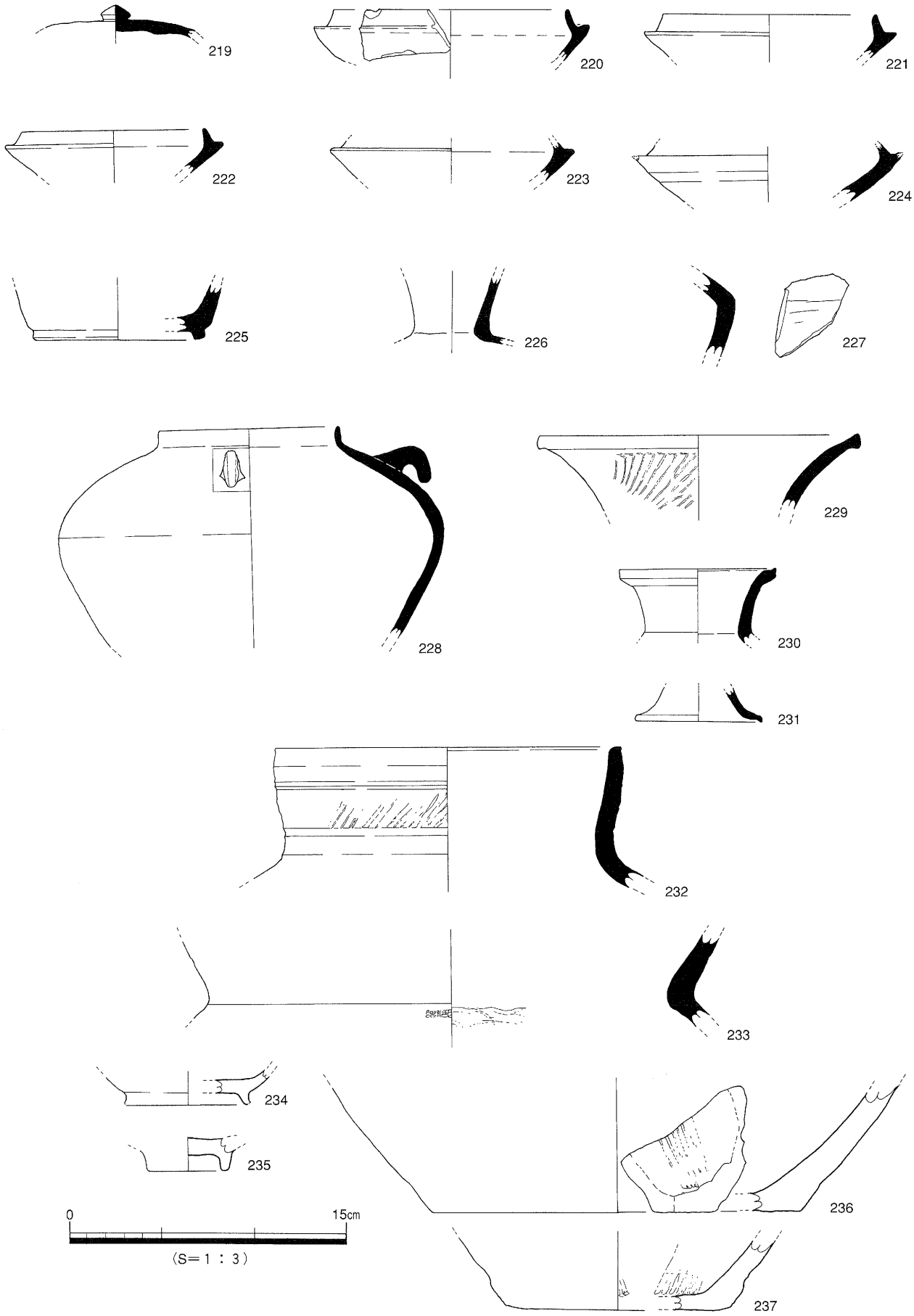
(2)　古墳時代

ＳＸ101（第26・45図）

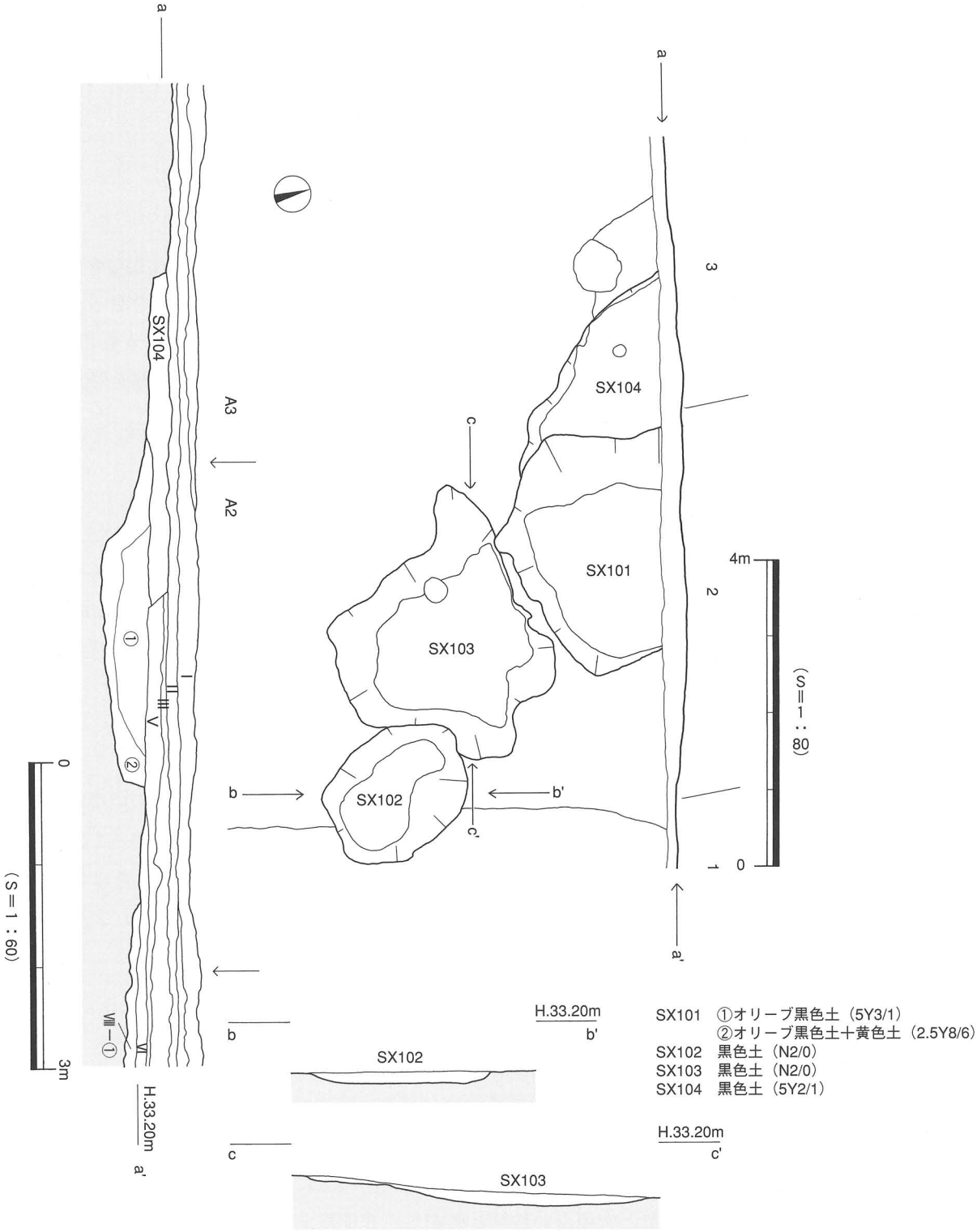
Ⅰ区北端中央部のＡ２・３区に位置する。遺構の北半部は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈している。規模は東西3.4m、南北1.6m、深さは検出面から40～50cmを測る。横断面形態は逆台形状を呈している。埋土は2層に分層できた。上層はオリーブ黒色土（５Y3/1）で硬くしまっている。下層はオリーブ黒色土に黄色土（2.5Y8/6）のブロックを多量に含む。掘り方は東側はしっかりとしているものの、西はなだらかで不明瞭となる。遺物は各層から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。なお、いずれも破片であり、弥生土器と土師器の器面は磨滅が著しい。須恵器には、坏身・坏蓋・高坏・長頸壺・甕がある。

出土遺物（238～249）（第46図、図版18）

238～240は弥生土器である。238と239は壺で、238は頸部下端に断面が台形状の凸帯を貼付する。239は厚手の平底になる。240は鉢で、やや厚手の上げ底をもつ。



第44図　ＳＲ201埋土①出土遺物実測図(7)



第45図　ＳＸ101～104測量図

241～249は須恵器である。241は坏蓋の口縁部片で、口縁部は垂下し、端部はやや内傾する。242～244は坏身の口縁部片で、立ち上がりはやや内傾し、受部がほぼ水平に短くのびるもの（242・243）と、上方へのびるもの（244）とがある。245と246は高坏である。245は短脚で、脚柱部はゆるやかに外反して開く。脚端は上方に突出する。247と248は長頸壺である。247は胴部最大径の位置に凹線が１条巡る。248は胴部はやや肩の張る球形を呈す。肩部には凹線２条を施し、凹線間には刺突斜線文がみられる。249は甕の口縁部片である。

時期：遺物から６世紀末とする。

ＳＸ102（第26・45図）

Ｉ区北東部のＢ２区に位置する。ＳＲ101と一部重複するが、切り合い関係は判然としなかった。平面形態は不整形を呈し、明確ではない。規模は東西1.7m、南北1.8m、深さは５～９㎝を測る。埋土は黒色土（Ｎ２/０）の単一層である。遺物は土師器と須恵器とが出土したが、図化できるものはない。

時期：時期を特定する有効な遺物はない。遺構の配置と埋土からＳＸ101に近い時期を想定し、６世紀末とする。

ＳＸ103（第26・45図）

Ｉ区北部のＡ・Ｂ２区に位置する。平面形態は不整形を呈する。規模は東西2.4m、南北2.7m、深さ15㎝を測る。横断面形態は浅いＵ字形を呈する。埋土は黒色土（Ｎ２/０）の単一層であった。遺物はわずかに弥生土器、土師器、須恵器の砕片が出土したにとどまる。図化できるものはない。

時期：時期を特定する有効な遺物はない。遺構の配置と埋土からＳＸ101に近い時期を想定し、６世紀末とする。

ＳＸ104（第26・45図）

Ｉ区北壁中央部のＡ２・３区に位置する。円形の東半部は後世の削平のため遺存していない。遺構の北半部が調査区外に続くことから正確な規模は測定できない。ＳＸ104はＳＸ101を切って覆っている。平面形態は円形を呈するものと考えられる。規模は推定直径3.4mと考えられ、深さは15～20㎝を測る。埋土は黒色土（５Ｙ２/１）の単一層で、硬くしまっている。遺物は弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土した。土師器は器面の磨滅が著しい。

出土遺物（250～252）（第46図）

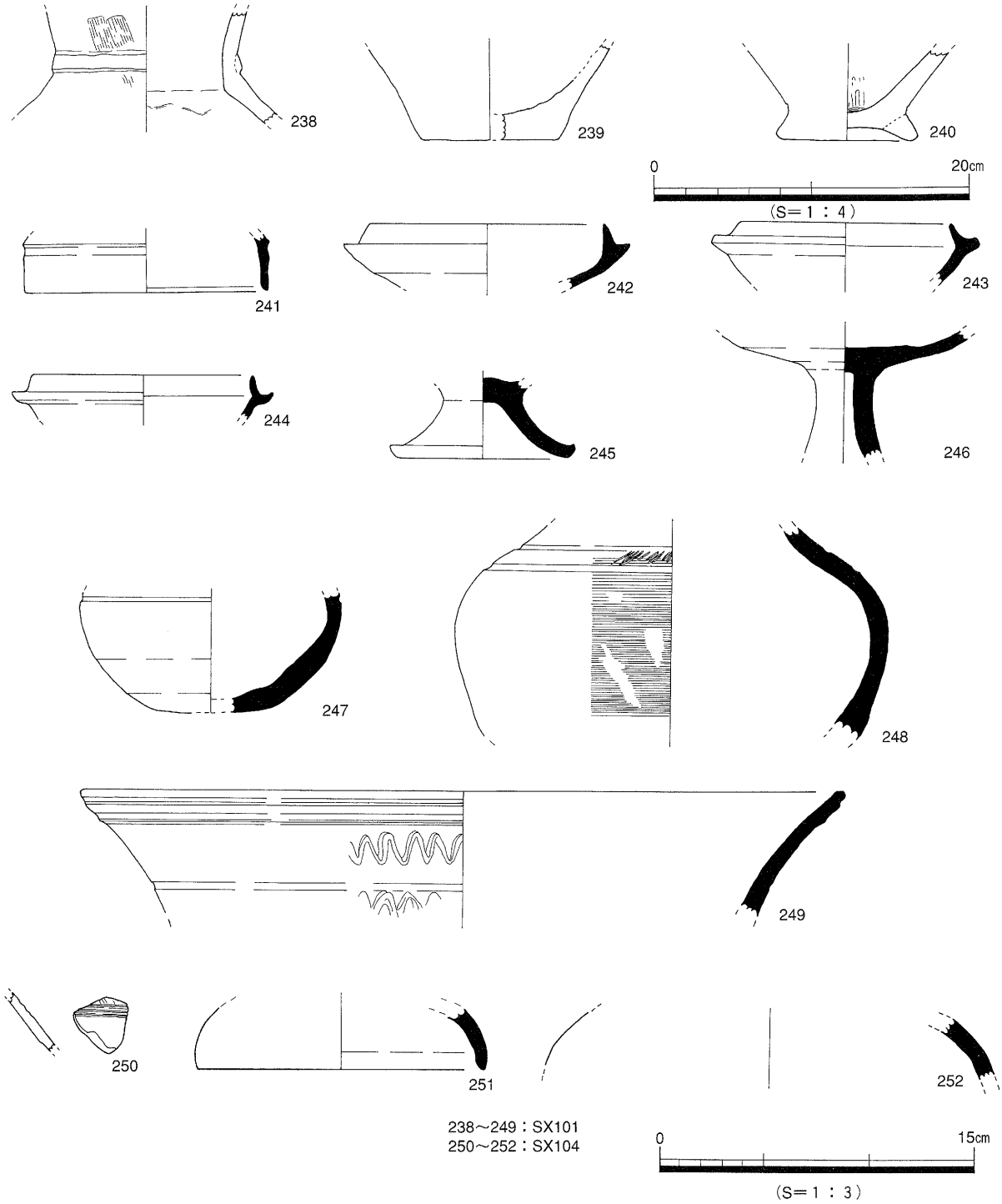
250は弥生土器である。小型壺の胴上半部片で、沈線文３条を施す。

251と252は須恵器である。251は坏蓋で、口径13.4㎝に復元される。口縁部は丸みをもちながら垂下し、口端部を丸くおさめる。252は壺で、肩が張る器形になる。外面にはわずかに自然釉がみられる。

時期：出土遺物は少なく、小片であることから、時期を特定する有効な遺物とはいえない。Ｉ区北壁ではＳＸ104はＳＸ101を切ることが観察されることから、ＳＸ101に後続するものである。ただし、埋土が類似することから、ＳＸ101と大差ない時期と想定し、６世紀末とする。

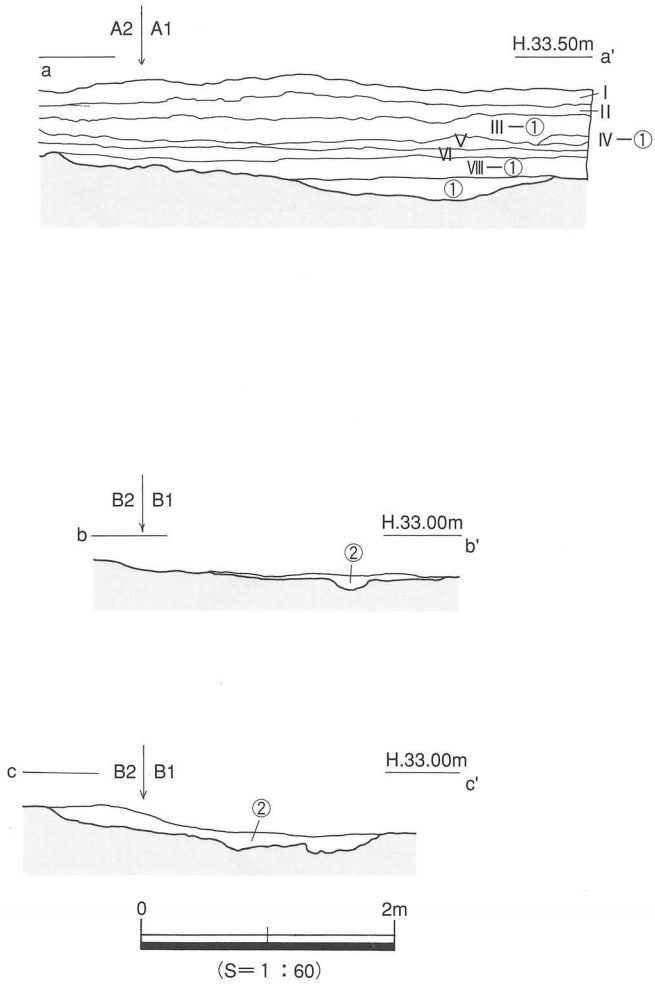
ＳＲ101（第26・47図）

Ｉ区東端のＡ～Ｃ１・２区に位置する。流路の北端は調査区外へ続き、南端は段丘の落ちにあたる

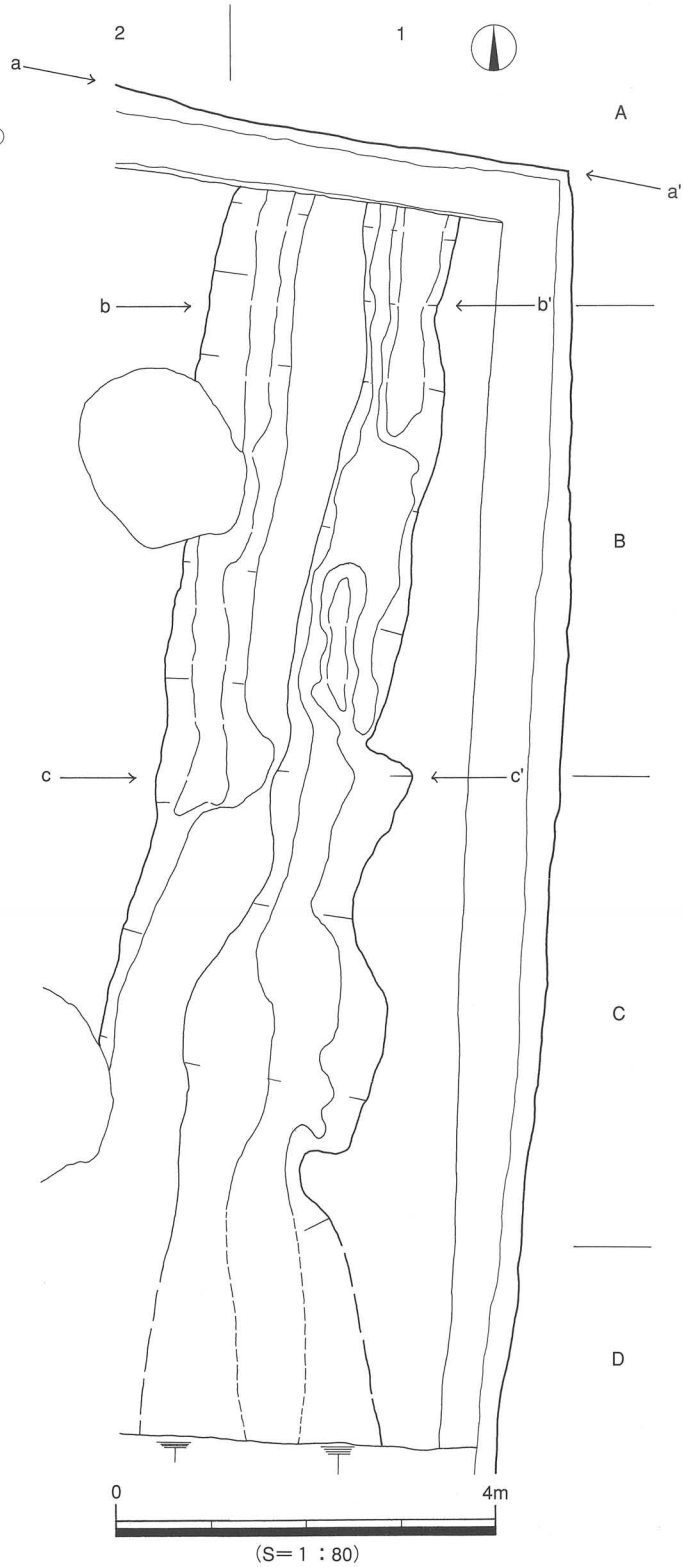


第46図　ＳＸ101・104出土遺物実測図

ため、途切れている。規模は検出長11.8m、幅3.4～3.8m、深さ20cmを測る。横断面形態は浅いＵ字形を呈する。埋土は２層に分層できた。埋土①は黒色土（Ｎ２/０）で粘性があり、硬くしまっている。埋土②は浅黄色シルト質土（５Ｙ３/１）で、黄色土（2.5Ｙ８/６）のブロックを多量に含む。遺物は土師器と須恵器が出土したが、その多くは磨滅の著しい小片である。この他、流路の底から多量の川原礫が出土した。川原礫の大きさは拳大である。



①黒色土（N2/0）
②浅黄色シルト質土（5Y3/1）十黄色土（2.5Y8/6）ブロック

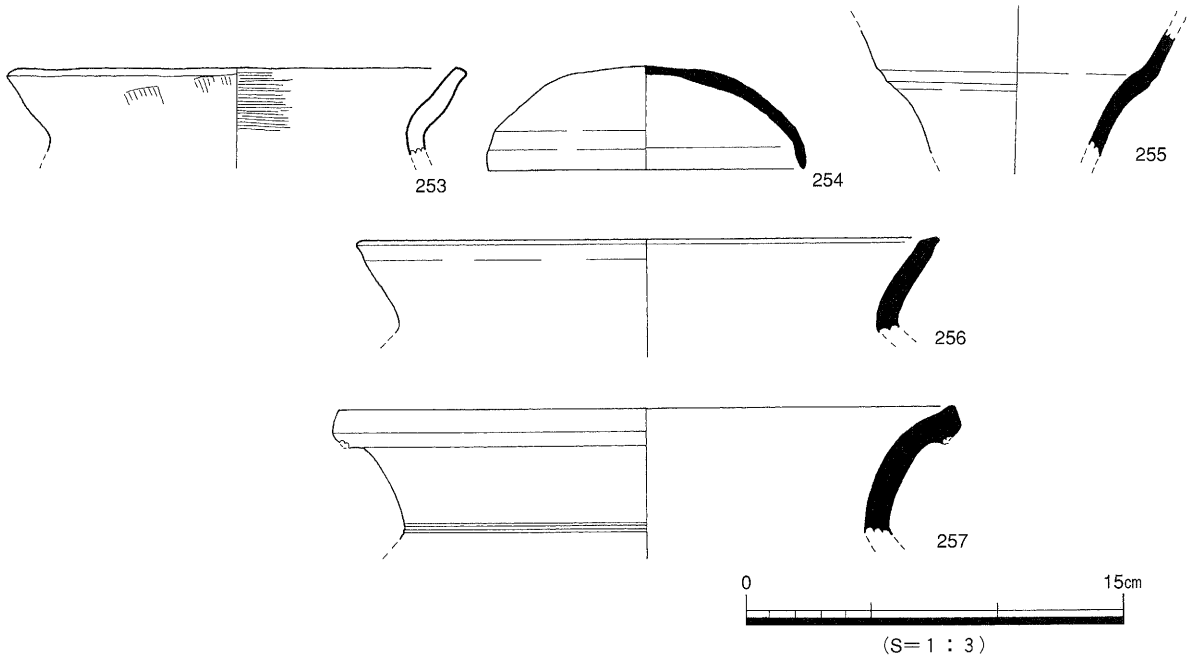


第47図　ＳＲ101測量図

出土遺物（253～257）（第48図）

253は土師器の甕で、口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は面取りする。254～257は須恵器である。254は坏蓋で、天井部と口縁部とを分ける稜は消出する。内外面ともに回転ナデ調整を施す。255は瑳の口縁～頸部片で、口縁部が大きく外反する。256と257は甕の口縁部片である。257は口縁部が外傾し、端部が強く外反する。口縁端部は上下に拡張している。

時期：出土遺物から、６世紀末～古代に埋没したものとする。



第48図　ＳＲ101出土遺物実測図

(3) 中　世

掘立１（第26・49図）

Ｉ区中央部のＢ・Ｃ２・３区に位置する。梁間２間、桁行３間の南北に細長い建物で、ＳＰ９・15・17～20・27～29の９基を柱穴として構成する。規模は、梁間の全長が3.5～3.9m、桁行6.1mを測る。柱穴の平面形態は円形、深さは５～42cmを測る。ＳＰ27～29は後世に削平され極端に浅く、ＳＰ９・29間の柱穴は削平により消出する。柱穴の埋土は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。柱痕は検出されなかった。建物の南東部に位置する柱穴（ＳＰ19・20）からは柱を支えるための基底石（根石）が検出された。遺物は、ＳＰ19からは土師器の三足付き羽釜と須恵器の破片、ＳＰ20からは須恵器片が出土した。

出土遺物（第49図）

258はＳＰ20から出土した須恵器の壺である。球形を呈し、外面には回転カキメ調整を施す。

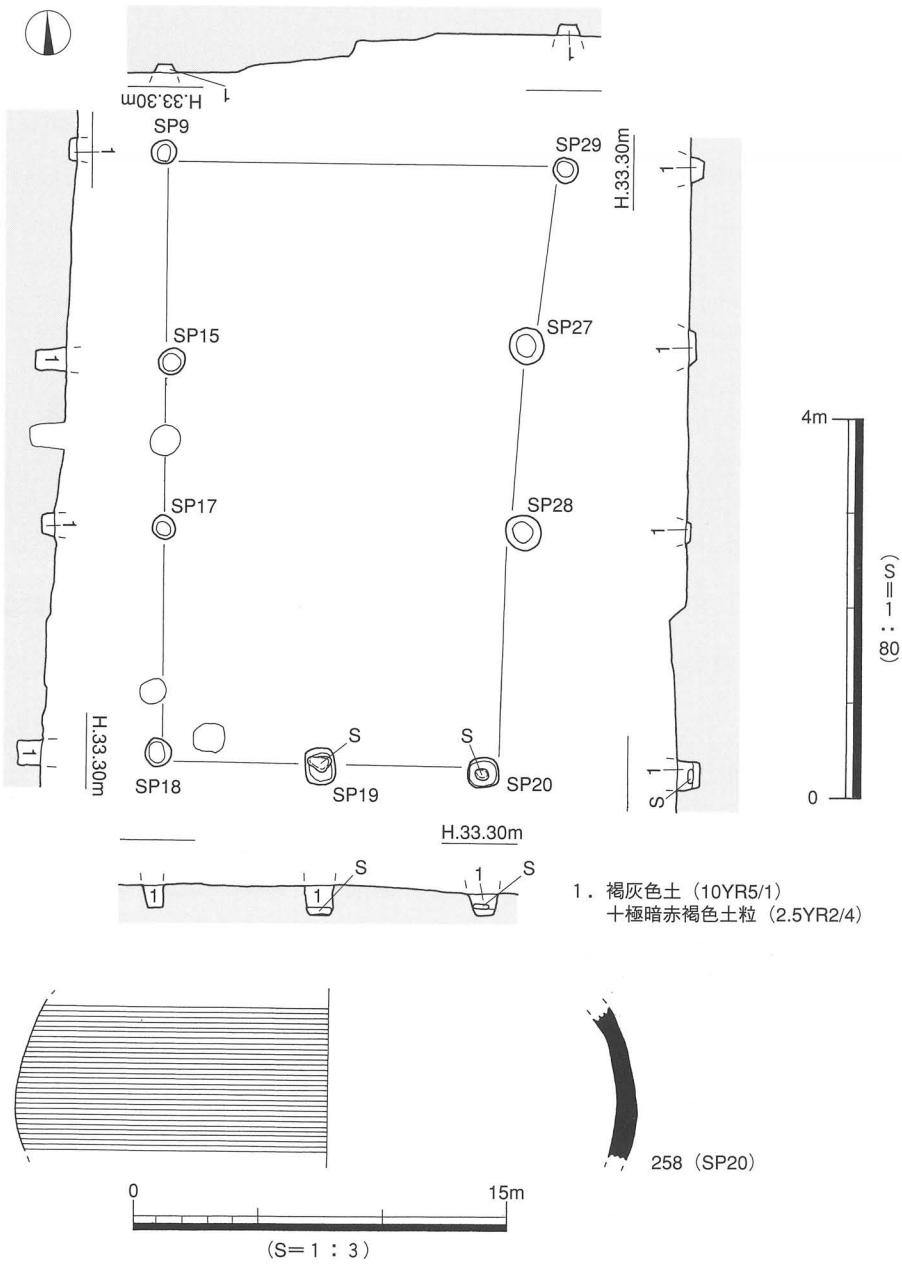
時期：出土遺物は、古い時代のものが柱穴の埋没時に流入したと判断される。柱穴の埋土と配置から中世とする。

ＳＥ101（第26・50図）

Ｉ区西半部のＢ３区に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は直径1.8mを測る。検出面から深さ90cm掘り下げたところ、著しい湧水が認められた。壁面の崩れる可能性が生じたため、以下の掘り下げは実施しなかった。断面形態は二段掘り状を呈し、検出面から20cmまでは逆台形、ここから下部は垂直に掘り下げられている。埋土は、中央部が褐灰色土（10ＹＲ５/１）、周囲は褐灰色土（10ＹＲ５/１）に砂礫が混じる。遺物は土師器と須恵器の破片、サヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物（第50図）

259は①層の上部から出土した須恵器の坏蓋である。天井部が比較的高く、かえりは口縁端部より下方にのびる。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。



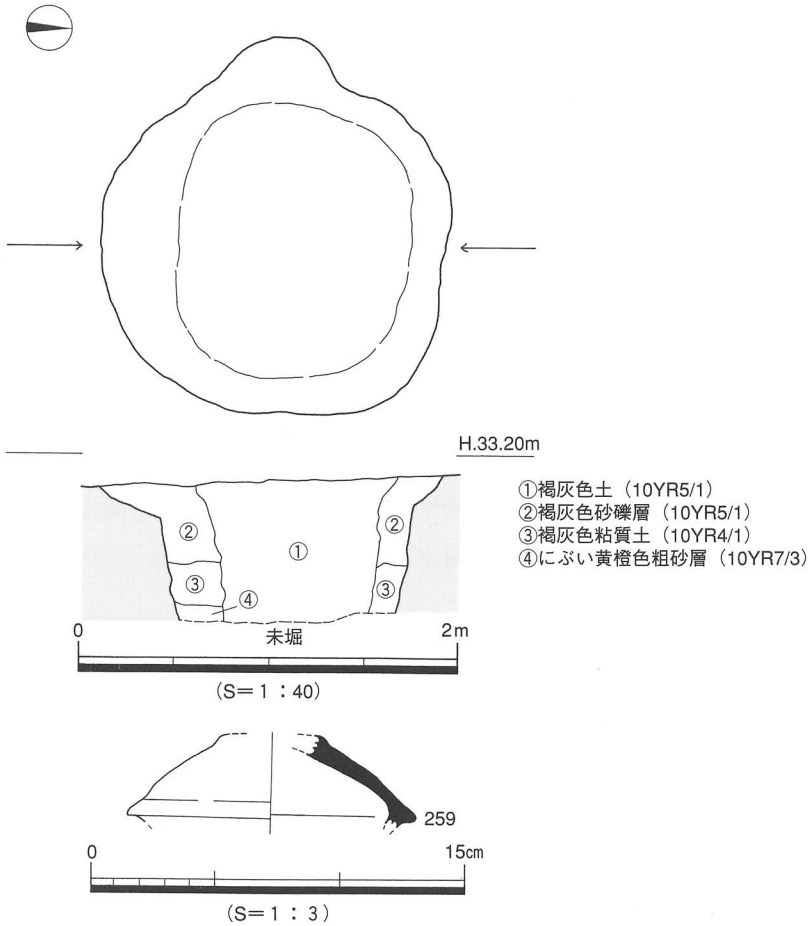
第49図　掘立１測量図・出土遺物実測図

時期：遺物（259）は、井戸の埋没時に古い時代の土器が流入した可能性が高い。よって、井戸の埋土と配置から中世に比定しておく。

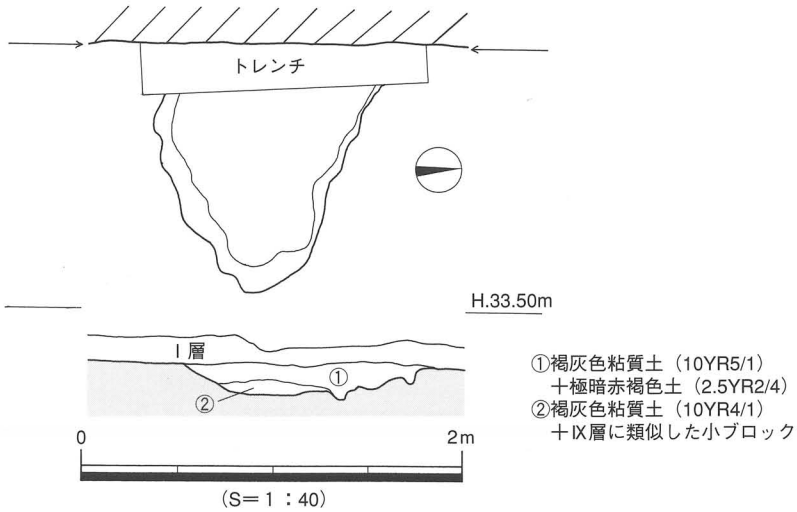
ＳＫ102（第26・51図）

Ｉ区北西部のＡ・Ｂ４区に位置し、西端は調査区外へ続く。平面形態は不整形を呈する。規模は、東西1.3m、南北1.3m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は２層に分層できた。上層は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。下層は上層よりも淡い色調で硬くしまっている。遺物は土師器と須恵器の砕片が出土したが図化できるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物がない。埋土から中世に比定しておく。



第50図　ＳＥ101測量図・出土遺物実測図



第51図　ＳＫ102測量図

ＳＫ103（第26・52図）

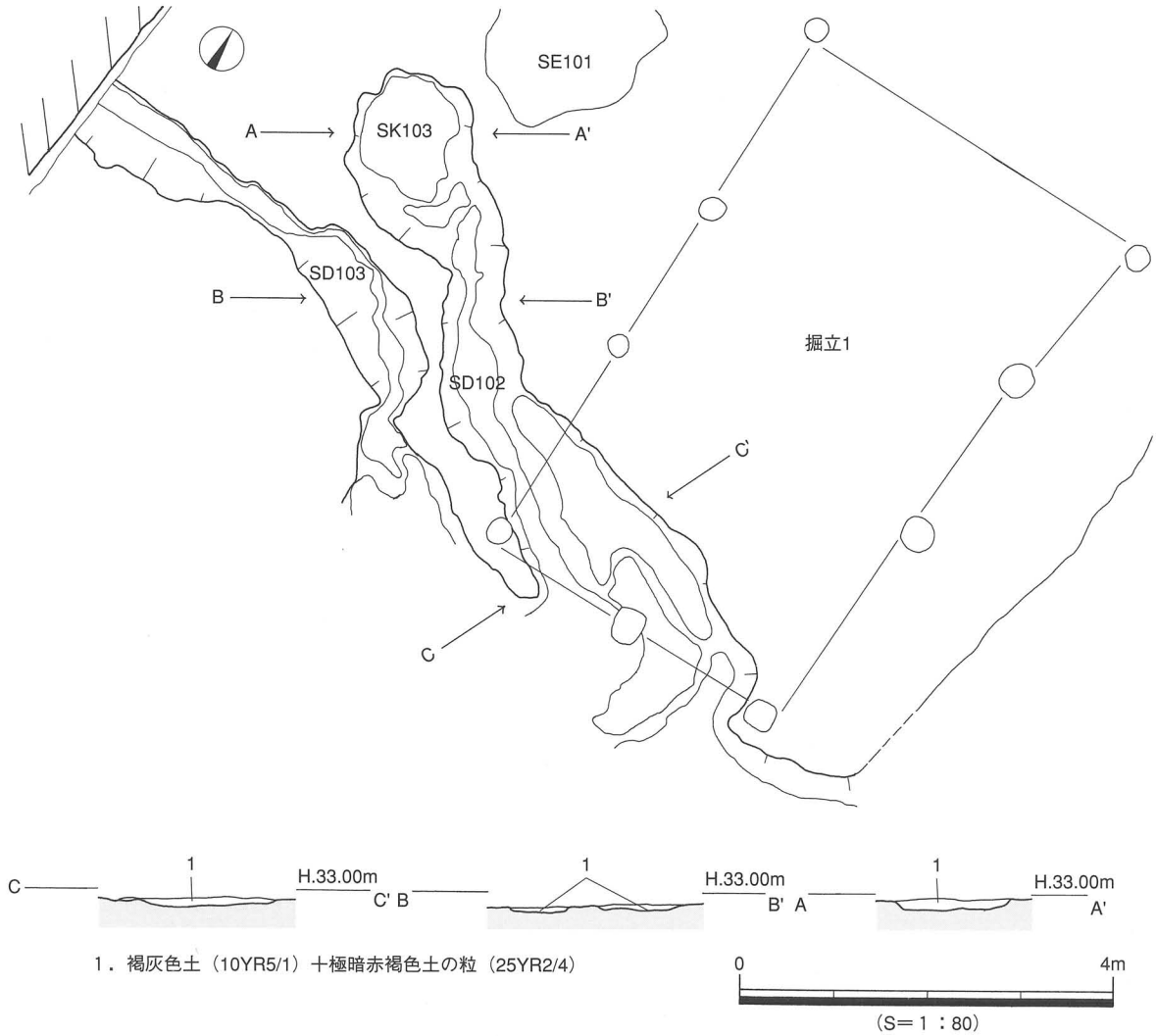
Ｉ区西部のＢ３・４区に位置する。ＳＥ101の南に隣接し、ＳＤ102の延長上にある。平面形態は不整形を呈する。規模は東西1.3m、南北1.5m、深さ10cmを測る。横断面形態は浅いＵ字形を呈する。埋土は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。遺物は土師器と須恵器の破片が１点出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土から中世に比定しておく。

ＳＤ102（第26・52図）

Ｉ区南半部のＣ２・３区に位置する。北西から南東に走り、東端では南に屈曲し、段丘の落ちでは途切れる。溝の北西端はＳＫ103に接続する。規模は検出長７m、幅0.5～0.8m、深さ４～８cmを測る。断面形態はＵ字形を呈し、埋土は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。遺物は土師器と須恵器の砕片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土と配置から中世に比定しておく。



第52図　ＳＫ103・ＳＤ102・103測量図

ＳＤ103（第26・52図）

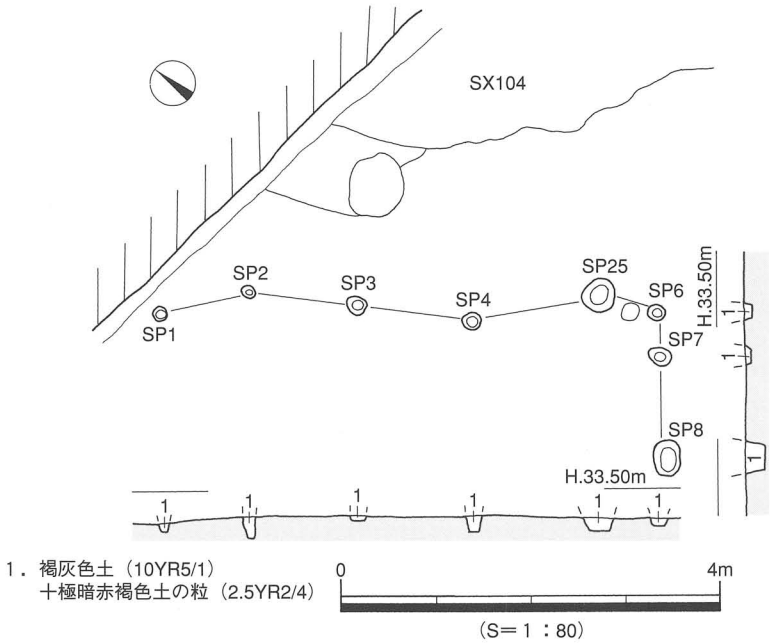
Ｉ区南半部のＣ３・４区に位置する。ほぼＳＤ102に並行する。溝の西端は調査区外へと続く。規模は検出長5.7m、幅0.3～0.9m、深さ１～５㎝を測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。遺物は土師器の砕片が２点出土したにとどまる。図化しうる遺物はない。

時期：時期決定に有効な遺物はない。埋土と配置からＳＤ102の時期と大差ないものと考えられる。

ＳＡ101（第26・53図）

Ｉ区北西部のＡ・Ｂ３区に位置する。ＳＥ101の北側に併設された柵列である。柱穴はＳＰ１～４・６～８・25の８基で構成され、規模は全長6.8mとなる。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径10～30㎝、深さ６～23㎝を測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ５/１）を基調とし、極暗赤褐色土（2.5ＹＲ２/４）の粒が混じる。遺物は出土していない。

時期：時期決定に有効な資料がない。埋土と配置からＳＥ101の時期と大差ないものとしておく。



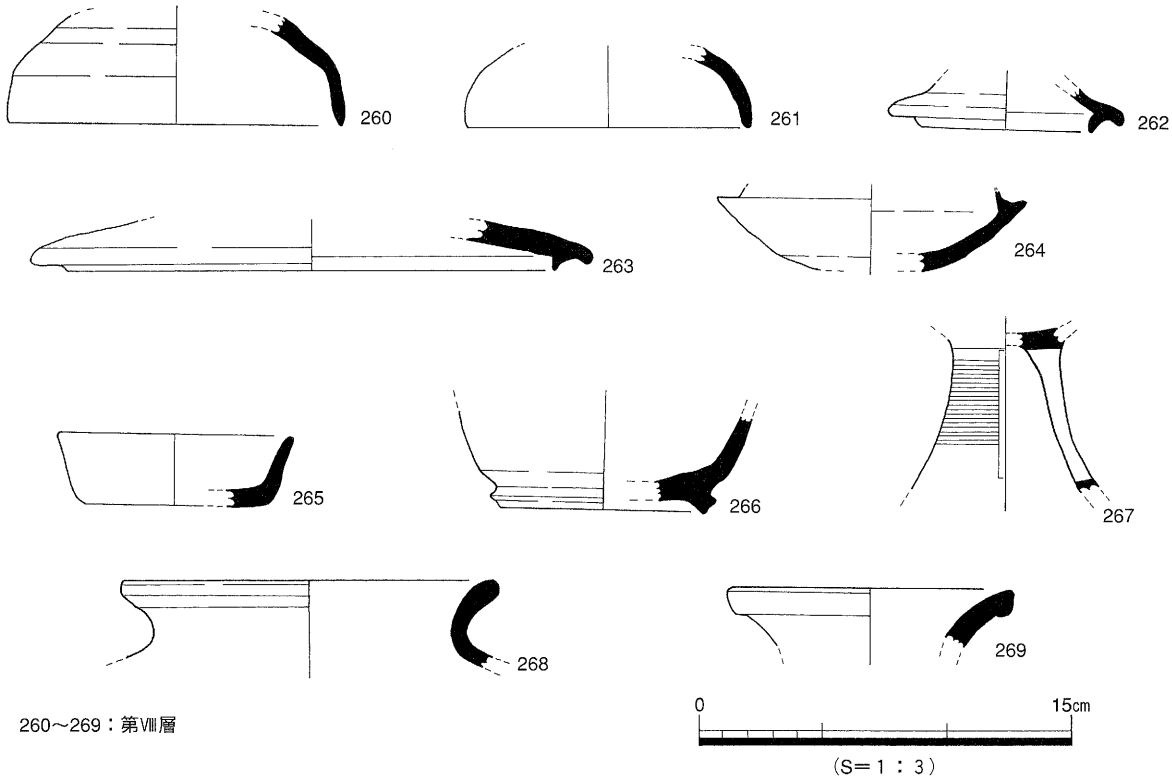
第53図　ＳＡ101測量図

(4)　包含層出土の遺物（第54・55図、図版18）

Ｉ区では、第Ⅷ層が遺物を多く包含し、他の層からも遺物がわずかに出土している。

第Ⅷ層出土遺物（260～269）　遺物はすべてが須恵器である。

260～263は坏蓋で、260は天井部と口縁部を分ける稜は消出し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。262はかえりが口縁端部より下方にのびる。264は坏身で、口縁部の立ち上がりは内傾する。受部は太くやや外方にのびる。265と266は坏身で、265は厚みのある平底になり、口縁部は外方に開く。266は外底部のやや内に「ハ」の字形の高台が貼付する。267は高坏で、透孔は長方形を呈し、３方向につく。268と269は甕である。268は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸くおさめる。



第54図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図(1)

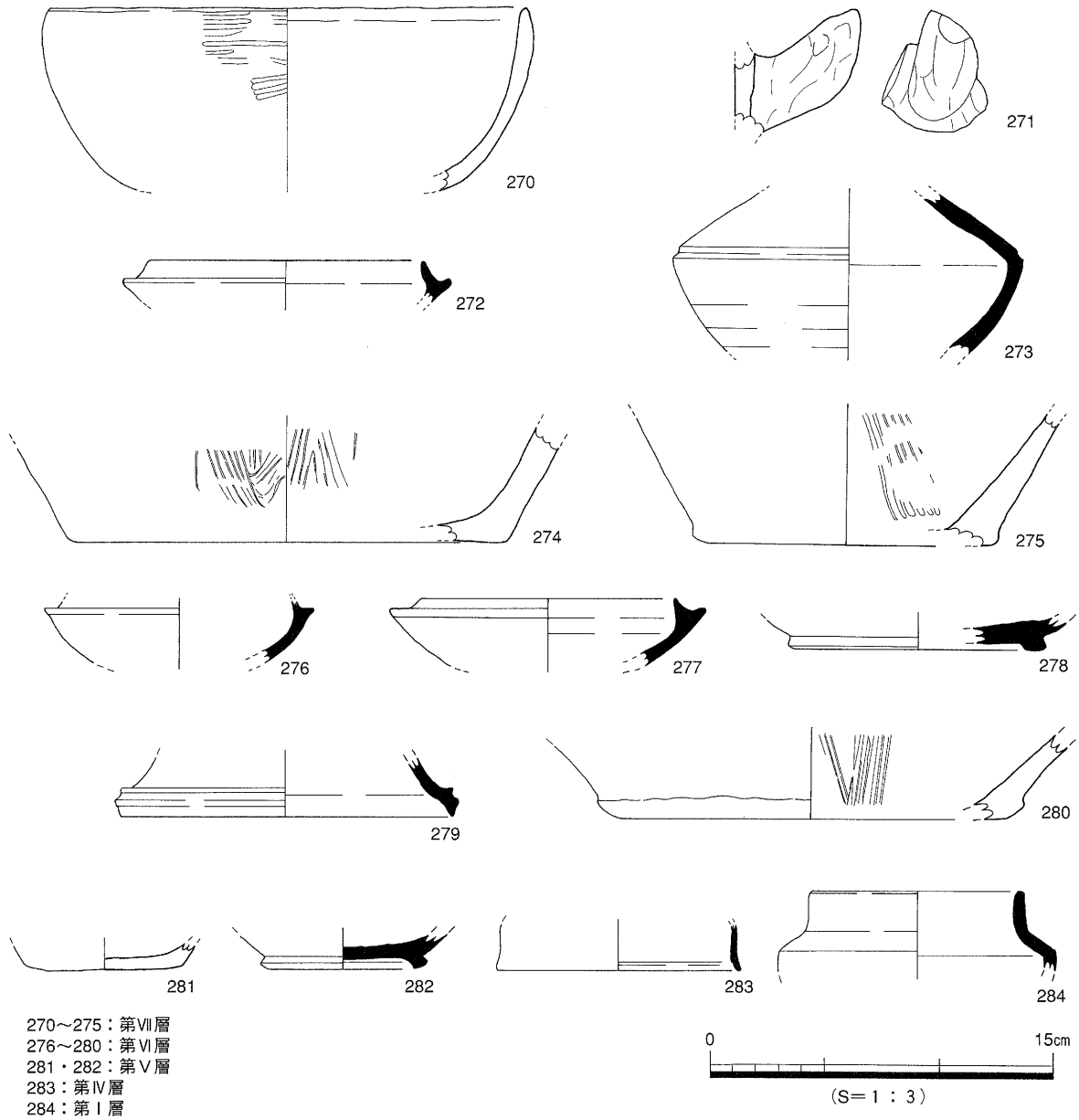
第Ⅶ層出土遺物（270～275）　遺物は土師器、須恵器、陶器がある。270は土師器の碗で、ボウル形の器形をもち、口径が20.1cmになる。外面上半部はヨコ方向のヘラミガキをする。271は甑の把手である。指頭痕を残し、斜め上方にのびる。272は須恵器の坏身で、口縁部片である。立ち上がりは内傾し、受部は太くやや上外方にのびる。内外面には回転ナデを施す。273は長頸壺で、胴部が扁平で、肩が張り、肩部には凹線文１条を施す。274と275は陶器である。いずれも備前焼のすり鉢の底部で、内面のおろし目は底近くまで施される。

第Ⅵ層出土遺物（276～280）　遺物は須恵器と陶器がある。276と277は坏身で、277は立ち上がりが内傾し、端部は尖る。受部は太く、上外方にのびる。278は坏で、底部に接して、高台が「ハ」の字形に貼付される。279は高坏で、脚部は外反気味に下がり、脚端部付近には凸線を１条施す。280は備前焼のすり鉢で、内面のおろし目は底近くまで施される。

第Ⅴ層出土遺物（281・282）　土師器と須恵器がある。281は土師器の皿になる。282は須恵器の坏で、高台が外底部に接して「ハ」の字形に貼付されている。

第Ⅳ層出土遺物（283）　283は須恵器の坏蓋で、口縁部は垂下し、端部が内傾する。口径が10.4cmに復元される。

第Ⅰ層出土遺物（284）　284は須恵器の短頸壺で、胴部上半で屈曲し、口頸部は短く直立する。



第55図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図(2)

4．小　結

本調査では、弥生時代、古墳時代～古代、中世の遺構と遺物を確認した。以下、時代ごとにまとめを行う。

弥生時代

前期末に時期比定されるＳＲ201は、土層の状況から埋没当初は水量が豊富であったことが推察される。水量は埋没が進行するに従い、徐々に減少し、湿地状を呈していたとみられた。これは当時の景観を復元する上で、ひとつの参考となるものである。埋土④～②の出土遺物には、当該期の土器と石器がある。これらの遺物には他の時期のものが含まれておらず、短期間の資料といえる。よって、これらの資料を一括して扱い、若干の検討を試みることとする。

(1) 土　器

器種は、甕・壺・鉢・高坏・蓋・その他（ミニチュア等）で構成される。器種構成比は甕（30点／29.1％）、壺（59点／57.2％）、鉢（１点／0.9％）、高坏（２点／1.9％）、蓋（１点／0.9％）、その他（10点／9.7％）の数値を示す。甕と壺が主要器種を占め、鉢・高坏・蓋がわずかに伴う。ここでは主要器種の甕と壺を取り上げ、整理する。

甕には、口縁部を折り曲げることにより形成するもの（甕ａ）と、口縁端部に接して粘土紐を貼り付けることにより口縁部を形成するもの（甕ｂ）とがある。いずれも全体の器形を知り得る資料はない。構成比は、甕ａ（５点／62.5％）、甕ｂ（３点／37.5％）である。対象となる資料が量的に多くはないので、組成比率をそのまま安易に受け取ることは控えるべきであるが、甕の口縁部形成にａとｂのふたつのものがあることは重要である。加飾はすべてに沈線文や沈線文＋刺突文がみられ、無文のものはみられない。沈線文のみで構成されるものは、４条か、４条以上である。沈線文＋刺突文のものには、８条と９条のものがあり、上から多条沈線文＋１段刺突文、多条沈線文＋１～２段刺突文＋３～５条の沈線文、多条沈線文＋１段刺突文＋１条沈線文＋１段刺突文＋２条沈線文がある。上位の施文が多条沈線文であることは共通するが、下位の施文にはバラエティーのあることがわかる。

壺は、完形品はなく、全体の器形を知り得る資料はない。大型品では、(77) のように口縁部径が広く、短い口頸部をもち、口縁内面に凸帯をもつものがある。中・小型品では頸部に直立化と長頸化がみられる。さらに加飾では (87) のように、貼り付けた凸帯上を指頭押圧後に上下に刻み目を施すものがある。頸胴部の境界や肩部、胴中位にヨコ方向の沈線文が施されるものがみられる。

これらの甕と壺で確認された諸特徴は、当地域の弥生土器編年の前期Ⅳに該当する（梅木　1994)。鉢・高坏・蓋は当該期の器種構成比では低い数値を示すことが指摘されており（梅木　1994)、本例もそれに同調している。その意味においても、本資料は前期Ⅳの典型例となるものである。

(2) 石　器

器種は伐採石斧・石庖丁・石鎌・スクレイパー（不定形刃器）・砥石で構成される。器種構成比（成品）は、伐採石斧（１点／16.6％)、石庖丁（１点／16.6％)、石鎌（１点／16.6％)、スクレイパー（２点／33.3％)、砥石（１点／16.6％）である。いずれも１ないし２点であり、対象となる資料は少ないが、前期Ⅳの石器の器種構成が判明する稀少な資料といえる。

次に各器種の形態を検討する。伐採石斧は、基部幅が狭く、刃部幅の広い長台形状の平面形で、横断面形が扁平な楕円形を呈するもの (57) と、やや基部が幅狭であるが平面長方形に近く、厚みが増し、横断面形は基部側が楕円形、刃部側が身膨れした長方形を呈するもの (119) とがある。これは下條信行氏が「弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究」で提示された、両刃石斧分類のＡ１ (57) とＡ２ (119) に該当するものである（下條　1994)。いずれも太形蛤刃石斧の系列に属し、変化の方向性はＡ１→Ａ２→（Ａ３）であることが明らかにされている。本遺跡の伐採石斧は、完成した太形蛤刃石斧の前段階のものと位置付けされる。石庖丁は、弧背弧刃形を呈し、背部弧度が刃部弧度よりも弱いものである (56)。刃部は扁両刃である。下條分類のＢ２に該当する。石鎌は、刃部がほぼ直線状を呈する (55)。研磨は両面のほかに背部にまで及び、面取りされる。スクレイパーは、刃部が弧状を呈するもの（６）と、直線状を呈するもの (58) とがある。砥石は、棒状の小型品である。基部に対して先端部がやや幅狭い形態である。

これらの形態的特徴のうち、伐採石斧と石庖丁は西部瀬戸内における当該期の典型例のひとつに位置付けられる。これは、下條氏の研究成果を追証するものである（下條　1994）。さて、器種構成に石鎌が含まれる点は注目したい。表13は、松山市における出土石鎌の一覧である。出土数は９点を数える。この数値は、瀬戸内における一平野からの出土数としては多い。点的というよりもむしろ、安定して石鎌が存在していたと理解することができる。すなわち、当地域における弥生時代石器には石鎌が定着しているのである。石鎌の初現は刻目突帯文土器段階であるが、その後の弥生前期前半の石器資料は良好なものに恵まれず、判然としない。石鎌が次にみられるのは前期末（梅木編年の前期Ⅳ）である。さらに中期前葉（梅木中期Ⅰ）の宮前川遺跡出土資料にも認められる。このことから、石鎌の定着時期を、現段階では前期末と捉えておきたい。

石材は、石庖丁と石鎌には緑色片岩が用いられている。この石材は、本遺跡周辺では入手できず、南へ約3.5km離れた砥部川下流域が採取候補地のひとつとして考えられている。よって、本遺跡へは搬入したもの（あるいは搬入されたもの）と判断される。緑色片岩資料（石器原材）には、(118) のような粗割段階以前の礫があることは、搬入素材の形状を知る手がかりとなり得るものである。

(3) 景　観

ＳＲ201（埋土④～②）の遺物は、摩耗が少ない。さらに本調査地のＩ区からは弥生前期土器片が出土したことから、ＳＲ201の遺物は、本調査地の北～北東に展開する微高地上の集落から投棄されたものと考えられる。久米才歩行遺跡２次調査地で検出された円形の竪穴住居址は当該期に時期比定されている。堀越川下流域右岸の微高地には当該期の集落遺跡が展開しており、今後はその広がりにも注意を払う必要がある。

ＳＲ201（埋土①）の遺物には、弥生時代中期に帰属するものもある。埋土と遺物の状況から、当時は水量が少なく、よどみのある湿地状を呈していたことが想定される。よって、本遺跡の北～北東の微高地には継続的に集落が展開していたものと考えられる。

古墳時代～古代

ＳＲ101は河道底から拳大の円礫が集中して出土したが、遺物の遺存は良好ではなく、器面の磨滅も顕著である。埋没当初は水量が多く、その後は、埋土が黒色で粘性のあるものに変化していることから、水量が減少し、よどみのある湿地状を呈していたと考えられる。河道の西側で検出されたＳＸはこの想定を裏付けるものとなる。ＳＲ201（埋土①）には、当該期の遺物が多量に含まれることから、本調査地の北～北東の微高地に、当該期の遺構が広がるものと想定される。

中　世

掘立柱建物、井戸、柵列等の生活関連遺構を検出した。平成９年度に実施した久米才歩行遺跡３次調査地からは15～16世紀の掘立柱建物、溝、土坑等の集落の一部が検出されており、ＳＲ101の西側の微高地には当該期の集落が展開していることを確認した。今回検出の南北棟建物と素掘りの井戸、区画溝（２次調査地ＳＤ１）の検出は、具体的な遺構の様相を示したものとなろう。

以上、本調査のまとめを行った。今後は、各時代における遺構の広がりを追求することが課題のひとつとしてあげられる。

註）

梅木謙一　1994「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器－松山平野を中心にして－」『牟田裕二君追悼論集』

下條信行　1994「弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究」『平成５年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書』

下條信行　1991「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡』松山市文化財調査報告書第20集

表13　愛媛県松山市石鎌出土遺跡一覧

番号	遺　跡　名	出　土　地	共伴土器	法量(cm)			石　材	文献	備　　考
				長さ	幅	最大厚			
1	大渕遺跡	松山市太山寺町	刻目突帯文土器	(13.4)	4.3	0.72	緑色片岩	①	報告書．Ｂ区 SX-1出土
2	久米窪田Ⅳ遺跡	松山市久米窪田町	弥生前期Ⅳ	25.3	5.8	1.9	緑色片岩	②	報告書．第42-2号土坑出土
3	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市南久米町	弥生前期Ⅳ	(7.8)	4.0	1.01	緑色片岩	③	本報告第32図55　SR201埋土③出土
4	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市南久米町	弥生前期Ⅳ	(15.1)	4.5	1.4	緑色片岩	③	本報告第27図5　SR201埋土④出土
5	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市南久米町	弥生前期Ⅳ	(14.3)	6.2	1.6	緑色片岩	③	本報告第36図117　SR201埋土②出土
6	久米才歩行遺跡4次調査地	松山市南久米町	弥生前期Ⅳ	21.4	4.9	2.0	緑色片岩	③	本報告第36図118　SR201埋土②出土
7	宮前川遺跡	松山市別府町	弥生中期Ⅰ	(8.5)	4.7	1.1	緑色片岩	④	報告書．E-5区遺物包含層出土
8	畑寺竹ヶ谷古墳群	松山市畑寺町		17.5	5.6	1.02	緑色片岩	⑤	未報告遺物．「A区7号墳丘Ｓno.5」の注記
9	福音寺遺跡竹ノ下地区	松山市福音寺町		16.3	4.5	0.87	緑色片岩	⑥	報告書（写真掲載）

＜文献一覧＞
①『大渕遺跡－１・２次調査－』2000
②『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』1981
③『松山市埋蔵文化財調査年報11』1999
④『宮前川遺跡－中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書－』1986
⑤『愛媛県史　資料編　考古』1986
⑥『国道11号バイパス　埋蔵文化財発掘調査報告書』1983

遺構・遺物観察表

―凡例―

(1)　以下の表は、本遺跡検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺物観察表の各記載について

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴上半部、底→底部、坏→坏部、天→天井部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

焼成欄では焼成具合を略記した。

例）◎→良好、○→並、△→不良

表14　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	Ⅱ区	U字形か	検出長14×5×0.8～1.3	ほぼ東西	①～④層に分層	弥生土器、石器 土師器、須恵器他	弥生前期・中期、古墳後期～古代、中世	
101	Ⅰ区 （A～C1・2）	浅いU字形	検出長11.8×3.4～3.8×0.2	南北	①層：黒色土 ②層：浅黄色シルト	土師器 須恵器	古墳後期～古代	器面の磨滅著しい。

表15　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規模(m)長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備考
101	A2・3	不整形	逆台形	3.4×1.6×0.4～0.5	上層：オリーブ黒色土 下層：オリーブ黒色土 ＋黄色土ブロック	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期	
102	B2	不整形	浅いＵ字形	1.8×1.7×0.05～0.09	黒色土	土師器 須恵器	古墳時代後期か	
103	A・B2	不整形	浅いＵ字形	2.7×2.4×0.15	黒色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期か	
104	A2・3	円形	逆台形	3.4×3.4×0.15～0.20	黒色土	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代後期～古代	

表16　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方向	桁　行		梁　行		方　位	床面積（㎡）	時　期	備　考
			実長(m)	柱間寸法（m）	実長(m)	柱間寸法（m）				
1	2×3	南北棟	6.1	1.96・1.50・2.14 1.60・1.60・2.20	3.5～3.9	4.00・1.42・1.40	N－S	23.79～21.35	中世段階か	

表17　井戸一覧

(SE)	地　区	平面形	断面形	規模(m)長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
101	B3	円形	二段掘り	1.8×1.8×0.90＋α	褐灰色土	土師器 須恵器	中世段階か	

表18　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m)長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
102	A・B4	不整形	逆台形	1.3×1.3×0.20	上層：褐灰色土 下層：極暗赤褐色土	土師器 須恵器	中世段階か	
103	B3・4	不整形	浅いＵ字形	1.5×1.3×0.10	褐灰色土	土師器 須恵器	中世段階か	

表19　溝一覧

溝(SD)	地　区	断　面　形	規模(m)長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
102	C2・3	ごく浅いU字形	検出長7.0×0.5～0.8×0.04～0.08	北西～南東	褐灰色土	土師器 須恵器	中世段階か	
103	C3・4	ごく浅いU字形	検出長5.7×0.3～0.9×0.01～0.05	北西～南東	褐灰色土	土師器	中世段階か	

表20　柵列一覧

柵列(SA)	規模（間）	方　向	実長（m）	柱間寸法（m）	柱穴規模径×深さ（m）	時　期	備　考
101	7		6.8	0.80・1.00・1.08・1.12・0.40・0.28・0.80	0.1～0.3×0.06～0.23	中世段階か	SE101の付帯施設

表21　SR201埋土④出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (17.5) 残高 9.7	沈線文8条。口縁端に刻目。	ヨコ・ナナメハケ→ナデ	ナデ	石・長（1～2）	◎	D5東ベルト	12
2	甕	残高 2.2	沈線文4条以上。	指オサエ	ハケ→ナデ	石・長（1～2）	◎	D5東ベルト	12
3	甕	残高 3.2	沈線文4条。	㊐ヨコナデ ㊥タテヘラミガキ	マメツ	石・長（1～5）	◎	E5	12
4	壺	底径 (9.8) 残高 7.2	平底。	ナナメハケ→ナデ	ナデ	石・長（1～5）	◎	D5東ベルト	

表22　SR201埋土④出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
5	石鏃・未製品	基部欠	結色片岩	(15.1)	4.5	1.4	(141.29)	D5 研磨段階。	12
6	スクレイパー	完存	サヌカイト	4.4	3.3	0.96	9.79	D5 右側部に自然面残置。	
7	剥片	完存	結色片岩	7.3	3.3	0.42	12.41	D5東ベルト	

表23　SR201埋土③出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	甕	残高 4.9	沈線文9条。	㊐ヨコナデか ㊥ヘラミガキ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5東トレ	
9	甕	残高 8.0	沈線文5条以上。	タテハケ (10本／cm)	マメツ	石・長（1～4）	◎	E6	
10	甕	残高 4.2	沈線文6条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D5	
11	甕	底径 (8.2) 残高 6.2	わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長（1～5）	◎	E6	
12	甕	底径 (7.6) 残高 7.0	平底。	タテヘラミガキ	ヨコ板ナデか	石・長（1～3）	◎	D5	
13	甕	底径 (7.2) 残高 7.6	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	
14	甕	底径 (6.9) 残高 6.2	平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	○	D5	
15	甕	底径 (6.6) 残高 7.3	厚い平底。	マメツ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
16	甕	底径 (6.7) 残高 4.0	厚い平底。	タテハケ（7～8本／cm） →ナデ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D5東トレ	
17	甕	底径 (6.6) 残高 3.3	平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎		
18	甕	底径 (5.7) 残高 4.3	平底。	タテミガキ	ナデ	石・長（1～3）	○	D5	

SR201埋土③出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
19	壺	残高 9.2	無文。	㊀ヨコヘラミガキ ㊁ナナメヘラミガキ	ナデか	石・長（1～3）	◎	D5	
20	壺	残高 6.9	頸部に沈線文3条。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
21	壺	残高 4.1	頸部に沈線文6条。	マメツ	ナデか	石・長（1～3）	◎	D5	
22	壺	残高 6.4	頸部に沈線文9条以上＋刺突文2段。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	○	E6	
23	壺	残高 7.7	頸部に沈線文4条以上、胴部に沈線分3条以上。	タテハケ（6～7本／cm） →ヨコミガキ	ナデ	石・長（1～5）	◎	D5	
24	壺	残高 5.1	胴部に沈線分7条（2条1組）以上。	マメツ	ナデ →ナナメヘラミガキ	石・長（1～3）	◎	D4	
25	壺	残高 3.5	胴部に「M」字状の突帯。	ヨコナデ	マメツ	石・長（1～5）	◎	E6	
26	壺	残高 24.2	無文か。	ナデ	ナデ	石・長（1～2） 金ウ	◎	D5	
27	壺	底径（13.0） 残高 5.0	厚い平底。	タテハケ（4本／cm）	ナデ	石・長（1～5）	◎	D5	
28	壺	底径 11.8 残高 7.1	厚く、わずかに上げ底。	ナナメハケ →ヨコヘラミガキ	ナデ	石・長（1～2） 金ウ	◎	D5東トレ	
29	壺	底径（10.0） 残高 16.6	厚い平底。胴部は肩部が張る。	ナナメハケ →丁寧なナデ	ヨコハケ →丁寧なナデ	石・長（1～2） 金ウ	◎	D5東トレ	
30	壺	底径（10.1） 残高 3.1	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長（1～5）	○	D5	
31	壺	底径（9.4） 残高 5.2	わずかに上げ底。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～3）	○	D4	
32	壺	底径 9.7 残高 7.7	厚い平底。	ヨコヘラミガキ	板ナデ	石・長（1～3）	◎	D5東トレ	
33	壺	底径 9.2 残高 6.5	厚く、わずかに上げ底。	ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～5） 金ウ	◎	D5東トレ	
34	壺	底径（8.6） 残高 4.0	わずかに上げ底。	強いナデ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～4） 金ウ	◎	D5東トレ	
35	壺	底径（8.4） 残高 6.5	わずかに上げ底。	ヨコヘラミガキ	マメツ	石・長（1～4）	○	E6	
36	壺	底径（8.2） 残高 3.5	平底。	ナデか	ヨコヘラミガキ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	
37	壺	底径（8.4） 残高 4.7	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D5	
38	壺	底径（7.1） 残高 5.3	厚い平底。	タケハケ（3～4本／cm）	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5東トレ	
39	壺	底径（8.3） 残高 5.7	厚く、わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長（1～4） 金ウ	○	D4	
40	壺	底径 7.6 残高 3.5	平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	○	D4	

SR201埋土③出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
41	壺	底径 (7.6) 残高 3.9	わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	石・長（1～5）	○	D5	
42	壺	底径 (7.6) 残高 4.5	平底。	ハケ→ヨコヘラミガキ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
43	壺	底径 7.0 残高 3.7	平底。	ヨコヘラミガキ	ナナメヘラミガキ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D5	
44	壺	底径 (6.0) 残高 5.8	上げ底。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	○	D5	
45	高坏	残高 8.6	低脚で、裾部は広がる。	指オサエナデ	ナデ	石・長（1～5）	◎	D5	12
46	蓋	口径 (20.3) 残高 4.5	裾部はゆるやかに外反する。	ナデ	ヨコハケ（14～15/cm） →丁寧なナデ	石・長（1～3）	◎	D5	12
47	甑	底径 7.6 残高 6.6	甕の転用品。焼成後両側穿孔。	タテヘラミガキ →丁寧なナデ	丁寧なナデ	石・長（1～3） 金ウ・銀ウ	◎	D5東トレ	12
48	甑	底径 6.6 残高 4.4	甕の転用品。焼成後両側穿孔。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	12
49	甑	底径 8.5 残高 6.1	壺の転用品。焼成後片側穿孔。	ナナメヘラミガキ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	12
50	甑	底径 7.4 残高 6.7	壺の転用品。焼成後片側穿孔。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D5東トレ	12
51	深鉢	残高 3.9	斜格子状の沈線文。	マメツ	ナデか	石・長（1～4） 金ウ	△	D5	13
52	深鉢	残高 3.6	口縁端に刻目。	ヨコ条痕	ナデ	石・長（1～3） 金ウ	○	E6	13
53	鉢	口径 (10.8) 残高 3.9	波状口縁。斜格子状の沈線文。	(口～頸)ヨコナデ (胴上)ヨコ条痕	ナデ	石・長（1～3）	△	D5	13
54	浅鉢	残高 2.7	波状口縁。口縁端に刻目。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D5	13

表24　SR201埋土③出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
55	石鎌	1/3か	緑色片岩	(7.8)	4.0	1.01	(50.81)	D5。背部は研磨され、面取りされる。	13
56	石庖丁	2/5か	緑色片岩	(7.4)	4.5	0.58	(28.97)	E6 弧背弧刃形	13
57	伐採斧	2/3か	緑色片岩	(10.9)	(6.1)	3.3	(350.0)	D5	13
58	スクレイパー	完存	緑色片岩	8.4	5.7	0.85	34.69	D5	
59	石庖丁未製品	1/3か	緑色片岩	(3.9)	3.6	0.73	(14.90)	D4 研磨段階か。	
60	石庖丁未製品か	完存	緑色片岩	9.4	4.0	0.48	34.51	D4 打裂～敲打（穿孔）か。	

表25　SR201埋土②出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
61	甕	口径（24.0） 残高 9.4	口縁端に刻目。沈線文11条＋刺突文１段。	㊐ヨコナデ ㊐マメツ ㊐下タテハケ（7～8本／cm）→ナナメヘラミガキ	㊐ヨコナデ ㊐上ヨコヘラミガキ	石・長（1～3）	◎	D4	14
62	甕	口径（22.1） 残高 3.8	口縁端に刻目。沈線文7条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D4	14
63	甕	口径（21.2） 残高 5.3	口縁端に刻目。沈線文6条＋刺突文1段＋沈線文1条＋刺突文1段＋沈線文2条。	㊐ヨコナデ ㊐上タテハケ（12本／cm）	マメツ	石・長（1～4）	◎	D6	14
64	甕	口径（29.6） 残高 8.6	口縁端に刻目。沈線文9条＋刺突文2段＋沈線文5条。	マメツ	㊐ナデ ㊐ヨコヘラミガキ	石・長（1～3）	◎	D4	14
65	甕	残高 7.1	沈線文5条＋刺突文1段＋沈線文5条。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	○	E6	
66	甕	残高 3.8	沈線文4条。	㊐ヨコナデ マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
67	甕	残高 4.3	沈線文4条以上＋刺突文1段＋沈線文3条以上。	マメツ	ヘラミガキ	石・長（1）	◎	E6	
68	甕	底径（8.8） 残高 6.7	厚みのある平底。	ハケ マメツ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D6	
69	甕	底径（8.4） 残高 3.0	立ち上りがあり、厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～2）	◎	D4	
70	甕	底径（6.8） 残高 4.1	平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	
71	甕	底径（6.0） 残高 2.6	平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～2）	◎	D4	
72	甕	底径（6.4） 残高 4.5	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D4	
73	甕	底径（6.0） 残高 5.5	立ち上りがあり、厚みのある平底。	ナナメハケ（10本／cm）	ナナメハケ（9本／cm）	石・長（1～2） 金ウ	◎	D6	
74	甕	底径（5.6） 残高 3.3	立ち上りがある平底。	タテハケ→ナデ	タテハケ→ナデ	石・長（1～2）	◎	D6	
75	甕	底径 5.5 残高 3.1	底部は立ち上りがあり、わずかに凹む。	マメツ	マメツ	石・長（1～5）	◎	E6	
76	甕	底径 7.0 残高 6.5	立ち上りがある上げ底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長（1～2）	◎	D6	
77	壺	口径（25.0） 残高 8.3	口縁部は短く外反する。口縁内面に凸帯。	㊐ヨコナデ マメツ	㊐ヨコナデ マメツ	石・長（1～4）	△	D5北トレ	14
78	壺	口径（18.4） 残高 4.7	口縁内面に凸帯。	ヨコナデ	マメツ	石・長（1～5） 金ウ	○	E6	14
79	壺	口径（20.0） 残高 5.1	口縁端面に沈線文＋刻目	ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
80	壺	口径（20.0） 残高 6.0	口縁端面に刻目。	マメツ	マメツ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	
81	壺	残高 6.2	口縁内面に2条の刻目凸帯。	丁寧なヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	

SR201埋土②出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
82	壺	残高 4.9	頸部に凸帯。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）金ウ	◎	D4	
83	壺	残高 10.7	頸部に凸帯（押圧）。	マメツ	ヨコハケ	石・長（1～4）	◎	E6	
84	壺	残高 4.2	沈線文9条以上。	ナデ	ナデ	石・長（1～8）金ウ	◎	D4	
85	壺	残高 5.1	刺突文1段。	ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D4	
86	壺	残高 4.0	竹管文1段＋沈線文5条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
87	壺	残高 5.4	胴部に凸帯が付され、凸帯上段部には連鎖状刻目。	マメツ	板ナデか	石・長（1～3）金ウ	◎	D4	
88	壺	底径（12.2）残高 5.9	平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
89	壺	底径（12.4）残高 6.3	厚みのある平底。	板ナデか	ナデ	石・長（1～2）	◎	E6	
90	壺	底径（12.4）残高 3.3	平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	E6	
91	壺	底径 11.2 残高 3.1	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～5）	◎	D4	
92	壺	底径（11.0）残高 4.4	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
93	壺	底径（11.6）残高 3.8	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5北トレ	
94	壺	底径 10.6 残高 6.3	厚みがあり、立ち上りのある平底。	ヨコナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
95	壺	底径（10.8）残高 5.7	平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～5）金ウ	◎	D6	
96	壺	底径（10.6）残高 4.4	厚みのある平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～3）金ウ	◎	D4	
97	壺	底径（10.2）残高 3.3	平底。	マメツ	指オサエ→ナデ	石・長（1～3）	◎	E6	
98	壺	底径（9.0）残高 6.2	厚みがあり、立ち上りのある平底。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D6	
99	壺	底径（9.4）残高 4.1	厚みがあり、立ち上りのある平底。	ヨコナデ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
100	壺	底径（9.4）残高 3.0	平底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長（1～2）	◎	E6	
101	壺	底径 8.0 残高 4.7	上げ底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長（1～5）	△	D5北トレ	
102	壺	底径 9.0 残高 6.0	平底。	丁寧なヨコナデ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D5	
103	壺	底径 9.4 残高 6.0	厚みのある平底。	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	石・長（1～5）	◎	E6	

SR201埋土②出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
104	壺	底径 8.0 残高 5.1	平底。	ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
105	壺	底径 6.4 残高 3.8	やや凹む、底部。	タテハケ（7本／cm）	マメツ	石・長（1～2） 金ウ	◎	D6	
106	壺	底径 6.0 残高 4.7	厚みのある、上げ底。	タテハケ（6本／cm） →ナデ	ナデ	石・長（1～4） 金ウ	◎	D4	
107	壺	底径 (7.4) 残高 5.8	やや凹む、底部。	指オサエ→ヨコナデ	指オサエ→ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D5東ベルト	
108	壺	底径 (9.0) 残高 5.2	厚みのある平底。	ハケ→ナデ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
109	鉢	残高 5.7	貼付口縁。	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D5北	14
110	高坏	残高 5.6	低脚。坏部と脚部の境界には、断面三角形の凸帯が付く。	㊀マメツ ㊁タテハケ（7本／cm）	㊀タテヘラミガキ	石・長（1～2）	◎	D4	14
111	甑	底径 (8.4) 残高 4.5	壺の転用品。焼成後片側穿孔。	ヨコハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D4	14
112	甑	底径 6.7 残高 3.8	甕の転用品。焼成後片側穿孔。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	E6	14
113	甑	底径 6.8 残高 3.5	甕の転用品。焼成後片側穿孔。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	E6	14
114	ミニチュア	底径 2.5 残高 3.2	厚みがあり、やや凹む底部。	指オサエ	指オサエ	石・長（1～3）	◎	D4	14
115	ミニチュア	底径 3.0 残高 3.5	立ち上りのある厚い平底。	指オサエ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	14
116	ミニチュア	底径 4～3.6 残高 4.0	上げ底。	マメツ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D4	14

表26　SR201埋土②出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
117	石鎌未製品	1/2	緑色片岩	(14.3)	6.2	1.6	(236.73)	D4 打裂～背部敲打段階。	14
118	石鎌未製品	完存	緑色片岩	21.4	4.9	2.0	380.0	D4 打裂段階。	15
119	伐採斧	完存		16.3	6.0	4.0	712.0	D4	15
120	砥石	一部欠		12.7	2.5	1.3	50.81	D4 手持ち砥か。	15
121	剝片	一部欠	サヌカイト	4.1	5.7	0.6	8.92	D6	
122	器種不明品	大きく欠	緑色片岩	(6.9)	(4.1)	(1.9)	(67.42)	D4	

表27　SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
123	甕	口径 (19.5) 残高 5.7	沈線文7条＋刺突文1段＋沈線文6条＋刺突文1段以上。	タテハケ（7本／cm）	ヨコヘラミガキ	石・長（1～2）	◎	D4	16

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
124	甕	残高　4.2	口縁端に刻目。沈線文6条以上。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～3）	◎	D5	16
125	甕	残高　4.6	沈線文8条以上。	㊐ヨコナデ マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
126	甕	口径（21.0） 残高　4.1	沈線文7条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
127	甕	残高　4.8	沈線文4条。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	16
128	甕	残高　6.0	沈線文4条。	マメツ	ミガキ？	石・長（1～3）	◎	E6	
129	甕	残高　4.0	沈線文5条＋刺突文1段以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	
130	甕	残高　5.7	櫛状工具による沈線文＋竹管文1段。	タテハケ（7～8本／cm）	ミガキ マメツ	石・長（1～4）	◎	E6	16
131	甕	残高　6.4	沈線文5条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
132	甕	残高　4.7	沈線文6条以上＋刺突文2段。	タテハケ（6～9本／cm）	マメツ	石・長（1～2）	◎	E6	
133	甕	残高　3.6	沈線文5条以上＋刺突文1段＋沈線文2条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D5	
134	甕	残高　4.5	刺突文1段。	タテヘラミガキ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D6	
135	甕	底径（9.4） 残高　3.7	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
136	甕	底径（8.0） 残高　5.5	わずかに上げ底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
137	甕	底径　7.0 残高　3.4	平底。	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ	石・長（1～6）	◎	D5	
138	甕	底径（7.0） 残高　5.0	厚みがあり、ごくわずかな上げ底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～5）	◎	D5	
139	甕	底径　6.2 残高　3.8	わずかに立ち上りがある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～2）	◎	D5	
140	甕	底径　6.0 残高　5.6	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
141	壺	口径（32.0） 残高　10.3	口縁内面に刻目凸帯。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	△	D5	16
142	壺	口径（25.2） 残高　4.6	口縁内面に凸帯。	マメツ	マメツ	石・長（1～3） 金ウ	△	D4	
143	壺	口径（10.4） 残高　9.6	短い頸部は直立ぎみに立ち上る。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	
144	壺	口径（17.6） 残高　5.6	大きく外反する口縁部。	タテハケ（6本／cm） →ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～4）	◎	D4	
145	壺	口径（13.6） 残高　3.0	口縁端に沈線文1条。	ヨコハケ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
146	壺	口径（16.4） 残高 4.3	口縁端部に丸みもつ。無文。	マメツ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D6	
147	壺	口径（14.4） 残高 2.7	口縁端部が面をもつ。無文。	ヨコナデ →ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～2）	◎	D4	
148	壺	口径（12.4） 残高 3.1	口縁端部が面をもつ。無文。	ヨコナデ	ヘラミガキ	石・長（1～2）	◎	D4	
149	壺	残高 4.0	口縁内面に凸帯。端面に無軸羽状文。	ナナメハケ（5本／cm） →ヨコナデ	マメツ	石・長（1～3）	◎	E6	
150	壺	残高 3.7	口縁内面に凸帯。	ヨコハケ（5本／cm）→ タテヘラミガキ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D5	
151	壺	残高 4.1	頸部に沈線文4条以上。	マメツ	ヨコヘラミガキ	石・長（1～2）	◎	D5	
152	壺	残高 4.7	頸部に沈線文2条＋刺突文1段＋沈線文1条。貼付凸帯上には連鎖状刻目文が施される。	㊀タテハケ（4本／cm）	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
153	壺	残高 4.6	二枚貝腹縁による山形文2段＋沈線文3条・2段＋下向き弧文＋上向き弧文＋山形文2段。	マメツ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
154	壺	残高 5.9	頸部に貼付凸帯。凸帯上を刻みと押圧により施文。	マメツ	ナデ	石・長（1～3）	◎	D4	
155	壺	残高 8.3	沈線文4条＋押圧による凸帯文2条。	ヨコヘラミガキ	ヨコナデ	石・長（1～2）	◎	E6	16
156	壺	残高 4.8	沈線文5条。	マメツ	マメツ	石・長（1～2） 金ウ	◎	D6	
157	鉢	口径（17.2） 残高 4.6	折り曲げ口縁。	㊀ヨコナデ マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	16
158	鉢	残高 4.7	貼付口縁。	㊀ヨコナデ タテハケ（5本／cm）	マメツ	石・長（1～2）	◎	D6	16
159	壺	底径 15.8 残高 5.1	厚みのある平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～6）	△	D4トレ	
160	壺	底径（12.8） 残高 4.1	やや厚みのある平底。	ヨコナデ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D4トレ	
161	壺	底径（12.4） 残高 4.3	厚みのある平底。	タテハケ（5～6本／cm） →ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D4トレ	
162	壺	底径 6.4 残高 4.2	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4） 金ウ	◎	D4	
163	壺	底径（10.0） 残高 3.5	厚い円盤状の底部。	ヨコナデ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D6	
164	壺	底径 8.4 残高 9.0	やや上げ底ぎみの底部。	マメツ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D4東ベルト	
165	壺	底径（8.8） 残高 5.5	やや上げ底ぎみの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D6	
166	壺	底径 9.4 残高 4.5	厚みがあり、やや上げ底ぎみの底部。	ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
167	壺	底径 6.6 残高 5.4	厚い円盤状の底部。	丁寧なナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
168	壺	底径 (10.4) 残高 2.8	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～4）	◎	D4	
169	壺	底径 (9.6) 残高 4.3	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D5	
170	壺	底径 (7.0) 残高 5.1	厚みのある平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～5）	◎	D5	
171	壺	底径 (7.8) 残高 3.4	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。	マメツ	ヨコナデ	石・長（1～2）	◎	D4	
172	壺	底径 (9.6) 残高 4.6	厚みのある平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D4	
173	壺	底径 (7.8) 残高 2.3	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。	指オサエ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D6	
174	壺	底径 (7.0) 残高 6.4	厚みがあり、上げ底ぎみの底部。	マメツ	マメツ	石・長（1～5）	◎	D4	
175	壺	底径 (7.2) 残高 5.2	厚みのある平底。	タテハケ（7本／cm）→丁寧なヨコナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
176	壺	底径 (9.0) 残高 6.9	厚みのある平底。	タテハケ→ナデ	ナデ	石・長（1～4）	◎	D5	
177	壺	底径 (9.6) 残高 4.7	上げ底。	ナデ	ナデ	石・長（1～5）	◎	D4	
178	甕	口径 (25.0) 残高 3.8	頸部に押圧凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
179	甕	口径 (19.6) 残高 2.9	頸部に押圧凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D4	
180	甕	残高 4.9	頸部に押圧凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	
181	甕	残高 2.6	頸部に押圧凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～4）	◎	D4トレ	
182	甕	底径 5.6 残高 7.2	上げ底。	丁寧なナデ	丁寧なナデ	石・長（1～3）	◎	D6	
183	甕	底径 6.5 残高 4.5	厚みのある、やや上げ底ぎみの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D5	
184	甕	底径 (7.2) 残高 5.5	上げ底。	マメツ	ヨコナデ	石・長（1～5）	◎	D4	
185	甕	底径 (6.6) 残高 6.5	上げ底。	マメツ	ヨコナデ	石・長（1～5）	◎	D4	
186	壺	口径 (14.8) 残高 3.3	口縁端部が面をもつ。頸部に沈線文2条以上。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	D5	
187	壺	口径 (26.0) 残高 2.6	大きく外反する口縁内面に、削り出し状の凸帯文3条。	㊀ヨコナデ タテハケ（5～6本／cm）→ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D4	16
188	壺	口径 (20.4) 残高 3.0	上方に拡張された口縁端部に凹線文4条。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長（1～3）	◎	D4	16

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(5)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
189	壺	口径（19.0） 残高　2.2	上下に拡張された口縁端部に凹線文3条。	マメツ	マメツ	石・長（1～3） 金ウ	◎	D4	
190	壺	口径（14.4） 残高　1.6	上下に拡張された口縁端部に凹線文2条か。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D4	
191	壺	残高　4.5	頸部に押圧と刻みをもつ凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5	
192	壺	残高　5.2	頸部に板状工具木口部による押圧された凸帯文。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	D5東トレ	
193	高坏	口径（22.4） 残高　4.8	口縁外面に沈線文1条。	タテハケ	タテハケ →ヨコヘラミガキ	石・長（1～3）	◎	D4東ベルト	16
194	高坏	底径（15.6） 残高　4.6	凹線文5条、鋸歯状の沈線文。	マメツ	マメツ	石・長（1～2）	◎	E6	16

表28　SR201埋土①出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
195	石庖丁	2/5	緑色片岩	(8.0)	6.0	0.86	(57.78)	D5 弧背弧刃形。	17
196	石庖丁	1/2	緑色片岩	(10.0)	5.5	0.82	(71.55)	D4 弧背直刃形。	17
197	石庖丁	1/4	緑色片岩	(5.2)	3.6	0.82	(22.08)	D4	17
198	石庖丁未製品	完存	緑色片岩	8.8	4.0	0.98	60.24	D4 打裂段階。	17
199	石庖丁未製品	完存	緑色片岩	8.5	5.9	0.83	65.07	D5 打裂段階。	
200	石庖丁未製品	1/2	緑色片岩	(5.0)	3.4	0.78	(16.09)	D4 粗割段階。	
201	敲石	ほぼ完存	緑色片岩	12.7	3.0	1.30	71.61	D4 粗割・打裂時の石器製作工具	
202	台石	完存	〔しそ輝石角閃安山岩〕	12.4	10.0	2.2	450.0	D6 風化著しく進行。	

表29　SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
203	深鉢	残高　3.2	口縁端に刻目。沈線による山形文3条。	ナデ	ナデ	石・長（1～2）	◎	E6	17
204	甕	口径（17.5） 残高　5.2	土師器。	剝落	剝落	石・長（1～3）	◎	D4	
205	高坏	残高　8.7	土師器。	マメツ	マメツ	密	△	D4	
206	甑	残高　5.8	把手部。	ナデ	－	石・長（1～2）	◎	D4	
207	甑	残高　4.6	把手部。	ナデ	－	密	◎	E6	
208	甑	残高　5.1	把手部。	ナデ	－	石・長（1～3）	◎	D4	

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
209	坏蓋	口径 (12.4) 残高 4.0	天井部と口縁部を分ける稜は、鈍い。口縁部は垂下し、端部は内傾する。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D5東トレ	17
210	坏身	受部径(12.0) 残高 3.6	立ち上りを欠く。受部はほぼ水平。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D4	
211	坏身	受部径(12.2) 残高 3.0	立ち上りを欠く。受部はほぼ水平。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D5	
212	高坏	口径 (12.0) 器高 5.5	つまみ部は天井がわずかに凹む。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D5	17
213	高坏	残高 4.9	短脚。透孔は長方形を呈し、3方向。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D5	
214	器台	残高 4.4	波状文2段。	平行タタキ	回転ナデ	密 長 (2)	◎	D4	
215	器台	底径 (17.9) 残高 5.3	ゆるやかに外反する裾部。ヨコナデにより弱い凸帯文が形成され、その上段に波状文。	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	密	◎	D4	17
216	坏身	口径 (14.0) 残高 2.8	立ち上りを一部欠く。受部はやや上方にのびる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D4	
217	高坏	口径 (10.4) 残高 4.8	無蓋長脚高坏の坏部。低い突帯を2条付し、突帯間には刺突列点文。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	17
218	高坏	残高 3.6	長脚2段透かし。透孔は長方形で2方向。	回転ナデ	ナデ	密	◎	D5	17
219	坏蓋	残高 1.8	宝珠様つまみ。	回転ナデ 一部回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D4	18
220	坏身	口径 12.4 残高 2.5	立ち上りは強く内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D5東ベルト	
221	坏身	口径 (11.3) 残高 2.3	立ち上りは内傾し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	
222	坏身	口径 (9.4) 残高 2.4	立ち上りは内傾し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	
223	坏身	受部径(13.0) 残高 2.1	口縁部欠く。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	
224	坏身	残高 3.1	口縁・受部ともに一部欠く。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	D5	
225	坏身	底径 8.0 残高 3.1	底端部のやや内側に、「ハ」の字形の高台を貼付する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	18
226	長頸壺	残高 3.6	頸部片。	ナデ	ナデ	密	◎	D4	18
227	瓶	残高 4.5	肩部片。	㊥上回転ナデ ㊥下回転ヘラケズリ	ナデ	密	◎	D5	
228	直口壺	口径 (9.4) 残高 11.7	肩は張り、口縁部は短く直立する。把手が4方向に付く。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4トレ	18
229	広口壺	口径 (17.2) 残高 4.1	口縁部は大きく外反し、端部は下方に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	18
230	広口壺	口径 (8.4) 残高 4.0	頸部はやや外傾し、口縁部は短く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	

SR201埋土①出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
231	高坏	底径 (6.8) 残高 1.8	脚部は外反し、脚端部は下方に突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D5	
232	甕	口径 (18.3) 残高 7.6	口縁部は直立気味にやや内湾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D5	18
233	甕	残高 5.0	頸部～胴上部片。	頸回転ヘラケズリ 胴上平行タタキ	口回転ナデ 胴上同心円文タタキ	密	◎	D5	
234	碗	底径 (4.3) 残高 1.8	緑釉陶器。底部に接して高台を貼付する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	18
235	碗	底径 (6.1) 残高 1.9	白磁。底部に接して、やや「ハ」の字形の高台を貼付する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D4	18
236	すり鉢	底径 (19.6) 残高 6.8	厚みのある平底。	回転ナデ	回転ナデ →ヨコヘラミガキ	密	◎	D5	18
237	すり鉢	底径 (10.4) 残高 3.8	平底。	回転ナデ 底ヘラケズリ	ヨコヘラミガキ	石・長（2～4）	◎	D4	

表30　SX101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
238	壺	残高 7.2	頸部下半に凸帯が1条巡る。	タケハケ（7本/cm）	マメツ	石・長（1～3）	◎	弥生土器	
239	壺	底径 (8.8) 残高 6.1	厚手の平底。	マメツ	マメツ	石・長（1～3）	◎	弥生土器	
240	鉢	底径 (8.0) 残高 5.7	やや厚手の上げ底。	マメツ	タテミガキ	石・長（1～4）	◎	弥生土器	
241	坏蓋	口径 (11.4) 残高 2.7	口縁部片。口縁部は垂下し、端部はやや内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		
242	坏身	口径 (11.2) 残高 3.0	底部を欠く。立ち上りはやや内傾する。受部は太くほぼ水平にのびる。	口回転ナデ 体回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎		
243	坏身	口径 (10.9) 残高 2.9	底部を欠く。立ち上りはやや内傾する。受部は太く、ほぼ水平に短くのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		
244	坏身	口径 (10.4) 残高 2.1	底部を欠く。立ち上りは内傾する。受部は上方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		
245	高坏	底径 (8.2) 残高 3.8	脚柱部は、ゆるやかに外反して開く。脚端はやや上方に突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	外面自然釉	
246	高坏	残高 5.7	脚基部は細い。	坏回転ヘラケズリ 脚回転ナデ	坏回転ナデ	密	◎		
247	長頸壺	残高 5.6	底部を欠く。胴部最大径の位置に凹線が1条巡る。	胴回転ナデ 胴下回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	外面自然釉	18
248	長頸壺	残高 9.9	やや肩が張る球形の胴部。肩部に凹線2条施し、凹線間に刺突斜線文。	胴回転ナデ 胴下回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎		18
249	甕	口径 (35.4) 残高 4.9	口縁は大きく外反する。櫛描き波状文は凹線により区画される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		

表31　SX104出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
250	壺	残高　3.6	弥生土器。沈線文3条。	タテハケ	ナデ	長（1～2） 金ウ	◎	A3	
251	坏蓋	口径（13.4） 残高　2.9	口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A3	
252	壺	残高　2.8	胴上半部片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	A3	

表32　SR101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
253	甕	口径（17.2） 残高　3.5	土師器。口縁部は強く外反し、端部は面取り風に仕上げる。	タテハケ（5本/cm）	板状工具によるヨコナデ	石・長（1～2）	◎	B2ベルト	
254	坏蓋	口径（12.4） 器高　2.6	天井部と口縁部を分ける稜は消失する。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1	
255	甕	残高　5.0	口縁～頸部片。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		
256	甕	口径（22.6） 残高　3.7	口縁部はゆるやかに外反し、端部は、つまみ上げられる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎		
257	甕	口径（24.2） 残高　5.1	口頸部は外反し、端部は上下にやや拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1	

表33　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
258	壺	残高　6.0	胴部は球形を呈する。	回転カキメ	回転ナデ	密	◎	SP20	

表34　SE101出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
259	坏蓋	口径（11.3） 残高　3.8	天井部は比較的高く、かえりは口縁端部より下方に伸びる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	密	◎	流入土	

表35　Ⅰ区包含層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
260	坏蓋	口径（13.2） 残高 4.3	天井部と口縁部を分ける稜は消失する。口縁端部は尖がり気味に仕上げる。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅷ層	
261	坏蓋	口径（10.9） 残高 3.1	口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A2 Ⅷ層	
262	坏蓋	口径（6.6） 残高 1.7	かえりは口縁端部より下方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅷ層	
263	坏蓋	口径（22.1） 残高 1.4	かえりは口縁端部より下方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	東壁トレンチ Ⅷ層	
264	坏身	残高 3.2	立ち上りは内傾する。受部は太くやや上外方にのびる。	㊐回転ナデ ㊥回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅷ層	
265	坏	口径（9.0） 器高 2.8 底径（6.8）	厚みのある平底。口縁は外方に開く。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅷ層	
266	坏	底径（8.0） 残高 3.9	高台は、底部のやや内に「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅷ層	18
267	高坏	残高 6.5	脚部片。長方形の透孔を3方向にもつ。	回転カキメ	回転ナデ	密	◎	東壁トレンチ Ⅷ層	
268	壺	口径（14.6） 残高 3.4	口縁部は、短く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1 Ⅷ層	
269	壺	口径（11.0） 残高 2.4	口縁部は、下方に拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	東壁トレンチ Ⅷ層	
270	碗	口径（20.1） 残高 7.9	ボウル形の器形。	ヨコヘラミガキ	マメツ	長（1～3）	◎	北壁トレンチ Ⅶ層	
271	甑	残高 5.2	把手部。	マメツ	マメツ	密	◎	C1 Ⅶ層	
272	坏身	口径（11.6） 残高 1.8	立ち上りは内傾する。受部は太くやや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	C2 Ⅶ層	
273	長頸壺	残高 6.9	胴部最大径位置に凹線文1条。	胴上回転ナデ 胴下回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	◎	C2 Ⅶ層	
274	すり鉢	底径（18.4） 残高 5.0	底部片。	板状工具によるケズリ	ナデ	長（1～3）	◎	C1 Ⅶ層	
275	すり鉢	底径（12.0） 残高 5.7	底部片。	回転ナデ	ナデ	長（1～6）	◎	C1 Ⅶ層	
276	坏身	残高 2.6	受部は太く水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B1 Ⅵ層	
277	坏身	口径（10.8） 残高 2.9	立ち上りは内傾し、端部は尖る。受部は太く、上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1 Ⅵ層	
278	坏	底径（10.5） 残高 1.4	高台は底部に接して「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1 Ⅵ層	
279	高坏	底径（14.0） 残高 2.5	脚部は外反気味に下がり、脚端部付近に1条の凸線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A1 Ⅵ層	
280	すり鉢	底径（16.5） 残高 3.6	底部片。	回転ナデ	ナデ	長（1～5）	◎	A1 Ⅵ層	
281	皿	底径（6.0） 残高 1.1	底部片。	回転ナデ 外底ヘラ切り	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅴ層	

Ⅰ区包含層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
282	坏	底径　(5.8) 残高　1.5	高台は底部に接して、「ハ」字形に貼付される。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	B2 Ⅴ層	
283	坏蓋	口径　(10.4) 残高　2.0	口縁部片。口縁部は垂下し、端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	A2 Ⅳ層	
284	短頸壺	口径　(8.8) 残高　3.4	口頸部は短く直立する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	北壁トレンチ Ⅰ層	

第4章

久米才歩行遺跡

5次調査地

第４章　久米才歩行遺跡５次調査地

１．調査の経緯

(1)　調査に至る経過（第２・56図）

本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№126　高畑遺物包含地』内における宅地造成工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、重信川中流右岸の小野川扇状地と、石手川扇状地との間に形成された洪積台地上、標高34.0mに立地する。同包含地内には、調査地北東130mに８世紀代の掘立柱建物を検出した南久米町遺跡１～３次調査地、南久米沖台Ａ、南久米沖台Ｂ遺跡があり、北西140mには、中世～近世の集落関連遺構を確認した北久米町屋敷遺跡１次・２次調査地がある。

すでに、久米才歩行遺跡では４次の調査が実施され、弥生時代～中世までの集落跡が確認されている。

このことから、松山市教育委員会文化教育課は当該地の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、平成11年２月１日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、対象地内に３本の試掘トレンチを設定した。地表下20cmの第Ⅵ層黄色粘土層上面では柱穴・溝・土坑を確認し、古墳時代の須恵器片や中世の土師器片等の遺物が出土した。

これらの結果を受け、当該地における遺跡の取り扱いについて、松山市教育委員会文化教育課と地権者は協議を重ね、開発工事によって失われる遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査は、調査地及び周辺地域における弥生時代～中世の集落の広がりや、集落構造の解明を主目的に、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと平成11年４月８日に開始した。

(2)　調査の経緯（第57～59図）

調査地は、来住台地の北端を流れる堀越川の北側に位置し、標高は34mを測る。調査対象面積は790.31㎡である。当地は調査以前に水田として利用されていた。以下、調査行程を略記する。

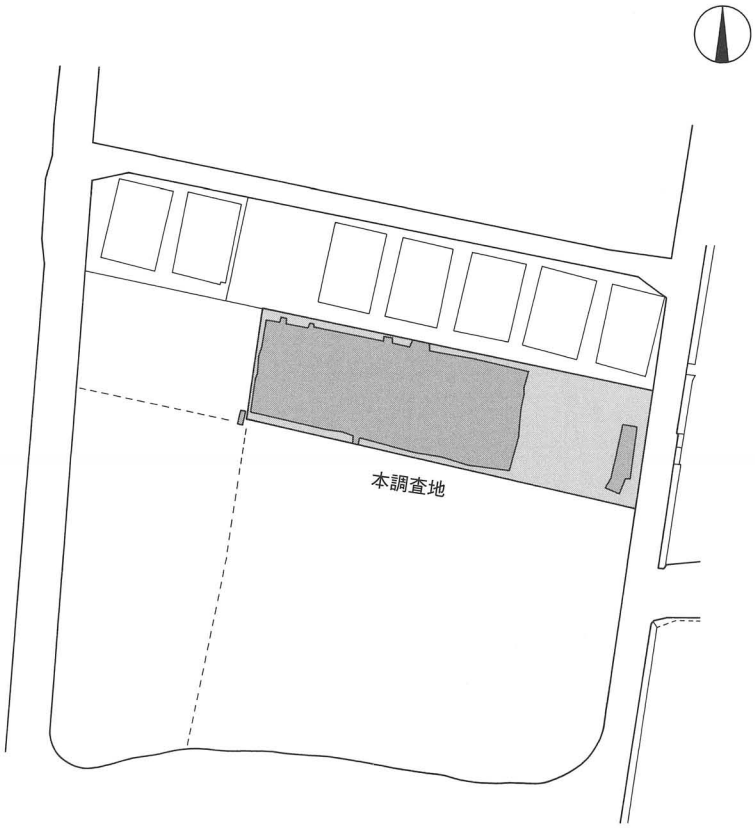
1999年４月８日、表土剥ぎ取り作業を開始する。試掘調査の結果と調査期間を考慮したうえで、重機を併用して第Ⅵ層黄色粘土（地山）上面での剥ぎ取りを行う。９日より人員を配して本格的な調査を開始する。遺構検出作業を行った結果、柱穴、溝、土坑等の遺構を確認した。４月15日、遺構検出状況の写真撮影をする。４月19日、遺構の掘り下げ作業を開始する。調査区内に国土座標系第Ⅳ系から国土座標４点Ｍ１＝Ｘ90219.0m　Ｙ-64644.0m、Ｍ２＝Ｘ90228.0m　Ｙ-64639.0m、Ｍ３＝Ｘ90215.0m　Ｙ-64620.0m、Ｍ４＝Ｘ90224.0m　Ｙ-64620.0mを設置し、同時に３m四方のグリットを設定し、グリット名は北から南へＡ～Ｇ、西～東へ１～13とした（第58図）。４月22日、遺構の測量を開始する。４月28日にはＳＤ１、ＳＤ２の掘り下げを終了し、測量を開始する。南・西部の擁壁工事始まる。４月30日、ＳＤ１の範囲確認のため、調査地南西の隣接地にトレンチを設定した。これは、安永ユリエ氏の協力によるものである。５月10日、掘立柱建物群の測量開始。６月２日には、調査区西部の調査を終了し、遺構完掘状況写真の撮影をする。６月３日、重機により調査区西部を埋め戻す。翌４日には調査区東部の掘削を開始し、遺構検出作業を行う。６月10日、遺構検出状況を撮影

第56図　調査地及び周辺遺跡（Ｓ＝１：1,000）

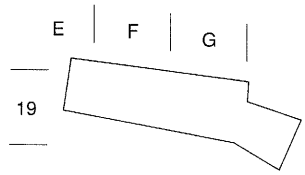
する。調査区西部と同様に３ｍ四方のグリットを設定する。遺構の掘り下げを開始。６月14日には、各遺構の測量を始める。６月22日、遺構完掘状況の写真を撮影する。６月26～28日には、調査地東側にトレンチを設定し、ＳＤ１・２・４の範囲確認をする。６月30日には、出土遺物と発掘機材を搬出し、野外調査を終了する。

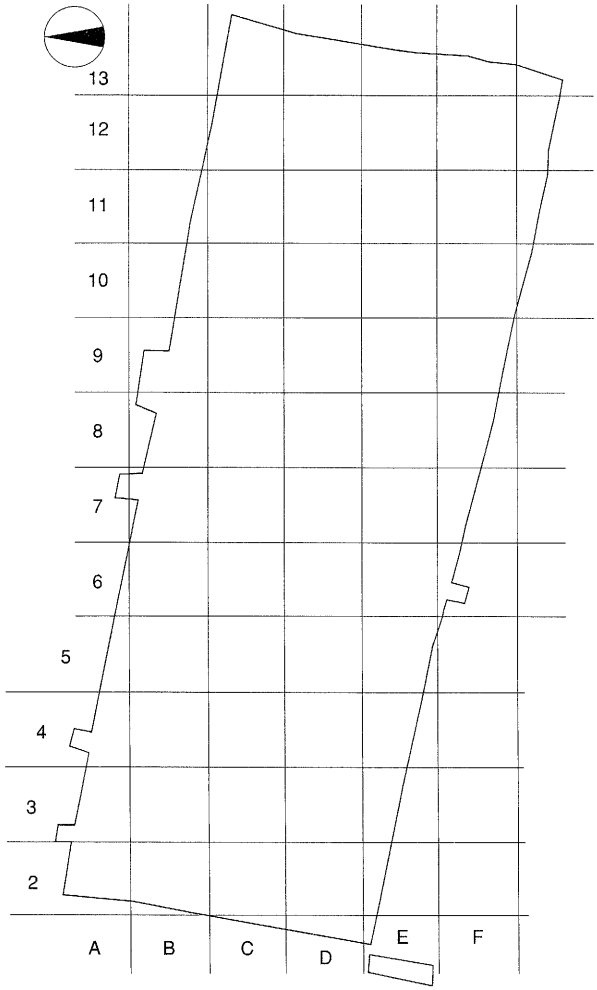
(3) 調査組織

調 査 地　松山市南久米町468－１
遺 跡 名　久米才歩行遺跡５次調査地
調査期間　1999（平成11）年４月８日～1999（平成11）年６月30日
調査面積　790.31㎡
調査委託　安永ユリエ
調査担当　小笠原善治・河野史知

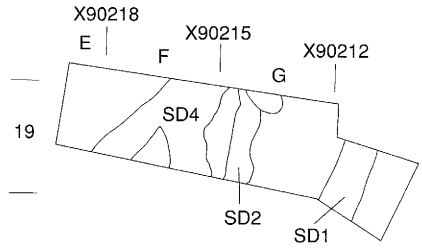


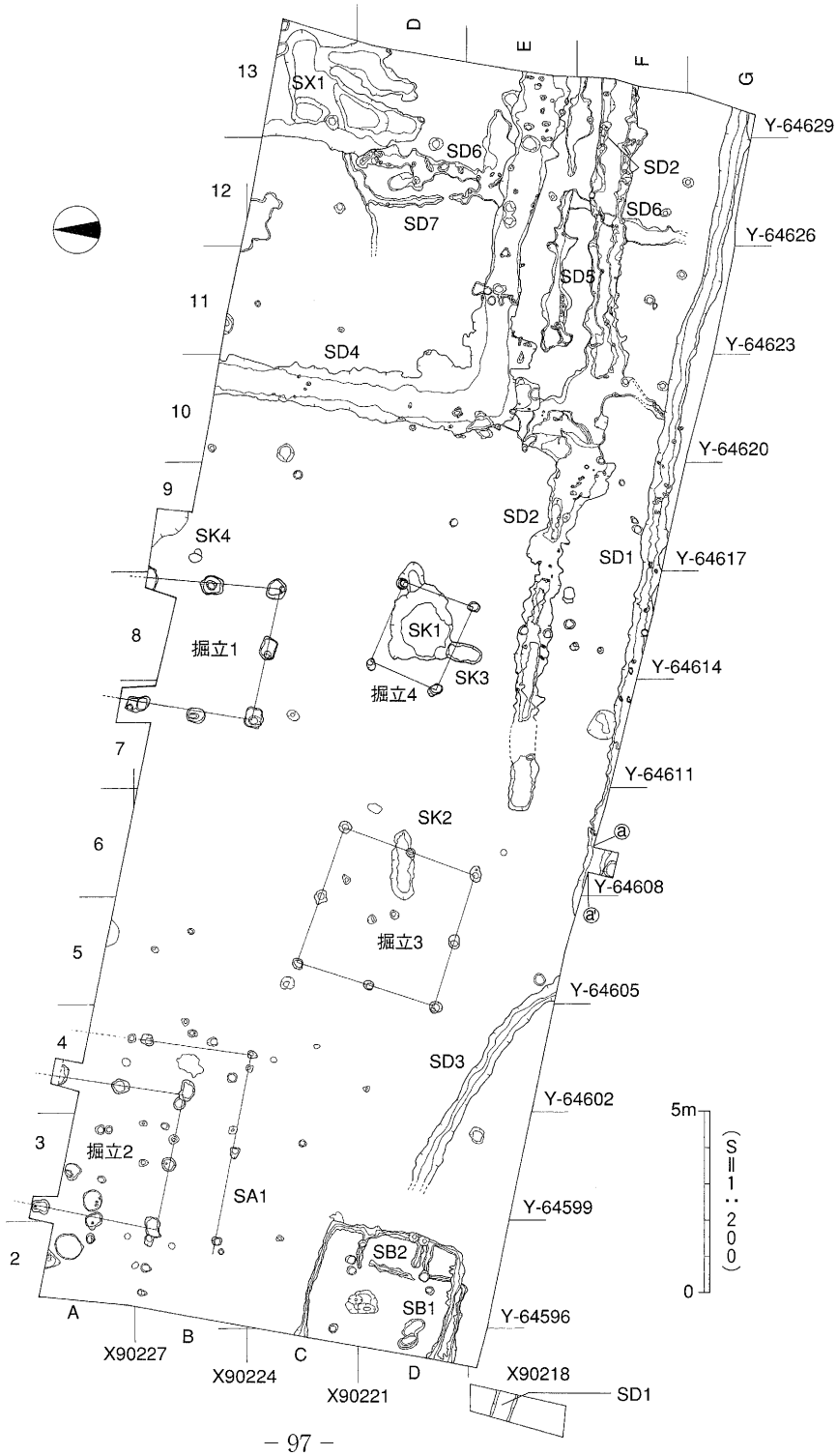
第57図　調査地位置図（Ｓ＝１：1,000）





第58図　調査地区割図（Ｓ＝１：300）


X90218
E
X90215
F
X90212
G
19
SD4
SD2
SD1


D
E
F
G
13
SX1
Y-64629
SD6
SD2
12
SD7
SD6
Y-64626
SD5
11
SD4
Y-64623
10
Y-64620
9
SD2
SK4
SD1
Y-64617
8
掘立1
SK1
SK3
掘立4
Y-64614
7
Y-64611
SK2
6
Y-64608
掘立3
5
Y-64605
4
SD3
Y-64602
3
掘立2
SA1
Y-64599
2
SB2
SB1
Y-64596
A
B
C
D
X90227
X90224
X90221
X90218
SD1
5m
0
(S=1:200)

第59図　遺構配置図

２．層　位（第60・61図）

調査地の基本土層は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層褐色土～褐灰色土、第Ⅴ層黒色土、第Ⅵ層黄色粘土（地山）である。各遺構は、第Ⅵ層上面で検出した。

第Ⅰ層：現代の水田耕作層である。

第Ⅱ層：現代の水田耕作層の下層にあり、昭和期の耕作層である。

第Ⅲ層：水田層下の床土である。

第Ⅳ層：ほぼ調査区全域でみられるが北部に厚く堆積する。層厚４～18cmを測る。色調から３分層した。

第Ⅳ－１層は褐灰色土で、南西部に部分的に分布する。層厚２～10cmを測る。第Ⅳ－２層は褐色土で、北東部から南西部にかけて厚く堆積する。層厚４～18cm。第Ⅳ－３層はにぶい褐色土で、北部と東部に部分的な分布をみせる。層厚２～４cm。

第Ⅴ層：調査区南半に厚く堆積し、調査区中央部付近で消失する。層厚15～22cmを測る。混入土壌の差から３分層した。

第Ⅴ－１層は黒色土で、南西部に厚く分布する。層厚は４～22cmを測る。第Ⅴ－２層は黒色土に灰色土と若干の砂が混じる層で、北壁の一部に見られる。層厚４～８cmを測る。第Ⅴ－３層は黒色土に粒状の黄色粘土が混じる層で、北壁の一部と南西部に途切れながら帯状に分布する。層厚３～９cmを測る。

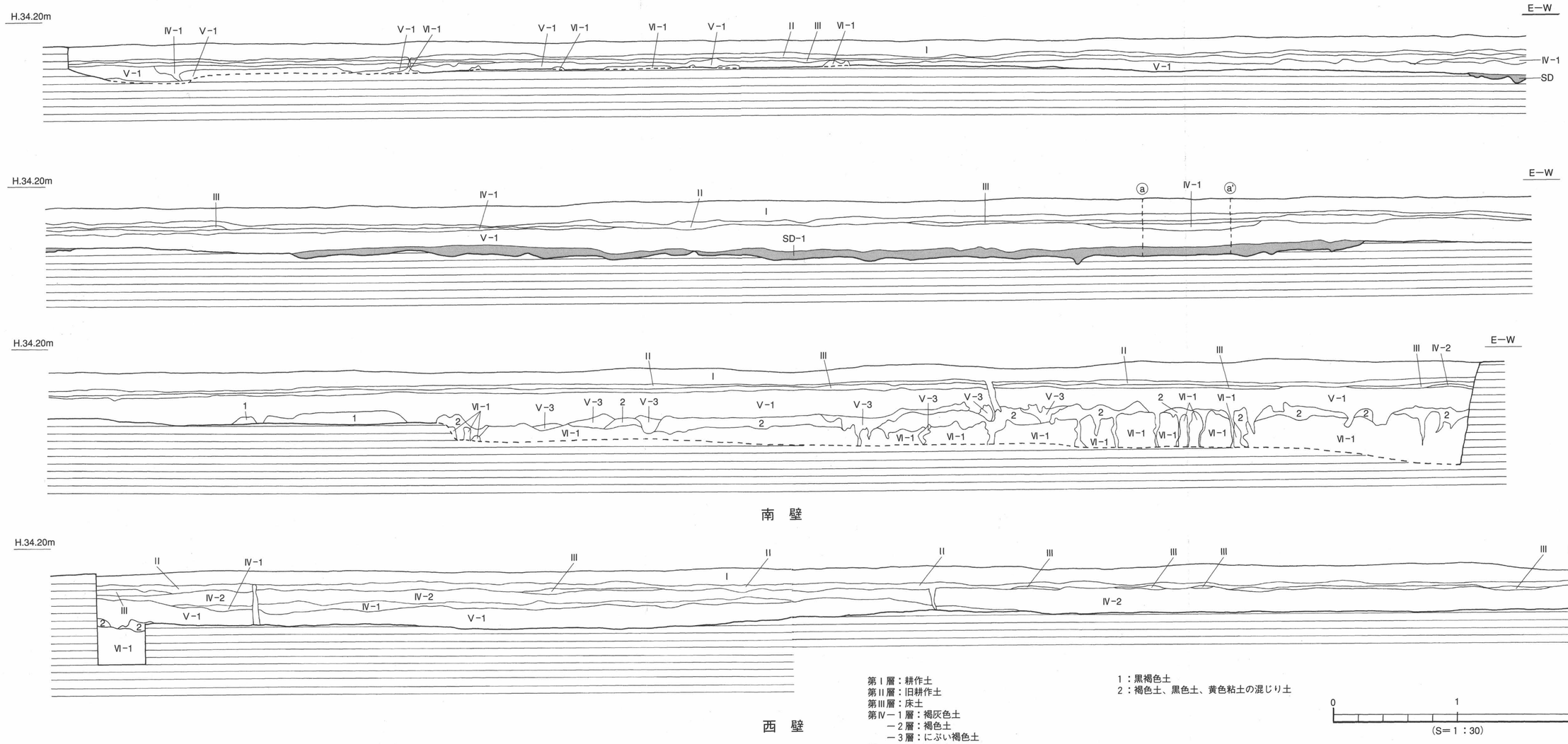
第Ⅵ層：調査区の基盤層で、本層位上面が遺構検出面になる。地形測量の結果、本層上面は調査区北東部から南西部にむけて緩傾斜している。混入土壌の違いにより２分層される。

第Ⅵ－１層は黄色粘土で、調査区ほぼ全域に見られる。第Ⅵ－２層は黄色微砂質土で、北東部の北壁に部分的に見られる。層序的には第Ⅵ－１層とほぼ同位である。

３．遺構と遺物

調査では、弥生時代～中世の遺物と遺構を検出した（第59図）。遺構は竪穴式住居址２棟、掘立柱建物址４棟、溝７条、土坑４基、性格不明遺構１基である。遺物は主に遺構からの出土品であり、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼き、石器等が出土している。

以下、時代ごとに遺構と遺物の説明をする。

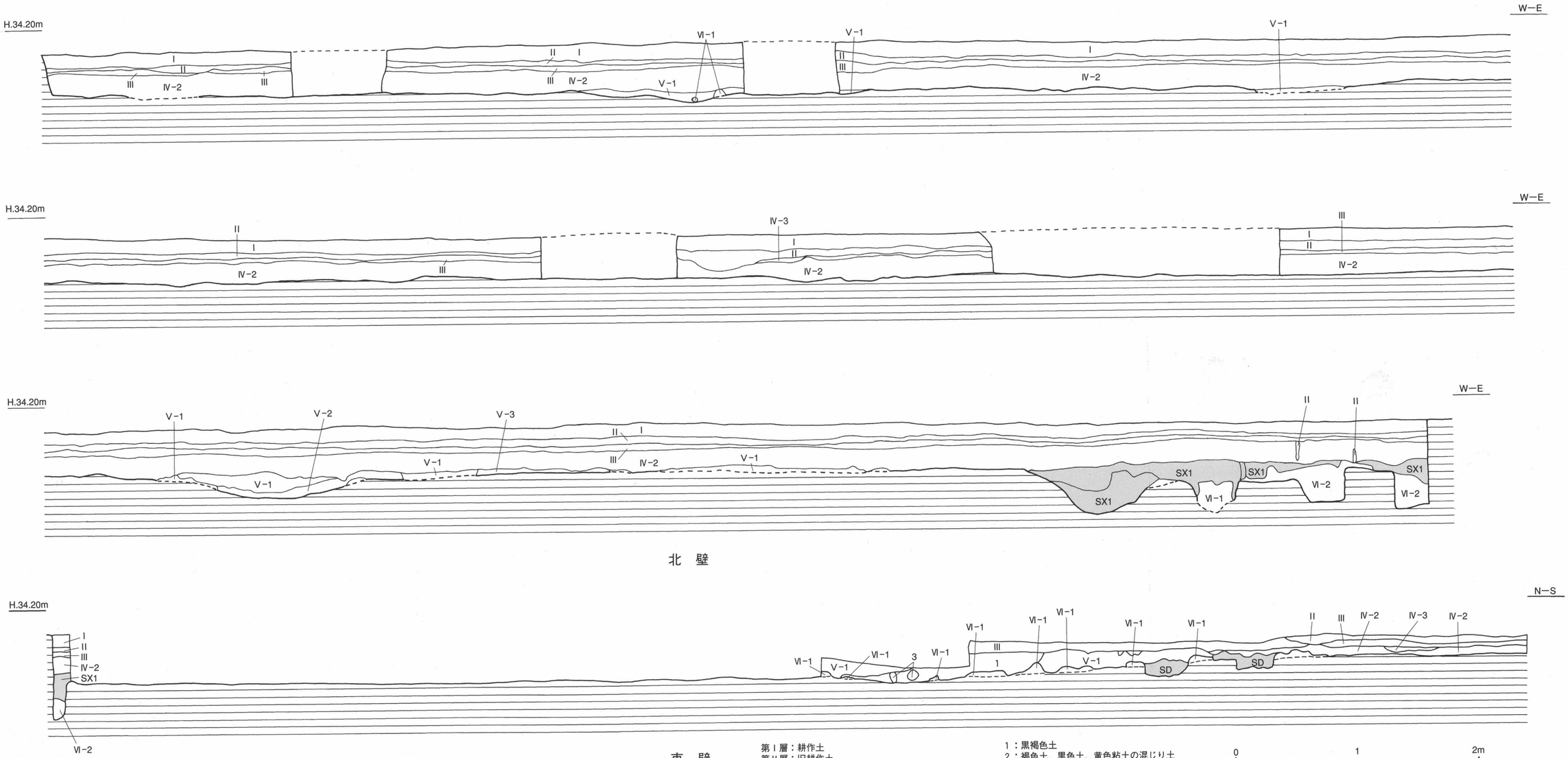


第Ⅰ層：耕作土
第Ⅱ層：旧耕作土
第Ⅲ層：床土
第Ⅳ－１層：褐灰色土
　　－２層：褐色土
　　－３層：にぶい褐色土
第Ⅴ－１層：黒色土
　　－２層：黒色土に灰色土が混じり若干砂混じる
　　－３層：黒色土に粒状の黄色粘土混じり
第Ⅵ－１層：黄色粘土
　　－２層：黄色微砂質土

１：黒褐色土
２：褐色土、黒色土、黄色粘土の混じり土

0　1　2m
(S＝1：30)

第60図　南壁・西壁土層図



第Ⅰ層：耕作土
第Ⅱ層：旧耕作土
第Ⅲ層：床土
第Ⅳ－１層：褐灰色土
　　－２層：褐色土
　　－３層：にぶい褐色土
第Ⅴ－１層：黒色土
　　－２層：黒色土に灰色土が混じり若干砂混じる
　　－３層：黒色土に粒状の黄色粘土混じり
第Ⅵ－１層：黄色粘土
　　－２層：黄色微砂質土

1：黒褐色土
2：褐色土、黒色土、黄色粘土の混じり土
3：灰黄色土、黒色土、黄色粘土混じり土

0　1　2m
(S＝1：30)

第61図　北壁・東壁土層図

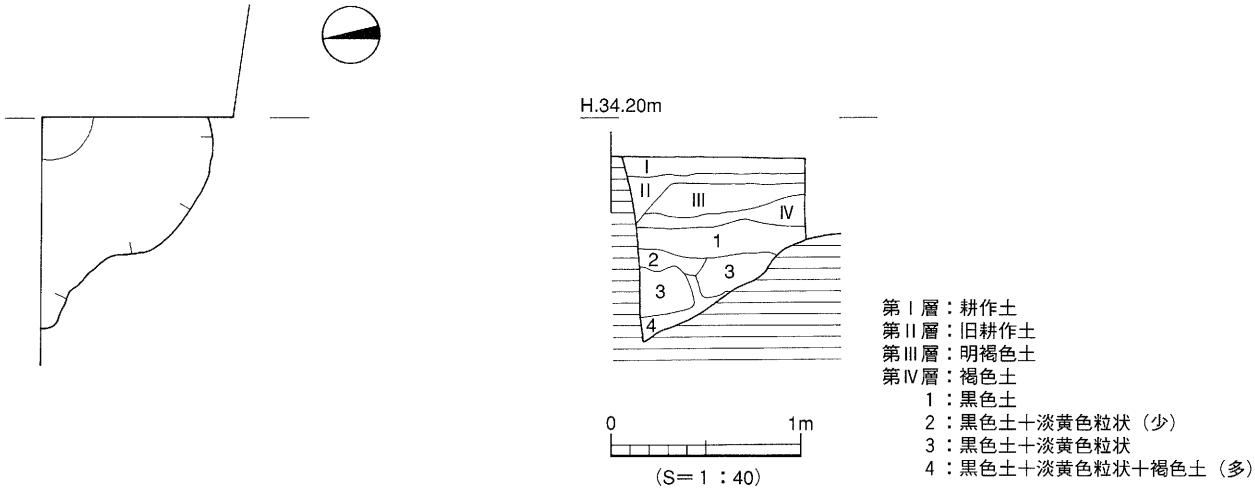
〔1〕弥生時代

(1) 土　坑

ＳＫ４（第59・62図）

調査区中央部北壁沿い、Ｂ９区に位置する。平面形態は、遺構が調査区外に展開するため特定できない。規模は東西1.2ｍ、南北0.8ｍ、深さ60cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は黒色土で、下部には淡黄色土が混入する。遺物は、弥生土器の細片が１点出土している。

時期：遺構からの出土遺物が少なく、時期の特定はし難いが、ここでは弥生時代以降としておく。



第62図　ＳＫ４測量図

(2) 溝

ＳＤ６（第59・63図）

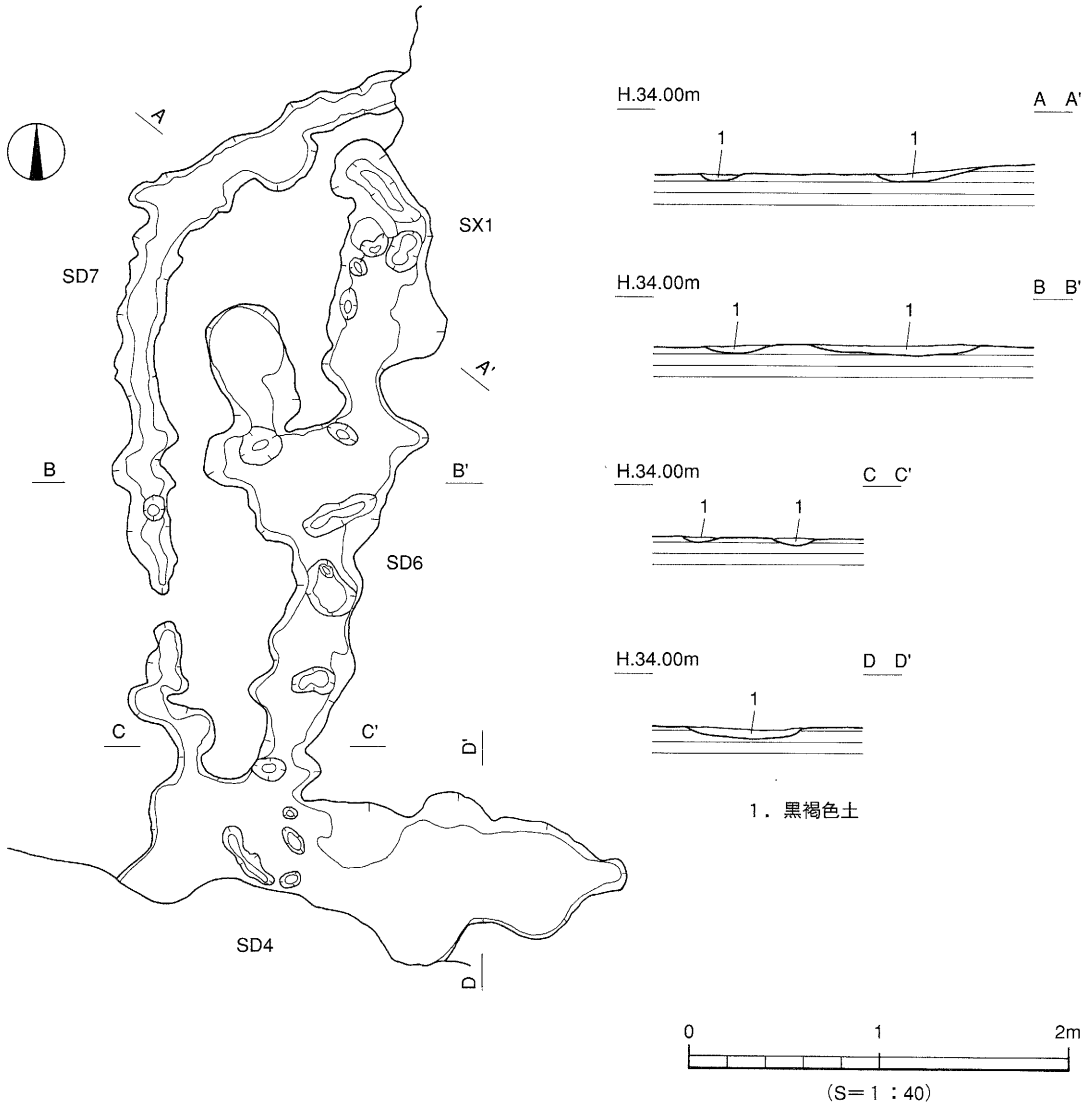
調査区東部、D12～F12区に位置し、南北に走る溝でＳＤ２、ＳＤ４、ＳＤ５、ＳＸ１に切られる。ＳＤ７との切り合い関係の確認に努めたが、判断できなかった。溝は遺存状態が悪く、ごく浅い溝である。規模は検出長９ｍ、幅30～65cm、深さ２～５cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期の比定は困難であるが、ＳＸ１との切り合い関係から、ここではＳＸ１構築以前で、弥生時代とする。

ＳＤ７（第59・63図）

調査区東部、D12～E12区に位置し、北東から屈曲しながら南に走る溝で、ＳＸ１に切られる。遺存状態は悪く、ごく浅い溝である。規模は検出長3.30ｍ、幅16～34cm、深さ２～４cmを測る。断面形態は、レンズ状～逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土である。出土遺物はない。

時期：遺構の時期を比定しうる出土遺物がなく、時期の比定はし難いが、ＳＸ１との切り合い関係から、ここではＳＸ１構築以前で、弥生時代とする。



第63図　ＳＤ６（北側）・ＳＤ７測量図

(3)　性格不明遺構

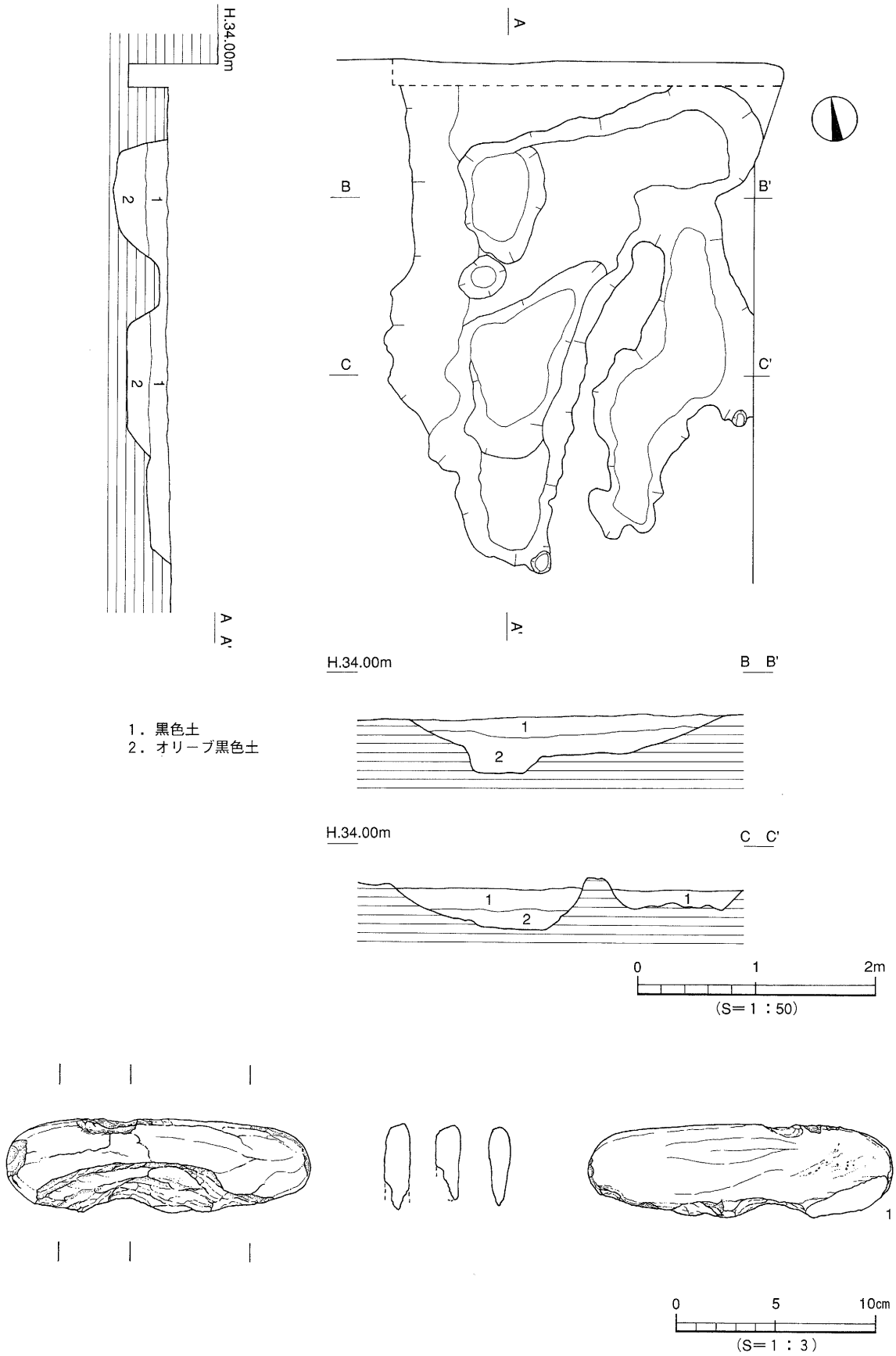
ＳＸ１（第59・64図）

調査区北東部隅Ｃ13～Ｄ13区に位置し、ＳＤ６、ＳＤ７を切る。南北に長い不定形な遺構で、遺構の北半は調査区外に続く。規模は東西2.5m、南北4.3m、深さ40cmを測る。埋土は上部が黒色土、下部がオリーブ黒色土になる。遺物は、弥生土器の小片と石製品が数点出土している。

出土遺物（第64図）

１は緑色片岩製石庖丁の未製品である。扁平な長方形態の素材で、両面は自然面を残す。背部には数ヶ所に打裂痕が見られ、刃部は大きく剥離している。

時期：遺構の埋没時期は、出土した遺物から弥生時代である。



第64図　ＳＸ１測量図・出土遺物実測図

〔2〕古墳時代

(1) 竪穴式住居址

ＳＢ１（第59・65図、図版19・22）

調査区南西部隅、Ｃ・Ｄ１～２区に位置する。遺構の西半は調査区外へ続き、遺構のほぼ全体をＳＢ２に切られる。遺構の遺存状況は悪く、周壁溝と主柱穴（Ｐ１・Ｐ２）とを検出した。遺構の平面形態は隅丸方形を呈するとみられ、規模は南北検出長2.80m、東西検出長2.20mを測る。主柱穴の規模は直径20～24cm、深さ21～24cmである。主柱穴の埋土は黒色土（黄色土含）である。周壁溝の規模は幅６～20cm、深さ２～３cmを測る。遺物は、土器小片があり、このなかには貝殻施文をもつ弥生前期の壺胴部片（２）がある。

時期：出土遺物は古い時代の混入品とみられ、ＳＢ２との切り合い関係から５世紀代とする。

ＳＢ２（第59・65図、図版19）

調査区南西部隅Ｃ・Ｄ１～２区に位置する。遺構の西半は調査区外へ続き、ＳＢ１を切る。平面形態は隅丸方形を呈するとみられる。規模は南北4.0m、東西検出長3.30mを測る。周壁溝は幅７～42cm、深さ２～４cmを測る。主柱穴は４基Ｐ３～Ｐ６で、埋土は、黄色土を含む黒色土である。周壁溝と、周壁溝東辺から延びる間仕切り状の小溝３条（Ｄ１～Ｄ３）を確認した。規模は、小溝１（Ｄ１）は検出長0.9m、幅14cm、深さ13cm、小溝２（Ｄ２）は検出長0.65m、幅20cm、深さ６cm、小溝３（Ｄ３）は検出長0.7m、幅20cm、深さ９cmを測る。小溝１～小溝２の距離は1.50mである。炉及びカマドとみられる施設は未検出である。住居址内中央部付近には、不整形な浅いくぼみを検出したが、灰や焼土は確認できなかった。住居址内からの遺物の出土はない。

時期：遺構の時期を比定できる出土遺物がなく、遺構の時期特定はし難いが、「久米常堰遺跡」（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　1989）で検出された竪穴式住居址の検出例に類似することから、本住居址の廃棄・埋没時期をここでは５世紀代としておく。

(2) 掘立柱建物址

掘立１（第59・66図）

調査区北部中央、Ｂ・Ｃ７～８において検出した建物址である。北辺の一部は調査区外に続く。規模は２間（3.8m）×２間（3.6m）以上の建物で、軸方向は12°東に振る。柱間は東西1.9～1.9m、南北1.75～1.85mを測る。柱穴の平面形態は方形～円形を呈し、規模は径50～60cm、深さ33～46cmを測る。柱穴埋土は褐灰色土、淡黄色土および両者の混合土からなる。柱穴からは須恵器坏蓋１点（Ｐ１）と、土師器の小片が少量出土している。

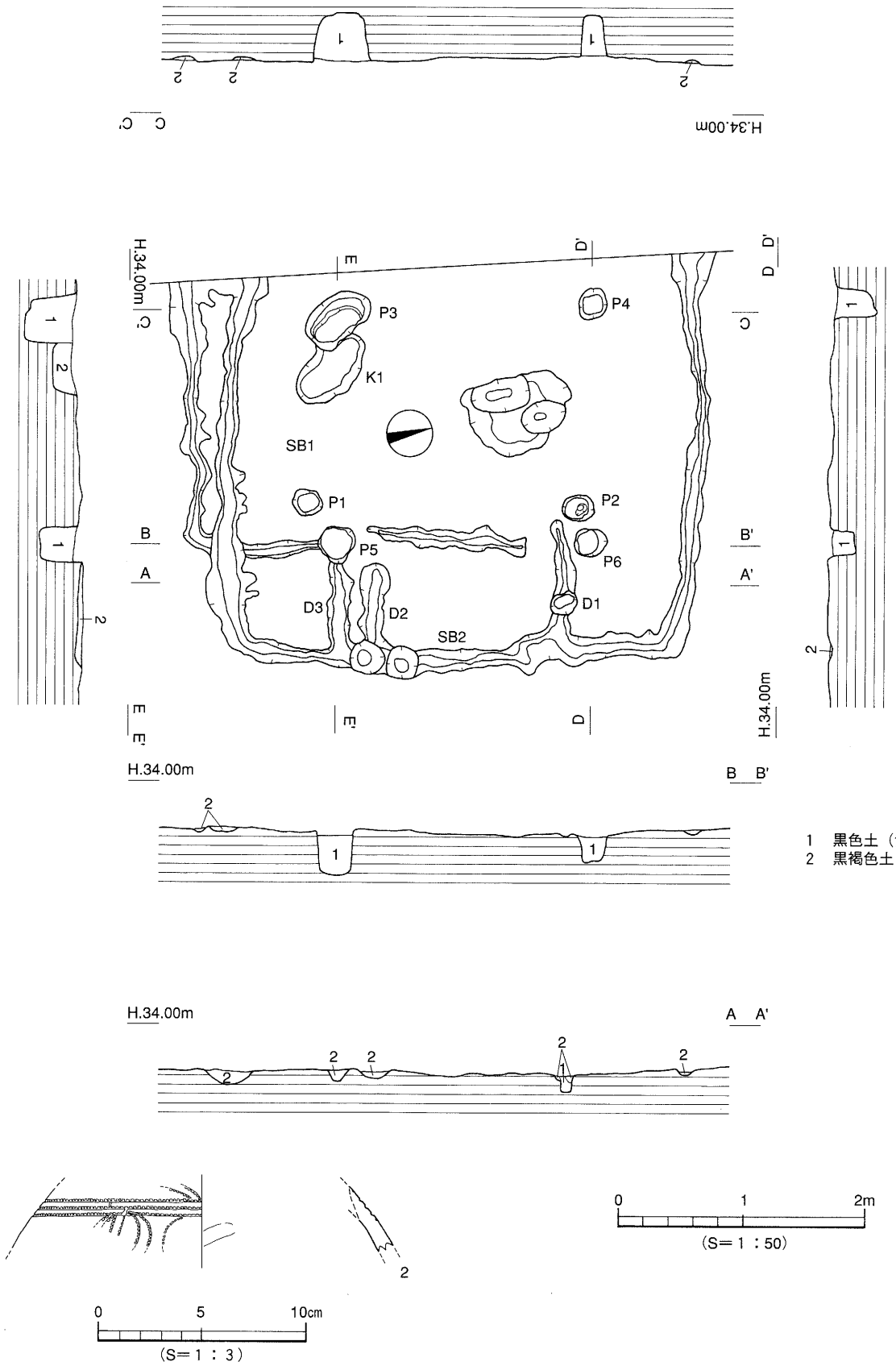
出土遺物（第66図）

３は須恵器の坏蓋である。口縁部はほぼ垂直に下り、口縁端部は凹面を呈する。

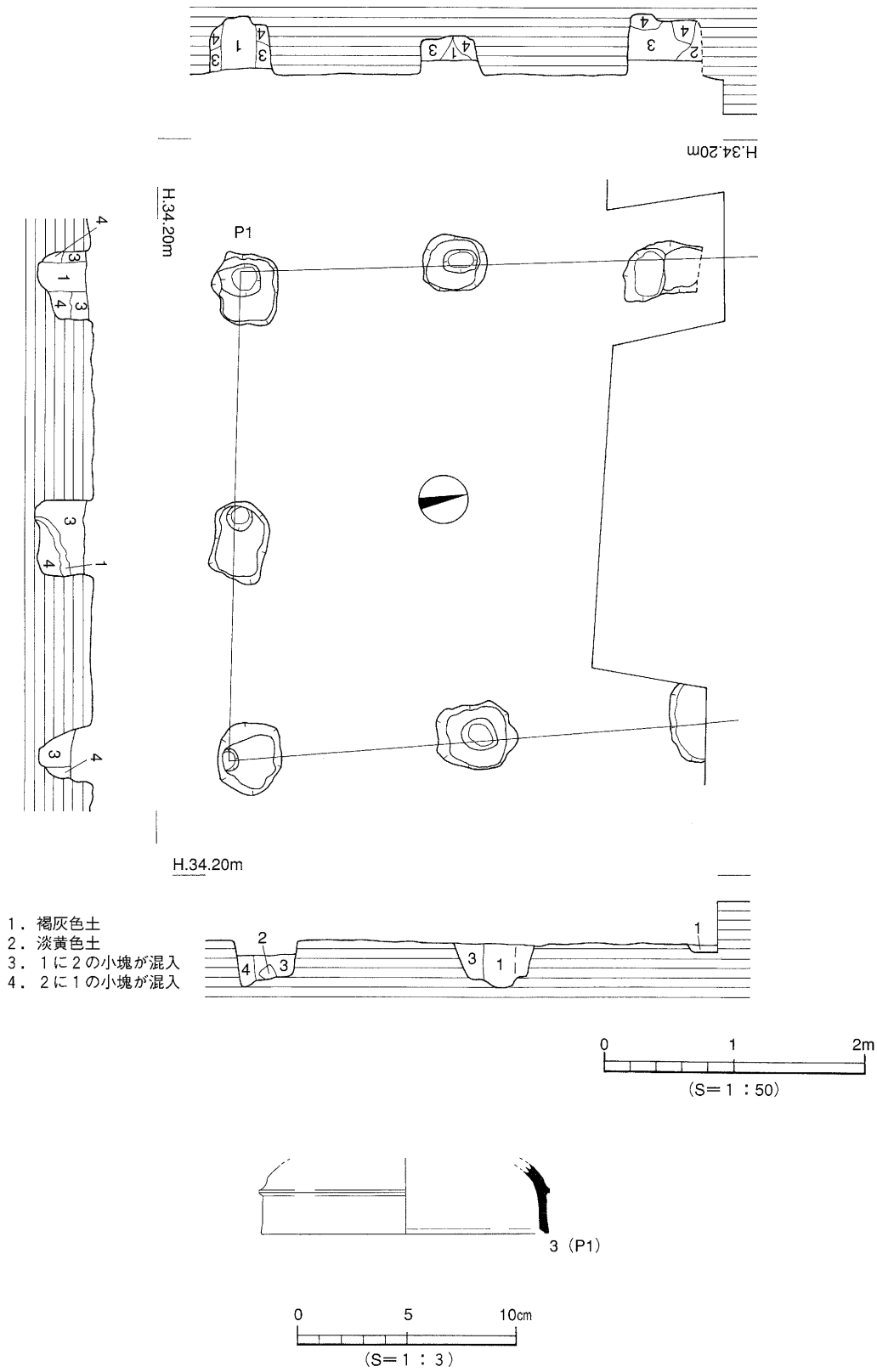
時期：出土した須恵器片の特徴から、本建物址の時期は５世紀末～６世紀初頭以降になる。

掘立２（第59・67図）

調査区北西部、Ａ・Ｂ２区～Ａ・Ｂ４区において検出した建物址である。本建物址の南部から東部には、逆「Ｌ」字状に柵列ＳＡ１が取り付く。本建物址の北辺部は調査区外に続く。主軸は11°東に



第65図　ＳＢ１・ＳＢ２測量図・ＳＢ１出土遺物実測図



第66図　掘立１測量図・出土遺物実測図

振り、掘立１とほぼ等しい軸方向を持つ。規模は２間（3.8m）×２間（3.4m）以上で、柱間は東西1.8～2.0m、南北1.6～1.8mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径15～22㎝、深さ７～28㎝を測る。柱穴埋土は黒色土で、淡黄色土が混入するものがある。柱穴からは、弥生土器の細片が少量出土している。

時期：本建物址からは時期を比定しうる出土遺物がなく、遺構の時期は特定できない。ただし、南部及び東部にＳＡ１が取り付くとするならば、ＳＡ１出土遺物の特徴から６世紀代となる。

掘立３（第59・68図）

調査区中央やや西部、Ｃ・Ｄ５区～Ｃ・Ｄ６区で検出した建物址である。掘立３柱穴の一部はＳＫ２床面にて検出し、ＳＫ２に切られている。規模は２間（4.0m）×２間（3.9m）の総柱建物址で、柱間は東西1.9～2.0m、南北1.9～2.0mを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径25～45㎝、深さ38～65㎝を測る。柱穴埋土は褐灰色土で、一部に黄色粘土を含んでいる。柱穴Ｐ１からは須恵器小片と土師器細片が少量出土している。

出土遺物（第68図）

５は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部は直に下り、端部は凹面をなす。

時期：出土遺物と埋土から、本建物址の時期は６世紀代とする。

掘立４（第59・69図）

調査地中央部、Ｄ７・８区において検出した。規模は１間（2.4m）×１間（2.1m）を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径25～40㎝、深さ20～30㎝を測る。柱穴埋土は黒褐色土で、柱穴からの遺物の出土はない。

時期：時期を比定できる遺物の出土はないが、本建物址の主軸方位や柱穴の規模等は掘立３と類似する。したがって、本建物址の時期は掘立３と同時期とし、６世紀代とする。

(3) 柵　列

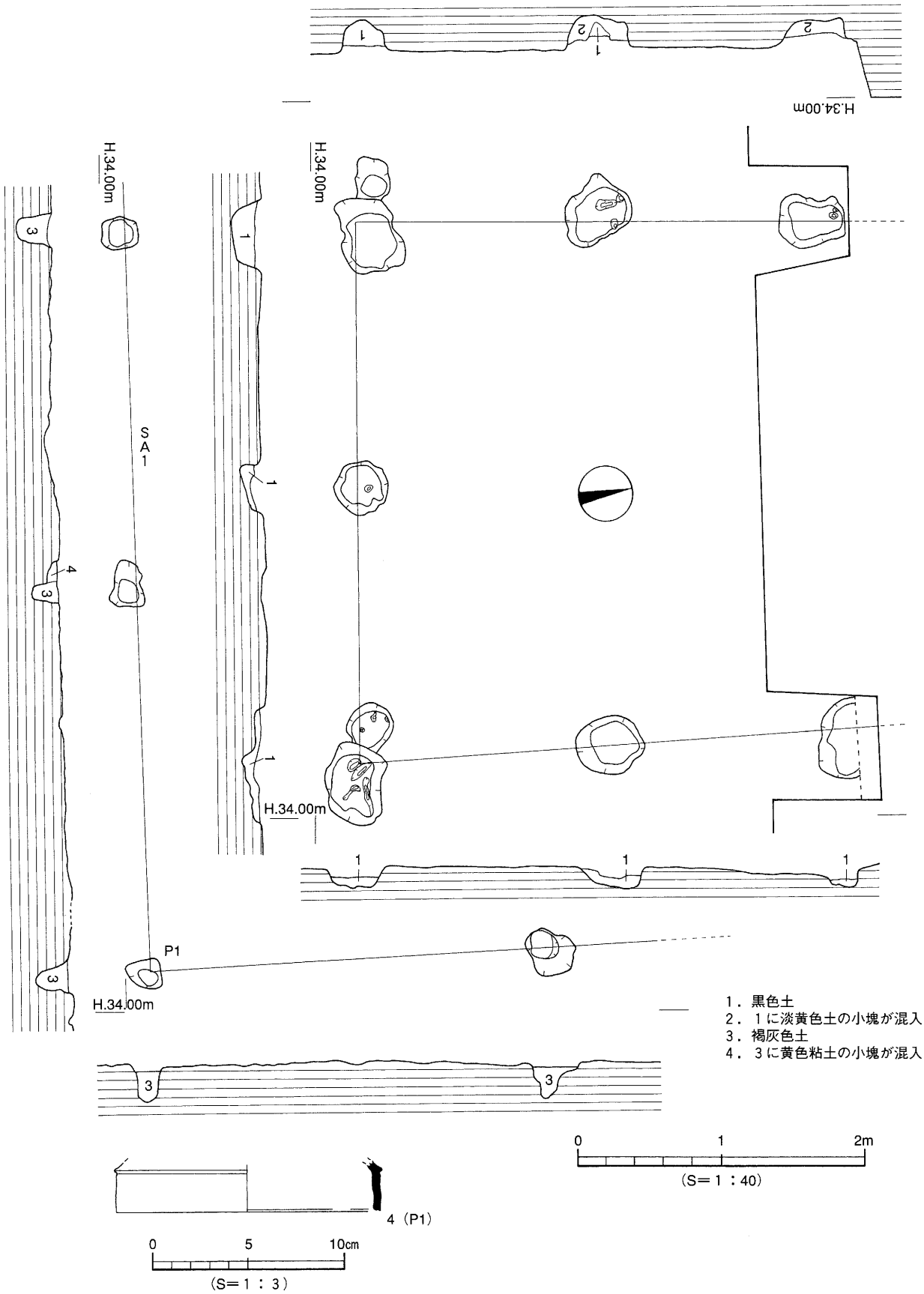
ＳＡ１（第59・67図）

調査区北西部、Ｂ２～Ｂ・Ｃ４区に位置する。掘立２に取り付くとみられる。掘立２の南部及び東部を逆「Ｌ」字状に囲うようにあり、東部は北方に続く。柵列の規模は東西２間（5.10m）、南北１間（2.70m）以上である。柱穴の平面形態は方形～円形を呈し、規模は径20～30㎝、深さ19～27㎝を測る。また、掘立２に対するＳＡ１の南辺及び東辺の距離は南辺1.55m、東辺1.30～1.35mを測る。柱穴埋土は褐灰色土で、黄色粘土が混入するものもある。柱穴Ｐ１からは、須恵器の小片と弥生土器の細片が数点出土している。

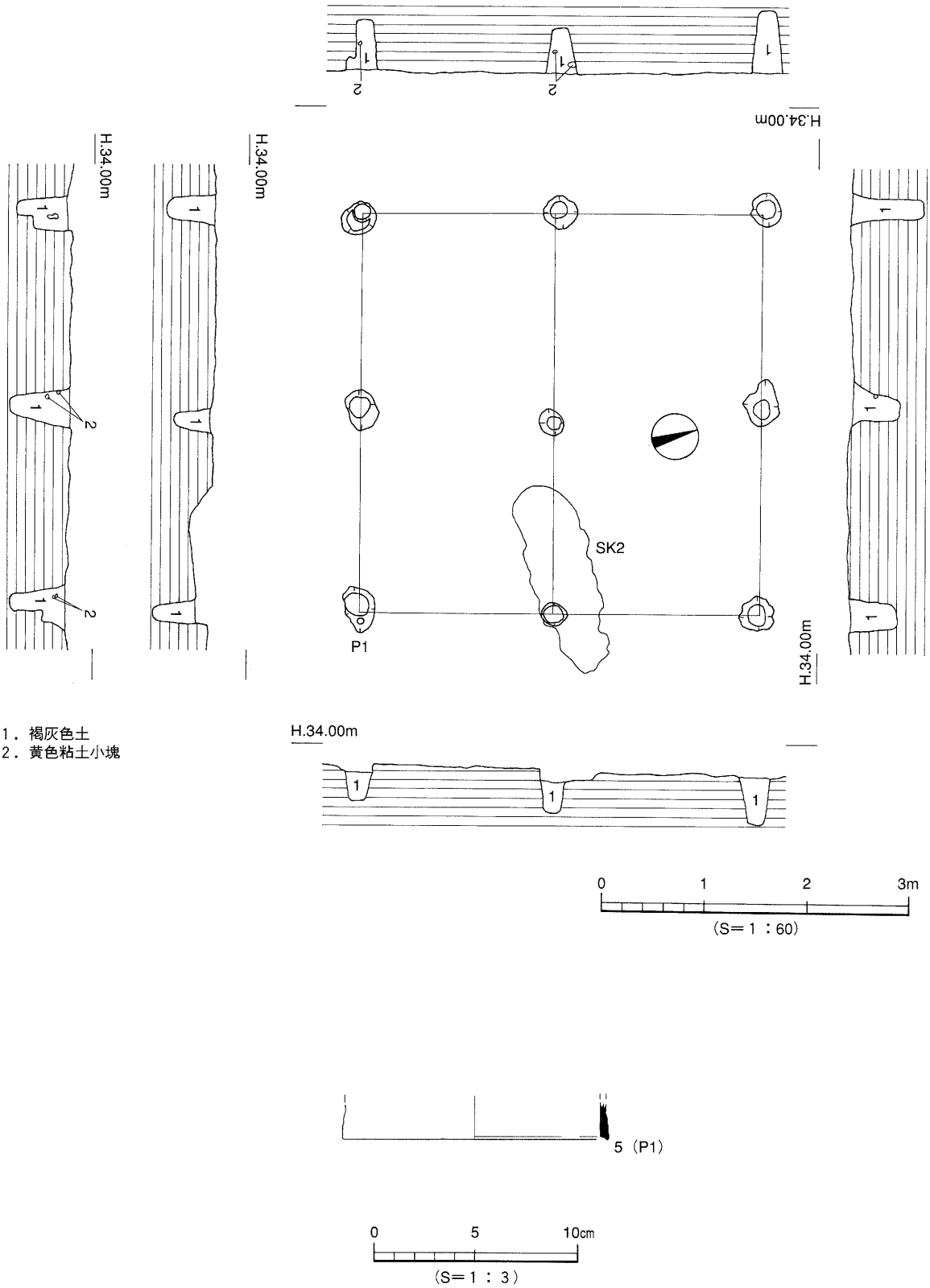
出土遺物（第67図）

４は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部はほぼ直に下り、端部は凹面をなす。

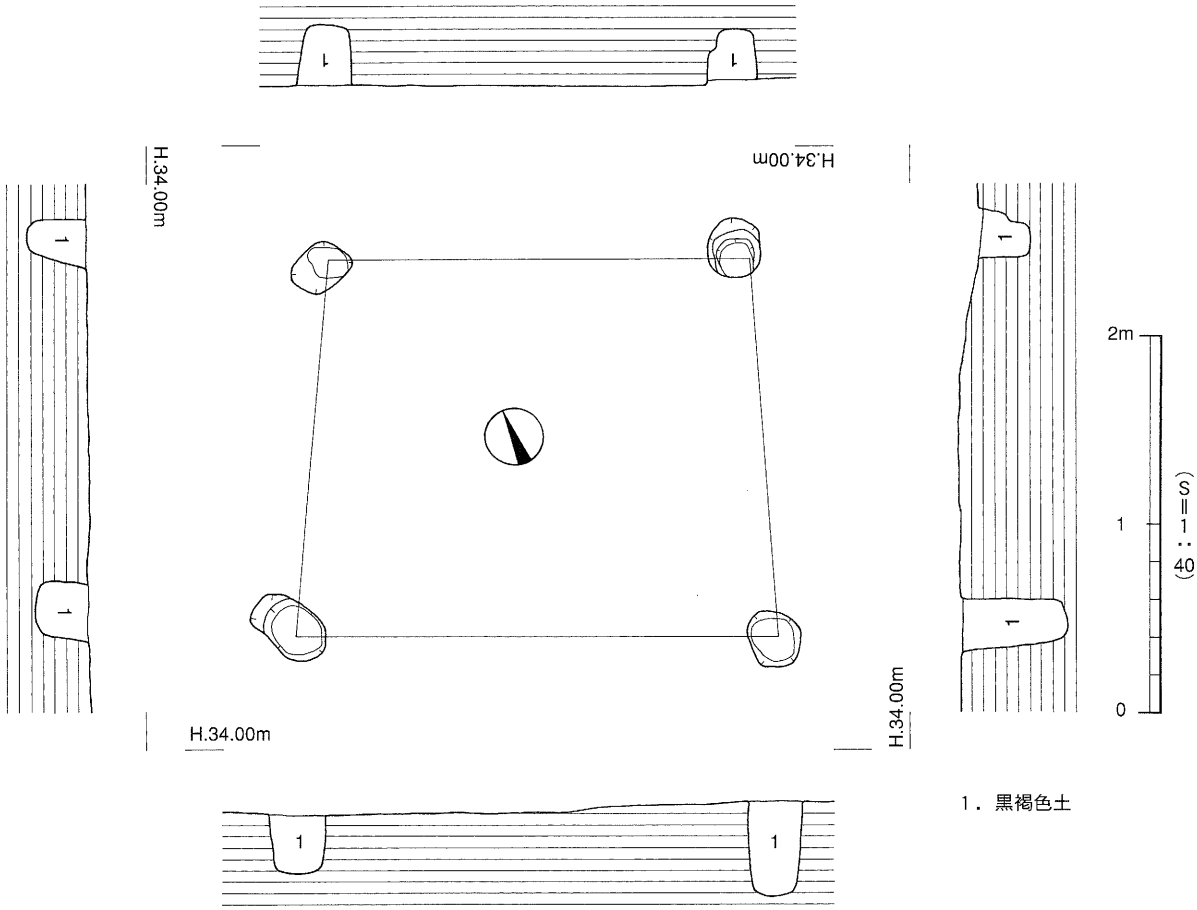
時期：出土した須恵器片の特徴から、遺構の時期は６世紀代とする。



第67図　掘立２・ＳＡ１測量図・ＳＡ１出土遺物実測図



第68図　掘立３測量図・出土遺物実測図



第69図　掘立４測量図

〔3〕中　世

(1)　溝

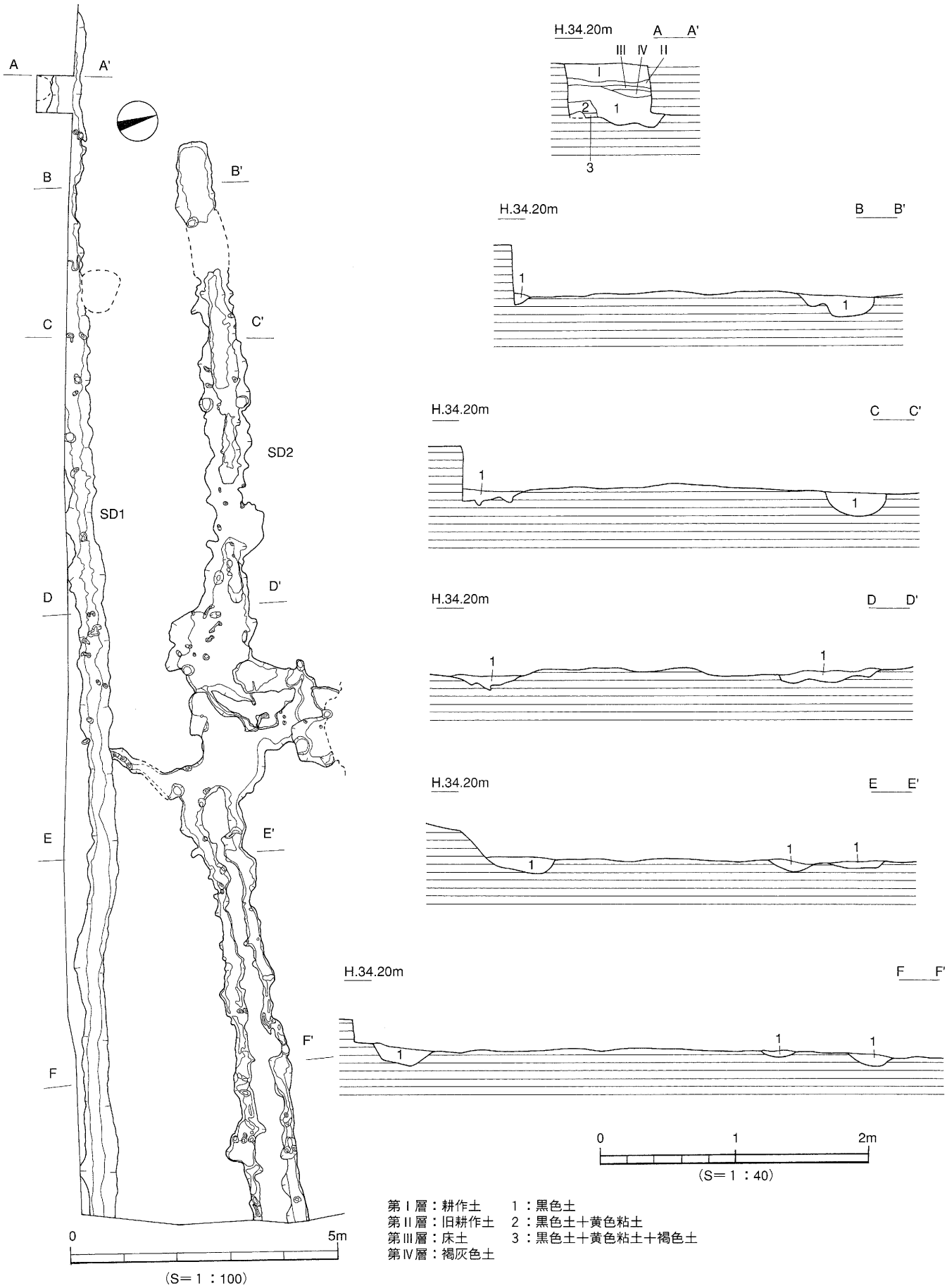
ＳＤ１（第59・70図、図版20）

調査区南部、Ｅ１～Ｈ19区に位置し、東西に走る溝である。規模は検出長55m、幅10～60cm、深さ８～10cmを測る。断面形態は船底状を呈する。埋土は黒色土で、部分的に黄色粘土や褐色土が混入する。断面観察からは、砂層や礫層の堆積はみられない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼小片が出土している。

出土遺物（第71図）

６は鍋の口縁部片である。口縁端部は面をなし、凹みをもつ。７は須恵器の高坏の口縁部で、端部は丸くおさめる。

時期：出土した遺物から、遺構の埋没時期は15世紀代である。



第70図　ＳＤ１・ＳＤ２測量図

第71図　ＳＤ１出土遺物実測図

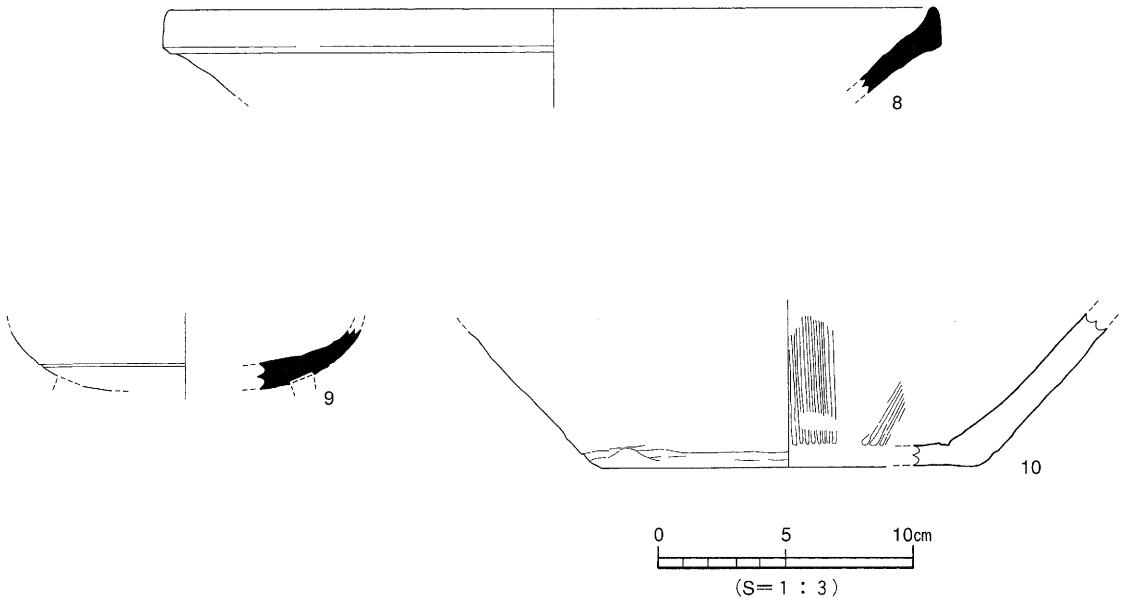
ＳＤ２（第59・70図、図版20）

調査区南部、Ｅ６～Ｆ13区に位置し、ＳＤ１と並行して走る溝で、ＳＤ６を切る。溝の東半は２条に分かれる。規模は検出長38m以上、幅50～130cm、深さ20～25cmを測る。断面形態は船底状を呈する。埋土は黒色土で、砂層や礫の堆積はみられない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、備前焼の小片が出土している。

出土遺物（第72図）

８は東播系捏鉢の口縁部である。９は須恵器で、高台付の碗になる。10は備前焼の擂鉢で内面に９条の櫛描条線が放射状に施される。

時期：出土した遺物から、遺構の埋没時期は15世紀代である。

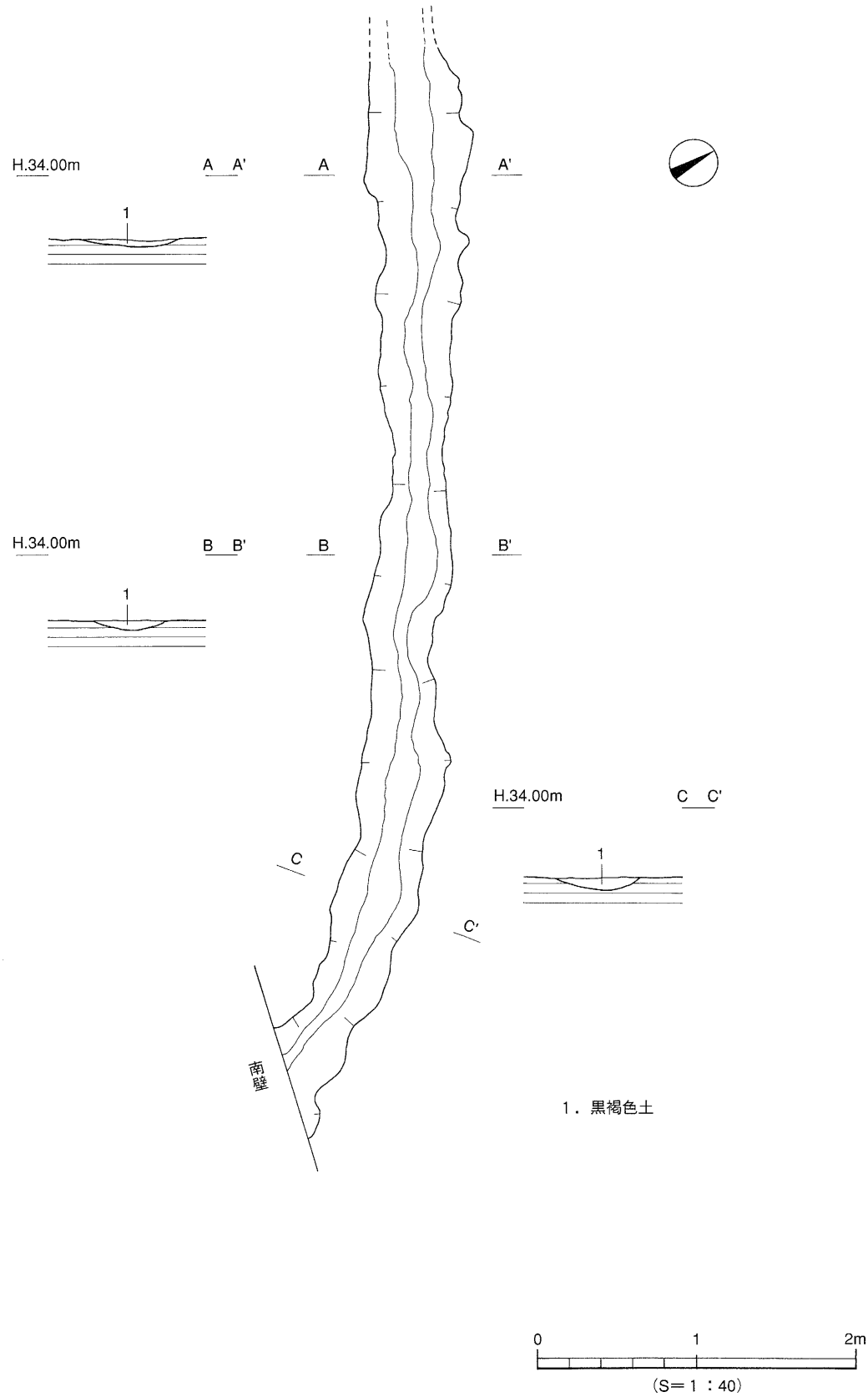


第72図　ＳＤ２出土遺物実測図

ＳＤ３（第59・73図）

調査区西部南、Ｄ３～Ｅ５区に位置し、北西から調査区南壁へ走る溝で、南部は調査区外に延びる。溝の遺存状態は悪く、西部の竪穴住居址ＳＢ１・２付近で消失する。規模は検出長6.5m、幅30～65cm、深さ３～５cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺構からは、土師器片が少量出土している。

時期：出土遺物が小片のため、時期を特定することは困難であるが、ここでは古墳時代以降とする。



第73図　ＳＤ３測量図

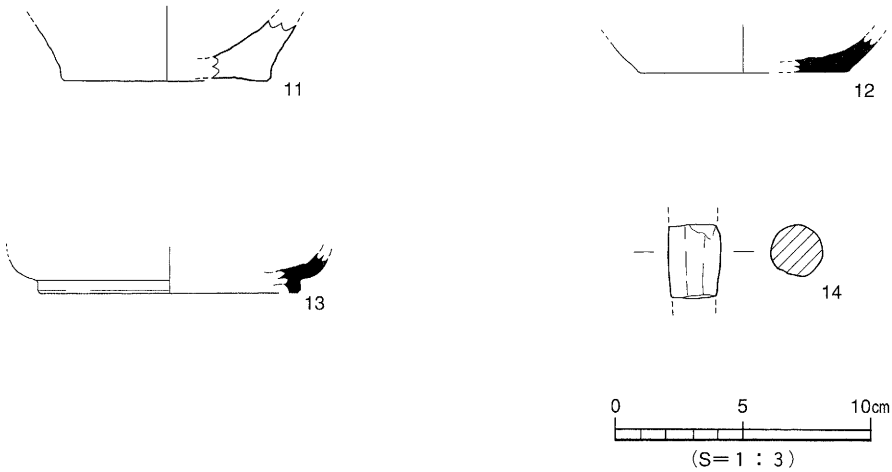
ＳＤ４（第59・75図）

調査区東部、Ｂ～Ｅ10区～Ｅ13区に位置し、北から東に「Ｌ」字状に走る溝である。遺構は、第Ⅵ層黄色粘土上面で検出した。規模は検出長南北7.4ｍ、東西検出長29ｍ、幅80～150㎝、深さ10～30㎝を測る。断面形態はレンズ状～逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土で、黄褐色粒が混入する。断面観察では、砂や礫の堆積はみられず、流水溝ではない。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、土釜の小片数点が出土した。

出土遺物（第74図）

11は弥生土器。平底の底部である。12は須恵器の底部である。底部は回転糸切り痕が残る。13は須恵器高台付きの坏である。高台の接合部は胴体部と底部の境付近に付く。14は土師質の三足付土釜または鍋の脚部である。

時期：出土遺物から、遺構の時期は14～15世紀代である。



第74図　ＳＤ４出土遺物実測図

ＳＤ５（第59・76図）

調査区東部、Ｅ11～Ｅ13区に位置し、ＳＤ６を切って東西に走る溝である。遺存状態は悪く、ごく浅い溝である。規模は幅10～40㎝、深さ２～５㎝、検出長7.5ｍを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺構からは、須恵器片と瓦器碗底部片が少量出土している。

出土遺物（第76図）

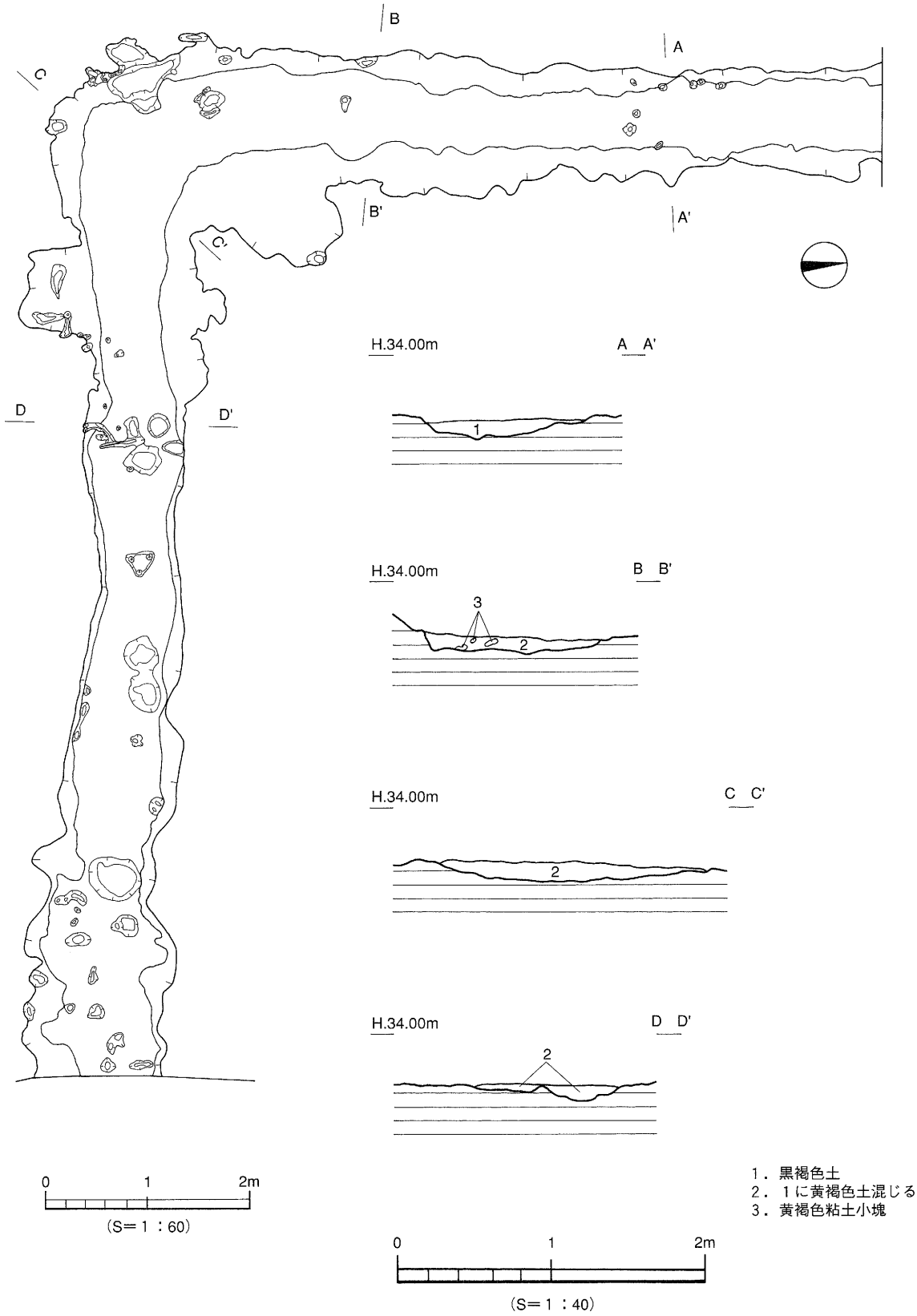
15は土師皿の底部である。底部に回転糸切り後の、板状圧痕が見られる。

時期：出土遺物から、遺構の時期は13世紀代である。

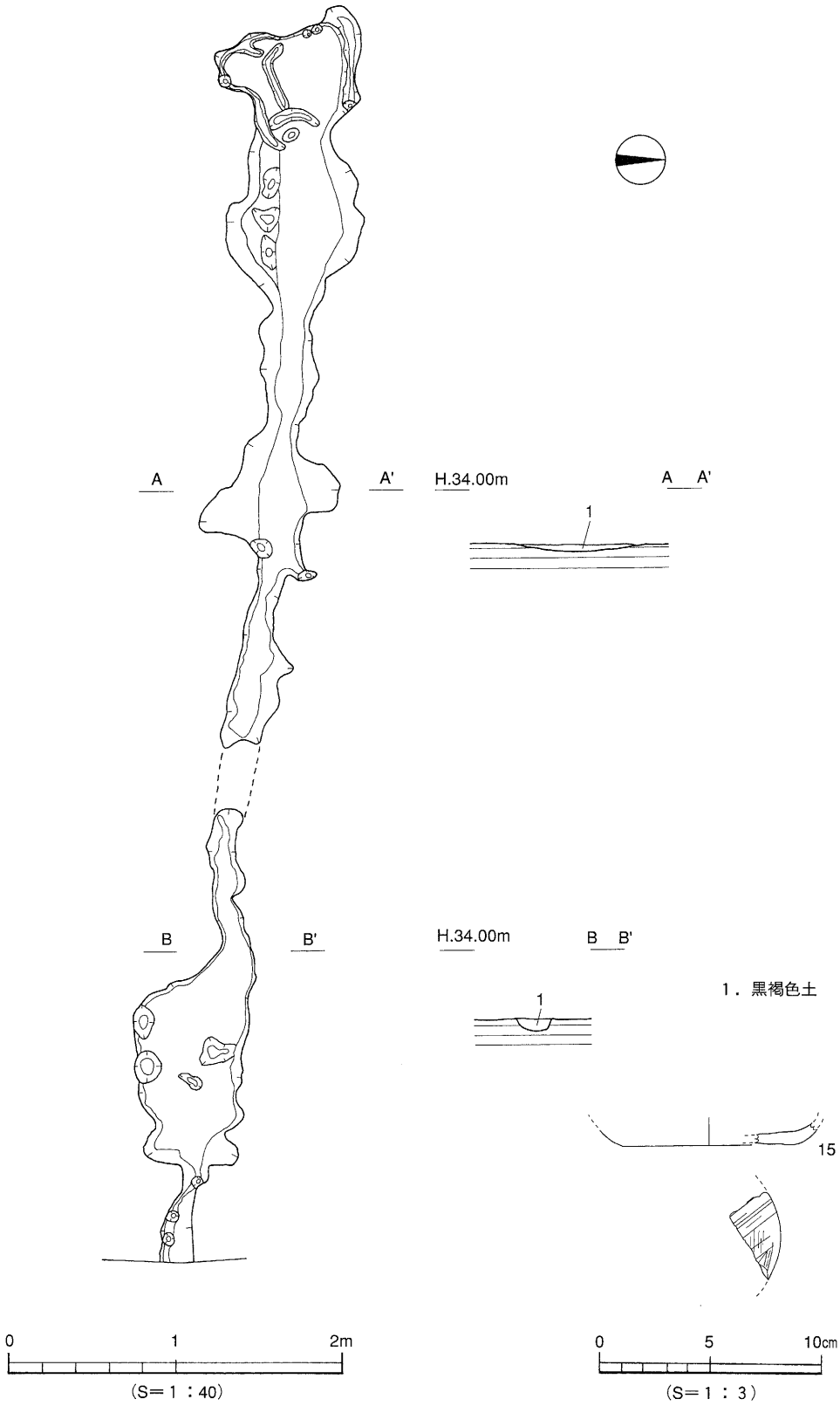
(2)　土　坑

ＳＫ１（第59・77図）

調査区中央部、Ｄ８区に位置し、ＳＫ３に切られる。平面形態は不整形な円形である。規模は東西2.10ｍ、南北1.65ｍ、深さ16㎝を測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は上部が褐灰色土で、下部が淡黄色土である。遺構からは弥生土器、須恵器、土師器、瓦器の小片が数点出土している。


B
A
C
B'
A'
C'
D
D'
H.34.00m
A A'
1
H.34.00m
B B'
3
2
H.34.00m
C C'
2
H.34.00m
D D'
2
0
1
2m
(S＝1：60)
0
1
2m
(S＝1：40)
1．黒褐色土
2．1に黄褐色土混じる
3．黄褐色粘土小塊

第75図　ＳＤ４測量図



第76図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第77図）

16は壺形土器の口縁部である。端部には、凹線文を３条施す（弥生中期後半）。17は土師器の坏である。底部に回転糸切り痕を残す。18は須恵器坏身の口縁部である。19は和泉砂岩を石材とした砥石である。一面はやや凹む。

時期：出土遺物17の特徴から、遺構の廃棄・埋没時期は中世にする。

ＳＫ２（第59・78図）

調査区中央部、Ｄ６区に位置し、掘立３を切る。平面形態は不整形な楕円形である。規模は長軸1.90m、短軸0.65m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐灰色土である。床面では掘立３の柱穴１基を検出した。遺構から遺物の出土はない。

時期：遺構の埋土がＳＫ１に類似することから、遺構の廃棄・埋没時期は中世とする。

ＳＫ３（第59・78図）

調査区中央部、Ｄ・Ｅ８区に位置し、ＳＫ１を切る。平面形態は南北に長い楕円形である。規模は東西0.5m、南北1.0m、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は弥生土器、土師皿の細片が少量出土している。

時期：遺構の切り合い関係と出土遺物から、遺構の廃棄・埋没時期は中世になる。

〔4〕その他の遺構と遺物（第79図）

調査地内からは、87基の柱穴及び小穴が検出された。柱穴からの遺物の出土は少ない。ここでは表採の資料も合わせ、図化できる土器に限り資料の提示を行う。

(1) 柱穴出土遺物

20はＳＰ51出土で、弥生時代の甕形土器口縁部片である。頸部内面に稜をもつ。21はＳＰ26出土で、土師器の坏で体部下半に稜をもつ。底部は回転糸切り。13世紀代。

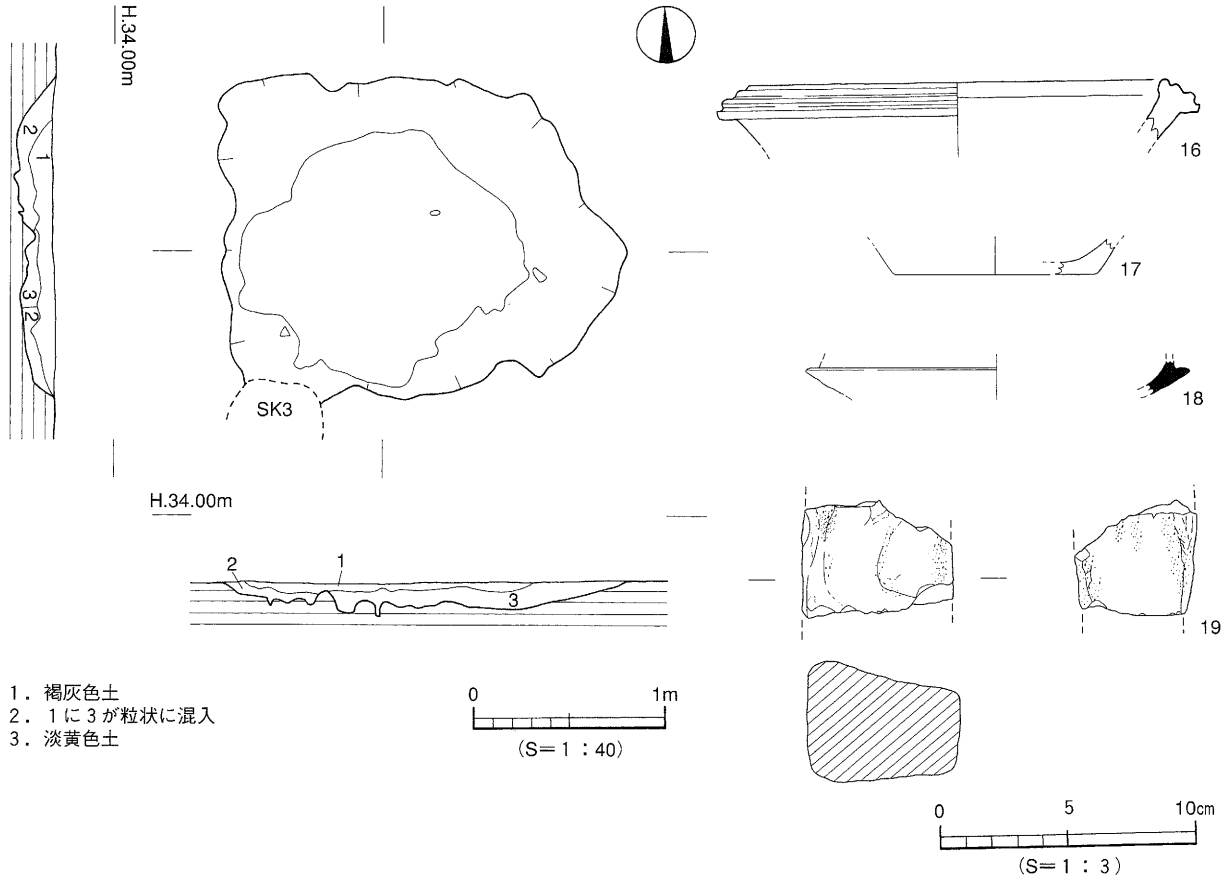
(2) 出土地不明遺物

22は須恵器高坏形土器の脚部である。透かし孔の一部が残る。裾部は短く内湾する。23は土師質碗の底部である。高台は断面三角形を呈し、胴部と底部の境付近に貼り付ける。24は肥前系皿の口縁部である。灰オリーブ色の釉がかかる。25は龍泉系青磁碗の底部である。内面見込みには花文のスタンプが見られる。高台断面は四角形で削り出す。26は土師質三足付羽釜の口縁部である。口縁下に丸みを帯びた「コ」の字状のタガが貼り付く。27は土師質三足付羽釜の口縁部である。口縁下に断面三角形のタガが貼り付く。

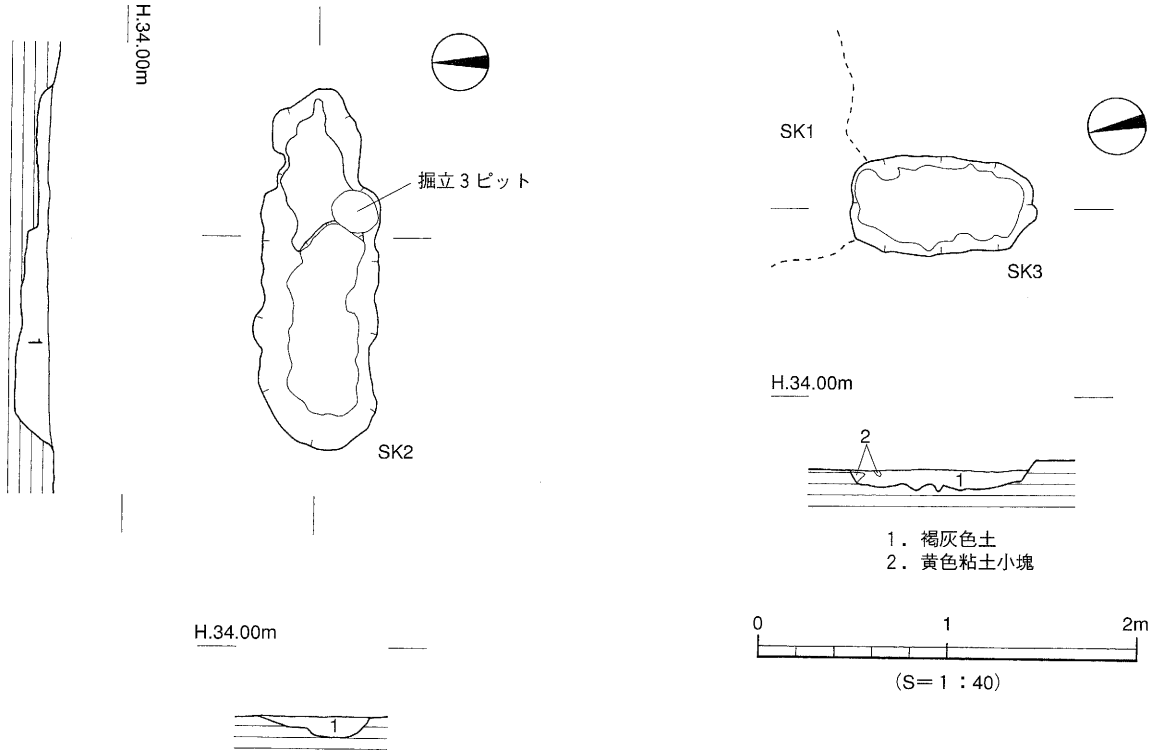
４．小　結

今回の調査では、弥生時代から中世までの遺構を検出した。

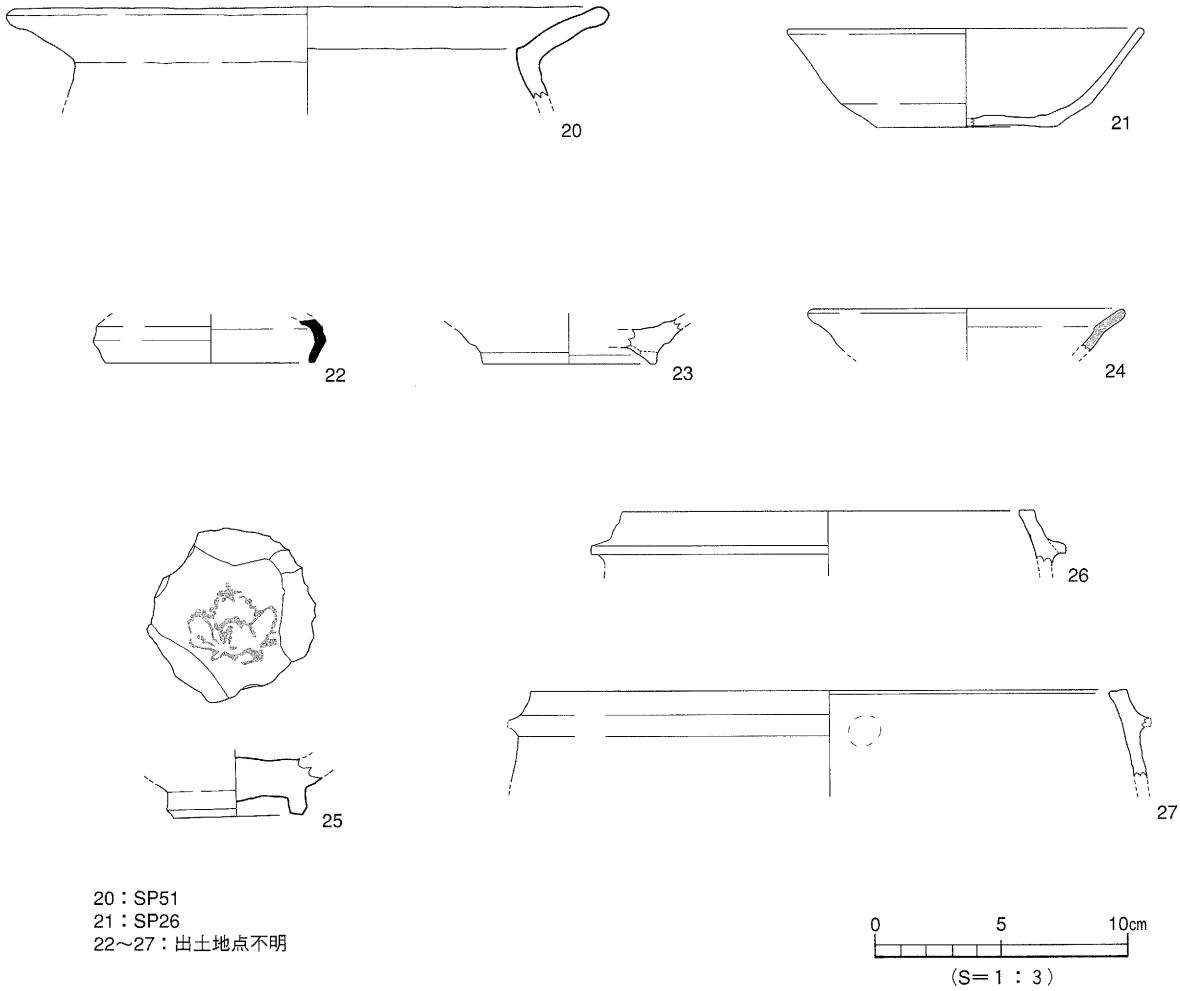
弥生時代：弥生時代の遺構にはＳＫ４、ＳＤ６・７、ＳＸ１がある。遺物は少なく、ピット内出土



第77図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図



第78図　ＳＫ２・ＳＫ３測量図



第79図　柱穴及び出土地点不明遺物実測図

品や表採資料が多数をしめる。久米才歩行遺跡では、これまでに南側の２～４次調査地で弥生時代の遺構と遺物を確認している。今回の資料は、弥生集落の範囲が、遺跡の北東部にも広がることを知る資料になった。

古墳時代：ＳＢ２は５世紀代の竪穴式住居址で住居内部に小溝をもつ。竪穴式住居址内に間仕切り状の小溝を持つ住居址は、東本遺跡４次調査地２区で検出された円形の大型竪穴式住居址ＳＢ203や、北久米常堰遺跡の方形竪穴住居址ＳＢ１等があげられるが、平野内での資料数は少ない。竪穴式住居の構造研究にとっては貴重な資料である。

６世紀代の掘立２は、南部から東部に柵列（ＳＡ１）を付設している可能性が高い。６世紀代の柵列を伴った掘立柱建物址の検出は希少であり、注目される。

総柱建物址の掘立３と掘立４は、建物の軸方向や南北の柱間がほぼ同様であることから、同時期の建物址と思われ、集落構造が知られる良好な資料である。

中世：中世の溝ＳＤ４は、調査区内東部を北から東へ「Ｌ」字状に走る溝である。内部施設は確認できなかったが、区画溝の可能性が高い。なお、近隣の北久米町屋敷遺跡からは、出土遺物や方位がＳＤ４と同じ溝が検出されている。

東西に平行して走る溝ＳＤ１及びＳＤ２は、出土遺物の内容から同時期の遺構といえる。ＳＤ１は

55m以上、ＳＤ２は38m以上となり、その性格は、区画溝または道路が考えられる。

今回の調査では、久米才歩行遺跡の古墳時代と、中世の居住域を特定する資料が得られた。くわえて、わずかではあるが当時の集落構造を解明する資料が得られている。今後は、同時代集落の範囲確認と、古代の来住台地上に展開する官衙遺跡群や、中世の北久米町屋敷遺跡との関連を検討する必要がある。

表36　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	5世紀代	隅丸方形	2.80×2.20	黒色土	6.16	2＋α					○	SB2に切られる。
2	5世紀代	隅丸方形	4.00×3.30	黒色土	13.2	4					○	SB1を切る。

表37　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁　行		梁　行		方　位	床面積(㎡)	時　期	備　考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×2	東西	3.8	1.9・1.9	3.6＋α	1.75・1.85	E-12°-N	12.96＋α	5世紀以降	
2	2×2	東西	3.8	1.85・1.95	3.4＋α	1.8・1.6	E-11.5°-N	12.95＋α	6世紀代	
3	2×2	南北	4.0	1.95・2.05	3.9	1.9・2.0	E-17.5°-N	14.44	6世紀代	
4	1×1	東西	2.4	2.3～2.4	2.1	2.0～2.1	E-25°-N	5.04	6世紀代	

表38　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模（m） 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	E1～H19	舟底状	55.0×0.1～0.6×0.08～0.1	東西	黒色土	弥生・須恵 土師・瓦器 備前	15世紀代	
2	E6～E10 F10～F13	舟底状	38.0×0.5～1.3×0.2～0.25	東西	黒色土	弥生・須恵 土師・瓦器 備前	15世紀代	SD6を切る。
3	D3・E4・E5	レンズ状	6.5×0.3～0.65×0.03～0.05	北西～南東	黒褐色土	土師	古墳以降	
4	B10～E10～ E13	レンズ状～ 逆台形状	36.4×0.8～1.5×0.01～0.3	東～北	黒褐色土 (黄褐色粒混)	弥生・須恵 土師	14～15世紀	SD6を切る。
5	E11～E13 F12・F13	レンズ状	7.5×0.1～0.4×0.02～0.05	東西	黒褐色土	須恵・瓦器	13世紀代	SD6を切る。
6	D12・E12	レンズ状	9.0×0.3～0.65×0.02～0.05	南北 東西	黒褐色土		弥生	SD2・4・5に 切られる。
7	C12・D12・ E12	レンズ状～ 逆台形状	3.3×0.16～0.34×0.02～0.04	北東～南	黒褐色土		弥生	

表39　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D8	不整円形	舟底状	2.1×1.65×0.16	2.8	褐灰色土	弥生・須恵 土師・瓦器	中世	SK3に切られる。
2	D6	不整形～ 楕円形	皿状	1.9×0.65×0.14	0.9	褐灰色土		中世	掘立3を切る。
3	D・E8	楕円形	レンズ状	1.0×0.5　×0.14	0.5	褐灰色土	弥生・土師	中世	SK1を切る。
4	B9	円形	舟底状	1.2×0.8　×0.6	0.75	黒色土	弥生	弥生以降	

表40　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C13 D13	不定形	不定形	4.3×2.5　×0.4	5.7	黒色 オリーブ黒色	弥生 石製品	弥生	SD6を切る。

表41　SX1出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	石庖丁	ほぼ完形	緑色片岩	15.2	4.8	1.2	141.7	未製品	

表42　SB1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
2	壺	残高　3.1	貝殻施文。	マメツ	ナデ	乳灰色 乳灰黄色	石・長（1～4） ○		22

表43　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
3	坏蓋	口径（13.0） 残高　3.2	口縁はほぼ直に下がる。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表44　SA1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
4	坏蓋	口径（13.8） 残高　2.6	口縁はほぼ直に下がる。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	暗オリーブ灰色 灰色	長（0.5） ◎	自然釉	

表45　掘立３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
5	坏蓋	口径（12.8） 残高　1.8	直に下がる口縁部。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表46　SD 出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
6	鍋	残高　3.9	口縁部片。口縁端部は面をなし、1条の凹線が巡る。	マメツ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長（1～4） ◎	SD1	
7	高坏	口径（10.8） 残高　2.5	高坏の口縁部片。端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	黒褐色 灰黄褐色	密 ◎	SD1	
8	こね鉢	口径（29.7） 残高　3.3	こね鉢の口縁部。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	石・長(0.5～1) ◎	SD2	
9	高台付碗	残高　2.3	高台部は剝落。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰白色	密 ○	SD2	
10	擂鉢	底径（14.5） 残高　6.0	備前焼・擂鉢の底部。内面に9条の櫛描き条線が、放射状に施される。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰色・にぶい黄橙色	石・長（1～3） 砂 ◎	SD2	
11	壺	底径（7.9） 残高　2.3	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄色	石・長（1～4） ○	SD4	
12	坏	底径（8.2） 残高　1.4	回転糸切りの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎	SD4	

SD 出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
13	坏	底径 (10.0) 残高 1.5	高台付坏。高台は底部と胴部の境付近に付く。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 灰白色	密 △	SD4	
14	土釜（鍋）	残高 2.9	三足付土釜（鍋）の脚部。	マメツ		にぶい黄橙色	石・長(0.5～2) ◎	SD4	
15	皿	底径 (7.5) 残高 1.0	土師皿の底部。底部は板状工具による調整有り。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石 (1～5) ◎	SD5	

表47　SK1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
16	壺	口径 (16.2) 残高 2.4	弥生壺形土器の口縁部。端部に凹線文3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(0.5～2) ◎		
17	坏	底径 (7.8) 残高 1.4	回転糸切りの底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
18	坏身	受部径(14.9) 残高 1.3	坏身口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗赤灰色	密 ○		

表48　SK1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
19	砥石	一部	和泉砂岩	4.5	5.9	4.7	159.9		

表49　柱穴及び出土地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	口径 (23.0) 残高 3.6	頸部内面に稜をもつ。	マメツ	㊐マメツ ㊝ナデ ㊟マメツ	橙色 明赤褐色・灰黄褐色	石・長(0.5～2) ○	SP51	
21	坏	口径 (14.0) 器高 3.8 底径 (7.1)	土師坏。底部は回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色・黒褐色	石 (1～2) ◎	SP26	
22	高坏	口径 (8.0) 残高 1.7	高坏脚の裾部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
23	碗	底径 (6.8) 残高 1.8	土師質。碗の底部。貼付けの輪高台は断面三角形。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄橙色・灰黄褐色 にぶい黄橙色	密 ○		
24	皿	口径 (12.2) 残高 1.7	肥前系皿の口縁。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		
25	碗	底形 5.0 残高 2.3	青磁の碗。見込部に花文スタンプ。	施釉	ナデ 無釉	明オリーブ灰色・にぶい褐色 明オリーブ灰色	密 ◎		
26	土釜	口径 (16.0) 残高 2.3	土師質。三足付釜の口縁部。口縁下貼付けのタガの断面形は丸味をおびた「コ」の字状。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5～2) ◎		
27	土釜	口径 (23.4) 残高 3.6	土師質。三足付釜の口縁部。口縁下貼付けのタガの断面形は三角形。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1～4) ◎		

第5章　おわりに

これまでに、久米才歩行遺跡３～５次調査地の調査報告をしてきた。最後に、報告した３ヶ所の調査成果と、既に調査報告が刊行されている２次調査地を含めて、久米才歩行遺跡の調査成果を整理して本書のまとめとする。

１．遺跡の概要

久米才歩行遺跡は、昭和63年に遺跡として認知された。遺跡は、久米官衙遺跡群のあるいわゆる「来住台地」の北を流れる（区画する）堀越川の北岸に位置する。遺跡の範囲は南は堀越川、北は北久米町屋敷遺跡、西は現在の国道11号線を境に南久米片廻り遺跡、東は南久米町遺跡までとなり、東西340m、南北160m、約54,400㎡となる。遺跡地内では、縄文時代晩期の土器片が最も古い遺物となり（４次調査地）、遺構では弥生時代前期後半が最も古く、以降は中世までに何某かの生活関連遺構が存在している。居住を示す竪穴式住居址や掘立柱建物址は弥生時代前期末～中期初頭、古墳時代中～後期 、古代、中世の各時代にあり、この地が居住空間として土地利用されていたことが明らかになってきている。また、遺跡の南境となる堀越川は古代まで久米才歩行遺跡３次調査地内の南半分を河川域としていたことも今回の調査成果である。以下、時代毎に遺構と遺物の整理をしてみたい。

２．縄文晩期～弥生時代

縄文時代晩期の土器片数点が４次調査地で出土している。西の南久米片廻り遺跡からは突帯文期で器種構成が判明する土器片を確認しており、才歩行遺跡～南久米片廻り遺跡一帯に同時期の集落が存在していたことは確かであろう。しかしながら、未だに遺構の確認はなく、今後の調査に期待したい。

弥生時代では前期末～中期初頭の竪穴式住居址と土坑、中期中葉の土坑が２次調査地で検出されている。前期末～中期初頭の竪穴式住居址は検出例が当平野で数少なく、稀少例として貴重である。遺物では５次調査地で前期後半のタマキガイ系の貝殻施文土器片が出土し、下関地域との関係が知られる資料である。４次調査地では自然流路の堆積土から前期末の土器や石器が出土し、当平野における弥生時代石器研究の検証をする資料が得られている。詳細は第３章４小結を参照していただきたい。担当者の加島は平野内の石鎌を集成し、定着期を推定した。当平野の石器研究が一歩前進を見せている。

３．古墳時代

５世紀後半の竪穴式住居址が５次調査地、６世紀前半の竪穴式住居址が２次調査地で検出されている。竪穴式住居址はいずれも平面形状が四角形で、５次調査地の住居址ＳＢ１には間仕切り溝があり、平野では数が少ない例となる（第４章４小結を参照）。出土品では、２次調査地ＳＢ１から臼玉が出土しているが、当平野の５世紀後半～６世紀前半の住居址には散見される事例であり、廃棄時の祭祀行為の典型例といえる。掘立柱建物址は６世紀代の建物が５次調査地で４棟検出されている。５次調査地では総柱構造と側柱構造とが見られるが、資料の制約から新旧関係や組み合わせが明確に出来なかった。集落構造の変遷を考える資料のひとつになり得るので、今後の周辺調査に期待したい。

4．古　代

7世紀前半の掘立柱建物址1棟と、古代に比定される掘立柱建物址1棟とが3次調査地で検出されている。方位や柱穴形状は久米官衙遺跡群の建物と共通しており、それとの関係が注目されるが、現状では位置付けが難しい。また、4次調査地の南半部分はこの時期まで自然流路の影響が強く残っており、7世紀代の掘立柱建物（3次調査地の掘立1・2）は流路に近い位置に建築されたことが知られる。

5．中　世

久米才歩行遺跡では、中世の遺構が最も多く検出されている。

3次・4次調査地は東西に隣りあう調査地で、掘立柱建物址3棟、井戸1基、溝1条、土坑1基が検出されている。遺構の詳細な時期は明らかでないものもあるが、判明している遺構から時期を絞り込むと15～16世紀の遺構群と考えられる。それを前提に集落構造を見ると、南北に走る溝を境に、西側に建物2棟と土坑1基、東側に建物1基と井戸1基が配置されることになる。ただし、集落内を溝で区画することになり、検討の余地がある。

当平野における中世の集落構造は不明な点が多く、ここでの結果は基礎的資料の増加として評価されよう。

久米才歩行遺跡は、久米高畑官衙遺跡群の周辺地の景観を考える資料として、重要な遺跡である。今回の結果で課題となるのは、古代の建物の位置付けである。官衙遺構との関係は重要事項であり、今後の調査で解決しなければならない。

【文献】

田城武志・梅木謙一編　2004『来住・久米地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	**レンズ**	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　プラスＸパン・ネオパンＳＳ・アクロス		
	カラー　エクタクロームＥＰＰ・ＲＤＰⅢ		

2．遺物は、４×５判または６×９判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45Ｇ・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーＳ 240㎜Ｆ5.6他
ストロボ	コメット／ＣＡ32・ＣＢ2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　プラスＸパン・ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキーＭＤ・90ＭＳ
レンズ	エル・ニッコール135㎜ Ｆ5.6Ａ・50㎜ Ｆ2.8Ｎ
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ ＲＣペーパー

4．製版　写真図版175線

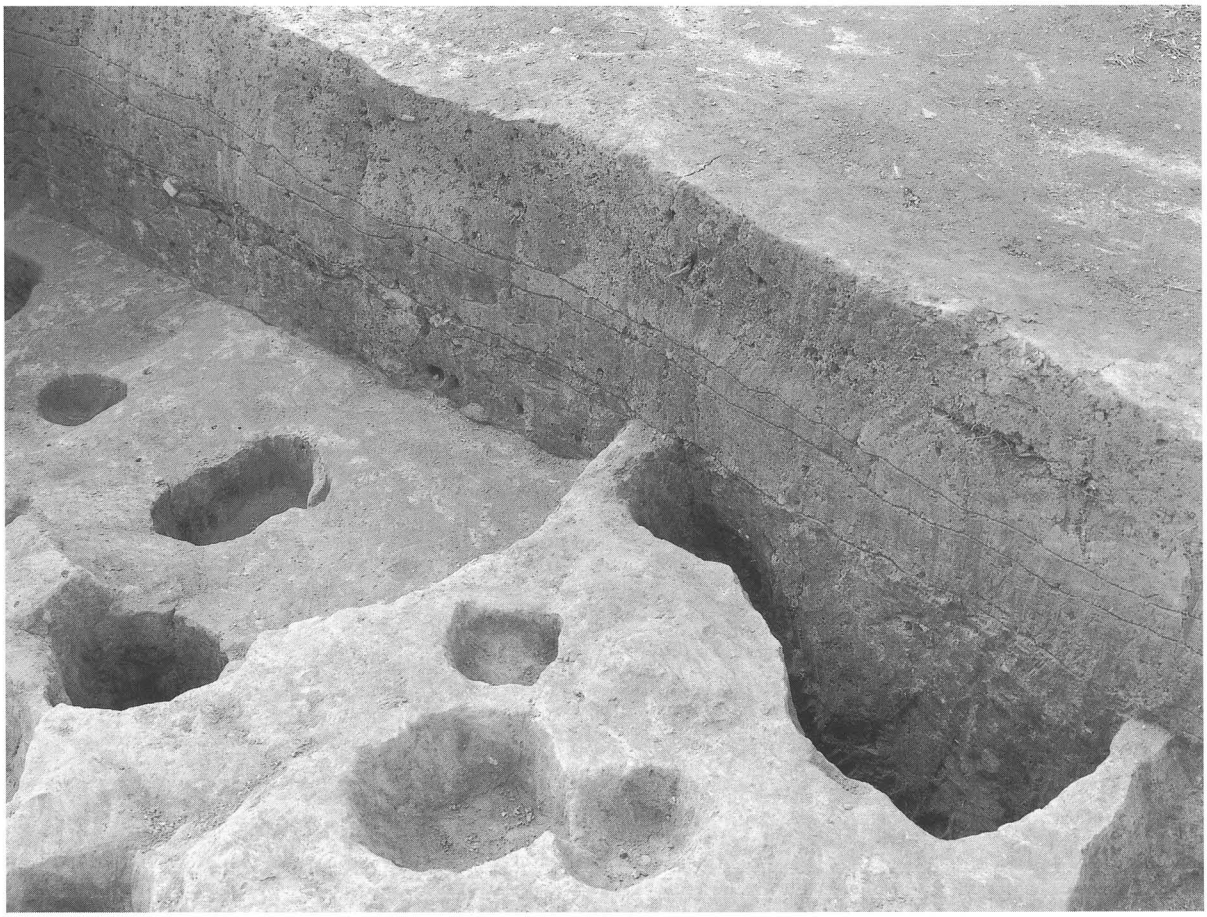
印刷　オフセット印刷

用紙　ニューＶマット　菊版93.5㎏使用

【参考】『埋文写真研究』vol.１～13　『報告書制作ガイド』

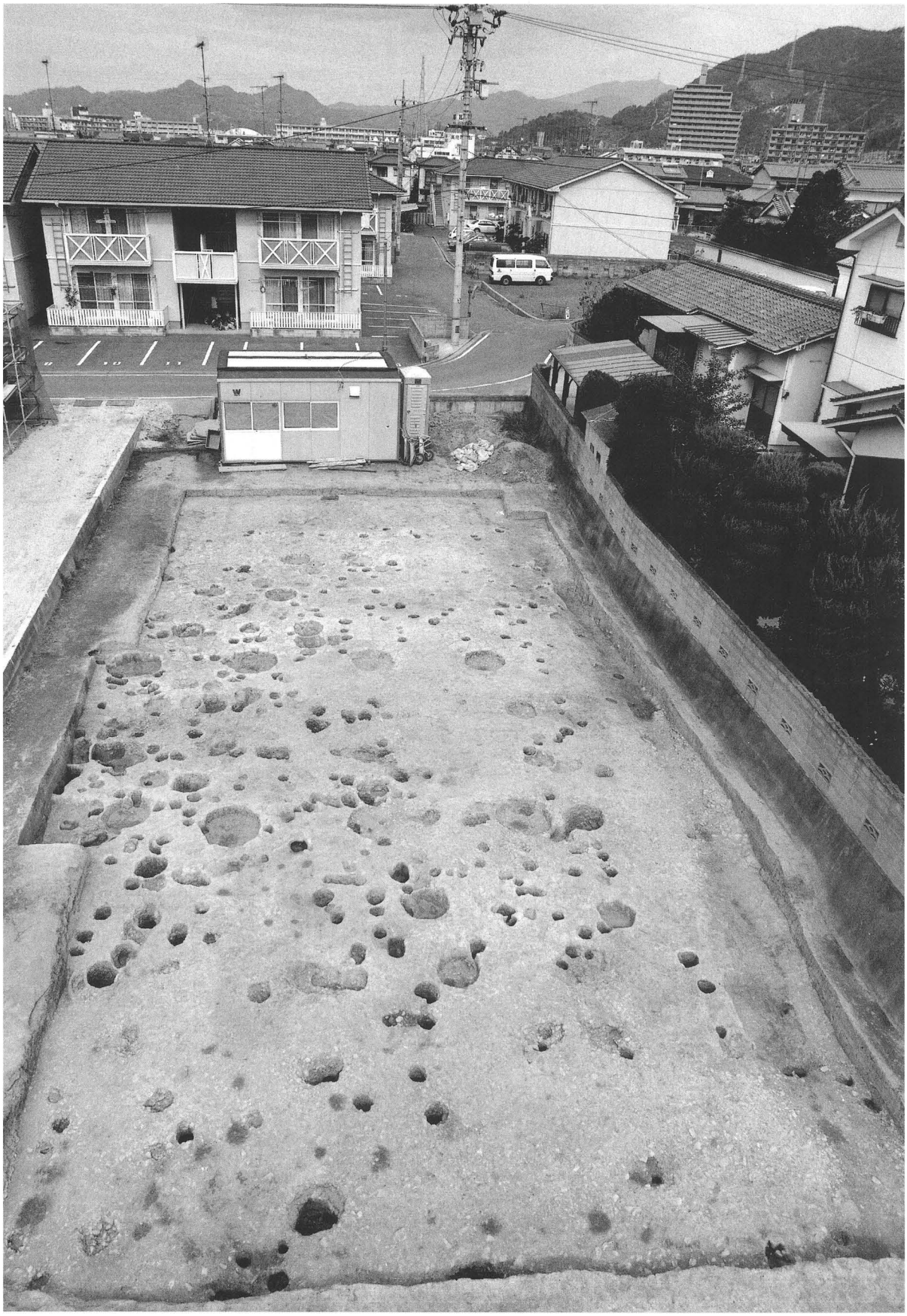
［大西朋子］

1　調査前の全景（北より）

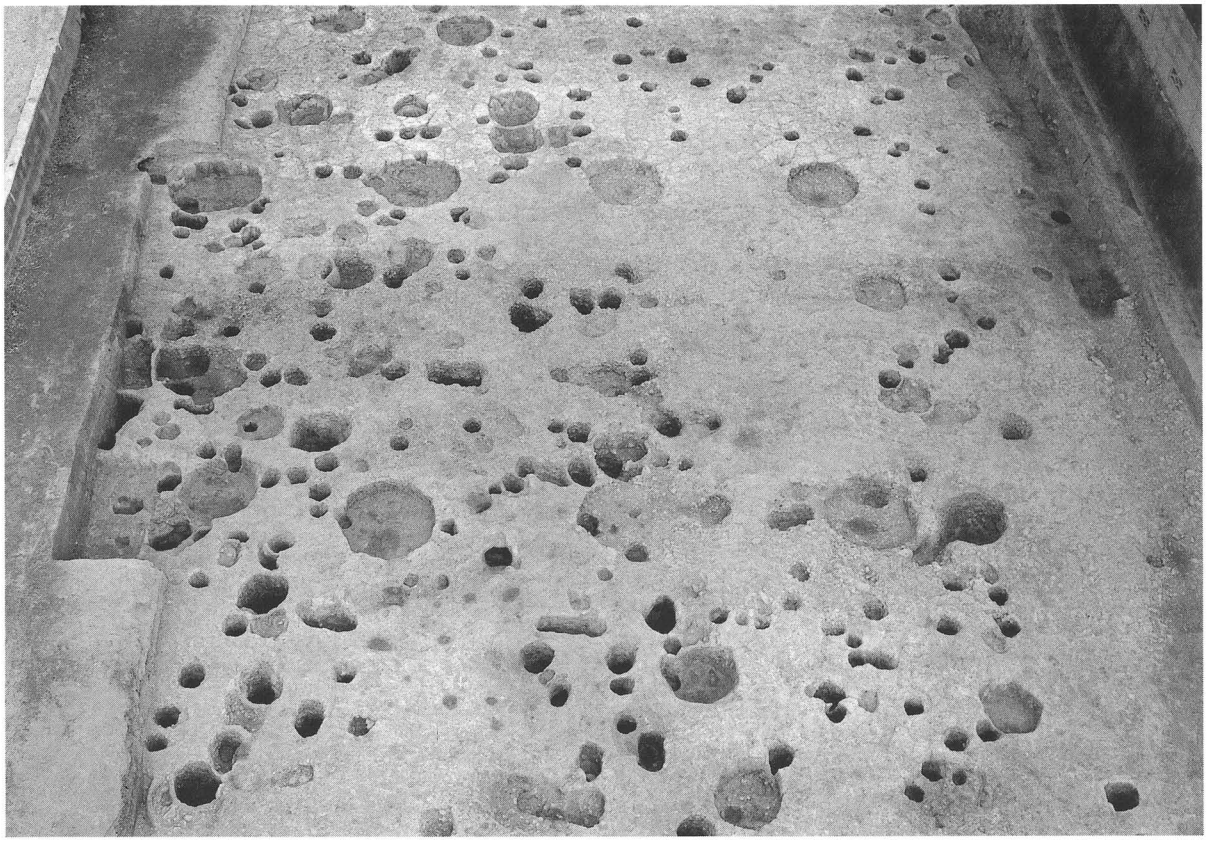


2　西壁土層（北東より）

図版二



1　調査地全景（南より）

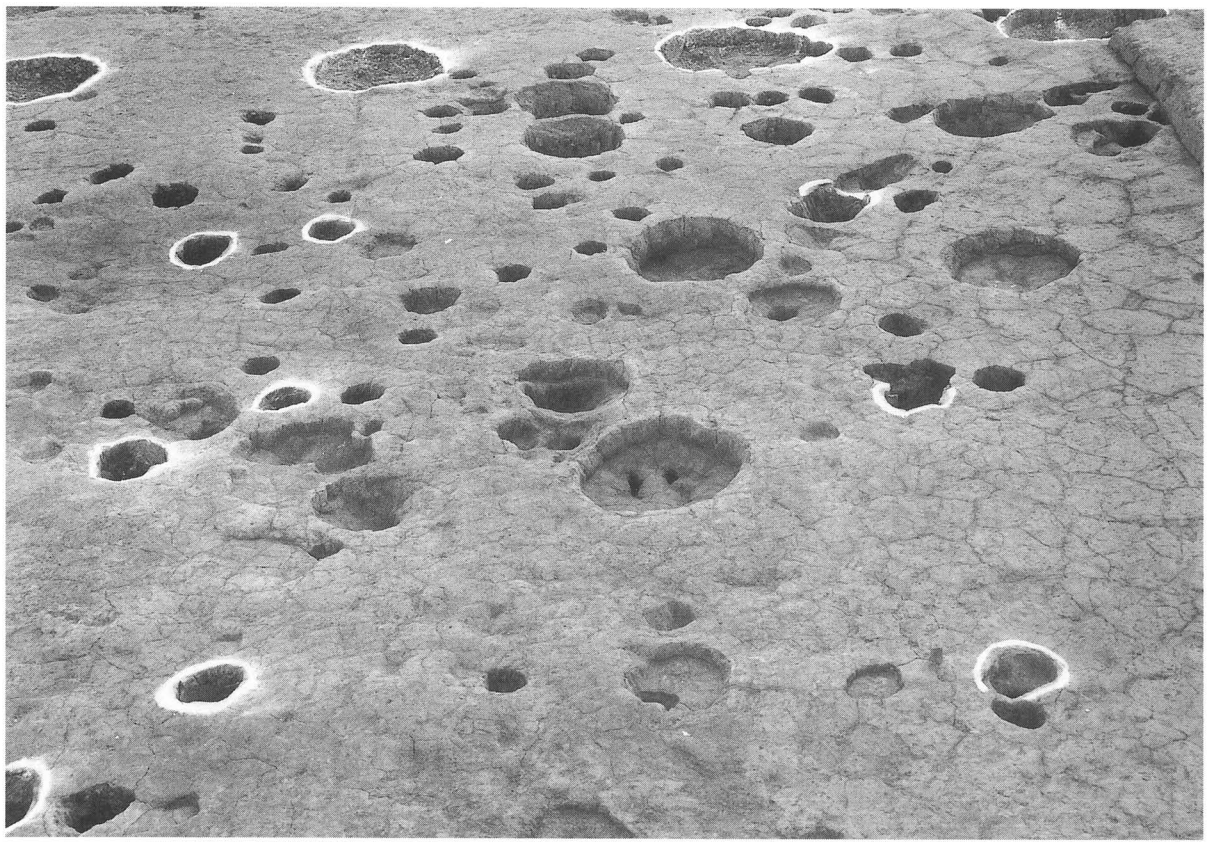


1　掘立１検出状況（北より）

2　掘立２検出状況（西より）

図版四

1　ＳＫ１完掘状況（北より）



2　掘立４完掘状況（北より）

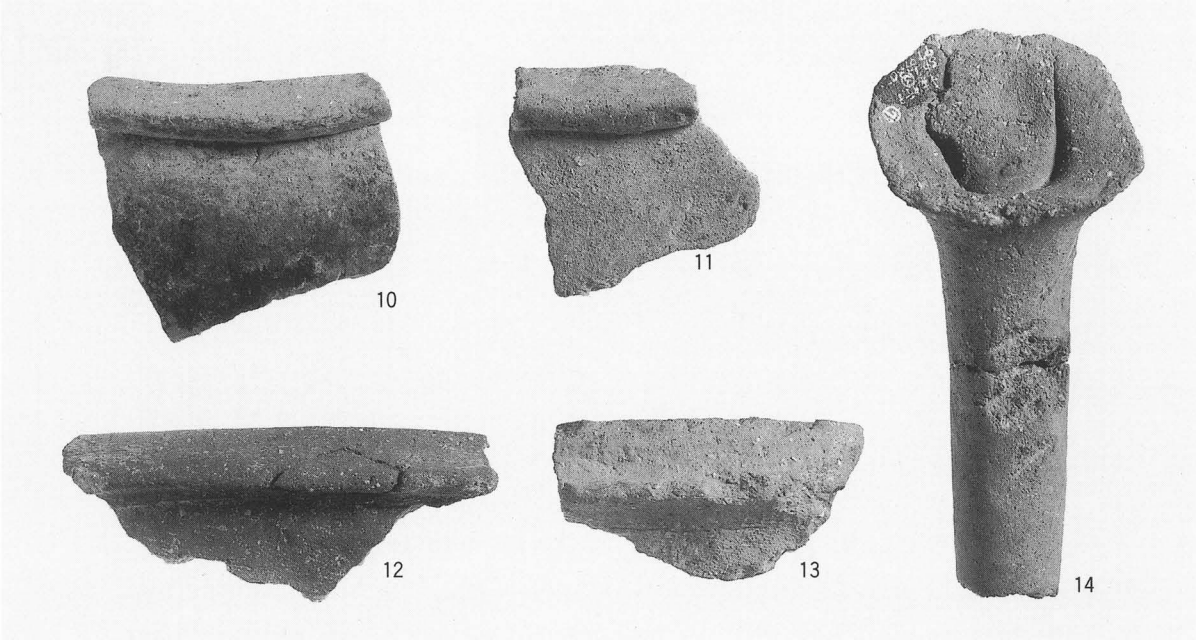
1　掘立３完掘状況（北より）

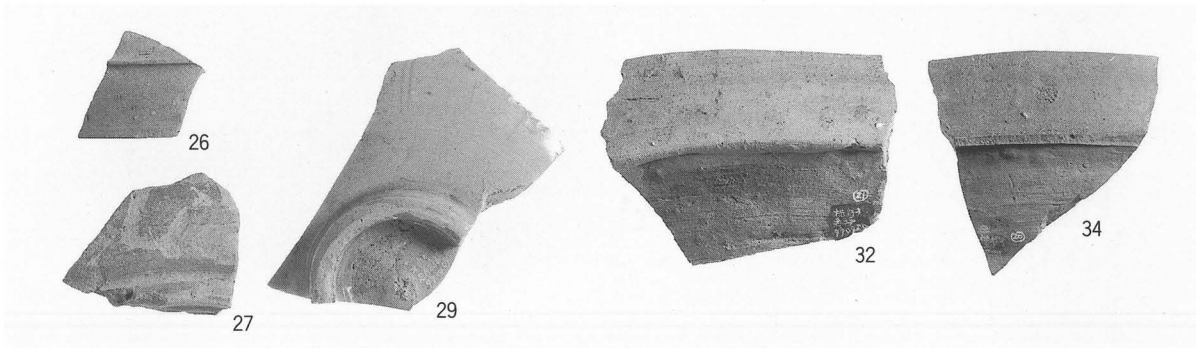
2　ＳＰ94遺物出土状況（北より）

図版六

1　ＳＤ１検出状況（南より）

2　ＳＤ１遺物出土状況（北西より）





1　出土遺物（ＳＤ１・ＳＰ94・ＳＰ４・ＳＰ345・ＳＰ256・第Ⅲ層）

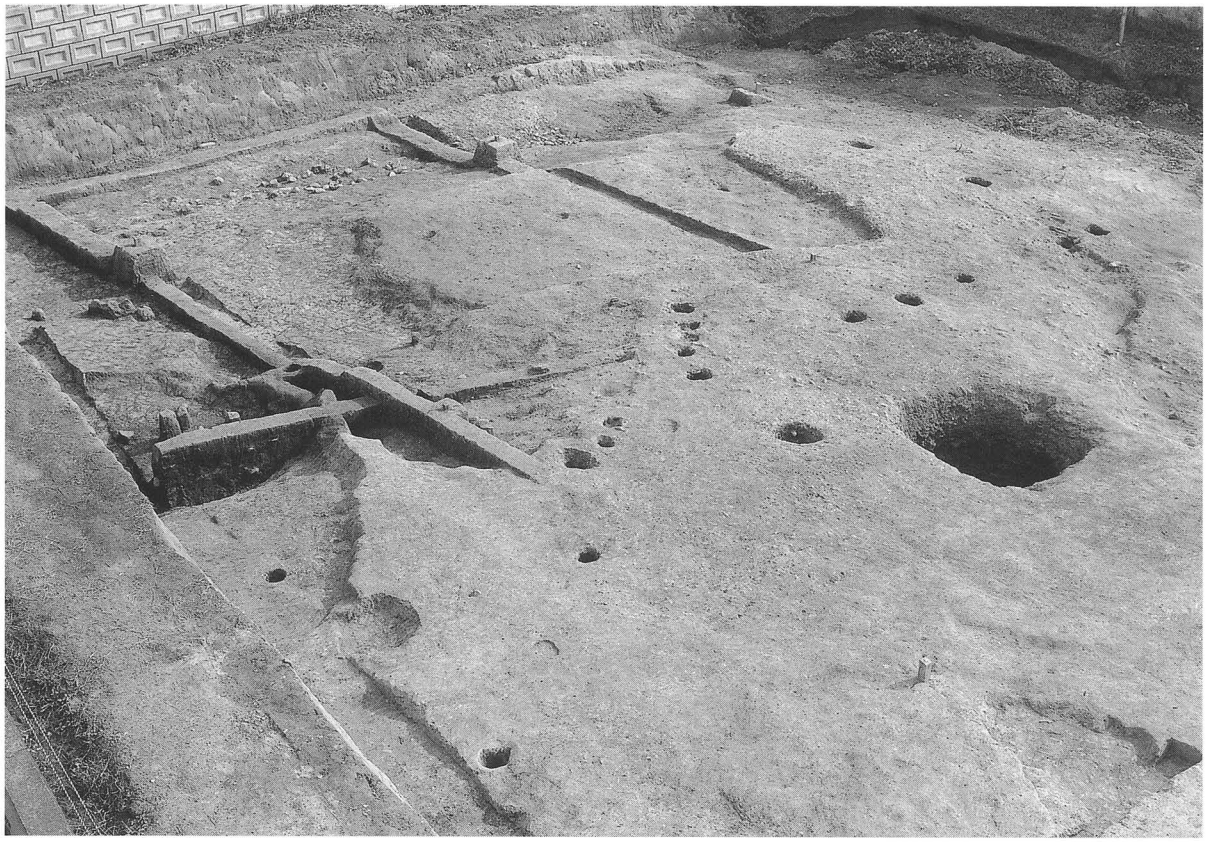
図版八

1　調査前の全景（南西より）

2　南壁土層（北より）

1　Ⅰ区遺構検出状況（西より）

2　Ⅰ区遺構完掘状況(1)（西より）



1　Ⅰ区遺構完掘状況(2)（北西より）

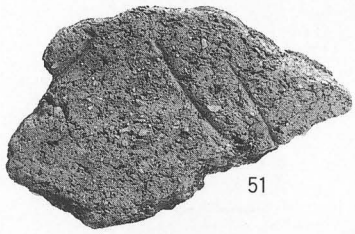
2　Ⅱ区ＳＲ201完掘状況（北東より）

1　ＳＲ201埋土④石鎌出土状況（東より）

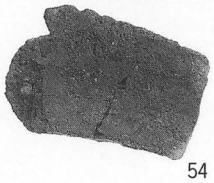
2　ＳＲ201埋土③両刃石斧出土状況（北より）

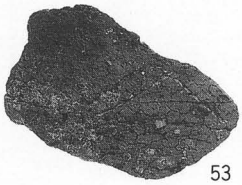
3　遺構完掘状況（北西より）

1　ＳＲ201出土遺物（埋土④・埋土③(1)）


51

52


54

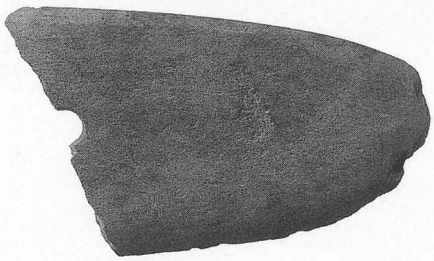

53

55

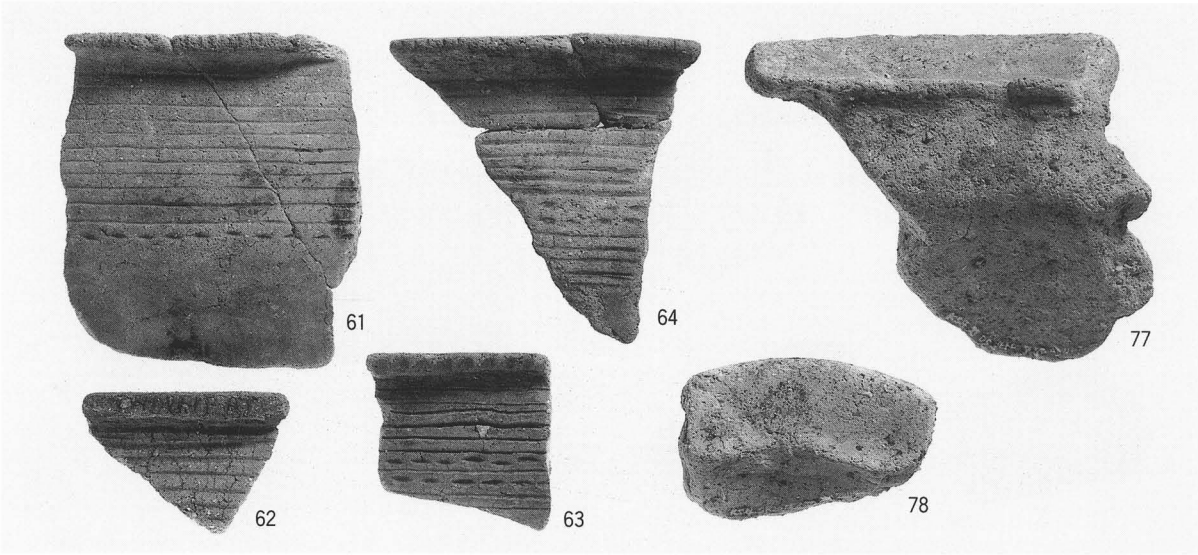
57

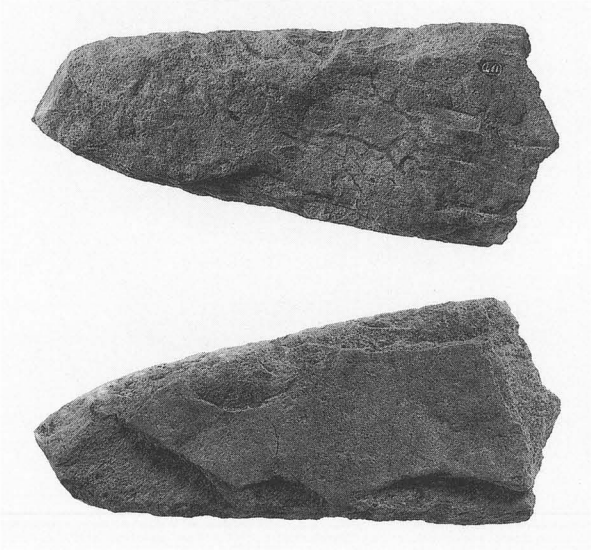
55

57

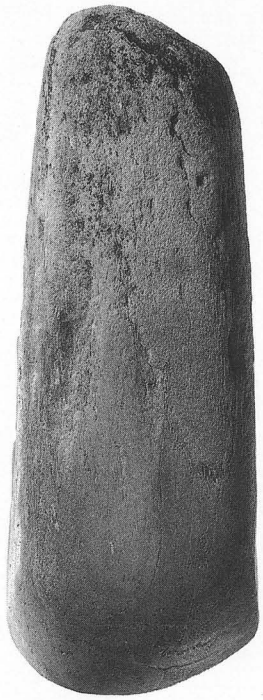

56

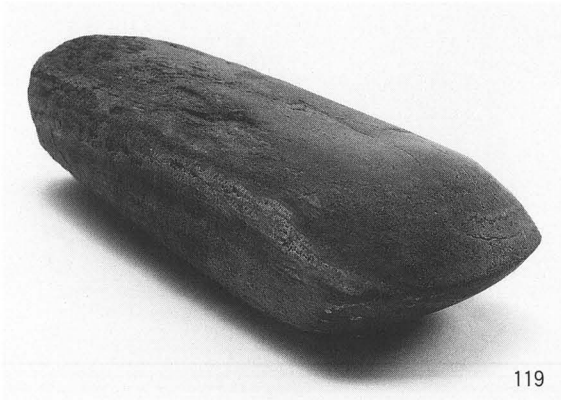
1　ＳＲ201埋土③出土遺物(2)



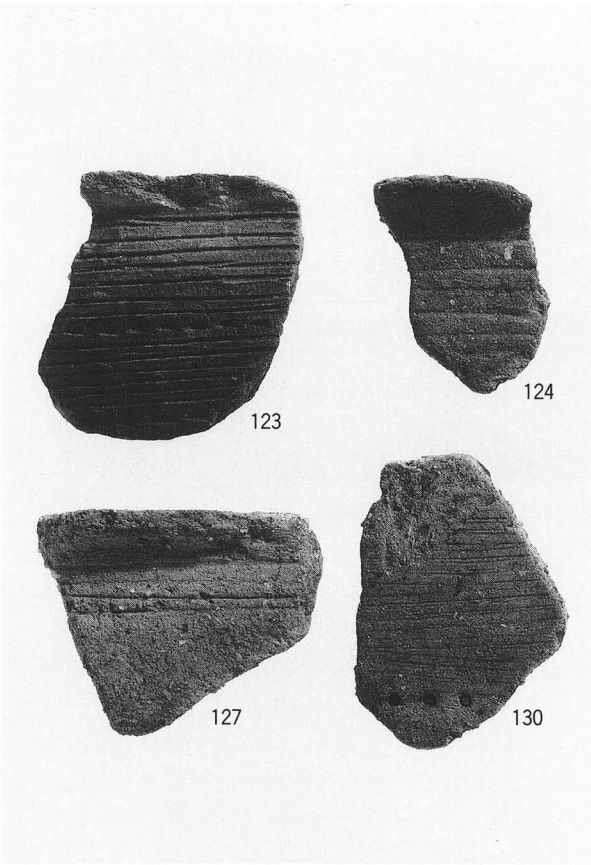


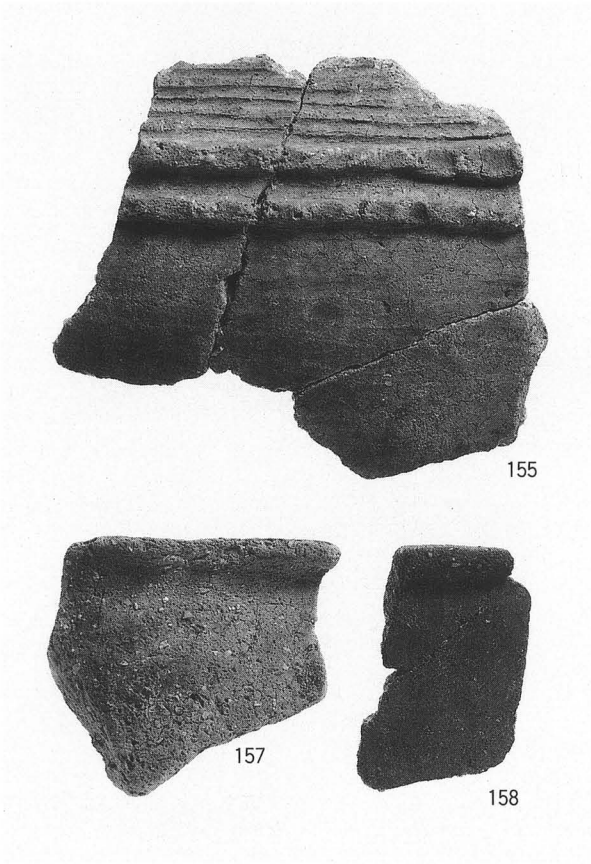
1　ＳＲ201埋土②出土遺物(1)

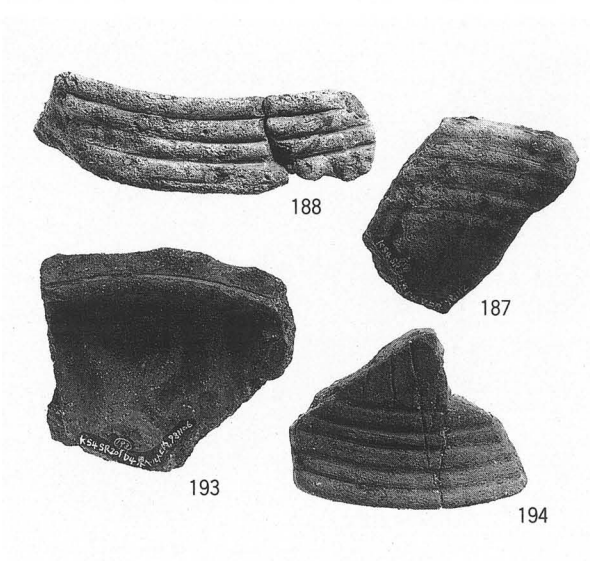




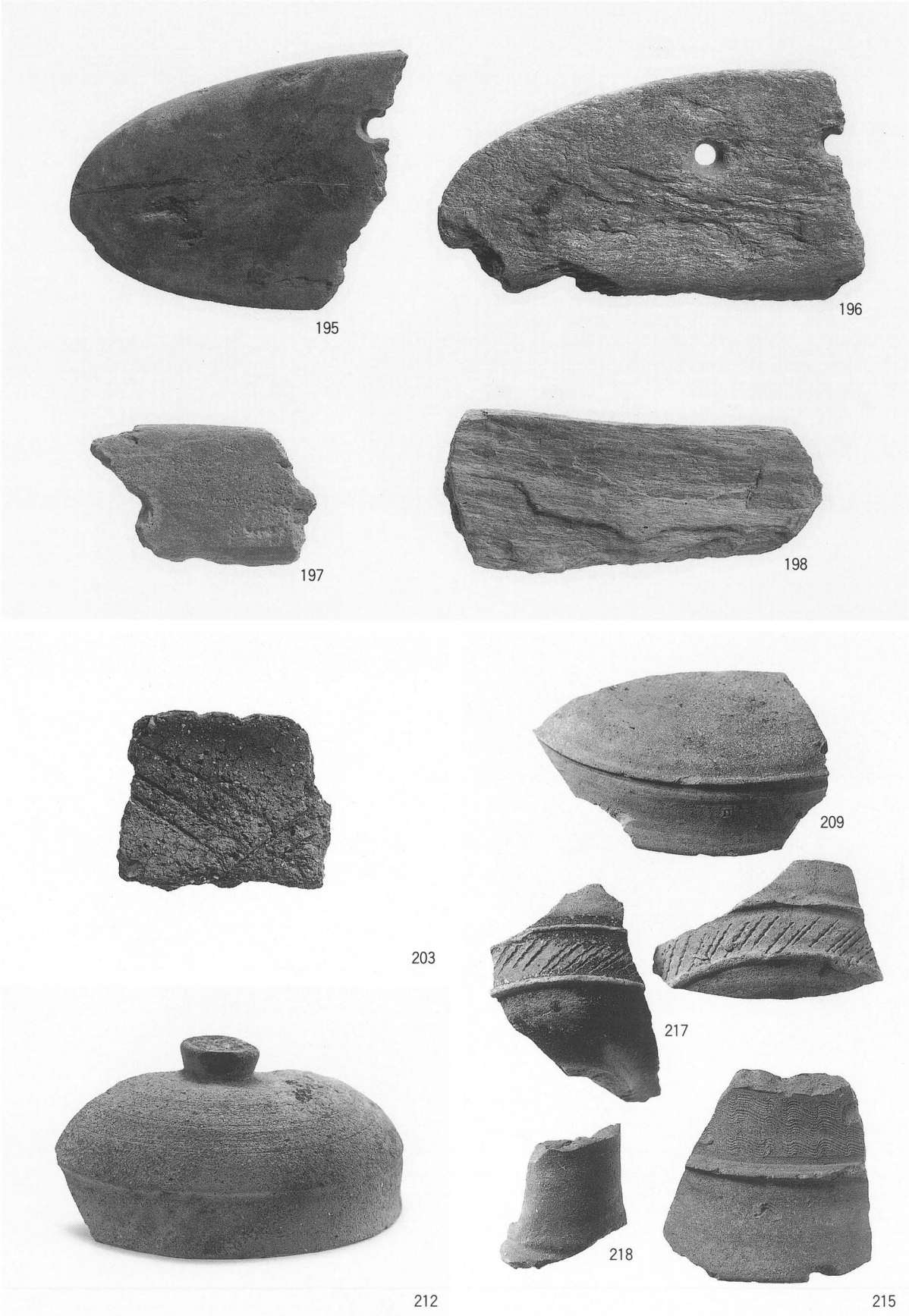
1　ＳＲ201埋土②出土遺物(2)





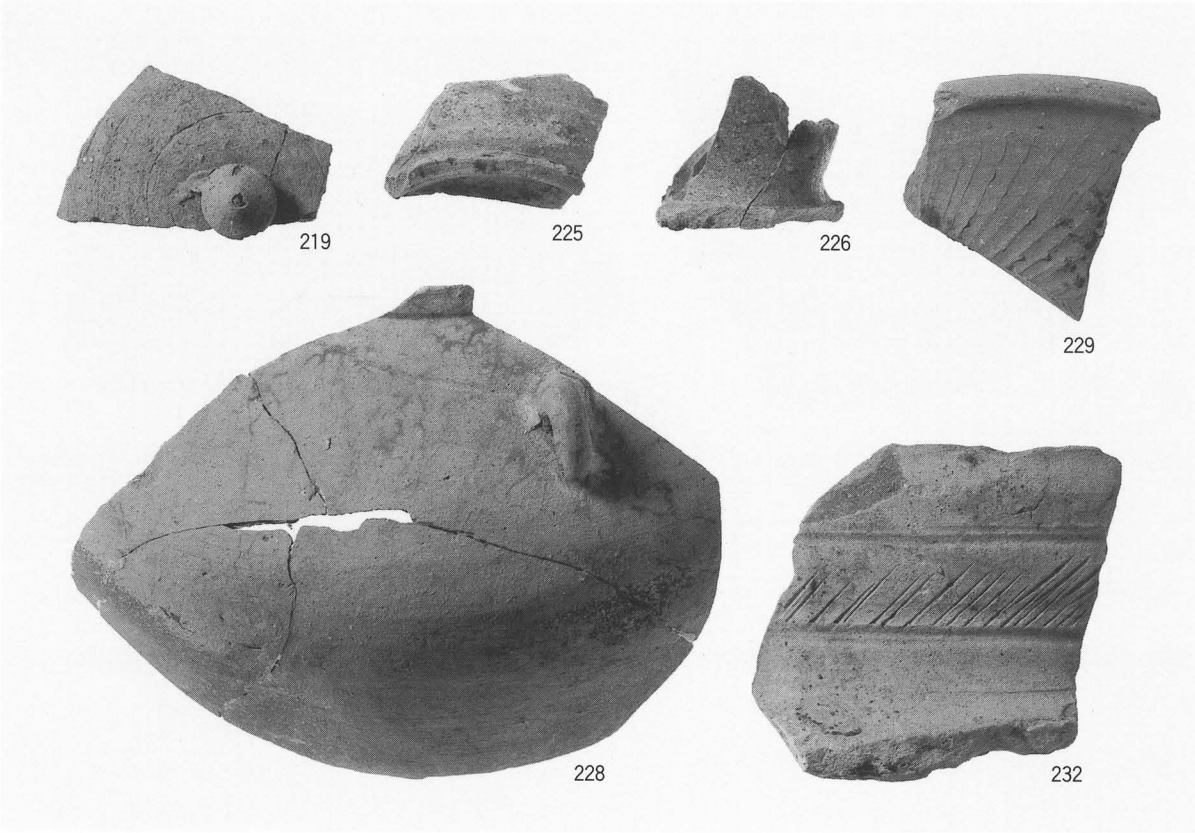


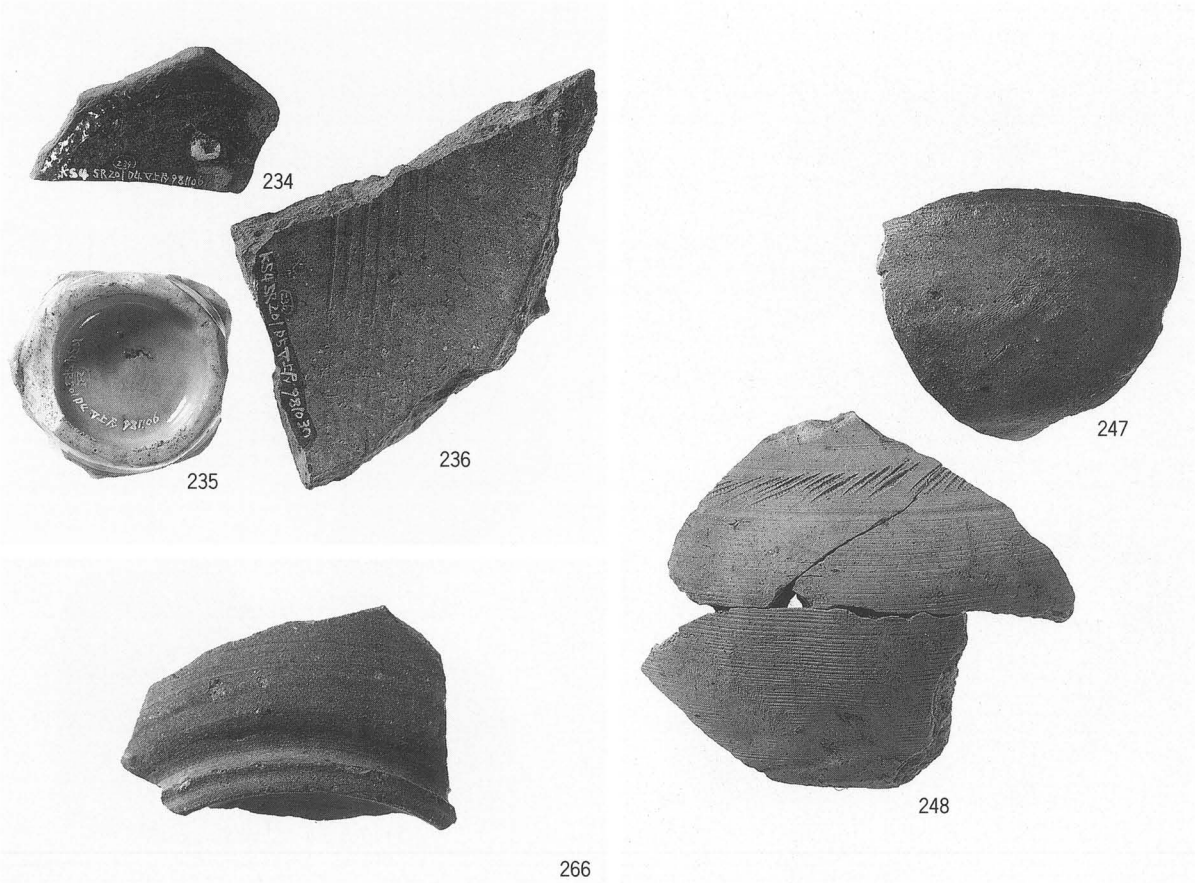
1　ＳＲ201埋土①出土遺物(1)



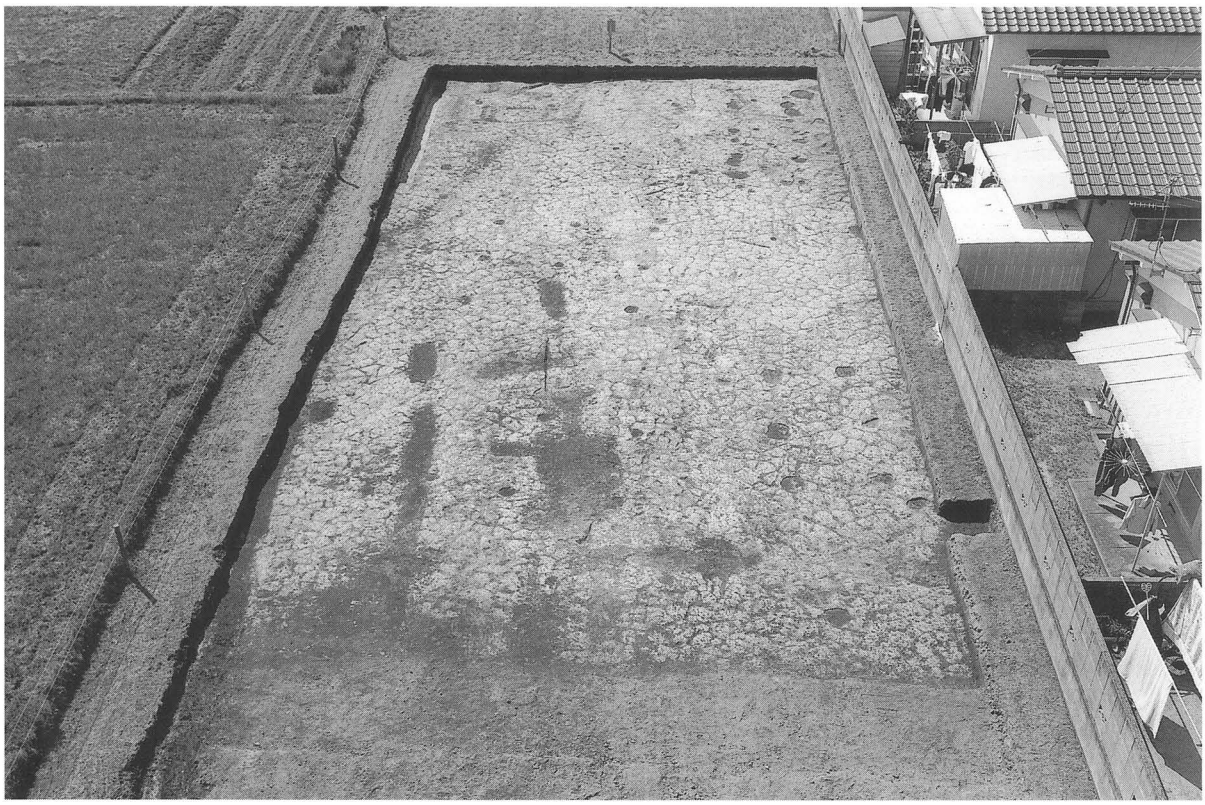
1　ＳＲ201埋土①出土遺物(2)

図版一八





1　ＳＲ201埋土①出土遺物(3)・ＳＸ101出土遺物・包含層出土遺物



1　調査区西部遺構検出状況（東より）

2　ＳＢ１・２検出状況（北西より）

1　ＳＤ１・２完掘状況（西より）

2　調査区西部完掘状況（東より）